

志ゆかり(首肯) 志ゆかり(趣向) 志ゆかり(手格) 志ゆかり(主格) 志ゆかり(主幹) 志ゆかり(主客) 志ゆかり(酒客) 志ゆかり(儒學) 志ゆかり(手簡) 志ゆかり(手眼) 志ゆかり(朱顔)

志ゆかり(首領) 志ゆかり(樹幹) 志ゆかり(手記) 志ゆかり(酒旗) 志ゆかり(主義) 志ゆかり(手技) 志ゆかり(毒器) 志ゆかり(受寄) 志ゆかり(守舊) 志ゆかり(種牛) 志ゆかり(首級) 志ゆかり(狩漁) 志ゆかり(入御) 志ゆかり(手巾)

志ゆかり(受寄者) 志ゆかり(酒狂) 志ゆかり(執行) 志ゆかり(守宮) 志ゆかり(酒興) 志ゆかり(珠玉) 志ゆかり(眞珠) 志ゆかり(叔) 志ゆかり(宿) 志ゆかり(接尾)

志ゆかり

志ゆかり

志ゆかり

九三四

志ゆかり(淑) 志ゆかり(寂) 志ゆかり(夙) 志ゆかり(粥) 志ゆかり(椒) 志ゆかり(豨) 志ゆかり(候) 志ゆかり(視)

志ゆかり(縮) 志ゆかり(蹙) 志ゆかり(蹙) 志ゆかり(蹙) 志ゆかり(蹙) 志ゆかり(蹙) 志ゆかり(蹙) 志ゆかり(蹙)

志ゆかり(塾) 志ゆかり(塾) 志ゆかり(塾) 志ゆかり(塾) 志ゆかり(塾) 志ゆかり(塾) 志ゆかり(塾) 志ゆかり(塾)

志ゆかり

志ゆかり

志ゆかり

九三五



去ゆく

志ゆくえい(宿營)圖軍隊の泊(止)つてる  
 營所(止)このの營所のコト、  
 志ゆくえい(宿衛)圖泊り込みて衛(守)り  
 居るコトを云ふ、  
 志ゆくえん(宿驛)圖道中の宿場(止)。  
 志ゆくえん(宿縁)圖宿因(止)に同じ、  
 志ゆくえん(祝宴)圖いはひの酒宴(祝)。  
 志ゆくえん(祝筵)圖祝のさかもり、  
 志ゆくえん(淑媛)圖才徳兼備せる賢婦人  
 (淑)のコトを云ふ、  
 志ゆくえん(宿怨)圖舊(止)き、うらみ、  
 志ゆくえん(淑行)圖婦人の行狀の正しき  
 コトを云ふ、  
 志ゆくえん(熟考)圖十分に考へる。爲(止)  
 と思案するコトを云ふ、  
 志ゆくえん(宿學)圖舊(止)くより其の名  
 の天下に轟(止)らひて居る學者、  
 志ゆくえん(熟客)圖なじみの客、  
 志ゆくえん(宿憾)圖長(止)らくのうらみ、  
 久しく無念(止)に思ひ居るコト。遺恨  
 (止)に同じ、  
 志ゆくえん(夙起)圖早朝より起(止)るコト  
 志ゆくえん(淑氣)圖心地(止)よき春の氣、  
 志ゆくえん(夙疑)圖前々よりのうたがひ、  
 志ゆくえん(熟議)圖十分に相談するコト、

去ゆく

志ゆくえん(評議)圖十分を云ふ、  
 志ゆくえん(熟果)圖果物(止)の十分に熟  
 したるコト。熟したる果實(止)、  
 志ゆくえん(淑訓)圖女子の教育の科ト、  
 志ゆくえん(宿願)圖前前よりの願ひ、  
 又は望みのコトを云ふ、  
 志ゆくえん(祝慶)圖めでたきコト。祝ふ  
 志ゆくえん(肅敬)圖つゝしみうやまふコ  
 トを云ふ、  
 志ゆくえん(肅啓)圖うやうやしく申し上  
 るコト。手紙の初に記して、謹で申し  
 進る云ふ意を表はす語、  
 志ゆくえん(熟計)圖十分に考へて計(止)  
 るコト。思案をつみし計畫(止)、  
 志ゆくえん(宿業)圖前世よりのむくぬ。  
 因念(止)因果(止)の科ト、  
 志ゆくえん(夙悟)圖子供の頃よりかしこく  
 ささきコト、  
 志ゆくえん(熟語)圖熟字(止)に同じ、  
 志ゆくえん(宿構)圖前方(止)より接(止)  
 へて置く。前より考へて置くコト、  
 志ゆくえん(宿業)圖佛教の語、前世より  
 のむくぬの科ト、  
 志ゆくえん(宿恨)圖遺恨(止)。前々より

去ゆく

のうらみのコト、  
 志ゆくえん(宿根)圖植物學の語、宿根草  
 のコト、即ち其の年の中に莖は全部枯  
 れ果るも、根のみは地中に残りて、翌年  
 に至りて、其の根より苗を出す草類の  
 コトを云ふ、  
 志ゆくえん(宿根草)圖宿根より芽を  
 生ず草類の總稱、  
 志ゆくえん(縮刷)圖原本をちりめて、印  
 刷(止)したるコト、又は其の物、  
 志ゆくえん(肅殺)圖さびしき秋の氣。秋  
 に於て草木の枯れ萎(止)むさまを云ふ  
 語、  
 志ゆくえん(熟察)圖くわしくさつす、よ  
 志ゆくえん(宿志)圖かれてよりの希望。前  
 々よりののみ、  
 志ゆくえん(宿紙)圖すきかへし紙。おとし  
 紙。かはやがみのコト、  
 志ゆくえん(祝詞)圖神にいのる、のりこ  
 志ゆくえん(宿世)圖まへの世。前世、  
 志ゆくえん(肅辭)圖極めてしづかなるコ  
 ト、しづかにして居るコト、  
 志ゆくえん(夙世)圖すえの世、おそろえ  
 たる世の中(止)後の世、  
 志ゆくえん(夙成)圖子供の時分より、才  
 智の大人(止)じみてるコトを云ふ、  
 志ゆくえん(熟成)圖十分に出来上るコト  
 満足(止)に出来(止)たるコト、  
 志ゆくえん(縮少)圖小さくするコト。ち  
 めるコト、  
 志ゆくえん(宿碩)圖總て其の名の轟(止)  
 ひて居る名望家の稱、  
 志ゆくえん(宿昔)圖昔から前前から云  
 志ゆくえん(宿雪)圖前日より降りつづひ  
 てる雪を云ふ、  
 志ゆくえん(肅捷)圖勝ちいくさを祝ひよ  
 るこぶコトを云ふ、  
 志ゆくえん(肅然)圖つししみ、かしこま  
 つてる状、しづかなる状を云ひ表はす  
 に用る語、

九三六

去ゆく

つらと思ひまはすコト、  
 志ゆくえん(熱柿)圖つばりうみたる柿(止)  
 の實(止)の科ト、  
 志ゆくえん(熱視)圖つらつらさみる。十分  
 志ゆくえん(宿次)圖さまるコト。しゆくば  
 志ゆくえん(宿次)の科ト、  
 志ゆくえん(祝辭)圖祝詞(止)の。に同じ、  
 志ゆくえん(熟字)圖漢字を二字かされて、  
 一つの意味の語となせしもの、稱、  
 志ゆくえん(宿疾)圖舊(止)くよりの病氣  
 (止)宿病(止)の科ト、  
 志ゆくえん(祝日)圖祝ふべき日、  
 志ゆくえん(宿習)圖昔(止)しよりのしき  
 たり。舊(止)きならはしのコト、  
 志ゆくえん(宿舎)圖さまるべき家。はた  
 志ゆくえん(宿舎)の科ト、  
 志ゆくえん(縮寫)圖其の形をちぢめて寫  
 志ゆくえん(塾舎)圖學生の寄宿して居る所  
 を云ふ、  
 志ゆくえん(宿主)圖凡て寄生虫が寄生す  
 る其の動物の體の科トを云ふ、委しく  
 云へば蠅虫などが生(止)たる、其の人の  
 身體の科トを云ふ、  
 志ゆくえん(祝酒)圖祝の爲めに酌む酒、  
 志ゆくえん(宿儒)圖十分に經驗を有てる  
 儒者、大學者の科ト、

去ゆく

志ゆくえん(熱手)圖其の物事に能くなれ  
 てるコト、又は其の人、  
 志ゆくえん(宿所)圖止宿して居る所。住所  
 志ゆくえん(淑人)圖徳を積みて、善良な  
 る行狀を爲す人、  
 志ゆくえん(宿將)圖老功のある大將、  
 志ゆくえん(肅肅)圖しづかなるさま。お  
 いかめしきさま。おこそかなる状(止)  
 を云ひ表はす語、  
 志ゆくえん(祝勝)圖戦争に勝ちたるコ  
 トを祝ひ、よろこぶコト、  
 志ゆくえん(祝)圖いはふ。よろこぶ。こぞ  
 志ゆくえん(宿)圖宿(止)をさる。さまる、  
 志ゆくえん(熱)圖固にえる。にえて軟(止)ら  
 かくなる。つはる。うむ。みのる。善く  
 出来る。よき時機さなる。例は機が熱  
 志ゆくえん(熟)圖上手になる。なる。巧(止)になる  
 志ゆくえん(折)圖折(止)合(止)がつく  
 例は評議が熱すな。物事が極度に達  
 する。例は興(止)熱(止)など、  
 志ゆくえん(菽水)圖豆と水との科ト。轉  
 じてつづまやかなる暮(止)の科トを云  
 ひ表はす語、  
 志ゆくえん(宿醉)圖酒の二日(止)えひ、  
 志ゆくえん(宿水)圖前日より汲みて置き  
 たる水、

去ゆく

志ゆくえん(熱醉)圖甚だしく酒に酔ふコ  
 ト、酒に酔ひたるコト、  
 志ゆくえん(熱睡)圖能くねむるコト、  
 志ゆくえん(宿世)圖まへの世。前世、  
 志ゆくえん(肅辭)圖極めてしづかなるコ  
 ト、しづかにして居るコト、  
 志ゆくえん(夙世)圖すえの世、おそろえ  
 たる世の中(止)後の世、  
 志ゆくえん(夙成)圖子供の時分より、才  
 智の大人(止)じみてるコトを云ふ、  
 志ゆくえん(熟成)圖十分に出来上るコト  
 満足(止)に出来(止)たるコト、  
 志ゆくえん(縮少)圖小さくするコト。ち  
 めるコト、  
 志ゆくえん(宿碩)圖總て其の名の轟(止)  
 ひて居る名望家の稱、  
 志ゆくえん(宿昔)圖昔から前前から云  
 志ゆくえん(宿雪)圖前日より降りつづひ  
 てる雪を云ふ、  
 志ゆくえん(肅捷)圖勝ちいくさを祝ひよ  
 るこぶコトを云ふ、  
 志ゆくえん(肅然)圖つししみ、かしこま  
 つてる状、しづかなる状を云ひ表はす  
 に用る語、

九三七



志ゆく

志ゆくせん(倏然)圖たちまち。たりに  
 俄(ニ)云ふ状を表はす語。  
 志ゆくせふくわい(祝捷會)圖からいくさ  
 を祝ひ喜ぶ會合。  
 志ゆくたい(縮退)圖ちかまる。あさす  
 さりするコトを云ふ。  
 志ゆくたい(宿題)圖學校にて生徒に日  
 期して作り、又は答へさせる爲めに與  
 ふる問題の稱。  
 志ゆくたく(宿諾)圖承諾したる事實を實  
 行せぬコト。以前に引き受けた事を實  
 行せぬコトを云ふ。  
 志ゆくたつ(熟達)圖其の物事に能くなれ  
 達するコト。巧(シ)になるコト。  
 志ゆくたん(熟談)圖つくづく物語(ワ  
 )する。念(ニ)の入りたる相談。  
 志ゆくつぎ(宿繼)圖宿場より宿場へ、つ  
 ぎつぎに人馬を仕立て、荷物などを送  
 るコトを云ふ。  
 志ゆくち(縮地)圖汽車や電車の便利が開  
 けて、往復(往)が速かに出来るに依り、  
 遠方の土地も近くなつたやうに思はれ  
 る云ふコト。  
 志ゆくち(熱地)圖勝手な十分に知つて  
 土地のコトを云ふ。  
 志ゆくち(熱知)圖委(ニ)しく知つて。十

志ゆく

分に知つてゐるコト。  
 志ゆくち(縮應)圖恥(ニ)るコト。はづか  
 しがるコト。  
 志ゆくちよ(淑女)圖淑徳を備へたる女子  
 志ゆくちん(宿賃)圖さまりちん。はたご  
 だい。  
 志ゆくちやく(祝着)圖うれしきコト。ま  
 志ゆくちよく(宿直)圖泊(マ)りて番をす  
 るコト。  
 志ゆくづ(縮圖)圖ちりめて其の通りに描  
 (マ)き寫(シ)したる圖。  
 志ゆくつち(熟通)圖熟知(マ)に同じ。  
 志ゆくてち(宿鳥)圖ねぐらにねてる鳥  
 (マ)のコトを云ふ。  
 志ゆくてき(宿敵)圖ふるきあだ。年來の  
 かたきのコト。  
 志ゆくてつ(熟鐵)圖十分にきたへたる鐵  
 志ゆくてん(祝典)圖いはひの儀式(マ)。  
 志ゆくてん(祝電)圖祝意を電報にて云ひ  
 送るコト。又は云ひ送りし電報。  
 志ゆくてん(熟田)圖能く耕(マ)されてあ  
 る田地。五穀の十分に實(マ)のりたる田  
 地のコトを云ふ。  
 志ゆくと(熱圖)圖十分に考へる。篤(マ)こ  
 思案するコトを云ふ。  
 志ゆくと(熱徒)圖熱會にゐて、學問をな

志ゆく

せる生徒(熟生)。  
 志ゆくとち(熟頭)圖熱會の長。  
 志ゆくとく(淑徳)圖女の正しき行狀を爲  
 して、美しき徳あるコト。  
 志ゆくどく(熟讀)圖念(マ)を入れて讀む  
 志ゆくば(宿場)圖道中のしゆく(マ)うまや  
 のコトを云ふ。  
 志ゆくはい(祝杯)圖祝の爲めに飲む酒。  
 志ゆくはら(宿飽)圖食ひすぎて、食(マ)の  
 の胃につかへてるコト。  
 志ゆくはら(祝砲)圖祝意を表す爲めに放  
 つ大砲のコト。  
 志ゆくぼち(宿望)圖前よりの望み。平  
 素の希望。  
 志ゆくぼち(宿坊)圖やどや(マ)寺院に參詣  
 せし人を泊(マ)らす爲めに僧侶が營(マ)  
 さんでるやどや。  
 志ゆくぼち(熟茶)圖十分に煮(マ)るコト。  
 十分に煮へたるコトを云ふ。  
 志ゆくぼち(宿泊)圖さまり込入るコト  
 さまるコト。  
 志ゆくぼく(菽麥)圖豆まむぎ。  
 志ゆくはつ(祝髮)圖佛前に歸依(マ)せし  
 證として髪を剃るを云ふ。  
 志ゆくばん(熟番)圖生番(マ)に對しての  
 語や聞けたる野番(マ)社會を云ふ語

志ゆく

志ゆくはづれ(宿外)圖道中の宿場の出口  
 (マ)のコトを云ふ。  
 志ゆくぼちよろち(宿場女郎)圖道中の宿  
 宿にはたらいでる下等女郎。  
 志ゆくびやくち(宿病)圖ちまへの病氣。  
 持病(マ)のコト。  
 志ゆくふ(叔父)圖父の弟(マ)をち。  
 志ゆくふ(熟布)圖細き糸にて織(マ)たる  
 布(マ)のコトを云ふ。「なるコト  
 志ゆくふ(祝福)圖うれしきコト。幸ひ  
 志ゆくふん(祝文)圖祝意を述べたる文章  
 志ゆくふん(宿憤)圖ふるさうらみ。遺恨  
 (マ)のコトを云ふ。  
 志ゆくへい(宿弊)圖よろしからざるしき  
 たり。舊(マ)くよりの弊害(マ)。  
 志ゆくほ(叔母)圖父の妹。なば。  
 志ゆくほち(宿謀)圖以前よりたくみあた  
 るはかりごま。前々よりのけいくわく  
 のコトを云ふ。  
 志ゆくまい(熱米)圖炊(マ)し米。めし。  
 志ゆくみん(熟眠)圖能くねむるコト。  
 志ゆくみやくち(宿命)圖前世より定まりた  
 る命(マ)のコトを云ふ。  
 志ゆくめい(宿命)圖前世より我れに具  
 (マ)はつてる運勢(マ)のコト。  
 志ゆくや(夙夜)圖あけくれ。あさばん(マ)

志ゆく

日々。たへすのコト。  
 志ゆくゆり(祝融)圖支那の太古の火の神  
 の名(マ)轉じて火事のコトを云ふ。  
 志ゆくらん(熟練)圖十分に見るコト。  
 志ゆくらん(熟爛)圖うみてただれるコト  
 轉じてなれてさほどの感じを起さぬ  
 コトを云ふ。  
 志ゆくりつ(縮煉)圖恐(マ)れおちてちち  
 かまるコトを云ふ。  
 志ゆくりよ(熟慮)圖十分に思案する。深  
 く考へるコト。  
 志ゆくれち(宿料)圖やど錢のコト。  
 志ゆくれん(熟練)圖其の物事になれ達せ  
 るコトを云ふ。「知つたる路  
 志ゆくろ(熟路)圖通り馴(マ)たる路。勝手  
 志ゆくろち(宿老)圖官吏などの年功ある  
 人のコトを云ふ。徳川時代に將軍家に  
 仕えたる。老中。家老。年寄役などのコ  
 トを云ふ。「きがけ  
 志ゆくわい(首魁)圖かしら。張本人(マ)さ  
 志ゆくわん(主管)圖其事をつかさどるコ  
 ト。ばんさう。支配人のコト。  
 志ゆくわん(首卷)圖冊數ある書物の初め  
 の巻のコト。  
 志ゆくわん(主觀)圖自己の志望と其の觀  
 察(マ)とが、同一の位置に在る云ふ。

志ゆく

おゆくわん(儒官)圖學者のつとむる官職  
 (マ)のコトを云ふ。  
 おゆくわん(儒冠)圖昔時學者に供(マ)り  
 て、冠(マ)りし一種のかんむり。  
 おゆくん(主君)圖自己の仕(マ)ふる君侯  
 自己の仕ふる主人。  
 おゆくん(殊勳)圖特別にすぐれたるいさ  
 ほし。大なるてから。  
 おゆくん(酒醺)圖酒に酔(マ)ふていざ  
 心地のよきコト。酒のかほり。  
 おゆげ(頌偈)圖佛の徳を褒めたへたる  
 偈のコトを云ふ。  
 おゆけい(主計)圖計算(マ)するコト。勘  
 定するコト。會計(マ)。  
 おゆけい(主刑)圖刑法の語。附加刑に對  
 しての稱にて、其の罪狀に依りて科(マ)  
 せらる。刑罰(マ)。  
 おゆけい(手藝)圖手にて爲す種々の技術  
 (マ)の手細工(マ)。  
 おゆけい(受刑)圖刑罰(マ)に服するコト  
 刑罰に處(マ)せられたるコト。  
 おゆけい(樹鶴)圖漢語にて、菌(マ)のこ  
 トを云ふ語。  
 おゆけい(樹藝)圖草木を培養(マ)するわ  
 さ。即ち園藝(マ)のコト。  
 おゆけち(受教)圖教をうくるコト。



志ゆけ

志ゆけり(儒教) 聖儒學の教へ、即ち孔子  
子思、孟子等の聖賢(聖賢)が遺(遺)し置き  
たる教へのコト。  
志ゆけふ(修業) 匠師て藝術(藝術)を、即ちわ  
さを習ひおさむるコト。  
志ゆけふ(受業) 匠師などの教へを受  
(受)るコトを云ふ。  
志ゆけふ(授業) 匠師を授(授)け教ゆる  
志ゆけん(主権) 匠師家を支配する最高最  
大なる権(権)を、すべからざる権利の  
にて天皇の有(有)し給ふもの(主権)な  
る権利、全權(全權)の稱。  
志ゆけん(殊眷) 匠師特別のあいこ。引き立  
志ゆけん(受験) 匠師試験を受けるコト。  
志ゆけふ(授業法) 匠師児童及び學生に  
學問を授ける方法。  
志ゆけふ(受業料) 匠師學藝の教(教)を  
受くる爲めに差し出す料金、即ち月謝。  
志ゆけんじや(修験者) 匠師修験道を修業な  
しつづ、諸國を廻る人、即ち山伏(山伏)の  
コトを云ふ。  
志ゆけんぢや(修験道) 匠師言(言)より分  
れたる一種の教法、ゴマを焚(焚)き呪文  
(呪)を唱えて、祈禱(祈禱)を爲す宗旨(宗旨)  
にて、此の道に入れば、専ら山中に入り  
て、難行(難行)苦行(苦行)せざるべからず

志ゆけ、志ゆい

志ゆけん(受驗人) 匠師試験を受ける人  
志ゆけい(主計局) 匠師大藏省内の一  
局、各省の豫算及び凡ての會計事務を  
取り扱ふ處。  
志ゆけい(主計官) 匠師大藏大臣の監  
督の下に在つて、會計事務を取り扱ふ  
官吏。  
志ゆと(主顧) 匠師をくひ、ひいきにされて  
る人のコトを云ふ。  
志ゆと(酒壺) 匠師酒を入れて置く、つば。  
志ゆと(酒戸) 匠師酒を賣る家。  
志ゆと(守護) 匠師ももるコト、守らせらる  
コト、例は神の守護など。  
志ゆと(首肯) 匠師合點(合點)する。打ち點  
(合點)く。承知するコト。  
志ゆと(殊功) 匠師拔群(拔群)のてがら。す  
ぐれたてがらのコト。  
志ゆと(首功) 匠師すぐれたる功。  
志ゆと(主公) 匠師主人公、主人。  
志ゆと(手工) 匠師手さきにて爲す仕事(工  
手)の稱。  
志ゆと(主根) 匠師草木類の種(種)よ  
り、芽(芽)を出したる時に、最初に莖(莖)  
より地中へ出だせし、根(根)の如きもの  
稱、此れが根(根)の基礎(基礎)となるよ

志ゆこ、志ゆき

志ゆこん(鬚根) 匠師根より鬚(鬚)の如く、四  
方八方に無數に出たる根の稱。  
志ゆこん(入魂) 匠師れんごるなるコト。こ  
んいなるコトを云ふ。  
志ゆこん(樹根) 匠師木の根。  
志ゆこいし(守護石) 匠師庭園の風致(風致)を  
添(添)ふる基礎(基礎)となるべき石の  
コトを云ふ。  
志ゆこはん(守護人) 匠師總て守護を爲す人  
警固(警固)の人。  
志ゆこしよく(守護職) 匠師昔時の一つの職  
名、源頼朝(源頼朝)が創(創)めて置きたるも  
のにて、國司(國司)の指揮を受けて、其の  
國內の警備(警備)を司(司)さざりしもの、  
現今の制度にて云へば、各府縣の警務  
長の如きもの。  
志ゆき(主査) 匠師検査役の主任の  
コトを云ふ。  
志ゆき(責任) 匠師責任を負(負)つて、  
取り調(調)ぶ  
コト、又は其の人。  
志ゆき(朱座) 匠師徳川時代に將軍家の命令  
(命令)を受けて、銀朱(銀朱)を製造せし場  
所のコトを云ふ。  
志ゆき(首座) 匠師一番のかみさ。上席首席  
(首席)の仲間にて第一に立つべき資格(資  
格)を有(有)するコト、又は其の人の稱。

志ゆさ

志ゆさい(守歳) 匠師十二月の三十一日の夜  
を賑(賑)らすして、舊年を送り新年を迎  
(迎)ふるコトを云ふ。  
志ゆさい(主宰) 匠師(主)に立ちて事務を  
取り扱ふコト。轉じて頭(頭)も、つかさ  
のコトを云ふ。  
志ゆさい(主裁) 匠師頭(頭)立ちて物事のき  
りもりをなすコト、又は其の人のコト  
を云ふ。  
志ゆさい(殊才) 匠師家人に秀(秀)でたる才  
智、才力のコトを云ふ。  
志ゆさい(取材) 匠師總て物事を爲すに當て  
其の材料を採(採)るコト、又は選(選)び  
コトを云ふ。  
志ゆさい(首材) 匠師船艇其の他船舶の龍骨  
の尖端(尖端)に、取りつけて軸(軸)となす  
べき材料の稱。  
志ゆざり(酒造) 匠師酒をつくるコト。  
志ゆざり(醸造) 匠師酒をつくる、即ち酒  
や醬油などをつくるコトを云ふ。  
志ゆざり(鑄造) 匠師又たちうざうざも讀む  
金屬(金屬)を鑄(鑄)して、種々の物を造る  
コトを云ふ。  
志ゆざり(壽藏) 匠師(生)てる中に拵(拵)  
へ置きたる自己の墓(墓)遺骸(遺骸)を納む  
る墓の穴の  
コトを云ふ。

志ゆさ、志ゆし

志ゆさつ(手冊) 匠師持ち歩きする小形の帳  
簿、即ち手ての  
コト。  
志ゆさつ(手札) 匠師名ふだ。てふだ。手紙  
の  
コトを云ふ。  
志ゆさや(朱判) 匠師朱を以て赤く塗りたる  
刀のさやの稱。  
志ゆさん(珠算) 匠師算に對しての稱、そ  
るばんを用ひて爲す算術(算術)、即ちた  
まさん。  
志ゆさん(珠簪) 匠師眞珠(眞珠)を用ひて、作  
(作)りたるかんざし。轉じて費(費)ささ  
立派なるかんざし。  
志ゆさん(授産) 匠師産業をさづくるコト。  
志ゆさん(授産場) 匠師産物を造るを業とす  
る人  
志ゆざりか(酒造家) 匠師酒を造るを業とす  
る人  
志ゆざんば(授産場) 匠師仕事を授けて働  
(働)かせる所を云ふ。  
志ゆざんさん(授産金) 匠師細民に仕事をな  
さしむる爲めに、授(授)くる金子。官府  
より或る條件の下(下)に、資本として貸  
し下ぐる金子。  
志ゆざんぶつ(主産物) 匠師其の國、又は其  
の土地にて生産する物品中の、第一位  
を占(占)めるもの、稱。  
志ゆし(酒資) 匠師酒をかふ代金。さかて。さ

志ゆし

か代のコト。  
志ゆし(酒肆) 匠師酒を賣る家。さかやの  
志ゆし(主司) 匠師(主)つかさ。  
志ゆし(酒肆) 匠師酒を賣る家。さかや。  
志ゆし(種子) 匠師草木野菜等の種(種)。  
志ゆし(繁殖) 匠師種(種)を管(管)む基礎(基礎)とな  
るべきものを云ふ。  
志ゆし(主司) 匠師長つかさ。  
志ゆし(鬚根) 匠師ひげ。あこひげ。  
志ゆし(殊死) 匠師一心不乱(一心不乱)となるコ  
ト。死物狂(死物狂)となるコト。  
志ゆし(主調) 匠師文書の句中の主なる語(語)  
の  
コトを云ふ。  
志ゆし(趣旨) 匠師思ひ。考へ。おもわく。思  
案(思案)のむね。  
志ゆし(酒卮) 匠師盃(盃)の  
コト。  
志ゆし(手指) 匠師手のゆび。  
志ゆし(銖銖) 匠師極めて僅(僅)かなる目方  
(目方)の僅少(僅少)の重(重)み。  
志ゆじ(主事) 匠師主任となりて、其の物事  
を取り扱ふ人。理事。幹事。  
志ゆじ(朱字) 匠師朱墨にて書きたる文字。  
志ゆし(孺子) 匠師堅子(堅子)に同じ。  
志ゆし(呪師) 匠師まじなひをする人。  
志ゆし(樹脂) 匠師樹より出るやに、



志ゆし

志ゆし(壽詞) 圖本卦(無妄)及び喜の字等の祝をこさぶく爲めに咏(詠)たる詩歌文章の稱、

志ゆし(堅子) 圖子供わらんべ(人)をあらざつて呼ぶ語、青(才)なご(云)ふの類、

志ゆし(手寫) 圖手づから書畫を寫すコト、又は寫したるもの、

志ゆし(取捨) 圖取るコトと捨(捨)るコト、轉じてふりわけけるコト、

志ゆし(守者) 圖守つて居る人、番人(番)の稱、

志ゆし(儒者) 圖漢學者、學者、

志ゆし(酒首) 圖酒に酔(酔)ふて精神の錯亂(錯亂)せるコトを云ふ、

志ゆし(侏儒) 圖梁(梁)の上に在る小さき柱(柱)、即ちうた(香)の極めて低(低)き人のコトを云ふ、

志ゆし(受授) 圖うけること、づけること、即ちやりまりのコト、

志ゆし(朱書) 圖朱墨にて記したるもの、即ちしゆがきのコト、

志ゆし(手書) 圖自筆の書類、手紙(手紙)の稱、

志ゆし(主神) 圖神靈の守をなす人、即ちかむつかさのコトを云ふ、

志ゆし(主人) 圖あるじ、自分の仕(仕)ふ

志ゆし

志ゆし(受信) 圖他方より差し出したる手紙の類を受け取るコト、特に差し出されたる電信を受け取るコトを云ふ、

志ゆし(孺人) 圖五位以上の身分ある人の妻女を呼ぶ語、

志ゆし(手指文) 圖手の指に在る線(線)の模様(模様)、即ち手紋、

志ゆし(主將) 圖其の軍の總大將、

志ゆし(首唱) 圖最初に云ひ出すコト、さなへ出すコト、

志ゆし(首相) 圖總理大臣の稱、

志ゆし(衆生) 圖多くの生(生)ある者、云ふ、

志ゆし(主上) 圖天子の御事を申す、

志ゆし(守城) 圖城を守もつて居るコト、

志ゆし(主従) 圖主人と家來(家來)の主人と奉公人のコトを云ふ、

志ゆし(手術) 圖醫術の語、及物を持ちて患部の治療を爲すコトを云ふ、即ち外科手術の稱、

志ゆし(輸出) 圖國産を外國へ差し出すコトを云ふ、

志ゆし(呪術) 圖まじなひの稱、

志ゆし

志ゆし(殊勝) 圖まさりたるやさしき徳(徳)轉じていさましき行(行)ひ、健氣(健氣)なる行(行)ひの稱、

志ゆし(手掌) 圖手のひら、

志ゆし(手燭) 圖さもしび、

志ゆし(酒色) 圖酒と色情、

志ゆし(酒食) 圖酒とさかな、

志ゆし(殊色) 圖女子容貌(容貌)の極めて美(美)しきコトを云ふ、

志ゆし(受信人) 圖他より發送せし手紙、又は電信を受取る人、

志ゆし(衆生界) 圖佛教の語、人間世界の稱、

志ゆし(守城砲) 圖城を守備するに用ゆる大砲、

志ゆし(種種雑多) 圖いろいろさまさま云ふ意を表はす語、

志ゆし(輸出税) 圖外國へ輸出する貨物に課する海關税、

志ゆし(輸出) 圖輸出と輸入とのコトを云ふ、

志ゆし(繡子) 圖一種のあや織物の名、練(練)りし絹糸にて織りし、地質の厚くして光澤(光澤)あるもの、

志ゆし(修) 圖勵をさめる。習(習)ふ。おこなふ。志ゆし(誦) 圖讀(讀)む。さなふ。うたふ。

九四二

志ゆす

志ゆす(毒) 圖劇(劇)いばふ。よろこぶ、

志ゆす(數珠) 圖すずくに同じ、

志ゆす(入水) 圖水の中へ入(入)るコト、

志ゆす(朱墨) 圖銀朱を膠(膠)にて煉(煉)りて墨(墨)の如くせし物、

志ゆす(朱硯) 圖朱墨を搗るに用ゆる硯の稱、

志ゆす(珠數玉) 圖珠數を製するに用ゆる小さき珠の總稱、

志ゆす(縞子) 圖比丘尼(尼)の稱、

志ゆす(坊主) 圖坊主の稱、

志ゆす(主政) 圖國政をつかさどれる人、政(政)を爲す人、

志ゆす(酒精) 圖酒の主成分、アルコールの稱、

志ゆす(趨勢) 圖勢(勢)のかたむくこと、形勢(形勢)のあつまること、

志ゆす(守勢) 圖城などを守るいきほひ守るありさまの稱、

志ゆす(酒税) 圖酒の税金、現行法にては、一石に付き二十圓なり、

志ゆす(受精) 圖女性の卵子と、男性の精虫とが、結合するコトを云ふ、即ち胚胎(胚胎)、妊娠(妊娠)、

志ゆせ

志ゆせ(儒生) 圖儒學を修むる人、漢學者、學者の稱、

志ゆせ(壽星) 圖陰曆の八月の別名、

志ゆせ(朱蕉) 圖木の名、せんれん木、

志ゆせ(手抄) 圖おき書(おき)きを爲すコト、又はおきかきせしもの、

志ゆせ(樹梢) 圖樹木の、つえの端(端)の稱、

志ゆせ(手跡) 圖書きたる文字、ふてのあとのコトを云ふ、

志ゆせ(酒席) 圖酒もりの席、

志ゆせ(殊蹟) 圖すぐれたるいさほし、抜群(抜群)の稱、

志ゆせ(殊絶) 圖秀(秀)でてるコト、取り分け、すぐれてあるコト、

志ゆせ(主戦) 圖戦争をするコトに賛成(賛成)するコト、戦争(戦争)をなすを主とする意見の稱、

志ゆせ(酒戦) 圖二人以上の人々が、互(互)ひに酒を飲み合ふコトを云ふ、

志ゆせ(酒仙) 圖大酒家、大酒のみ、

志ゆせ(修繕) 圖又たしゅうぜんとも讀む、つくらひなほすコト、

志ゆせ(鬚髯) 圖口の上下に生へてるひげ、口ひげの稱、

志ゆせ(受禪) 圖帝王の御位を讓(讓)ら

志ゆせ

志ゆせ(鑄錢司) 圖古昔の役所の名、通用錢を製造せし所、

志ゆせ(守錢奴) 圖金錢を多く持ちてしわんぼなる人をあざけりて云ふ語、

志ゆせ(主成分) 圖其の物質(物質)の中に、含(含)んで居る重(重)なる成分の稱、

志ゆせ(酒石英) 圖白色にして光澤(光澤)ある、極めて酸(酸)き藥品なり、ラムネなどを製す原料となるもの、

志ゆせ(主税局) 圖大藏省内に在る一局にて、大藏大臣の指揮を受け、租税に關する事務及び監督(監督)を爲す處、

志ゆせ(主膳監) 圖昔時の官名、皇太子のきこしめす膳部をさのへし職名、

志ゆせ(守戦同盟) 圖敵の侵襲を、互(互)ひに助け合ふて、防(防)ぐべく爲したる國々國々の同盟、

志ゆせ(首鼠) 圖心の定まらぬコト、決斷力の乏(乏)しきコトを云ふ、

志ゆせ(呪詛) 圖まじなひのらふコト、

九四三











志ゆな、志ゆは  
 或る動きを仕掛けられたる意を表はす  
 動詞のコトを云ふ、  
 志ゆなり(首腦)固重(計)なるコト、かし  
 ら立ちし人のコトを云ふ、  
 志ゆなり(酒毒)固酒を絞(形)る袋、  
 志ゆにく(朱肉)固赤色の印肉(形)、  
 志ゆにく(酒肉)固酒ささかな、  
 志ゆなふ(受納)固うけをさむるコト、  
 志ゆにふ(輸入)固外國より貨物等の入り  
 来るコト、  
 志ゆにん(主任)固主として其の職に當る  
 志ゆにん(受任)固或る任務を仰(形)せり  
 (形)らる、コトを云ふ、  
 志ゆにゆ(授乳)固赤子(形)に乳を呑  
 (形)すコトを云ふ、  
 志ゆにふ(輸入)固他國より我が國  
 へ送(形)り來りたる貨物、  
 志ゆにふせい(輸入税)固外國より輸入す  
 る貨物に課(形)する税金、  
 志ゆぬり(朱塗)固赤色の漆(形)にてぬる  
 コト、又はぬりたるもの、稱、  
 志ゆはい(手背)固手の甲(形)、  
 志ゆは(種馬)固たれ馬のコト、  
 志ゆはい(酒杯)固酒を飲む盃(形)、  
 志ゆはち(守防)固ふせぐべく守(形)るコ  
 ト。かためを爲すコト、

志ゆは、志ゆひ  
 志ゆはち(酒坊)固酒を賣る店、  
 志ゆはふ(主法)固主たる法律と云ふ意に  
 て、人類の重大肝要なる權利及び義務  
 に關する規定を示したる法律のコト、  
 例は民法又は商法、國際法などの類を  
 云ふ、  
 志ゆはん(首班)固第一位、首位、  
 志ゆはん(襦袢)固肌(形)につける襦(形)、  
 のなき短かき衣物の稱、はだき、  
 志ゆひ(種皮)固草木の種子の上皮、  
 志ゆひ(守備)固守るコト。かたむるコト、  
 志ゆひ(首尾)固頭と尾、初めと終りと  
 物事の經過(形)即ちなりゆき、都合す  
 る、假令は首尾よく行くなど、(形)略(形)  
 (軍略(形))、  
 志ゆひ(樹皮)固樹の皮のコト、  
 志ゆひ(種皮)固種(形)の外部を包める薄  
 き皮のコト、  
 志ゆひ(壽碑)固壽藏(形)に同じ、  
 志ゆひ(朱引)固朱を以て線(形)を引く  
 コト、又は引きたるもの、稱、  
 志ゆひつ(主筆)固新聞又は雜誌記者中の  
 頭(形)たるものにて、其の社の社  
 説、及び重要な論説等を執筆するも  
 のの稱、  
 志ゆひん(洩瀉)固病人、老人などが臥(形)

志ゆひ、志ゆふ  
 たるまゝにて、小便をなす具、陶器(形)  
 又は硝子(形)にて作らる、  
 志ゆひん(需品)固必要なる品、無くてな  
 らぬ物品のコトを云ふ、  
 志ゆひたい(守備隊)固守備の軍隊、  
 志ゆひたい(守備兵)固守備の兵士、  
 志ゆひき(朱引外)固昔時江戸の市  
 中、市外とを區別する爲めに、市街圖  
 に朱の線(形)を引きしより、東京市外の  
 コトを、しゆびきくわいと云ふ、而して  
 市内のコトを、しゆびきうち(朱引内)  
 と云ふ、  
 志ゆひせんりやち(守備占領)固守備上の  
 必要よりして占領したる敵國の土地を  
 云ふ、  
 志ゆふ(首府)固其の國第一の都、宮城の  
 志ゆふ(主婦)固主人の嫁(形)、一家の經濟  
 (形)をつかさどる女、妻女、  
 志ゆふ(主部)固大切な部分、  
 志ゆふ(授付)固さづけあさふコト、  
 志ゆふ(首服)固自首して罪に服するコ  
 トを云ふ、  
 志ゆふ(儒服)固昔時學者が特に着用せ  
 し衣服のコトを云ふ、  
 志ゆふで(朱筆)固墨筆に對しての稱にて  
 朱墨を附(形)けて、文字を書くに用ゆる

筆の稱、  
 志ゆふん(主文)固文章中の肝要なる語句  
 の稱、法律の語にて、判決の云ひ渡し  
 文のコトを云ふ、  
 志ゆふちかん(酒風漢)固酒毒にて身軀(形)  
 の自由の利(形)なく爲りし人、  
 志ゆへき(酒癖)固さげぐせ、  
 志ゆべつ(種別)固種類を別るコト。しな  
 わけ、  
 志ゆべつ(殊別)固一々別(形)るコトを云  
 志ゆひ(酒保)固軍隊の内にて、飲食物及  
 び日用品を賣る處のコトを云ふ、酒屋  
 の奉公人、  
 志ゆひ(酒舖)固さかや、  
 志ゆひ(酒母)固酒を醸(形)す時に用ゆる  
 もやしのコトを云ふ、  
 志ゆひ(主簿)固帳面を預かる人、書記、  
 志ゆひ(主母)固其の家の女主人、  
 志ゆひ(珠母)固介の名、あこ貝のコト、  
 志ゆひ(首謀)固悪事、むぼんなごを企  
 (形)だつる張本人のコト、  
 志ゆほく(主僕)固主人と下僕(形)、  
 志ゆみ(趣味)固おもむき、おもしろみ、あ  
 じわひのコトを云ふ、  
 志ゆみざ(須彌座)固佛像を奉安し置く處  
 ①兜(形)の八幡座のコトを云ふ、  
 志ゆふ、志ゆみ

志ゆみさん(須彌山)固佛語、佛のあます  
 なるま云ふ極めて高き山の名、  
 志ゆみざん(須彌壇)固佛像を安置する臺  
 (形)のコトを云ふ、  
 志ゆみやち(壽命)固いのち、生命、  
 志ゆめい(主命)固主人の命令(形)、  
 志ゆめい(受命)固命令を受くるコト。仰  
 (形)に従ふコトを云ふ、  
 志ゆもく(種目)固種類の小わけ、  
 志ゆもく(撞木)固丁字形になつて長き  
 物にて、鉦(形)を打つ具、  
 志ゆもく(樹木)固木、立ち木、  
 志ゆもつ(腫物)固皮膚(形)に生ずる出来  
 物(形)のコトを云ふ、  
 志ゆもん(朱門)固朱塗(形)の門、  
 志ゆもん(手紋)固手のすじのコト、  
 志ゆもん(呪文)固まじなひの文句(形)、  
 志ゆもくぎめ(撞木紋)固鉦(形)の一種、其  
 の形極(形)めて大きく、一丈五六尺以上  
 二丈あり、頭は左右に廣(形)り出で、  
 其の兩端の下部に眼あり、其の頭の状  
 (形)、が宛然(形)鉦(形)を叩く撞木に似  
 たるより此名あり、林(形)は灰白色に  
 て、溫暖(形)の地に棲(形)む、  
 志ゆもくづえ(撞木杖)固上端に短かき横  
 木を渡したる丁字形を爲せる杖のコト

志ゆゆ、志ゆり  
 志ゆゆ(須臾)固つかぬま、しばしのコト、  
 志ゆつせつ(茶葉節)固九月九日の節句の  
 異稱、  
 志ゆよ(授與)固さづけあさふコト、  
 志ゆよ(入典)固殊に身分高き人のよめい  
 りのコトを云ふ、  
 志ゆよち(主用)固おもなる用事、主人の  
 志ゆより(需用)固ひつよう、入用、  
 志ゆらい(修羅)固あしゆらに同じ、  
 志ゆらい(集禮)固元祿時代の雅語、拂ふ  
 べき義務ある一定の代金のコトを云ひ  
 表はしたるもの、  
 志ゆらち(壽老)固生命のながくあるコト  
 壽命の長き老人、  
 志ゆらく(入浴)固貴人のみやこいり、  
 志ゆらん(酒亂)固酒に酔(形)ひて精神の  
 狂(形)ふコトを云ふ、  
 志ゆらだち(修羅道)固佛教のあしゆら道  
 より轉じたる語にて戦争の場處、騒動  
 の場處のコトを云ふ、  
 志ゆらちじん(壽老人)固七福人の一、  
 志ゆらのちまた(修羅街)固修羅道、  
 志ゆり(手裏)固手のひら、  
 志ゆり(主吏)固其の役所の主(形)なる官  
 吏のコトを云ふ、  
 志ゆゆ、志ゆり















志ゆん

志ゆんどう(齋動) 志ゆんすかに動くコト  
 轉じて取るに足らぬ者の手むかふコト  
 を云ふ。  
 志ゆんとう(準等) 志ゆん相違のなき等級  
 を云ふ。  
 志ゆんとう(純銅) 志ゆん相違のなき銅  
 志ゆんとう(俊徳) 志ゆん相違のなき銅  
 志ゆんなん(殉難) 志ゆん相違のために生命を  
 間を授けたる所の名。  
 志ゆんなん(閑年) 志ゆん閑なる年のコト。  
 志ゆんば(駿馬) 志ゆん能く走る上等の馬の  
 コトを云ふ。  
 志ゆんばい(巡拜) 志ゆん神社佛閣を次から次  
 へ参拜して歩くコト。  
 志ゆんばら(詢訪) 志ゆんたづねさふ。おとづ  
 志ゆんばく(純白) 志ゆんまっしろ。  
 志ゆんばつ(俊拔) 志ゆんはだちすぐれる。  
 志ゆんばつ(峻拔) 志ゆん山の格段に高くそび  
 ゆるコト。  
 志ゆんばん(順番) 志ゆん順々にかはりて、其  
 の物事をなすコトを云ふ。  
 志ゆんび(純美) 志ゆん何等のまじり氣のなき  
 美(び)くしきコトを云ふ。  
 志ゆんびつ(潤筆) 志ゆん筆をうるほすと云ふ

志ゆん

志ゆんびきん(準備金) 志ゆん用意に備(び)へ  
 置く金子のコト。  
 志ゆんびつれ(潤筆料) 志ゆん書又は畫を書  
 きたる報酬(びつれ)。  
 志ゆんぶ(巡撫) 志ゆん諸國をめぐり歩いて、  
 人民の心を安じなぐさむるコトを云ふ。  
 志ゆんぶ(春風) 志ゆん春の候に吹く、すな  
 はな風。  
 志ゆんぶ(醇風) 志ゆんおさなしき風俗。  
 志ゆんぶ(順風) 志ゆんおび風。  
 志ゆんぶ(春服) 志ゆん春のつきたがふ。  
 志ゆんぶ(春眼) 志ゆん春衣(はる)のコト、即  
 ち花見衣裳(はなみ)。  
 志ゆんぶ(峻文) 志ゆん苛酷(はげ)なる法律、  
 志ゆんぶ(春分) 志ゆん春の彼岸の中日、即  
 ち此の日は晝夜の時間に、長短の差な  
 き時なり。  
 志ゆんぶ(春風君) 志ゆん紙馬(かま)の異  
 名、即ちいかのぼり。  
 志ゆんぶ(純文學) 志ゆん詩歌文章等の  
 みを研究する文學。  
 志ゆんぶ(春分點) 志ゆん太陽が黃道(わ  
 だ)を、南より北へ向つて通過する點の  
 コトを云ふ。  
 志ゆんべ(峻壁) 志ゆんはしきがけ、

志ゆん

志ゆんべつ(峻別) 志ゆんきつぱりせる區別。  
 志ゆんばら(遵奉) 志ゆん能く従ひ守るコト。  
 志ゆんばら(詢謀) 志ゆんひはかる、相談す  
 るコトを云ふ。  
 志ゆんばく(醇朴) 志ゆんいつはらざるコト。  
 志ゆんみん(春眠) 志ゆん春の夜の心地よき眠  
 (みん)のコト。  
 志ゆんめ(駿馬) 志ゆんよきうま。  
 志ゆんめい(峻命) 志ゆん主君の仰せ付けの  
 志ゆんやち(春陽) 志ゆん春の日のコト。  
 志ゆんやち(馴養) 志ゆんかひならずコト、養  
 ふてならずコト。  
 志ゆんやち(順養子) 志ゆん兄(あに)の世継(よ  
 り)に弟(あに)が爲り、弟の世継に兄の子が  
 なるが如きコトを云ふ。  
 志ゆんやち(巡洋艦) 志ゆん軍艦の一種、  
 速力(すみ)はやくして、石炭を多く積み得ら  
 るるやう造られあるに依り、善く遠洋  
 の航海を爲すに適する艦。  
 志ゆんよ(餽餘) 志ゆん食ひあまり。  
 志ゆんら(巡邏) 志ゆんめぐり歩いて、視察し  
 つ、警(あや)しむるコトを云ふ。志ゆん巡査(じ  
 ゅん)のコトを云ふ。  
 志ゆんら(春來) 志ゆん春になつてこのかた  
 志ゆんら(醇醪) 志ゆんまさり物なき上等の  
 さけ。

志ゆん

志ゆんらん(春蘭) 志ゆん草の名、蘭の一種に  
 て、普通の物よりは其の葉細く長く、春  
 の頃に其の花莖(はたけ)の頂(たか)に、一箇  
 づゝの帯綠色の小さき花を咲すもの。  
 志ゆんらん(巡覽) 志ゆん方を見物して歩く  
 コト。  
 志ゆんり(淳漓) 志ゆん酒さうすき酒  
 轉じて親切と薄情(はげ)。  
 志ゆんり(循吏) 志ゆん善良にして、やさしき  
 官吏のコトを云ふ。  
 志ゆんりつ(恂慄) 志ゆんおそる、コト。こは  
 がるコトを云ふ。  
 志ゆんりん(純林) 志ゆん全部が同一種類の樹  
 木よりなつてゐる林。「コトを云ふ  
 志ゆんりやち(純良) 志ゆん此の上もなきよき  
 志ゆんりやち(循良) 志ゆんなほなる性質の  
 コトを云ふ。  
 志ゆんれい(峻厲) 志ゆんさくしてきびしき  
 性質(せい)を云ふ。  
 志ゆんれい(巡禮) 志ゆん諸國々を巡(めぐ)りて、諸  
 處の神社佛閣に参詣する人。笈(せき)甲  
 掛(か)などの扮装(はんさう)にて、諸國の靈  
 場(みやげ)に参詣し道々、咏歌(うた)を唱(とな)へて  
 人の恵みを受くる人。  
 志ゆんれい(醇醪) 志ゆん酒味よく、香氣  
 (かき)の高き酒。まさり氣のなきあまき

志ゆん

志ゆんれい(準例) 志ゆん標準(ひょうげん)となすべ  
 き、しきたりのコトを云ふ。  
 志ゆんれい(巡禮室) 志ゆん巡禮のみを泊  
 (と)める安(やす)やごの科ト。  
 志ゆんろ(峻路) 志ゆんはしきみち。歩き難  
 (た)き阪路(ばんろ)。  
 志ゆんろ(順路) 志ゆん本道路(ほんだう)の科ト。便  
 宜(べんい)なる道すぢ。たよりよき道すぢ  
 の科ト。  
 志ゆんろく(馴鹿) 志ゆん鹿の種類にして、寒  
 地に棲む、形鹿(か)に似て大きく、雌雄  
 (めす)ともに長く太き角(つ)を有す、我が  
 國(くに)にては、樺太(はま)に多く産す。  
 志ゆんわ(淳和院) 志ゆんじゆんなるんに  
 同じ、其の條を見られよ。

志ゆん

志ゆん(正) 志ゆん同じ、あし。  
 志ゆん(疎) 志ゆん又たそと讀む、細(こ)かからぬ  
 即ちまばら。まばらにす。あらし。荒く  
 す。間(ま)をあける。すかす。うさん  
 す。親しくせぬ。うさくなる。遠ざかる  
 志ゆん(疏) 志ゆん又たそと讀む、前條の疎(そ)  
 志ゆん、まよ、正、疎、疎



志よ 越、直、疽、蛆、狙、狙、狙、狙、狙、狙

志よ(越) 図又たそと讀む、つづくまるコト、  
志よ(直) 図又たそと讀む、つづくまるコト、包  
(切)みたる物。つこのコト。神を祀るに  
用ひ敷物の名、即ちあらも。浮草(ウツクサ)  
志よ(疽) 図又たそと讀む、腫物。ふきでも  
志よ(蛆) 図又たそと讀む、うじ虫の科ト、  
志よ(狙) 図又たそと讀む、獸の名、てなが  
ざる(手長猿)れらふ。うかがふ。す  
れくれもの。性根の曲(カ)りし、かうか  
つなるコト、  
志よ(狙) 図又たそと讀む、あさすさりす  
るコト、ためらふコト、  
志よ(狙) 図又たそと讀む、石の多くある  
山。石山の科ト、  
志よ(狙) 図又たそと讀む、齒にて物をか  
み碎(ク)くコト。あじほふ。あじを分け  
る。かみわけける。考へる。計(カ)をた  
つる、  
志よ(沮) 図又たそと讀む、水に浸(シ)るコ  
ト。水氣を多く含みたる土地。そばむ  
こばむ。はむ。やめる。やむ。まける  
やぶる。水なごのもれ出るコト、  
志よ(狙) 図又たそと讀む、にくむ。うらむ  
れたむ。それむ。のらふコト。悪く云  
ふ、そしる、

志よ 阻、阻、阻、阻、阻、阻、阻、阻、阻、阻

志よ(阻) 図又たそと讀む、山や道のけは  
しきコト。要心堅固なる土地の稱。難  
(カ)し。困難なるコト。こまる。なやむ  
そばむ。はむ。たより。たのむコト  
邪(カ)す。さまたげる。いぶかる  
うたがふコト、  
志よ(阻) 図又たそと讀む、精密(シ)ならざ  
るコト。ぞんざいなるコト。おこりた  
かふるコト、  
志よ(阻) 図又たそと讀む、野菜類を鹽漬  
(シ)せし物、即ち漬物、  
志よ(阻) 図又たそと讀む、まぢがふ。くひ  
ちがふ。そとするコト、  
志よ(阻) 図又たそと讀む、農具の名、くは  
こ、すきこのコト、  
志よ(阻) 図はじめ、はじむ。かかり、  
志よ(阻) 図はし、髪をかき、くしげす  
るコト、 「即ち洲(シマ)  
志よ(阻) 図水邊(シ)の、 「即ち洲(シマ)  
志よ(阻) 図木の名、かしの科ト、  
志よ(阻) 図糸の端(シ)の、物事の初め、い  
ぐち。物事の起り、即ち起原(シ)の、  
なぐコト。つぎの科ト。事業。仕事  
(シ)の、  
志よ(阻) 図草の名、いも。特にさつま  
いの科トを云ふ、

志よ 諸、諸、諸、諸、諸、諸、諸、諸、諸、諸

志よ(諸) 図種々雑多、しる。これ又  
たは、この云ふ意を表はす語に、於  
て云ふ意味を示す無意味の助辭、  
志よ(諸) 図諸(シ)に同じ、  
志よ(諸) 図蔓草の名、山のいも、  
志よ(諸) 官衙、即ちやくしよの科ト。割  
當(シ)手分(シ)即ち部署など。位置。  
坐席の順次。書き記す。かき表はす、又  
は書き表はしたるもの。姓名を書き、  
又は姓名を書きたるもの、  
志よ(諸) 図夜あけ、あけほの、  
志よ(諸) 図又たしや、又たそと讀む、物  
を火に載せ軟かくす、即ちなる。たく、  
志よ(諸) 図あつきコト。特に夏季のあつ  
き。層の大暑の略にて、土用(シ)の科  
トを云ふ、  
志よ(諸) 図場所。こころ。程度、又は此れ  
だけ。ばかり。云ふ意を表はす語、  
志よ(諸) 図場所(シ)の、こころ。止る所。  
位置。ある。居る。置く。始末(シ)す、  
處置(シ)する。定(シ)る。定(シ)める。安じて其  
の處にある。従ふ。行く。なつく、  
志よ(諸) 図書物の科ト。文字の科ト。文  
字をかき記すコト、又はかき記したる  
物、  
志よ(諸) 図五穀の一、きびの科ト。極め

て僅(カ)の重量を云ひ表はす語、  
志よ(軒) 図又たやまも讀む、田畑の中に  
設けられたる假小屋。轉じて別荘、下  
屋敷の科ト。都會の土地に近き郊野の  
じの科トを云ふ、  
志よ(嶼) 図小島(シ)を云ふ、  
志よ(瘧) 図病氣の名、鬱憂病の科ト。轉  
じて氣ふさぐ。あんじ煩(シ)らふコトを  
云ふ、  
志よ(鯉) 図川魚の名、たなこの稱、  
志よ(杵) 図器具の名、きね。つち。才植  
(シ)の科ト、  
志よ(庶) 図妾(シ)の腹に生れし子。いろ  
く。衆(シ)し。人民の科ト。つよくた  
のむ。ひれがふ。ほさん。達せん。こ  
す。ちかし。云ふ意を表はす語、  
志よ(助) 図たすく。たすける。世話す。助  
手の略、すけて、  
志よ(鋤) 図農具の名、くは。すき。田畑  
をすきならすコト、  
志よ(輔) 図道中の驛(シ)に在る役所、今  
の村役場の如きもの。二つ辻(シ)の科  
トを云ふ。人民が力を合し助くるコト  
志よ(葺) 図木の名、榎(シ)の種類にて、  
木の科ト。草の名、あさ、  
志よ(葺) 図木の名、くぬぎ。くぬぎの實

(シ)ごんがり。機(シ)の附属品の名、即  
さび。水を汲みて溜(シ)置く方形の桶  
(シ)即ちふれ。轉じて水を汲む。汲み  
出すコト、  
志よ(序) 図書物又は文書などのほしがき  
のぶ。つひづる。い。ごち。物事のは  
じめ。次第。ついで。大なる家の東西  
に在る廂(シ)の稱。庠序の序にて、學  
校の科ト、  
志よ(抒) 図水などを汲み出すコト、又は  
くむコト。もらす。もる。のぶる。草  
などを刈りのぞくコト、  
志よ(舒) 図云ひ表はす、即ちのぶる。み  
やびやか。風雅。しなやか。開く。咲く  
委(シ)しくす。つまびらかにす。ゆる  
める。ゆるやかにす。ゆるす。物事の初  
め。い。ごち。ごちの科ト、  
志よ(澂) 図水のはまり。みぎは、  
志よ(紋) 図位をす。める。官をのぼす。  
書物や文書の初めに、其の内容の概略  
(シ)を述ぶるコト又は述たる物。のぶ  
る。記す。序に通ず、ついで次第。い。ご  
ち、  
志よ(徐) 図やすらか。ゆるやか。おもむろ  
ゆる。ゆる。しづ。しづ、  
志よ(餘) 図虫の名、蛙(シ)の種類、ひき、

へるの科トを云ふ、  
志よ(汝) 図そなた。そち。なんじ、  
志よ(如) 図赴く。行く。達す。至る。副詞  
にて、い。ごち。若(シ)し。萬一又はそうし  
て云ふ意を表はす語、  
志よ(絮) 図柳(シ)に咲く白き小きき花の  
種。轉じて降りつゝある雪を云ふ。綿  
(シ)の科トを云ふ、  
志よ(茹) 図野菜を湯に浸して軟かくす、  
即ちゆてる。轉じて菜(シ)類のひたし  
きもの。草木の根の多く連なれるもの  
又は連なれる状を云ふ。たべる。くふ、  
志よ(恕) 図ゆるす。さがめぬコト。同情  
を表はす。おもひやりになす。心のゆる  
やかにして大なる状(シ)を云ひ表はす  
語、  
志よ(洳) 図物又は土地などの水につかり  
ぬる。コトを云ふ、又は水づかりとな  
りて、濕(シ)る土地の稱、  
志よ(施) 図人に金錢物品などを惠みあ  
たふるコトを云ふ、  
志よ(爾) 圖爾他に同じ、此のほか。此れ  
以外。云ふ意を表はす語、  
志よ(沮) 図又たそと讀む、  
くひさめる。さへぎり。さへむるコトを  
云ふ、  
志よ、志よあ 汝、如、絮、茹 九五九



志よあ、志よい  
 志よあたり(暑中) 図夏季のはげしき炎熱(暑)に、中(中)られて病氣となれるコトを云ふ。  
 志よる(所爲) 図爲せしコト。しわざ。  
 志よる(暑威) 図暑氣のきびしきコト。強きあつさのこト。  
 志よる(紋位) 図位をさづけらるるコト。位をのほせらるるコト。  
 志よる(所有) 図持つてるコト。我が権利内の物たるコト。或る物に就て、所有權を保つてるコト。  
 志よる(綱簾) 図農具の名、すき。  
 志よる(書院) 図書物の蔵(書)めある部屋と云ふ。意は、學問を修(修)めめる處。表坐敷、即ち客間(客間)のこトを云ふ。  
 志よる(庶尹) 図種々のおさ、もろくの長のこトを云ふ。  
 志よる(所有權) 図所有物を自由に使用し、及び處分する權利のこトを云ふ。  
 志よる(主) 図其の物の所有權を有(有)てる主(主)の稱。  
 志よる(前條) 図前條に同じ。  
 志よる(所有物) 図其の人の持つてる物を云ふ。  
 志よる(初一念) 図最初より思つて

志よる、志よう 松、松、松、松、升、昇、陞  
 志よる心根(心根)のこト。  
 志よる(書院番) 図徳川幕府の職名殿中の書院を守りし武士の稱。  
 志よる(松) 図木の名、まつ。  
 志よる(松) 図うつたへ。うつたふるコト。實(實)む。問ひ糺(糺)す。いさかひ。口論。あらしひ。  
 志よる(松) 図胸(胸)さばきするコト。心の落ちつかぬコト。おどろきあはてるコトを云ふ。  
 志よる(松) 図木の名、まつ。  
 志よる(松) 図みだれたる髪。さんばら髪(さんばら)のこトを云ふ。  
 志よる(升) 図櫛目(櫛目)の單位にて、一升は一斗の十分の一、一合の十倍。一升(一升)のぼる。あがる。上へ行く。すむ。植物の實(實)じゆくす。さかえる。  
 志よる(昇) 図太平(太平)世のおだやかになさまコト。一升(一升)のこトに同じ。前條を見よ。  
 志よる(陞) 図上(上)るのぼるコト。  
 志よる(頌) 図其の人の德行などを褒め稱(頌)ゆるコト。又はほめたる文書。明らかなり。公(公)なり。  
 志よる(懐) 図おそる、こぼる、

志よる、志よう 驟、驟、種、種、種、種、九六〇  
 志よる(東) 図馬の一心に爲つて走り行くコト。走り行く馬。  
 志よる(驟) 図おそる。こぼる。慎(慎)む。敬(敬)ふ。コトを云ふ。  
 志よる(種) 図つきて鳴すか。即ちつりがれのこト。  
 志よる(種) 図又、しゆと讀む。植物の種子たれ。いろくさぐさ。さまんく。のたぐぬ。種類(種類)種子と云ふ。意より轉じて、種(種)をまくコトを云ふ。  
 志よる(種) 図足の後の方の部、即ちか。さきびす。轉じて、ふむコト。つぐつ。行く。いたる。  
 志よる(種) 図皮膚のはれるコト。はれもの。できもの。即ち腫物(腫物)。  
 志よる(種) 図足の疲勞(疲勞)たるコト。種(種)に通ず。下男、小奴(小奴)。  
 志よる(種) 図小き壺(壺)の形になりし杯(杯)かされる。かされる。あつまる。むらがる。あつめるコト。  
 志よる(衝) 図つぐ。ぶつかる。あたる。目的とする所、例は其の衝に當るなど。大切なる所。大通(大通)り。道路のこトを云ふ。  
 志よる(承) 図うくる。いたる。かしづく。うけたまはる。うけつぐ。順(順)々(々)。

志よる、志よい  
 志よる(順序) 図おこたる。なまける。  
 志よる(勝) 図かつ。すぐれる。まさる。ぬきんでる。天然の風景に富みたる場所の稱。つりあふ。かなふ。こト。  
 志よる(飯) 図炊事に用ゆる具、こしき。せいろ。のこト。  
 志よる(備) 図おこたる。なまける。  
 志よる(春) 図おこたる。なまける。うすづく。轉じて夕陽(夕陽)の西に入らん。させる。状態を云ふ。語、例は日西山に春(春)く。こトを云ふ。  
 志よる(拍) 図突く。打ちあたる。ぶつかる。志よる(誦) 図讀む。唄ふ。唱(唱)ふ。そしる。惡口(惡口)を云ふ。  
 志よる(柵) 図松に同じ、まつ。  
 志よる(履) 図履物。はれもの。特に足の履(履)のこトを云ふ。  
 志よる(稱) 図名譽(名譽)はまれ。ほめられた。た。ふ。このふ。名づくる。呼び爲す。さなへ名、即ち稱號(稱號)のこト。はかるコト。ばかりにてはかりたる目方。つりあふ。かなふ。こト。  
 志よる(證) 図印(印)を云ふ。即ちしよう。明(明)らかにす。明(明)を立つる。  
 志よる(承) 図進む。上(上)る。承(承)に通

志よる、志よう 勝、飯、備、春、拍、誦、稱、證、承  
 志よる(佐) 図うけつぐコト。佐(佐)を爲す。す。う。うけつぐコト。佐(佐)を爲す。佐(佐)なる。助手(助手)。  
 志よる(蒸) 図蒸(蒸)の細かき薪(薪)物に湯氣を通し軟かにす。即ちむす。あつし。あつくる。あつむ。多し。いろい。ろ。  
 志よる(蒸) 図むす。あつくる。風なくして。暑(暑)のこト。のぼる。進む。久し。長し。多し。いろく。作(作)す。い。なむ。くはだつ。支那にて、冬季に營む先祖の祭事の稱。目上(目上)の人と情(情)を通するコトを云ふ。  
 志よる(從) 図したがふ。つきそふ。供(供)して行く。從者(從者)も人。我(我)も。氣(氣)のこト。同一の家筋(家筋)のこト。  
 志よる(縦) 図横に對しての語、たて。南北に通る。線(線)打ちます。放つ。打ちすて置く。我(我)も。かつて。ほしい。ま。

志よる、志よう 蒸、蒸、從、縦、聲、聲、縱  
 志よる(聲) 図木の名、もみ。  
 志よる(聲) 図きはだちて、高く立つそびゆるコト。敬(敬)ふ。たつさぶ。はげます。す。める。恐(恐)れ驚(驚)け。云ひ表はす語。  
 志よる(聲) 図過ぎ來りしあこ。  
 志よる(縱) 図家(家)の子を云ふ。  
 志よる、志よう 乘、乘、乘、乘、仍、仍、九六一  
 志よる(乘) 図のこト。のするコト。乗物(乗物)の略。算術の語、かけ算のこト。かける。かけあはす。かぞへる。はかる。打ちかつ。  
 志よる(乘) 図あまる。餘分にある。其の上にも。あまつ。おそれおごる。こトを云ふ。  
 志よる(元) 図むだ。役(役)に立ぬ。こト。いたづら。あだし事。物の入り亂れる。こト。混雜する。こト。  
 志よる(仍) 図因(因)る。依(依)つて。されば。かさなり。つ。意を表はす語、即ちた。び。し。き。り。に。  
 志よる(繩) 図葉(葉)を編み紐(紐)させし物。即ちなは。特に墨(墨)のはのこト。のり。おきて。て。ほん。正(正)しき。こト。教(教)ゆる。こト。た。し。誠(誠)しむる。こトを云ふ。  
 志よる(尉) 図左右の兵衛府。衛門府及び檢非違使などのこトを云ひし語。年を老ひたる男子、即ちおきな。稱。炭火の燃(燃)へ。盡(盡)きて。灰(灰)なりたる物を云ふ。  
 志よる(容) 図かほかち。すがた。  
 志よる(使用) 図用に立つべくもちひつ。か



志より

志より(試用) 固ためし用ゆる。こゝろみに使(び)ひみるコト、  
志より(私用) 固自分にのみ關する用事、公用に對しての稱(私)に用ゆる。内分にて使ふコト、  
志より(自用) 固自分の用事(私)にのみつかふコト、例は自用車など、  
志より(自容) 固自分のなりふり、  
志より(鍾愛) 固非常に可愛(び)がるコトを云ふ、  
志より(承引) 固引き受ける、承知する、つけたまはる、  
志より(印) 固證據(私)たつ爲めに捺したる印形の稱、  
志より(承允) 固引き受ける、承知する、きき入れるコト、  
志より(松陰) 固松の木のかげ、  
志より(松韻) 固松風のおこ、  
志より(冗員) 固むだな人員、  
志より(誦詠) 固詩歌をよむコト。詩歌を吟するコト、  
志より(松烟) 固墨(松)の異名、  
志より(頌歌) 固其の人の功績徳望を褒めたいたる歌を云ふ、  
志より(升遷) 固貴人の死去されたるコトを云ふ語、

志より

志より(湘娥) 固美人のトを云ふ、  
志より(勝槩) 固よき景色(私)、  
志より(庠校) 固學校に同じ、  
志より(昇降) 固のぼるさ下るさ、あがりなりのコト、  
志より(昇水) 固毒藥(私)の名水銀(私)製劑にて灰白色を爲せる重き粉末の毒殺虫防腐消毒等の効力を有す、  
志より(松膏) 固まつやに、  
志より(稱號) 固さなへ名、さなへ呼ぶコト、  
志より(乘客) 固汽車、電車、馬車、人力、船等に賃錢を拂ふて乗る人、  
志より(乘艦) 固軍艦に乗るコト、  
志より(鐘馗) 固惡魔を退治する神の名、體格強健眼孔大きく髯(ひげ)多く、黒色の衣冠をつけ、青龍刀を右手に持てる像の神、  
志より(鐘起) 固そびえたつ。そばたち志より(誦詠) 固文句を能く記憶し、そらにて讀み又は書くコト、  
志より(繩規) 固すみなほさ、ぶんまはした云ふ(私)轉じてのり、てほん、  
志より(蒸氣) 固液體が氣體を爲りて立ち上るもの、稱(湯氣(私))のトを云ふ

志より

志より(昇給) 固給料額の、のぼるコト、俸給の上るコト、  
志より(昇級) 固等級の進み行くコト、  
志より(松炬) 固たいまつのコト、  
志より(松魚) 固魚の名、かつほに同じ、  
志より(剝金) 固計算してあまりたる金子のトを云ふ、  
志より(蒸氣車) 固蒸氣の力にて走る車、即ち汽車(私)、  
志より(蒸氣船) 固蒸氣の力に依りて、海上を走り行く船、  
志より(勝境) 固景色の殊に美しき處のトを云ふ、  
志より(蒸氣浴) 固むし風呂のト、  
志より(蒸氣機) 固蒸氣の力に依りて動力を起さす仕掛の器械、  
志より(蒸氣唧筒) 固蒸氣の力にて水を吸ひ上げる仕掛(私)になつてゐるポンプ、  
志より(蒸氣力) 固蒸氣の活動す志より(勝區) 固景色の勝(私)れてる土地。名所のトを云ふ、  
志より(承句) 固漢詩の五言七言絶句の

九六二

第二番目の句の稱、

志より(元句) 固むだなる文句。何等の役に立たぬ文句、  
志より(乘具) 固馬具(私)のト、  
志より(松火) 固たいまつのコト、  
志より(剝過) 固ありあまつてるコト、餘分なるコト、  
志より(勝軍) 固ちいくさ、  
志より(冗官) 固役に立ぬ官職、無益な官吏、無能の官吏、  
志より(憧憬) 固あこがる、コト。思ひを寄せてるコト、  
志より(鐘馨) 固鐘(私)と、打ちばんのコトを云ふ、  
志より(紹繼) 固父のあとをうけつぐ、  
志より(承繼) 固うけつぐコト、  
志より(勝景) 固すぐれたる景色。よきけしきのコト、  
志より(衝擊) 固つきうつコト、  
志より(證券) 固證券又はてかた(私)特に債權の證明を爲す文書、即ち借用證書などの類、  
志より(證言) 固證據たつる言葉(私)證人の證明せる言葉、  
志より(證券印紙) 固證據となるべく爲めに貼る印紙(私)、即ち收入

印紙の舊名、

志より(證據) 固明(私)を立つるコト。明を立つるしるしのコト、  
志より(稱呼) 固さなへるコト。さなへるのト、即ち稱號、  
志より(鐘鼓) 固かれ太鼓(私)、  
志より(元語) 固むだご。むえきな云ひぐさのト、  
志より(證悟) 固證據を見て心底より悟(私)を開くコトを云ふ、  
志より(鐘鼓) 固うたつたへるコト。うたへ出るコトを云ふ、  
志より(證據立) 固證據を示して證明する、  
志より(證據) 固證據を上げてし、  
志より(證據人) 固しようこなるべき人のト、  
志より(證據裁判) 固證據を描(私)へて、是非(私)を判斷する裁判、現行の裁判法は即ち此れなり、  
志より(證據物件) 固或る物事の證據となるべき物のトを云ふ、  
志より(證據) 固なわのト、  
志より(證據) 固くたくたく、入り

雜(び)りて用をなさぬコト(私)むだな物の入り雜(私)つてるコト、

志より(松杉) 固松さすぎ、  
志より(勝算) 固必らず勝つさ云ふ下算用(私)、  
志より(稱讚) 固ほめただえるコト、  
志より(乘算) 固かけ算のト、  
志より(承仕) 固昔時男子の髪を剃(私)て仙洞御所(私)、又は攝家に仕へて雜役に從事せしもの、稱、  
志より(承嗣) 固あそつぎのト、  
志より(松脂) 固まつやにのト、  
志より(松實) 固松の木の実(私)、俗に云ふ、  
志より(承襲) 固つぎつぐコト、  
志より(承襲) 固つぎつぐコト、  
志より(承襲) 固我が家に車夫を抱へ置きて、只だ自分の乗るための人力車のト、  
志より(松樹) 固松の木、  
志より(證書) 固權利義務に關する事を認めたる證據(私)なるべき文書の稱、  
志より(陸鏡) 固官位をのぼせ進むコト、  
志より(蒸暑) 固むしあつきコト、

九六三

志より

志より

志より



あよりしよ(蒸庶)困人民のこト、  
あよりじん(承塵)困なげしのこト、  
あよりしん(衝心)困急病の名、心臓が烈  
(つ)しき脚氣の爲めに、痺(じ)れるこト  
を云ふ、  
あよりしん(昇進)困昇り進む、官等など  
あよりしより(丞相)困宰相大臣のこト、  
あよりじより(蒸蒸)困物事の盛大なる状  
を云ひ表はす語、  
あよりしより(繩床)困繩を輪(つ)にして  
圓形に作りたる敷物(つ)、多く禪宗の  
僧侶の用ゆるものなり、  
あよりじより(猩猩海苔)困赤色を帯  
べる海苔(つ)のこトを云ふ、  
あよりせい(鐘聲)困鐘(つ)のひびき鳴る  
聲を云ふ、  
あよりせき(證跡)困證據を爲るべき殘  
(つ)つてあるあとかたのこト、  
あよりせき(乘積)困或る敷に或る敷をか  
け合して得たる積(つ)、即ち數量(つ)、  
あよりせき(蹤跡)困あしあき(つ)行衛(つ)  
のこト、  
あよりせつ(勝絶)困すぐれまさつてるこ  
ト、殊に勝れてよき景色、  
あよりせん(承前)困前の文章のつづきの  
こトを云ふ、

あよりせん(惓然)困ぞつさする、おそれ  
おのゝこトを云ふ、  
あよりせん(剩錢)困あまりの金錢(つ)つり  
あよりせん(乘船)困船(つ)に乗るこト、  
あよりそ(訟訴)困うつたへ。公事(つ)。あ  
らそひのこト、  
あよりそ(勝訴)困ちくじのこト、  
あよりそん(仍孫)困曾孫(つ)、  
あよりたり(松濤)困瀟の松風、  
あよりたり(稱道)困さなるこト、呼び  
なすこト、  
あよりたり(唱道)困さなるへうさふこト。  
さなる知らすこト、  
あよりたり(昇堂)困堂へ昇るこト、轉じ  
て人の家(つ)訪(つ)れ行くこトを云ふ、  
あよりたり(承諾)困うけがふ、承知する  
こト、  
あよりたり(冗談)困むだばなし、馬鹿な  
あよりち(勝地)困風景のすぐれてよろし  
き土地(つ)名高き土地のこト、  
あよりち(發時)困山などのきわだつて、  
高くそびへてるこトを云ふ、  
あよりちよ(乘除)困かけ算とわり算、か  
けるこトわるこト、  
あよりちや(冗長)困譯もなく長たらし  
あよりてい(訟廷)困法廷のこト、

あよりてん(昇天)困天に昇るこト、轉じ  
て耶穌にて信徒の死せしを云ふ、  
あよりてん(承傳)困うけつたへるこト、  
うけつぐこトを云ふ、  
あよりてん(昇殿)困御殿(つ)に昇(つ)る  
こト、昔時朝廷に仕ふる四位以上の人  
及び藏人(つ)にて、六位以上の人、宮  
中の御殿に昇るこトを許されしを云ふ  
あよりとり(升騰)困高くなるこト、物  
價の上るこト、  
あよりとり(昇等)困等級の昇るを云ふ、  
あよりどり(變動)困おそれて動き出す。  
おのゝきふるこト、  
あよりどり(鐘鐃)困鐘を鐃(つ)に用ゆる地  
金(つ)にて、一種の合成金、即ち錫(つ)  
が二十五分銅が百分より成りしも  
の、稱、  
あよりどり(衝動)困つきやりにて動かすこ  
ト、何等の感情をも起さず、只だ無意  
味につきやられるが如き感を精神に起  
すこトを云ふ、  
あよりとく(頌德)困其人の美德善行を、  
ほめあらはすこト、  
あよりとく(誦讀)困聲を立て、讀むこト  
あよりとつ(衝突)困物と物とがぶつかり  
合ふこト、轉じて双方(つ)の意見など

あより

あより

あより

九六四

あよりとく(一致)困せぬこトを云ふ、  
あよりとく(頌德表)困功德を褒め表  
はして、朝廷へ上(つ)る文章のこトを  
云ふ、  
あよりなん(拯難)困難儀を救ふこト、困  
難を助するこトを云ふ、「人のこト  
あよりなん(使用人)困めしつかひやまひ  
あよりなん(陸任)困役向の進むこト官等  
ののぼるこト、  
あよりなん(證人)困ほしようにん、證據  
あよりなん(承認)困みさめて承知するこ  
トを云ふ、  
あよりなん(鐘乳石)困方解石(つ)  
が石炭(つ)と合して、一つの化学的の  
變化を生じて、氷柱(つ)の如く垂れ下  
りたるもの、一般につつら石と云ふ、  
あよりぬつ(蒸熱)困むしあつきこト、  
あよりぬん(稱念)困佛の御名をさのふる  
こト、念佛をさのふるこト、  
あよりはい(勝敗)困ちまけ、  
あよりはい(松柏)困松と柏(つ)と、轉じ  
て松柏の葉は、四時其の色を變ぬより、  
操(つ)變らぬ正しきこトを云ひ表はす  
に用ゆる語、  
あよりはつ(蒸發)困凡て水の如き液體が  
熱を受けて氣體となつて上るこトを云

あよりばつ(聲拔)困山などの取り分け高  
くそびゆるこトを云ふ、  
あよりはふ(乘法)困かけ算のこト、  
あよりはふ(使用法)困凡て物の用ひ方の  
方則のこト、  
あよりはつ(蒸發)困蒸發して立つ氣  
あよりはりのかがみ(淨玻璃鏡)困地獄に  
在つて死して來た者(つ)を映して、其の  
生前(つ)の性行を判斷(つ)するを云ふ  
想像上の鏡(つ)轉じて何(つ)しても誤覺  
化(つ)し欺むこトの出來ぬを云ふこ  
トを云ひ表はす語、  
あよりび(稱美)困ほめた、ゆるこト。ほ  
めちらすこトを云ふ、  
あよりび(鐘美)困美しき物、又美しき事  
柄をあつめるこト、  
あよりび(冗費)困むだなつひえ、  
あよりふち(松風)困風が松の枝を拂ふこ  
ト即ちまつ風、  
あよりふち(承服)困承知して従ふ、納得  
あよりふん(冗文)困むだな條例、むだな  
文句のこト、  
あよりぶこと(勝負事)困勝敗(つ)を争ひ  
て、利益を計(つ)る遊び事を云ふ、  
あよりへち(證憑)困たしかなるしようこ

あよりへい(昇平)困世の中が善く治(つ)  
まりて、無事なるこトを云ふ、  
あよりへい(承平)困世の中の平穩無事な  
るこトを云ふ、  
あよりへい(稱兵)困軍(つ)を起すこト、  
あよりへい(冗兵)困役に立たぬ兵士、  
あよりへい(蒸餅)困むし菓子(つ)のまんじゆ  
う、パン、  
あよりへく(繩墨)困すみなわ(つ)轉じて規  
あよりへん(誦梵)困お経(つ)を讀み上げ  
るこト、  
あよりまん(冗漫)困くどくして用に立ぬ  
あよりめん(蒸民)困人民のこト、  
あよりみやう(稱名)困佛の名を呼びて念  
佛をさのふるこト、  
あよりめい(證明)困證據を立つるこトを  
あよりめい(證明書)困或る物事に就  
(つ)ての證明を爲したる證書、  
あよりもん(證文)困證書に同じ、  
あよりよ(稱譽)困ほめたつるこ  
ト、  
あよりよ(剩餘)困餘分。あまり、  
あよりよ(乘輿)困天子の御車即ち車馬。  
おのりもの、  
あよりより(稱揚)困ほめたのふる。ほめ

あより

あより

あより

九六五



志より

たゆめるコト、  
 志より(從容) 志をちついでる。ゆつたりしてゐるコト。  
 志より(慈通) 图片傍(シ)より勸(シ)めおだてるコト。  
 志より(元用) 志むだな入用。  
 志より(松頼) 志まつ風に同じ。  
 志より(蒸溜) 志凡て水の類即ち液體を煮沸(シ)して、蒸氣として、其の冷(シ)たる露(シ)を集め取るコト。  
 志より(繩律) 志きそく、おきてのコトを云ふ。  
 志より(雙立) 志そばだち立つコト。  
 志より(蒸溜器) 志蒸溜さすに用ゆる器具。  
 志より(承領) 志承知するコト。受取るコトを云ふ。  
 志より(承了) 志承知するコト。うけがふコトを云ふ。  
 志より(使用料) 志總て物を自己の所用に使ふ爲めに、仕拂ふ資金のコトを云ふ。  
 志より(松露) 志松の根元に生ずる球形の、小さき一種の菌(シ)の名。松の葉にたまれるつゆ。  
 志より(如雨露) 志器具の名、草木花卉

志より、志よか

に水と與ふるに用ゆる物、金屬製の柄杓の如きものにて、柄(シ)を爲して其の端(シ)に無數の小孔ありて、其處(シ)より水が雨露の如くに出るもの、志より(蒸溜水) 志水を蒸溜なしたるもの。  
 志より(鐘樓) 志かればつき堂のコト。  
 志より(蒸露罐) 志蒸溜器に同じ。  
 志より(所依) 志より(こころ) たるべき所。たのみさする所。  
 志より(暑喝) 志あつさに中るコト。  
 志より(初縁) 志最初のえんぐみ。  
 志より(所縁) 志たる。たよりとするコト。ゆかりのコト。  
 志より(助授) 志たすけ。たすくコト。  
 志より(初夏) 志夏のかかり、夏の初め。  
 志より(諸家) 志いろいろの家。學識ある多くの人と云ふコト。  
 志より(書家) 志書道の達人、即ち文字を巧みに書く人。  
 志より(書架) 志書物を入れ置く棚(シ)。  
 志より(初更) 志初夜のコト、現今の夜の八時のコトを云ふ。  
 志より(初號) 志初めの號、第一號。  
 志より(徐行) 志しづかに歩む。ゆるやかに行くコト。

志よか、志よき

九六六

志よか(書閣) 志書架(シ)に同じ。  
 志よか(初學) 志學問藝術などの習ひ初め、又は習ひ初めの人。  
 志よか(書題) 志書學に對しての稱文字を記されたる(シ)の面(シ)のコト。  
 志よか(書翰) 志手紙のコト。  
 志よか(所轄) 志かつかつするコト。支配し取り締るコトを云ふ。  
 志よか(所感) 志見又は聞きて心に感じたるコトを云ふ。  
 志よか(書翰紙) 志手紙を認める紙。  
 志よか(書翰箋) 志手紙を書く紙、じようがみ。  
 志よか(暑寒平) 志袴地(シ)の一種。絹糸と麻糸(シ)にて織りたるもの、夏期に着用するもの。  
 志よか(書簡文) 志手紙に用ゆる文章。候(シ)文のコト。  
 志よか(書筒袋) 志紙にて作られたる、細長き袋にて、手紙を入れて封ずる用を爲すもの。  
 志よか(初虧) 志日蝕(シ) 又は月蝕(シ)の初めの時を云ふ語。  
 志よか(所期) 志期する所を云ふ意にて斯くあるべしとあらかじめ心に定めてゐるコトを云ふ。

志より、志よき、志よく、卓

志よき(初期) 志物事の生じたて、おこり、志よき(書記) 志指揮(シ)に依りて種々の事實(シ)を書く役、又は其の人。  
 志よき(暑氣) 志あつつけ、あつさのコト。  
 志よき(聖記) 志名前などを書き記すコト。  
 志よき(庶卉) 志種々の草花のコト。  
 志よき(庶幾) 志こひれがふ。近(シ)し。  
 志よき(除棄) 志とりのぞくコト。のぞきすつるコトを云ふ。「袋のコト」  
 志よき(書笈) 志書物を入れて荷(シ)ふ。  
 志よき(初級) 志初等の級(シ)。  
 志よき(所行) 志其の行ひ、しわざ、しぐさのコトを云ふ。  
 志よき(諸行) 志佛語にて、萬物及び萬事の行ひのコトを云ふ。  
 志よき(書記課) 志役所にて書記の事務を執る處の稱。  
 志よき(官) 志書記官、志官省の長官、又は地方長官の命を受けて、其の官府の事務を執り、合せて長官を扶くる官職の名。  
 志よき(無常) 志佛敎の語、人生は萬事たよりなく、ばかなきコトを云ふ。  
 志よき(卓脚) 志の高き机。しつぽく。臺即ち食卓(シ)のコト。  
 志よき、志よく、卓

志よき、式、拭、色、足、食、仄、仄

志よき(式) 志又たしきとも讀む、のり。てほん。しかた。のつさる。手本となす。うやうやしく慎(シ)むコト。使(シ)ふ、用ゆる。乗用の車の前に横に渡されたる木。  
 志よき(拭) 志又たしきとも讀む、乗用車の前に在る横木(シ)のコト。  
 志よき(色) 志又たしきとも讀む、いろいろのコト。つやのコト。いろいろさまなるコトを云ふ。  
 志よき(足) 志又たしきとも讀む、あし。満足なるコト。十分なるコト。みちたるコトを云ふ。  
 志よき(食) 志くちらふ。食物。日々の食事。轉じて御飯(シ)めし。食祿即ちふち。ふち米。受る。戴(シ)く。はむ。虫くふてかける。なくなる。きゆるコト。  
 志よき(仄) 志漢字の四聲の一、そく字のコト。そば。かたわき。かすか。ほのか。ひるがへる。うらがへる。そばたつ。志よき(仄) 志日の光り弱くなる。云ふ意より轉じて、夕方(シ)のコト。かたむく。かたよる。  
 志よき、式、拭、色、足、食、仄、仄

志よき、蝕、蜀、燭、觸、職、九六七

志よき(蝕) 志日蝕(シ) 虫が食ひて、かけ破(シ)る、コトを云ふ。  
 志よき(蜀) 志虫の名、いもむしの唐名なりと云ふ。  
 志よき(燭) 志ともしび、特に蠟燭(シ)の火。善火(シ)ひかる。てらすコトを云ふ。  
 志よき(觸) 志はる。ふる。感じる。おほゆ。はたく。ふちあたる。うつ。突(シ)く。  
 志よき(觸) 志弓を入れ置く、なめし皮の袋、ゆみぶくろのコト。  
 志よき(觸) 志同じ。虫の名、いも虫、仕事、職務(シ)つかさどるコト、つかさ。おもに。主たるコトを云ふ。  
 志よき(識) 志又たしきとも讀む、物事をみわける力、即ち智識。知るコト。智惠。書き記す。しるし。知己(シ)、知り合ひ。こんい。  
 志よき(機) 志棒杭(シ) 特に牛をつなぐ。志よき(織) 志又たしきとも讀む、糸を機(シ)にかけて布(シ)をなすコト。おる。はた。機(シ)にておりたる物。  
 志よき(束) 志又たしきとも讀む、まとめる、つかぬる。たばね。たばねたる物。つ











志よけ

志よけい(諸藝) 図いろく(の藝術) もろ  
 志よけい(紋景) 図見たる景色の有様を、  
 文章に記し表はすコト、  
 志よけち(助教) 図助教員のコト、  
 志よけつ(處決) 図決斷を定むるコト。さ  
 ばくコト、  
 志よけつ(暑月) 図夏の日のコト、  
 志よけつ(庶孽) 図めかけ腹の子、  
 志よけつ(如月) 図きさらき月、即ち陰曆  
 の二月のコト、  
 志よけふ(所業) 図しわざ、なしたること  
 志よけん(所見) 図見たること、見たる  
 もの、其の物事につきて意見をさしは  
 さむべきところを云ふ、  
 志よけん(書見) 図書物を讀むコト、書物  
 を見るコトを云ふ、  
 志よけん(諸賢) 図もろく(の賢人) 云ふ  
 意より轉じて、皆さんあながたご云  
 ふ意を表す語、  
 志よけん(諸彦) 図前條に同じ、  
 志よけん(緒言) 図書物の初めに書く文章  
 即ち序文。はしがき、  
 志よげん(序言) 図前條に同じ、  
 志よげん(助言) 図傍(か)より云ひそへる  
 言葉。おしへたすくる言葉のコト、

志よこ

志よこ(書庫) 図書物を保存すべく藏(ぞう)  
 め置く庫(くら)、書物藏、  
 志よこ(庶姑) 図しゆうさめ(の)コト、  
 志よこ(書賈) 図書物を商ふ人、即ち書林  
 本屋、  
 志よこ(助語) 図文法上の語にて、接頭(け  
 つ)接尾(けい)などの接續詞のコトを云ふ  
 志よこち(諸侯) 図大名(だいめい)のコト、支  
 那にて公侯伯子男の爵位を有せる人の  
 コトを云ふ、  
 志よこち(助攻) 図助(すけ)けの攻め手云  
 ふ意にて、本攻撃をして容易(やす)なら  
 しむる助(すけ)のコトを云ふ、  
 志よこく(諸國) 図國々(くに)多くの國、  
 志よこく(初刻) 図再版に對しての稱にて  
 初版(しょばん)に同じ、  
 志よこつ(躡骨) 図足をこしらへてる語(こ  
 づ)の骨(ほね)コト、足の骨、  
 志よこん(初献) 図酒席にて始めに飲みた  
 る酒。初に持ちし盃、  
 志よこん(初婚) 図最初の婚禮、  
 志よこん(如今) 圖今(いま)したがた。只今こ  
 云ふ意を表はす語、  
 志よさ(所作) 図しより。ふるまひ。そぶり  
 のコト、舞踏(まひ)、  
 志よさい(書齋) 図書を書き本を讀む部屋

志よさ

志よさ(學問) 図なす部屋。勉強する部屋、  
 志よさい(處裁) 圖處分し、裁斷する云  
 ふ意にて、始末(はつまつ)するコト、きりもり  
 するコトを云ふ、  
 志よさい(所在) 圖あるところ云ふ意に  
 て、其の物の現存して居る所即ちありか  
 のコトを云ふ、  
 志よさい(如才) 圖才氣があるやうで云  
 ふ意より轉じて、わけめ。めかり云ふ  
 意を表はす語、  
 志よざり(所藏) 圖我が物として藏(ぞう)め  
 置くコト、又は其の物、  
 志よざつ(書冊) 圖書物のコト、  
 志よざち(汝曹) 圖なんじたち。そなたご  
 も。そちたち。ごもから、  
 志よさん(初三) 圖月の初めの第三日、  
 志よさん(初參) 圖初めて行くコト。初見  
 參(しん)のコト、  
 志よざいち(所在地) 圖其の物の現在して  
 る土地のコトを云ふ、  
 志よざいなし(無所在) 圖するコトなき、  
 退屈(たいくつ)なり、  
 志よざいなし(無如才) 圖めかりなきなり  
 云ふまでもなきなり、  
 志よし(諸子) 圖もろもの子(こ)多くの入

九七二

志よし

志よし(諸司) 圖もろものつかさ人、  
 志よし(諸士) 圖多くの男。人々、  
 志よし(諸姉) 圖多くの女、  
 志よし(所志) 圖志すところ、考ふところ、  
 志よし(所司) 圖足利時代の侍所(しよじよ)の  
 次官の稱、  
 志よし(初志) 圖初めの志(こころ)、最初の考  
 志よし(處士) 圖民間にゐて、官に仕へざ  
 る學識ある人のコトを云ふ、  
 志よし(書史) 圖書物に同じ、  
 志よし(庶子) 圖めかけ腹の子、私生子(し  
 し) [し]  
 志よし(書肆) 圖本屋のコト、  
 志よし(諸事) 圖いろいろの事から、  
 志よし(處事) 圖事の始末をつけるコト、  
 志よし(序詞) 圖じよ文に同じ、  
 志よし(助詞) 圖文法の語、テニオハのコ  
 トを云ふ、  
 志よし(序次) 圖物事の順序(じゆんじゆ)につづき  
 志よし(敘事) 圖こごがらな、文章につづ  
 くるコト、  
 志よし(助辭) 圖漢文にて、其の意義を十  
 分に知らせる爲めに用ゆる文字のコト  
 假令(かじやう)焉(ん)か、矣(い)か、令(しよ)使  
 (し)などの類を云ふ、  
 志よし(初秋) 圖秋のはじめ、陰曆の七

志よし

志よし(諸色) 圖いろいろのもの。よろ  
 づの品物のコト、  
 志よし(諸式) 圖前條に同じ、  
 志よし(書式) 圖届書、願書及び證書類  
 の書き方の規定(ていぎ)、  
 志よし(初日) 圖物事を爲し行ふ其の第  
 一日の稱、朝(あさ)の太陽、あさひのコトを  
 云ふ、  
 志よし(書寫) 圖文字又は文書等を書き  
 寫(か)すコトを云ふ、  
 志よし(諸種) 圖いろいろの物。様々(さま  
 ざま)の種類のコト、  
 志よし(助手) 圖總て手傳(てでん)手助(てすけ)  
 を爲す人の稱、官名、大學にて教授の  
 指揮を受けて、學術に關する手つだひ  
 を爲す職の名、  
 志よし(處暑) 圖曆の語、二十四氣の一、  
 志よし(處處) 圖さところ。ほうば  
 う。こごかし、このコト、  
 志よし(沮洳) 圖水氣(みづけ)を帯びてる土  
 地。濕氣(しつげき)深(こ)き土地、  
 志よし(徐徐) 圖ぼつぼつ。そろそろ。し  
 づかに云ふ意を表はす語、  
 志よし(初心) 圖總て物事に馴(な)れる  
 コト、即ちうぶなるコト、人の未(ま)だ

志よし

世なれざるコト、  
 志よし(初審) 圖裁判所に於て、最初の  
 取り調(しよべ)の第一審、  
 志よし(處身) 圖きむすめのコト、  
 志よし(書信) 圖手紙にて爲す音信(おんじ  
 ん)手紙のたより、  
 志よし(所信) 圖自己の確(たし)かに信じ  
 てるコトを云ふ、  
 志よし(諸人) 圖多くの入々(いりいり)もろ人、  
 志よし(庶人) 圖人民。平民、  
 志よし(所司代) 圖足利時代に侍所(しよ  
 じよ)の次官が、其の家人をして其の職  
 務を代理せしめたる、其の代理人のコ  
 トを云ふ、徳川時代に、京都に置きた  
 る職名にて、朝廷の御事を主として、  
 つかさざらせたもの、  
 志よし(叙事) 圖叙事文の一定せる  
 作り方のコトを云ふ、  
 志よし(叙事文) 圖總て事實(じじつ)を其  
 のまゝに記(し)したる文章の稱、(記事  
 文)  
 志よし(書狀) 圖手紙のコト、  
 志よし(如上) 圖上(じやう)に又は前に述  
 べたる通り云ふコト、  
 志よし(書籍) 圖書物のコト、  
 志よし(叙時) 圖昔時從五位の下に、

九七三







あよご、あよに

あよご(初等)階級の一番下。一番初めの階級のゴト。  
 あよご(初冬)階級のはじめ。冬のか、り(陰曆十月の別名。  
 あよご(書牘)階級。書面。  
 あよご(所得)階級。自己の収め得たる利益のゴトを云ふ。収益(生産)其の他に依りて、或る期間内に生ずる純利益のゴト、例は作物類の收穫、又は貯金利子などの類。  
 あよご(助動詞)階級。助動詞の下へ附け加えて、其の動意を明らかにす言葉。  
 あよご(所得税)階級。純利益に對して其の多少に應じて、徴收する税。  
 あよご(書牘文)階級。手紙の文體。  
 あよご(初七日)階級。死したる日より七日目に當る日。  
 あよご(初任)階級。初めて官職に任ぜらるるコトを云ふ。  
 あよご(諸人)階級。もろもろの人。多くの人。人々のコトを云ふ。  
 あよご(庶人)階級。平民の稱。  
 あよご(紋任)階級。紋に就し、官職に任ぜらるるコトを云ふ。  
 あよご(諸入費)階級。いろいろの入用。

あよに、あよは

あよに(諸入費)階級。諸雜費のゴト。  
 あよに(諸入用)階級。こまこませし入用。諸入費のゴト。  
 あよに(暑熱)階級。夏季のあつさ。きびしきあつさのゴト。  
 あよに(初念)階級。最初に抱きたる思案。初に起せしかんがへ。  
 あよに(所念)階級。思ふところを云ふ。意に思案。かんがへ。  
 あよに(處方)階級。病人に與ふべき藥の調合(方)方法。手段のゴトを云ふ。  
 あよに(諸方)階級。うばう。處々いろいろの方法、しかた。  
 あよに(所望)階級。ぞむコト。  
 あよに(庶民)階級。庶人。  
 あよに(書房)階級。學問する部屋。書物を賣る家。本屋。  
 あよに(初教)階級。初めておこるコト。初めておこりしコト。流行病などの初めてはやり出せしコトを云ふ。  
 あよに(處罰)階級。たゞして罰を科するコトを云ふ。  
 あよに(諸法)階級。いろいろの方法。もろもろのしかたのゴト。  
 あよに(初版)階級。初めて刷らるる書物。

あよは、あよひ

あよは(文書)階級。即ち第一版。  
 あよは(初犯)階級。初めて罪をおかすコト。又は初めて犯したる罪。  
 あよは(所犯)階級。おかしたる罪。罪を犯したるコトを云ふ。  
 あよは(諸般)階級。種々雑多。いろいろもろもろのゴト。  
 あよは(處方書)階級。處方。處方を認めたる文書のゴト。  
 あよは(處方箋)階級。處方箋。處方を認めたる文書のゴト。  
 あよは(書皮)階級。書物の表紙の稱。  
 あよは(助筆)階級。他人の作りたる文案の足らざる點をおぎない書き添ふるコト。又は其のもの。  
 あよは(春貢上)階級。びたる女の帯(結)の結び目の下らぬ爲めに、帯の上よりしめる巾(巾)の布帛を云ふ。  
 あよは(春貢込)階級。しよび込むコト。  
 あよは(春貢込)階級。動植物を澤山(春貢)に春貢(貢)して、轉じてむたな物又は役(貢)に立物を引き受けるコト。  
 あよは(春貢投)階級。相手の身體(春貢)を我が肩(春貢)にかけて投るコト。  
 あよは(諸病)階級。いろいろの病氣。

あよひ、あよは

あよひ(序開)階級。初(ひ)まり、はじめ、あよひ(春貢)階級。春貢(春貢)に物を貢ふ、即ちせよふ。  
 あよひ(所部)階級。其の支配(部)管轄(部)に屬するコトを云ふ。  
 あよひ(書風)階級。文字の書きつ振。書きたる文字の容子。  
 あよひ(諸物)階級。いろいろの物。種々の品。品々のゴト。  
 あよひ(處分)階級。きりもりする。所置する。しまつするコト。  
 あよひ(序文)階級。書物の初めに其の内容の概略を述たる文書。はしがきのコトを云ふ。  
 あよひ(書辭)階級。書物を好み、たしなむくせのゴトを云ふ。  
 あよひ(處辨)階級。置する。しまつする。きりもりするコト。  
 あよひ(初歩)階級。物事の初め。手ほどきのコトを云ふ。  
 あよひ(書舖)階級。書籍(書)を賣る家、即ち本屋。書肆。書店。  
 あよひ(庶母)階級。父(妻)のゴト。  
 あよひ(徐歩)階級。づかに進むコト。ゆるゆると行くコトを云ふ。  
 あよひ(除歩)階級。ゆるゆると進むコトを云ふ。

あよに、あよは

あよに(紋補)階級。假(假)に官職(官)を授け(假)るコト。  
 あよに(初發)階級。しよはつに同じ。  
 あよに(濃濛)階級。小雨(雨)の降り續く状態を云ふ。  
 あよに(跟蹤)階級。元氣(氣)なく、目(目)が歩み行く状を云ひ表はす語。  
 あよに(濕潤)階級。じゆくじゆくとするほふ状態を云ふ。  
 あよに(所望)階級。望(望)むコト。欲するコト。好(好)む。注文。  
 あよに(序幕)階級。芝居の一番初めに開(幕)めるコトを云ふ。  
 あよに(庶民)階級。庶民。くさ。人民。  
 あよに(庶務)階級。いろいろの事務。雜務。  
 あよに(諸務)階級。いろいろのつとめ。  
 あよに(所務)階級。つとめ。やくめ。  
 あよに(署名)階級。自己の姓名を書き記すコトを云ふ。  
 あよに(助命)階級。生命の助かるコト。生命を助けるコト。  
 あよに(書面)階級。事實(事)を認めたる文書。手紙のゴトを云ふ。  
 あよに(書目)階級。書物の名を列(目)記したるもの。書籍目録。

あよは、あよら

あよは(書物)階級。書籍。本。  
 あよは(書物棚)階級。書籍を積み重ねて置く爲めの棚。  
 あよは(書物箱)階級。書物を蔵(蔵)めて置く箱。本箱(箱)。  
 あよは(初夜)階級。日の暮れたばかりの時。よひ(夕)方より夜中までの稱。  
 あよは(諸役)階級。種々の役向。雜役。  
 あよは(助役)階級。そへやく。すけやく。市又は町に於て、市長又は町長を佐(助)けて、行政事務を執る官吏の稱。  
 あよは(緒餘)階級。あまりのはし。あよは(譽預)階級。譽(譽)の種類、やまのいものコトを云ふ。  
 あよは(所用)階級。固(固)必用なるコト。もちゆるコト。要(要)用。用件。  
 あよは(譽預)階級。さつまいもを蒸して、やうかんの如くせし食品。  
 あよは(薯餅)階級。薯餅(餅)菓子。一種、山の芋(芋)自然生(生)等を摺(摺)たる物に、小麥粉を混(混)して、煉(煉)りて、餅(餅)を包みて、蒸(蒸)たる菓子(子)のゴト。  
 あよは(初老)階級。論語より出たる語、四十歳のコトを云ふ。  
 あよは(所勞)階級。つかれるコト。わづらふコト。病氣にかゝるコト。



志より、志よれ

志より(助老) 志草木の枝のコト、  
 志より(書吏) 志書記に同じ、  
 志より(胥吏) 志下級の官吏、  
 志より(所理) 志物事を處分するコト、  
 志より(諸流) 志いろ／＼の流儀、大小種々の川のコトを云ふ、  
 志より(書林) 志本屋。書物屋、  
 志より(所領) 志領分(カウ)のコト、  
 志より(諸陵) 志御歴代のみさま、  
 志より(助力) 志力を添(カ)るコト。力を盡すコト。たすけるコト、  
 志より(書類) 志事實(カ)を文字にて書き表はしたる物の總稱、  
 志より(庶僚) 志いろ／＼の種類、くさぐさの品、  
 志より(諸禮) 志いろ／＼の禮式。種々の作法(カ)のコト、  
 志より(諸例) 志書式(カ)に同じ、  
 志より(庶僚) 志もるもの官吏。官吏仲間のコトを云ふ、  
 志より(序列) 志順序(カ)よくならぶコト。ならんでるコト、  
 志より(鋤簾) 志土砂(カ)をすくひ取る十能(カ)の如き鐵製の具、  
 志より(如簾) 志(カ)を編みて作りたる、すたれの如きもの、水溜(カ)など

志よれ、志ら

志よれ(爲す)に用ゆ、  
 志よれ(諸禮式) 志種々の禮儀作法の仕方(カ)を云ふ、  
 志よれ(如露) 志花弁盆栽などに水を施(カ)ふに用ゆる具、金屬製の子杓(カ)の如き物にて、柄(カ)を管(カ)爲し、其の端(カ)に無數の細かき孔(カ)の穿(カ)たれあるもの、  
 志よれ(書樓) 志書齋(カ)に同じ、學問の仕(カ)を云ふ、  
 志よれ(書籠) 志書物を入れて置く箱(カ)、即ち本箱(カ)のコト、  
 志よれ(書録) 志書き記すコト。書き載(カ)るコトを云ふ、  
 志よれ(緒論) 志書物の初めに書き記す議論(カ)を云ふ、  
 志よれ(序論) 志緒論に同じ、  
 志よれ(諸王) 志皇族方の御子のコトを申す、  
 志よれ(蕭然) 志俗語にて、勢(カ)なくさびしき狀(カ)を云ひ表はす語、  
 (志ら)

志ら、志らか

志ら(白) 志(接頭)或る語の上に冠(カ)らせて、木地(カ)のままを云ふ意、色の白しさを云ふ意を表はすに用ゆ語、假令ば白旗(カ)など、  
 志ら(白) 志(白) 志料理の一種、白胡麻(カ)と豆腐(カ)を摺り交(カ)し内へ、甘庶(カ)大根、人参(カ)椎茸(カ)などの味をつけて煮きたる物を雜し物、  
 志ら(賜養) 志下され物。たま物、  
 志ら(子來) 志人人が其の徳になつて子の親(カ)を慕(カ)ふ如く集(カ)り來るコトを云ふ、  
 志ら(爾來) 志其の後、このかた、  
 志ら(白糸) 志白き糸のコト、  
 志ら(次郎) 志二番目に生れし男子、  
 志ら(白魚) 志魚の名、形は小さく鱗は細長く、其の最も大なる物にても、三寸を越えず、全體白色にて光澤(カ)あり、味(カ)淡泊(カ)なり、  
 志ら(師勞) 志(紙鷲)の一名、  
 志ら(白梅) 志白き花の咲く梅、  
 志ら(白髮) 志白く爲りたる髮の毛、  
 志ら(白鹿毛) 志馬の毛色の名、鹿毛(カ)に白き毛の混(カ)れるもの、  
 志ら(白甘) 志白き甘酒。白酒、

九七八

志らか、志らき

志らか(白壁) 志白く塗りたる壁(カ)、  
 志らか(白紙) 志白き紙、白紙(カ)、  
 志らか(白粥) 志雜(カ)物のなき白米の粥、  
 志らか(白髮) 志上等の昆布(カ)を、毛の如く細く刻(カ)みたるもの、  
 志らか(白髮) 志白髮の生(カ)てる老人、  
 志らか(白髮) 志白髮(カ)の生(カ)てる老婆(カ)のコト、  
 志らか(白髮) 志白毛の生(カ)てる頭(カ)、  
 志らか(白髮) 志髮の白毛なるもの、  
 志らか(白髮) 志白毛を黒髮に染める藥、其の種類甚だ多し、  
 志らか(白髮) 志白毛の交つてるコト、  
 志らか(白紙) 志白紙を書物の如くこちたるもの、  
 志らか(白河夜船) 志前後を知らぬ有様(カ)を云ふ、  
 志らか(白木) 志木(カ)のまま飾(カ)を施(カ)す木、  
 志らか(白菊) 志白き花の咲く菊、  
 志らか(白桐) 志桐の木の名、

志らき、志ら、白、精

志ら(新羅琴) 志(新羅)十二の琴にて、昔時の朝鮮の一部なる新羅(カ)より渡りしもの、  
 志ら(白木造) 志木地(カ)のままにて造(カ)りたるもの、  
 志ら(至樂) 志無上(カ)の快樂、  
 志ら(刺絡) 志醫學上の語、手足の靜脈(カ)に鍼(カ)を刺(カ)して、惡血を取るコトを云ふ、  
 志ら(白) 志面(カ)が白くなる、夜が明け初(カ)面白味(カ)が薄らぐ、染め色がはげてゆく、  
 志ら(精) 志動米を搗きて皮を取りて美しくなす、  
 志ら(白) 志何等(カ)の標(カ)をもなきくじ(カ)のコト、  
 志ら(白雲) 志白色を呈せる雲、一種の皮膚病、多く子供の頭に生ずる白きかさの如き液(カ)の出る腫物、  
 志ら(白子) 志魚の雄(カ)の腹に在る子、豆腐(カ)の如きもの、即ち魚の精液(カ)性來(カ)色の白き子供、  
 志ら(白苔) 志山中に自生する苔の一種、長さ二寸内外、葉は圓形にして白

志らき、志らす、知

色を呈し、花も亦た白くして小さき物、一名を花(カ)けさ云ふ、  
 志ら(白鷺) 志水鳥の名、白きコト、  
 志ら(白鞘) 志木地(カ)のままにて作りたる刀(カ)のさやの稱、何等の作(カ)もなきさや、  
 志ら(白) 志胡麻の種子より、搾り取りたる油の稱、  
 志ら(白) 志美しく白くあり、興味(カ)さめて、さびしくあり、知りながら知らぬ體をよそふなり、づうづうしくあり、  
 志ら(白) 志明け方、しこのめ時のコト、  
 志ら(白) 志(白裝束) 志白色の衣服を着たるを云ふ、  
 志ら(白) 志魚の名、いさぎの一名、  
 志ら(白) 志罪人を取り調べる所、即ち法廷、  
 志ら(知) 志動物事を知らせ告げる、知れるやうにしむ、  
 志ら(白砂) 志海濱に多く在る、白色を呈せる砂、  
 志ら(白) 志胡粉(カ)を練(カ)りて固(カ)めたるもの、  
 志ら(白炭) 志枝炭(カ)堅炭、

九七九















まろく、まろく、

食祿を受け居るコトを云ふ、  
 まろくび(白首)固白粉を首(び)に塗りたる女と云ふ意にて、酌婦(び)仲居(び)淫賣婦(び)などのコトを云ふ、  
 まろくま(白熊)固熊の一種、北極地方に産す、全身純白の毛を以て包(び)まれ、能く水中を泳ぎ得るもの、  
 まろくくり(白括)固白く、くくりたる絞(び)染(び)の、  
 まろくばん(四六判)固洋紙の切りたる型(び)の名、長さ三尺六寸、巾(び)が二尺六寸ある西洋紙を、三十二に切りたる物の稱、  
 まろくぶん(四六文)固漢文の一體、四字句と六字句とにて成り立てる文章(び)の稱、  
 まろくねなび(白紅)固白と赤とに、染め別けたる水引、  
 まろくま(白胡麻)固胡麻の一種、其の種の白きもの、  
 まろけいとら(白鶏頭)固草の名、けいとら(び)の一種、白色の花の咲くもの、  
 まろこうじ(白麴)固麥麴に對しての名にて、上等の白米(び)を以て製したる麴の稱、

まろさ、まろた

まろさ(白)固色の白きコト白き色の程度  
 まろさけ(白酒)固酒の一種、白色にてトドロクせる味(び)の甘(び)き酒、  
 まろざくら(白柘榴)固柘榴の一種、其の種の色の純白なるもの、  
 まろざらち(白砂糖)固精製(び)したる白色の砂糖の稱、  
 まろさんご(白珊瑚)固さんご樹の一種にて、其の色の白きもの、  
 まろし(白)固白くある色、白し、  
 まろした(白下)固砂糖きびを、しばりて製したる物にて、水分の多分に含(び)れてる、粗製の砂糖、之(び)を更に二三回精製して白砂糖を造る、  
 まろじろ(白)固色の極めて白き状態を云ひ表はすに用ゆる語、  
 まろしめす(知食)固敬語にて、知りたもふ、治(び)めたもふ、  
 まろずみ(白炭)固茶の湯に用ゆる炭、枝炭(び)を石灰(び)にて白く染(び)しもの、  
 まろたへ(白袴)固純白色の木綿(び)色の白くして、光澤(び)あるを云ふ、  
 まろたへ(白妙)固凡て物の色目の純白なるコトを云ふ、

まろち、まろふ

まろち(白地)固地色(び)の白き物(び)白き織物、  
 まろちりめん(白縮緬)固織りたるままにて、染めざるちりめん、  
 まろつる(白鶴)固全身白毛を以て包まれたる鶴(び)、但し眼の縁(び)と脚(び)と粗(び)の末(び)のみ淡紅色を呈す、  
 まろで(白手)固白き薬(び)を引きし磁器(び)のコトを云ふ、  
 まろなすび(白茄)固なすびの一種、其の實(び)の色の白色を呈するもの、  
 まろなます(白癩)固一種の皮膚病、白きあざの生ずる病氣の、  
 まろなまり(白鉛)固錫(び)の一名(び)しるしめの一、  
 まろぬの(白布)固晒(び)したる白木綿(び)の塗られたるもの、  
 まろねづみ(白鼠)固染色(び)の名、淡(び)き鼠色(び)主家に忠義を盡す正直なる奉公人、  
 まろぼむ(白)固色(び)が白くなる、  
 まろびかり(白光)固其の色の白くして、光澤(び)のあるコト、  
 まろふち(白藤)固白き花を咲(び)せる藤、  
 まろふち(白斑)固白きまばらのコト、

九八六

まろふ、まろむ

まろぶどり(白葡萄)固葡萄の一種、其の果實(び)が成熟(び)すれば白色を呈するもの、  
 まろぼり(白保)固すきかへし紙の、色の稍や白き物を云ふ、  
 まろぼけ(白木瓜)固木瓜(び)の一種にて、花の白色なる物、  
 まろぼり(城壁)固城壁の周(び)に在る堀、  
 まろまめ(白豆)固大豆の一種、豆の色白く、稍やきばみしもの、大切なる食品なり、味噌、豆腐及び醬油は、皆本品にて製せらる、  
 まろまなこ(白眼)固白めだまに同じ、  
 まろみ(白鐵)固一種の金屬、即ち錫(び)と鉛(び)を合したる、軟かき金(び)、銅(び)の鍋(び)薬罐(び)などの内部に敷きて、綠青(び)の養生を防止、又は孔(び)の穿(び)たる部を蓋(び)するに用ひらる、  
 まろみ(白身)固玉子の白き部分即ち蛋白(び)、  
 まろみつ(白蜜)固はちみつのコト、  
 まろみづ(白水)固白米を洗ふたる白き濁(び)り水、  
 まろみそ(白味噌)固白豆と麴にて製したる味噌(び)、  
 まろむ(白)固白色白くなる、

まろむ、まわ

まろむ(白)固動白くする、  
 まろむく(白無垢)固まさり氣なき純白色の衣服、  
 まろめ(白鐵)固白鐵(び)のなまり、  
 まろめ(白眼)固眼の中の白き部分の、  
 まろめだま(白眼玉)固眼珠(び)の白色なる部分の稱、  
 まろもち(白餅)固焼きたるのみにて、何も附けざる餅、  
 まろもの(代物)固賣買する品、商品、  
 まろもめん(白木綿)固染めざる白色の木綿(び)、  
 まろん(私論)固自分丈(び)の意見、  
 まろん(詩論)固漢詩の作法、其他に就きての議論、  
 まろん(史論)固歴史の事實(び)に就きての議論、  
 まろん(時論)固時事に關する議論(び)、

(まわ)

まわ(詩話)固漢詩に就きての物語(び)、  
 まわ(私話)固双方の争ひを表面(び)にせずして、折合(び)のつきたるコトをまわ、まわう、  
 まわ(和睡)固、  
 まわ(皺)固物が皺(び)みて、其の表面に大小不定の線(び)を生じたる物を云ふ、  
 まわち(雌黄)固鑛物の一種、化學上より云へば、硫酸(び)と砒素(び)との混合物にて、其の色は黄白色を呈して著(び)るしき、光澤(び)あり、其の性質(び)は碎(び)け易(び)し、本品は薬用を爲り、又た繪具(び)に用ひらる、  
 まわく(仕分)固區別する、區別して分ち與(び)ふ、  
 まわくちや(數九茶)固數(び)の甚たしく、寄(び)てあるを云ふ、  
 まわけ(仕分)固物事を爲し分(び)つコト、しわくるコトを云ふ、  
 まわけ(仕譯)固簿記の記載(び)方のコト即ち貸(び)借(び)を區別して記すコト、  
 まわざ(爲業)固爲したるコト、したるわざ、行(び)ひし、  
 まわし(齋)固けちなり、出(び)きたなくあるなり、やぶさかなり、  
 まわのぼし(皺伸)固寄りたる皺を延(び)すコト、  
 まわぶ(爲佗)固動しあきる(び)もてあます、  
 まわむ(皺)固動しわがよる、  
 まわむ(皺)固動しわをよせる、

まわ、まわう、皺、齋、九八七



志わよ、まん 挽、心、臣、忱、慎、心、澹  
志わよる(敬寄)自動しわが出来る。  
志わる(挽)自動ゆがみ垂(る)る。たわむ、

(まじん)

志ん(心)固こころ即ち精神●むね●物の  
真中(まぢ)●固物の基礎(たもと)、物事の原因  
●物事を行ふ主(しゅ)となるもの、假令は  
心に爲つて働(はたら)くなど●凡て食物の  
實質(じつしつ)内に在る固(かた)きもの、即ち果  
物(くだもの)の種●凡て食物(じき)の内に堅  
飯(かた)き物のあるコトを云ふ、假令は此の  
飯(かた)には心があるなど。  
志ん(臣)固君主に仕(つか)ふる人、即ち家來  
(けらい)のコト、  
志ん(臣)固君主に對して、家來(けらい)  
又は其の國民が、自己のコトを謙遜  
(けんそん)して申し出る代名詞、  
志ん(忱)固まこと、眞實(まこと)、  
志ん(慎)固まこと、正實(まこと)つゝしむ。うや  
まうコト、  
志ん(沁)固水にしたる、しみこむ●水中  
の容子を物を持って、さぐりみるコト  
を云ふ、  
志ん(滯)固流れすに一處に、止(とど)まつて

志ん 峯、岸、申、呻、伸、神、紳、辰

志ん(峯)固山のみれ●山などの高くして  
峻(たけ)しき状態を云ふ●海岸の崖(たけ)など  
のけはしきさま、  
志ん(岸)固木の名、されりこのコト、  
志ん(申)固十二支の第九位の名、さる●  
のぶる。もうす●かされる。かきぬ●伸  
に通ず、あくび、せのびのコト、  
志ん(呻)固苦(くる)しき聲を出す、うなる。  
うめくコトを云ふ、  
志ん(伸)固のびる。のびす●兩手を廣げ  
て、體をのびす、せのび、  
志ん(紳)固かみ●こころ、たましい即ち  
精神●靈妙(れいめう)不思議(ふしぎ)なるコト●  
萬人に秀(ひで)たる威徳(いとく)を具へてる  
人のコトを云ふ、  
志ん(紳)固束帶(せうたい)を着けたる時に、腰  
(こし)をたはれたる帶の餘(あま)りを垂れ下  
げて、飾(かざ)り置(お)く物の稱●大帶  
(おほおび)●轉じて、大帶は身分高き人なら  
では用ゆる能はざるより、身分ある人  
のコトを云ふ語、  
志ん(辰)固十二支の第五位の名、たつ●  
時の名、現今の午前八時●方角の名東

志ん 娠、脹、展、展、振、宸 九八八

志ん(娠)固子宮を腹に有(あ)つ、はらむ。み  
をも。みもち、  
志ん(脹)固にぎはふコト。はんじやうす  
るコト。ゆたかなるコト●多くの人に  
物をほごす、  
志ん(展)固夜のあけがた。早朝、  
志ん(展)固大なる蛤(かき)●海中に棲める  
一種の蛟(かき)、  
志ん(展)固神靈を祀る時に供(とも)ふる生  
(なま)の切肉の稱、  
志ん(震)固かみなり●ふるひ動くコト、  
又はうかすコト●おどろく。おそる  
。おの、く●おどす。こはがらす、  
志ん(振)固うごく。うかす。ふるふ。ふ  
る●興(き)ふる、興す。盛んにす●拂(はら)ふ。  
のぞく●盛大なる状態を云ふ語、例は振  
古(ふる)●振大なる●古(ふる)のコト、  
志ん(宸)固廣大にして最も奥深き御殿  
(おん)のコトを云ふ●特に天子の宮殿の  
コトを云ふ語、  
志ん(脣)固口のぐるり、即ちくちびるの  
コトを云ふ、  
志ん(脣)固子供。わらんべ、  
志ん(辛)固味(あじ)のからきコト●新鮮

(まじ)なるコト●十二支の第八位の名、  
かのこ、  
志ん(新)固あたらしきコト。あらたなる  
コト●荒地(かた)を開きてより二年目の  
稱●或る語に冠(かむ)らせて、新(あらた)なり  
又は其の年に出来た物と云ふ意を表は  
す語、例は新茶、新米など、  
志ん(薪)固たきぎ。柴(しば)●樵夫(しやうぶ)の  
コトを云ふ、  
志ん(親)固兩親の親にて、父及び母即ち  
をや●仲のよきコト、れんこるにする  
コト●みうちのコト即ち親族(おやぢ)のし  
たしむ。したしきコト、  
志ん(親)固死者の身體をちかに納(な)む  
る棺(かた)の稱、  
志ん(親)固直(ただ)に肌につく衣物即ち  
だき。しやつ。じゆばん、  
志ん(信)固まこと、いつはりなきコト●  
性(さが)しまぬコト、疑(うたが)いはざるコト、  
即ち人を信(しん)す●信義の信にて、まめ  
やかなるコト、即ち忠實(ちゅうじつ)なり、お  
さづけ即ち音信(おんしん)●神佛(かみぶつ)の威徳  
(いとく)に従ふコト、即ち信仰(しんじょう)のコト、  
志ん(森)固樹木の群(ぐん)り生じてる處、  
即ちもり●總て立ち列(たてり)んでるコト  
●身ぶるひする、ぞつとする状態を云ひ

志ん 新、薪、親、欄、親、信、森

表はす語●樹木の繁茂せる状態を云ふ語  
志ん(眞)固まことなるコト、いつわりな  
らぬコト●正味(ただ)のもの、混(まじ)り氣  
のなきコト●天然(てんぜん)自然(じぜん)のコト  
●迷(まよ)はざるコト、あやまたざるコト  
●楷書(かいじゆ)のコト、即ち眞書、  
志ん(眞)固眼を怒らして、にらみつける  
コト●怒(いか)みに思ふコト●にくく思  
ふコト、  
志ん(眞)固木の名まき●木のおひしげつ  
てる状態を云ひ表はす語●倒(たふ)れたる  
木のコトを云ふ、  
志ん(眞)固柱(はしら)の下に在る石、即ち、い  
しづえ●石の轉がり落る音(ね)のコト  
を云ふ語、  
志ん(眞)固麻糸(あし)のうみたるもの、稱  
●極めて細(こ)きコト。かすかなるコト  
を云ひ表はす語、  
志ん(眞)固すすむ。のぼる。たかまる。あ  
がる●呈(てい)す。献(けん)する。参(まゐ)らす●ばすむ。  
つさめる。近(ちか)くなる、  
志ん(眞)固次第(しだい)に入り込み行く。漸  
々(しだ)に進みゆく●あだす。おかす。攻めて  
土地をかすめ取る●無理(むり)に取る。横領  
す、  
志ん(眞)固次第(しだい)に進みゆく。段々(だんだん)

志ん 眞、眞、眞、眞、眞、眞、眞、眞

盛んになる状態を云ひ表はす語●馬の疾  
(はや)く走るさま、  
志ん(眞)固ひたす。つかる。うるほふコト  
●凹(くぼ)みたる土地に、水の溜(たまり)つて  
る處を云ふ。即ち沼(ぬま)澤(さわ)●ますま  
す。いよいよ云ふ意を表はす語、  
志ん(枕)固又たちんと讀む。臥具の名ま  
くら●まくらをするコト又たまくらさ  
なすコト●更に轉じて臥(ふ)する、ねむる  
ふす●水邊(みづべ)にのぞむ云ふ意を表はす  
語、即ち枕水(まくらづみ)など、  
志ん(深)固ふかきコト。ふかき。ふかし。  
ふかくあり、  
志ん(深)固一種の寶玉●たから、  
志ん(深)固くしき氣。あやしき氣、  
志ん(診)固脈(みやく)及び身體の容子を視て  
健康の有無を檢(しら)ぶ●しらべ。視(み)る  
かんがへる、  
志ん(診)固こるがるコト。めぐるコト。こ  
るがすコト●もさるコト。反(かへ)りくコト  
志ん(診)固病氣の名、はしか●かざはる  
しの如き腫物の總稱●轉じてやむ。や  
まし、  
志ん(疹)固ひさへの衣物、ひさへぎぬ●  
美しき模様を染めし衣物、  
志ん(疹)固田畑(いな)のあぜのコト●轉じて土

志ん 浸、枕、深、診、疹、疹 九八九







まんう、まんえ

れる状を云ひ表はす語、  
 志んち(甚雨) 志んはなはだしき雨。大雨  
 (志ん)の志んを云ふ、  
 志んち(真打) 志ん落語、講談、淨瑠璃など  
 の一座中に於て、最後に出て、伎を演  
 ずる人の稱、即ち一座中の第一の人の  
 稱、  
 志んち(進運) 志ん進歩しつゝある運命の  
 コトを云ふ、  
 志んち(人運) 志ん人の運勢(志ん)、  
 志んち(眞影) 志んまことの像(志ん)を寫し  
 たるもの志んを云ふ、  
 志んち(神影) 志ん神體を寫したる像の志  
 んを云ふ、  
 志んち(人影) 志ん人のかけ(志ん)人の志ん、  
 志んち(震耀) 志ん勢力威力などの震ひか  
 らける志んを云ふ、  
 志んち(津液) 志んつばきの稱、  
 志んち(宸掖) 志ん宮中、官殿、  
 志んち(尋釋) 志ん物事の道理などを、た  
 づねきむる志んを云ふ、  
 志んち(親縁) 志ん親類のつらなり、即ち  
 縁者(志ん)の志んを云ふ、  
 志んち(神苑) 志ん神社の境内に在る、お  
 にはの志んを云ふ、  
 志んち(深淵) 志ん極めて深く水の湛(志ん)

まんえ、まんか

へてある所、即ち深きふち、  
 志んち(深遠) 志ん深くして遠し、即ち奥  
 ゆかしき志ん。奥底の知れ能はぬ志ん  
 を云ふ、  
 志んち(人烟) 志ん人家にて飯(志ん)を炊く  
 煙(志ん)の志ん。轉じて人口の稱、  
 志んち(針葉樹) 志ん針の如き形状を  
 爲しての葉(志ん)を有しての樹木の總稱、  
 例は松(志ん)杉(志ん)檜(志ん)など之れなり、  
 志んち(眞價) 志んほんごの直段、ほんごの  
 價(志ん)。ほんごの直打(志ん)、  
 志んち(眞假) 志んまごまご、うそご、  
 志んち(臣下) 志んけらひ、  
 志んち(新芽) 志ん新たに出たる芽(志ん)、  
 志んち(人家) 志ん人の住つてゐる家、人の住  
 むべき家、  
 志んち(深海) 志ん深き海、海の一段深く  
 なつてゐる部の稱、  
 志んち(心界) 志んこころ、意中、  
 志んち(新開) 志ん荒地(志ん)を新たに開く  
 コト、又は新に開きたる土地、  
 志んち(震駭) 志ん甚だしく驚く志んを云  
 ふ、  
 志んち(侵害) 志んおかしそなふ志ん、  
 志んち(進講) 志ん帝王の御前に罷り出で  
 書物の講義を承(志ん)はる志んを云ふ、

まんか、まんき

志んち(深更) 志ん夜ふけ。夜中、  
 志んち(深坑) 志んふかきあな、  
 志んち(進行) 志んすすみゆく志ん。物事  
 の進む志ん、  
 志んち(深交) 志ん交(志ん)の殊に厚(志ん)き  
 コト。したしき交際(志ん)、  
 志んち(親交) 志ん前條に同じ、  
 志んち(信仰) 志ん宗教を真心(志ん)より信  
 心する志んを云ふ、  
 志んち(信號) 志んしるしを出して、音信  
 を傳へる志んを云ふ、あひづ、  
 志んち(神號) 志ん神の稱號、  
 志んち(深濠) 志ん深きほりわり、  
 志んち(人家) 志ん偉大なる人物。すぐれ  
 たる人物、  
 志んち(眞書) 志ん筆の一種の名、細かき  
 楷書を書くに用ゆる穂先(志ん)の長くし  
 て細(志ん)き筆の稱、  
 志んち(審數) 志んめんみつに取り調(志ん)  
 ぶる志んを云ふ、  
 志んち(神學) 志ん神道に關する事柄(志ん)  
 を研究する學問、  
 志んち(心學) 志ん文明年間に中澤道二  
 云ふ學者の工夫せし一種の教へ、即ち  
 神佛儒の三道を合せて、人道の大義を  
 教へしものにて、云ふ所の道話是なり

まんか、まんき

志んか(人格) 志ん總て人の品性、即ち人  
 志んか(志ん)の志んを云ふ、  
 志んか(新形) 志ん新しく出来たる形  
 (志ん)はやりのかた、  
 志んか(親狎) 志ん親(志ん)しみなれる志ん  
 意になつて遠慮(志ん)のなき志ん、  
 志んか(新株) 志ん會社にて、新たに募集  
 せる株式(志ん)の志ん、  
 志んか(新顔) 志ん新たに、其の組(志ん)へ加  
 はりたる人、新らしき仲間の人、  
 志んか(新柄) 志ん此れまでになき柄。あ  
 たらしき柄、  
 志んか(殿) 志ん一軍の最後に在りて、後  
 方より攻め來たらむとせる敵を防ぐべ  
 き、任務を負ふてゐる軍隊の稱、轉じて  
 總て列をなせるもの、最終に在るも  
 の、志んを云ふ、  
 志んか(箴諫) 志んいましめいさむ。道理  
 を説きて意見する志ん、  
 志んか(心肝) 志ん心の志ん、  
 志んか(新刊) 志ん新たに出版したる書物  
 の志ん、即ち新版、  
 志んか(宸翰) 志ん天子のお書きあそばさ  
 れたる御文書を云ふ、  
 志んか(親翰) 志ん親書(志ん)に同じ、  
 志んか(震耀) 志んふるひうごく志ん、

まんか、まんき

志んか(深閑) 志ん極めて静かなる志ん、  
 ひつそりせる志んを云ふ、  
 志んか(心眼) 志ん物事の判断を確實にな  
 す心のはたらきを云ふ、  
 志んか(眞價) 志ん眞價(志ん)、まごご、に  
 せ。ほんごのまごご、  
 志んか(甚寒) 志ん甚だしきさむさ、  
 志んか(眞影) 志ん眞影流、志ん劍術の一派の名  
 創(志ん)めて工夫せるもの、  
 志んか(片假名) 志ん眞片假名、志ん漢字の間に、  
 片假名をはさみて書きたる文書の志ん  
 を云ふ、  
 志んか(早起) 志ん朝早く起る志ん。はやお  
 きの志んを云ふ、  
 志んか(振起) 志んふるひ起る、奮發心(志ん)  
 を起す志んを云ふ、  
 志んか(晨暉) 志ん朝日のひかり、  
 志んか(箴規) 志んいましめ、  
 志んか(新規) 志んあたらし志ん。新らしく  
 なせし物事、  
 志んか(新奇) 志ん(志ん)らしくしてめづら  
 しき志ん、  
 志んか(新禧) 志ん新年の祝賀、  
 志んか(振氣) 志ん精神を振ひ起す志ん、  
 志んか(辛氣) 志ん氣のふさぐ志ん。精神の

まんき

暗れぬ志ん。じれつたき志ん、  
 志んか(心氣) 志ん精神、心持、かんがえ、  
 志んか(心機) 志ん心持(志ん)、心のはたらき  
 志んか(心木) 志ん心木の心棒(志ん)轉じて働  
 (志ん)を起す基礎(志ん)となる志ん、  
 志んか(神器) 志ん神を祀るに用ゆる凡ての  
 器具、三種の神器の略、  
 志んか(神氣) 志ん精神(志ん)たましい、  
 志んか(神奇) 志ん奇妙(志ん)なる志ん、  
 志んか(審議) 志んはしく相談する志ん、  
 志んか(信義) 志ん(志ん)の道を守りて心根  
 (志ん)の正しき志ん、  
 志んか(信疑) 志ん信する志ん疑ふ志ん、  
 志んか(眞義) 志ん本來(志ん)の意義(志ん)、  
 志んか(眞偽) 志んまごご、いつはり、  
 志んか(神祇) 志ん天津神(志ん)と國津神(志ん)  
 の事を申す、  
 志んか(仁義) 志んなまきり義理、人道の大  
 義名分の志んを云ふ、  
 志んか(贖儀) 志ん贖別(志ん)に贈る品物、  
 志んか(賑救) 志ん金品を施(志ん)して救  
 (志ん)ふ志んを云ふ、  
 志んか(書札) 志ん(志ん)しく罪科をた  
 し調(志ん)ぶる志んを云ふ、  
 志んか(新舊) 志んあたらしきと、ふるき











まんさ

まんざい(心材) 樹木の幹(心)の心の赤色を呈せる部の稱。  
 まんざい(薪材) 樹薪なるべき木材。單にたきいのコト。  
 まんざい(浸劑) 固ふりだしぐすり。  
 まんざい(天才) 固才智のすぐれたる人、物事の役(に)立つ人。  
 まんざり(真相) 固かざり氣のなきありさま、本當の状態。  
 まんざり(心想事成) 固心の思ひ。心持。  
 まんざり(神草) 固人參(人參)の異稱。  
 まんざり(新裝) 固あたらしきよそほひ。晴(い)のよそほひ。  
 まんざり(神葬) 固神道(神道)の儀式(式)に依りて、死者の靈を葬るコト。  
 まんざり(新造) 固新たにつくるコト、新製造のコトを云ふ。  
 まんざり(新造) 固東京の方言にて、二十歳前後(二十)の妙齡(妙齡)の女子の稱。  
 まんざり(心像) 固前(前)に心に感じ又は見たる現象(現象)が、或る機會(機會)に依りて、心に其のまゝ現はれ來る有様(有様)を云ふ。  
 まんざり(心臓) 固臟腑の名、左の乳の部にある臟器にて、手を握(握)りしが如き形を爲せるもの、血液循環の基礎をな

まんさ

せる大切なもの。  
 まんざり(腎臟) 固臟腑の名、へその左右に在る、ソラ豆の如き形を爲せるものにて、小便を製造するところ。  
 まんざり(人造) 固人の力で拵(拵)えるコト、又た拵たる物。  
 まんざり(神策) 固神の如く大したばかりごとのコトを云ふ。  
 まんざり(振作) 固ふるひおこる。  
 まんざり(新作) 固新らしく作るコト。  
 まんざり(人作) 固人の力にて作りしコト。  
 まんざつ(診察) 固病氣の容子をしらべるコト。病氣を視(視)るコト。  
 まんざん(辛酸) 固くるしみ、なんぎ。  
 まんざん(心算) 固考へ、心つもり。  
 まんざん(神算) 固靈妙なるばかりごこ、  
 まんざん(深山) 固山又た山のおく、おくやま。みやまの山。  
 まんざん(神山) 固神を祭つてある山。かうかうしたる山の稱。  
 まんざん(晋山) 固僧侶が新たに、一寺の住職(住職)となるコトを云ふ。  
 まんざん(新參) 固新たに仕(仕)へたるもの。新たに奉公(奉公)せしもの。新たに其の組(組)へ入りしもの。  
 まんざし(新座敷) 固新規に建(建)たる

まんさ、まんし 緒

九九八

座敷。新築の座敷。  
 まんざりりん(人造林) 固苗木(苗木)を植ふ又は種子を蒔(蒔)いて、造(造)り上げたる林の稱。天然林に對しての稱。  
 まんざんもの(新參者) 固新らしく來た者。未だ其の事になれざる人。  
 まんざりがん(深層岩) 固火山に生ずる火成岩が、地上に湧出して、かたまりて成りたる岩。  
 まんざりがん(人造岩) 固セメント及び砂を用ひて、岩の如くに作りたる物、即ち人造石(人造石)なり。  
 まんざりけんし(人造絹糸) 固絹糸(絹糸)に薬を合せて、絹(絹)の如き光澤(光澤)を有(有)せたる糸。  
 まんざりびやう(心臓病) 固心の臟に生ずる種々の病氣。  
 まんざりびやう(腎臟病) 固腎の臟に生ずる種々の疾病。  
 まんざいとちより(人才登用) 固學識才智のある人物を上げ用ひて、相當の官職を授(授)くるコトを云ふ。  
 まんし(襦) 固布帛(布帛)を洗ひ張りするに用ゆ具、其の張る時に布帛を張りのばす用をなす付にて作りたる細きもの。  
 まんし(宸旨) 固天子のおむね。

まんし

まんし(親子) 固なやま、子。  
 まんし(神祠) 固神を祀るほこら、神社。  
 まんし(心志) 固こころね、こころざし。  
 まんし(心思) 固考へ、心に思ふて、  
 まんし(振子) 固ふりこ、さげふり、時計などの。  
 まんし(浸死) 固水に溺(溺)れて死するコト。  
 まんし(信士) 固正しき人。佛語、佛式に依りて葬りたる男子の戒名(戒名)の終(終)りに附る語。  
 まんし(紳士) 固中流以上の社會の人。金満家。品位高尚にして、徳望あり且つ品行方正なる人を云ふ。  
 まんし(唇齒) 固唇(唇)と齒(齒)とを云ふ。意より、非常に親密なる關係を有して、互ひに扶(扶)け合つて仲のよきを云ふ。  
 まんし(新詩) 固新聞紙又は雑誌などの稱。  
 まんし(新紙) 固新らしき紙。新聞紙の略。  
 まんし(進止) 固舉動(舉動)のたふらふまる。  
 まんし(進士) 固文官試験に及第せし人。  
 まんし(進仕) 固官につかふ、官吏となる。  
 まんし(神姿) 固すぐれたるすがた。おく。ゆかしきありさま。  
 まんし(深旨) 固ふかき考へ。ふかきおぼしめしのコトを云ふ。  
 まんし(眞摯) 固正直(正直)にして決斷(決斷)する

まんし

力に富(富)むる氣質(氣質)のコト。  
 まんし(參差) 固物が互ひに入り交(交)りて、こた(こた)くになれる状を云ひ表はす語。  
 まんし(震死) 固雷(雷)に打れて死す。  
 まんじ(眞事) 固ほんま、まごとのコト。  
 まんじ(新字) 固新らしく鑄造したる活字。  
 まんじ(神靈) 固三種の神器の一つ、やまかへのまが玉の稱を申す。  
 まんじ(神事) 固神を祭りつかふるコト。  
 まんじ(心事) 固心に思ふコト、考がえてるコト、意中の事。  
 まんじ(臣事) 固臣下として君につかふまつるコトを云ふ。  
 まんじ(信次) 固族(族)へ出て、三日以上のさまりのコトを云ふ。「ふ、  
 まんし(迅駛) 固速(速)やかなるコトを云ふ。  
 まんじ(仁慈) 固いつくしみ、めぐむ。  
 まんじ(人事) 固世の中の出來事(出來事)。人の身上に關(關)するコト。人の力にて出來得る總(總)ての事。  
 まんし(新秋) 固秋のはじめ、即ち初秋。陰曆の七月の稱。  
 まんし(深愁) 固一方ならすうれひかなしむコトを云ふ。  
 まんし(新式) 固新らしき型(型)の。新ら

まんし

しき仕方。流行がたのコト。  
 まんし(審議) 固くわしく知る、つまびらかに知るコト。  
 まんし(深識) 固見識のすぐれてふかきコトを云ふ。  
 まんし(寢室) 固ねや、ねる部屋。  
 まんし(新室) 固新らしく作りたる居間(居間)。  
 まんし(又) 固坐敷(坐敷)の稱。  
 まんし(迅疾) 固はやきすみやかなる。  
 まんじつ(親昵) 固したしみなじむコト。  
 まんじつ(眞實) 固まこと、ほんまごう、實際。  
 まんじつ(盡日) 固月の終りの日、みそか。  
 まんじつ(人日) 固七月の七日の稱。  
 まんし(深謝) 固厚く禮を述べ。謹みてこそはりを云ふ。  
 まんし(親炙) 固しんせきに同じ。  
 まんし(辰砂) 固水銀と硫黄(硫黄)との化合物にて、普通には土砂の如き狀(狀)にて存在す、色は赤色なり、此より水銀を取り、又た製造して繪具(繪具)及び藥品とす。  
 まんじや(信者) 固信仰して人々(人々)。  
 まんじや(仁者) 固なまげ深き人。  
 まんじや(人車) 固人力車の稱。  
 まんじや(神社) 固神を祭(祭)つてあるやし

九九九











志んそ、志んた  
 コトを云ふ、進水(シシ)、  
 志んぞくけつこん(親族結婚)親類同士が互ひに結婚を爲すコトを云ふ、醫學上より云へば、其の間に出来た子は、多くは不具者なりと云ふ、即ち血族配偶のコトを云ふ、  
 志んそくさくぶん(迅速作文)固一定したる時間内に、文章を速(シ)やかに作(ツ)るコトを云ふ、  
 志んた(糞糞)固わかみそのコト、  
 志んたい(神體)固神のみたま、祀れる神のおすがたのコトを云ふ、  
 志んたい(新體)固新らしき體裁、新らしきかた、  
 志んたい(進退)固進むコトと退(シ)くコト  
 ①かけひき②たちひふるまひ、  
 志んたい(身體)固からだ、  
 志んたい(身代)固其の人の財産(サシ)、  
 志んたい(寢室)固寝だいのコト、  
 志んたい(執帶)固骨の關節(サシ)を離れぬやうにつなぎ止めてある弾力(サシ)ある、白くして光澤(サシ)ある強き節(サシ)のコトを云ふ、醫學名、  
 志んたい(神代)固かみよ、神の御代(サシ)、  
 志んたい(人體)固からだ、  
 志んたい(甚大)固すぐれて大きいコト、

志んた  
 志んた(振盪)固振り動(カ)かされてメチャ(シ)に爲るコトを云ふ、  
 志んた(新月)固新たに鍛(カ)えたる刀、  
 志んた(軫悼)固天子のおなげきあそばさるを云ふ、  
 志んた(神道)固神の道、神の教(カ)、  
 志んた(新道)固しんみち、  
 志んた(人道)固人たる者の守るべき正しき道①人の通行すべき路(カ)、  
 志んた(神託)固神のおつげ、  
 志んた(新宅)固新たに作りたる家、  
 志んた(深澤)固すこきさは、水の深くして多くあるさは、  
 志んた(信託)固信用して頼みまかす、  
 志んた(仁澤)固めぐみの甚だあつきコト、殊に厚きなきけのコト、  
 志んた(進達)固願書(カ)などを、下級の官省が取次(カ)て、上級の官省へ届くるコトを云ふ、  
 志んた(侵奪)固おかしうばふ、かすめ取るコトを云ふ、  
 志んた(深潭)固ふかきふる瀬②谷川などの一段深き處を云ふ、  
 志んた(新炭)固たきり、炭、  
 志んた(診斷)固診察して病氣を判斷するコトを云ふ、

志んた  
 志んた(震旦)固印度(カ)にて支那のコトを云ふ、  
 志んた(震旦)固印度(カ)にて支那のコトを呼ぶに用ゆる語なりと云ふ、  
 志んたい(新體詩)固近來流行し出したる一種の長歌(カ)、西洋の詩風に習ひたるもの、語調一様ならざるものにて、重に七五調を用ゆ、  
 志んた(糞糞)固じんだに同じ、其の條を見よ、  
 志んたい(身體刑)固法律語、刑罰執行の方法にて、罪人の身體を束縛(カ)して、苦役に服(カ)さするさか、身體に苦痛を感じしむ刑のコト、假令(カ)答(カ)刑さか、入墨(カ)の刑など、  
 志んたい(新體詩歌)固現代に流行しつつある、七五調(カ)などの歌のコトを云ふ、  
 志んたい(神代杉)固杉の木が何百年と云ふ、長き間(カ)土中又は水中に埋(カ)もれて、木理美(カ)しく、色黒くして一種の光澤(カ)を生ぜし物、種々の器具又は建築に用ひらる、  
 志んた(診斷書)固醫士が病氣の鑑定をなしたる文書、

志んた  
 志んた(薪炭林)固芽(シ)より繁(シ)りたる森林のコトを云ふ、  
 志んた(新宅)固新(シ)らしく出来たる家に引き移(カ)りたる其の視(カ)ひのコト、  
 志んた(身代限)固其の債務を果す能はざるが爲めに、自己の財産全部を債權者に渡すコトを云ふ、即ち破産(カ)、  
 志んたい(人代名詞)固文法の語、人の名に代(カ)て呼ぶに用ゆる語、假令(カ)ば私(カ)汝(カ)其方(カ)などの語を云ふ、  
 志んた(薪炭商)固たき木と炭(カ)を業とする人の稱、  
 志んた(信託事業)固或る會社と信用上の契約を爲して、其の債券(カ)又は株券(カ)などの發行賣買に關する事務を取り扱ひ、又は債權者の爲めに、債權の返済に關する手續(カ)を取り扱ひたり、或は一個人の財産(カ)、又は遺産等の取締(カ)をなす業務のコトを云ふ、  
 志んたい(進退)固官公吏などが、其の職責に對して、失策(カ)ありたる時に、其の責(カ)を引き、退く可き

志んた  
 志んた(信託會社)固會社組織(カ)にして、信託事業を營(カ)むコトを云ふ、  
 志んた(新地)固新らしく開きたる土地①新知行(カ)のコト、  
 志んた(賦治)固賦治者が賦(カ)をして病氣を治(カ)すコトを云ふ、  
 志んた(人智)固人間の智能(カ)、  
 志んた(人知)固人間の才智、  
 志んた(新築)固新たに家を建(カ)てるコト、  
 志んた(人畜)固人と家畜、  
 志んた(新茶)固其の年の製造にかかる葉茶(カ)のコトを云ふ、  
 志んた(新著)固新らしき著作物、  
 志んた(深沈)固おちついでる性質②夜のふけ行くコトを云ふ、  
 志んた(新陳)固あらたなるさふるさくるコト、  
 志んた(新智識)固在來のものより、勝(カ)りし新らしき智識、  
 志んた(身長)固ながくのばすコト、長くのびるコト、  
 志んた(身長)固身のたけ、身の長さ、せだけ、  
 志んた(深長)固意味のふかくしてゆたかなるコト、

志んた  
 志んた(伸張)固のびるコト、  
 志んた(振張)固ふんばつしておこすコト、ふるひはるコト、  
 志んた(新着)固新たに着(カ)たるコト、又は新たにきたる物、  
 志んた(眞鍮)固金(カ)の名、銅(カ)と亜鉛(カ)を合したるもの、色は黄色にて光澤(カ)あり、且つ容易(カ)く侵蝕(カ)されざるに依り、種々の物を製するに用ゆ、  
 志んた(身中)固からだのな、心裡、  
 志んた(心中)固心のなか、  
 志んた(心中)固色情の爲めに、男女が共に死するコトを云ふ情死、  
 志んた(人中)固人ごみの中、ひさなか①詢先(カ)より濟(カ)の下までまつすぐに通つてゐる線(カ)を云ふ、  
 志んた(盡忠)固忠義を盡(カ)すコト、  
 志んた(慎重)固つつしみおもんするコト、つつしみふかきコト、  
 志んた(深重)固おちついでるコト、ゆつたりしておももしきコト、  
 志んた(神助)固神のおほせ、  
 志んた(眞直)固正しきコト、まつすぐなるコトを云ふ、  
 志んた(心中立)固人と契約せし

志んた

志んた、志んち

志んち







あんは

あんぼり(人望) 図人より望(望)を属するコト。人より慕(慕)はるコト。  
 あんぼつ(神罰) 図神明の罰。  
 あんぼつ(進發) 図す、み行くコト。  
 あんぼつ(鬘髮) 図黒(黒)くして漆の如き光澤(光澤)ある髮(髪)。  
 あんばふ(眞法) 図いつはりならざる法、まことの法のコトを云ふ。  
 あんばふ(心法) 図精神をたんれんする方のコトを云ふ。  
 あんばり(腎張) 図多淫なる性質の人。色情に耽(耽)り易(易)き人、すけべい。  
 あんばり(心張) 図しんばり棒の略。  
 あんはん(侵犯) 図罪をおかすコト。  
 あんはん(審判) 図つまびらかにしらぶるコト。  
 あんはん(新版) 図新らしき出版物。  
 あんはん(親藩) 図昔時の大名の一種の名にて、徳川家より出でたる人が、大名となりしものを云ふ。  
 あんはい(新俳優) 図壯士役者。  
 あんぼろ(辛抱) 図しんばろ強き人。  
 あんはつめ(新發明) 図新たに工夫を爲したるコトを云ふ。  
 あんばりぼろ(心張棒) 図戸の開ぬように

あんは、まんひ

あんばら(辛強) 図がまんつよし忍耐力(忍耐力)に富みてあり。  
 あんばら(審判官) 図審判を爲す役の人を云ふ。  
 あんばら(新寶珠結) 図紐(紐)の結び方の形の名。  
 あんび(審美) 図美しきと醜(醜)とを見分るコトを云ふ、即ち美の鑑別。  
 あんび(親披) 図宛名の人(直)にお讀み下され云ふ意を示す時に、封書(封書)の宛名の脇(脇)に記す語。  
 あんび(眞否) 図まことと然(然)らざるを、  
 あんび(眞皮) 図人の皮膚(皮膚)の外皮の、直ぐ下に在る皮の名。  
 あんび(神祕) 図秘密中の秘密(秘密)の不思議千萬なる事。  
 あんび(深秘) 図秘密の中のひみつ。ふかきひみつのコトを云ふ。  
 あんび(親皮) 図草木の外皮(外皮)の直ぐ下に在る軟(軟)らかき皮を云ふ。  
 あんびつ(震筆) 図天子の御自筆。  
 あんびつ(眞筆) 図其の人の自から書きたるもの、即ち自筆(自筆)。  
 あんびん(神品) 図すぐれて氣高きコト。勝(勝)れたる物品の稱。

あんひ、まんふ

あんびん(人品) 図其の人の容子、れうち、人からのコトを云ふ。  
 あんびがく(審美學) 図美しき物の性質などに就きて、研究(研究)する學問。  
 あんぶ(神符) 図神のお護(護)り札(札)。  
 あんぶ(榛蕪) 図草木の乱れしけつてるコト。入り亂れて生(生)じてる草木。  
 あんぶ(親父) 図ちち、てをや。  
 あんぶ(新婦) 図新(新)に迎(迎)えたる嫁(嫁)。  
 あんぶ(泰風) 図西風(西風)のコト。  
 あんぶ(神風) 図神の力にて吹(吹)き云ふ風(風)。  
 あんぶ(伊勢國) 図伊勢國の枕語(枕語)。  
 あんぶ(心服) 図心服(心服)より従(従)ふ。  
 あんぶ(臣服) 図臣下(臣下)を爲つて服從(服從)するコト。  
 あんぶつ(神佛) 図神と佛と。  
 あんぶつ(眞物) 図まことの物、いつはりなき物。ほんもの、コト。  
 あんぶつ(人物) 図其の人の容子。物事のすぐれて出来る人。其の人のれうち。人(人)と物(物)と。  
 あんぶん(譯文) 図未來(未來)のコトを、譯(譯)したる文書のコトを云ふ。  
 あんぶん(新聞) 図新らしき聞(聞)きしコト。

あんふ、まんへ

あんふ(珍) 図新らしき出来事。最近に在りし事柄(柄)の略。  
 あんふ(深文) 図きびしき法律。  
 あんふ(人文) 図人の智能(智能)の啓(啓)け進むコト、即ち文明(文明)の進(進)むコトを云ふ。  
 あんふ(仁聞) 図仁徳(仁徳)あつき、きこえ。仁要なる事を記して、日々發行する出版物(出版物)の略。  
 あんふ(新聞屋) 図新聞紙を賣る家。新聞記者を嘲(嘲)りけつて云ふ語。  
 あんぶつ(人物論) 図其の人の性格及び技量(技量)等を論ずるコト、又は論じたるもの。  
 あんぶん(新聞社) 図新聞紙を發行する家。  
 あんぶん(新文) 図新聞記者。新聞紙の記事を作るを業とする人。  
 あんべい(親兵) 図護衛兵のコト。近衛兵(近衛兵)のコトを云ふ。  
 あんべい(新兵) 図其年に入營せし兵士。新參(新參)の兵士のコト。  
 あんべう(神廟) 図神の靈魂を祀りある處。即ちみたまや。特に伊勢の太神宮の御事を申す。  
 あんふ、まんへ

あんへ、まんは

あんべん(審辨) 図つまびらかに區別するコト。明(明)らかにさばくコト。  
 あんべん(新編) 図新らしき編輯するコト。又は編輯したる物。  
 あんべん(鍼砭) 図いましめさすコト。  
 あんべん(神變) 図不思議千萬なる變化の仕方。奇妙なるコトを云ふ。  
 あんべい(新平民) 図明治の聖世に穠(穠)多(多)が新たに平民の中に連(連)れられたる者の稱。  
 あんば(親母) 図はは。  
 あんば(親補) 図天皇が御自身にて官職を授けられ給ふコト、即ち親任。  
 あんば(進歩) 図次第に發達(發達)して善くなるコト。はかどるコト。  
 あんばら(深謀) 図ふかきはかりこと。  
 あんばら(心棒) 図車の横木。ごだいなるコト。肝心なるコト。  
 あんばら(神木) 図神樹に同じ、かみき。  
 あんばら(親睦) 図中のよきコト、懇(懇)るなるコト。  
 あんばら(臣僕) 図家來(家來)の下男。  
 あんばら(新發意) 図佛教の語、新たに發心せり云ふ意にて、新たに佛門に入らる人の稱。  
 あんばら(新佛) 図新たに死せし人。

あんは、まんみ

あんばら(親睦會) 図互ひに懇親を結ぶべく會合するコト。  
 あんまい(新米) 図其年に收穫(收穫)したる米穀(米穀)の略。即ち新(新)の米。  
 あんま(身幕) 図自分の仕末(仕末)を自分で能くつけよ、なふコトを云ふ。  
 あんま(新前) 図未だ其の事に關(關)わらぬコト。いまいりしもの。  
 あんみ(辛味) 図からさあじ。  
 あんみ(親身) 図殊更(殊更)に親しき身内(身内)の略。親切(親切)なるコト。  
 あんみ(新見世) 図新たに開業せし店。  
 あんみ(新道) 図新らしき開きし道路。  
 あんみ(親密) 図むつまじきコト。したしきコト。仲(仲)のよろしきコト。  
 あんみ(親密) 図極めて細かきコト、緻密(緻密)なるコト。  
 あんみ(深密) 図極めて秘密なるコト。  
 あんみ(臣民) 図其國の人民。  
 あんみ(人民) 図たみぐさ。  
 あんみやう(身命) 図いのち。生命。  
 あんみやう(診脈) 図脈をしらべる云ふ事にて病氣を診(診)るコト。  
 あんみらい(盡未來) 図時間のつづく限(限)り云ふコトを云ふ。  
 あんみけん(臣民權) 図憲法の保護を受



まんみ、まんめ

けて、臣民の等しく得てゐる権利。  
**まんみらいさい** (盡未來際) 圖行く末、未のばてまで云ふ意を表す語。  
**まんめ** (新芽) 圖あたらししく出たる草木の芽。(新芽) 図わか葉。  
**まんめ** (神馬) 圖神社に飼ふてある、神のつかひしめの馬の稱。  
**まんめい** (神明) 圖神の神ト。特に天照皇大神宮の御事を申す。  
**まんめい** (長明) 圖夜の明白あけ、夜あけ。あけぼのの神トを云ふ。  
**まんめい** (身命) 圖身體と生命と。  
**まんめい** (申盟) 圖くりかへして盟(ち)ふコト。重(ち)れて堅くちがふコト。  
**まんめい** (人名) 圖人の名(な)。  
**まんめい** (人命) 圖人の生命。  
**まんめち** (神妙) 圖やさしくあるコト。すなほなるコト。けなげなるコト。不思議なるコト。奇妙なるコト。  
**まんめん** (人面) 圖人のかほ。人のかほに能く似たるもの、稱。  
**まんめん** (仁免) 圖なまきをかけて罪科をゆるされるコトを云ふ。  
**まんめんちく** (人面竹) 圖竹の一種、ホテイ竹の神トを云ふ。  
**まんめんちく** (真面目) 圖極めてまじめなるコト。ありていのコト。

まんめ、まんや

**まんめんじゆちしん** (人面獸心) 圖顔が人で心が獸(け)と云ふ意にて人の心のくされてるコトを云ふ。  
**まんも** (森茂) 圖樹木の夥多(た)しく、茂(さ)ひしげつてゐるコトを云ふ。  
**まんもち** (榛莽) 圖樹や草(くさ)の一面に茂(さ)ひしげつてゐる處を云ふ。  
**まんもく** (眼目) 圖眼をいからすコト。  
**まんもく** (深目) 圖ふかく、くぼみし目。  
**まんもく** (人目) 圖人の目。人の見るコト。  
**まんもつ** (進物) 圖贈(く)り物、進上する物。  
**まんもの** (新物) 圖總て新らしき物の稱。  
**まんもん** (神文) 圖神に對して自己の誓(ちか)を立つる文章の神トを云ふ。  
**まんもん** (審問) 圖つまびらかに、さびたす。明らかにしらるるコト。  
**まんもん** (訊問) 圖たづねさふ、さひたすコトを云ふ。  
**まんもん** (尋問) 圖たづねさふコト。  
**まんや** (深夜) 圖夜なか。夜ふけ。  
**まんや** (晨夜) 圖朝と晩と。  
**まんや** (新家) 圖新宅。  
**まんやち** (新陽) 圖新年、はつ春(はる)。  
**まんやち** (新役) 圖新たに仰せつけられたる役目のコトを云ふ。

まんや、まんよ

**まんやち** (神役) 圖神官、かんぬし。  
**まんやち** (信約) 圖かたきちかひ。まことやくそくの神トを云ふ。  
**まんやく** (新約) 圖新らしく結びたるちかひ。新規のやくそく。  
**まんやく** (新藥) 圖新たに發見されたる藥。  
**まんやく** (神藥) 圖非常によくきく藥(くすり)。  
**まんやく** (新譯) 圖新たにほんやくするコト。又はせしもの、稱。  
**まんやくせんしよ** (新約全書) 圖耶穌教の經文を記せし書物の名。  
**まんよ** (神興) 圖神の乗物(のり)。  
**まんよ** (燈餘) 圖もえのこり、もえさし。  
**まんよち** (人欲) 圖人々の有(あ)る慾心(よく)。  
**まんよち** (信用) 圖確かに信するコト。其人ならば、何事も間違(まちが)ないさ安心して云ふ事も聞き、又た物事をも任(まか)すコト。人望(ひとぞ)の集(あ)まれるコトを云ふ。  
**まんよちがし** (信用貸) 圖貸主が借主を信用して、抵當(ていどう)を取らずに金銭を借するコト。  
**まんよちがしきん** (信用貸金) 圖信用して貸し渡したる金銭。

まんら、まんら

**まんら** (混みあひ) (信用組合) 圖多くの人が互ひに、幾分かつづの金銭を出し合ひて、一體となしたる組合(くみあ)ひ。其の組合人の中に、金銭の必用生じたる時には其の組合より低利にて金銭を貸與し、又は組合より組合人へ、日用品を薄利にて分つコトをなすもの。  
**まんら** (現金取引の反對にて、賣掛) 圖一種、現金取引の反對にて、賣掛(か)にて取引するコト。  
**まんら** (信用約束) 圖他人に信用を與へる約束の神トを云ふ。  
**まんら** (信用證券) 圖自由自在に通用する證券の神トにて、即ち爲替(か)約束手形。銀行の小切手。荷爲替(か)などを云ふ。  
**まんら** (信用旅行券) 圖旅行するに際し、一定の金を銀行へ預(たく)り置き、旅行先にて、必用に應じて隨意に引き出し得るようになし置く預金(よ)信用してたよるコト。  
**まんらい** (神韻) 圖唄(うた)歌曲(きょく)の靈妙にして、其音聲の殊にゆかしきコト、又音樂(が)の靈妙なる調(しらべ)を云ふ。  
**まんらい** (人籟) 圖音曲(おんきょく)の神ト、

まんら、まんり

**まんらい** (迅雷) 圖はげしき雷(かみかみ)、甚しき雷鳴(かみかみ)の神トを云ふ。  
**まんらち** (心勞) 圖心のつかれ、氣苦勞(きくろう)。  
**まんらち** (辛勞) 圖苦しき勞(らう)なる、骨を折る、苦勞するコトを云ふ。  
**まんらち** (新郎) 圖新たに嫁(よめ)を迎へた婿(むこ)。  
**まんらち** (辛辣) 圖殊の外に味(あじ)のからき。非常にきびしきコトを云ふ。  
**まんらばんしやち** (森羅萬象) 圖天地間に在る有形無形の凡ての物を云ふ。  
**まんり** (真理) 圖まことの道理。高尚(こうこう)なる理論(りろん)動かざる條理の神ト。  
**まんり** (深理) 圖ふかき道理。高尚なる理論の神トを云ふ。  
**まんり** (審理) 圖司法官が訴訟(しんそ)の告訴(こ)等に就き取りしらぶるコト。  
**まんり** (心理) 圖心の道理。精神が事物に感じて、働く状態を云ふ。心理學の語。  
**まんり** (心理) 圖心の中。意中。  
**まんり** (神力) 圖神のしわざ。不思議なるはたらきの神トを云ふ。  
**まんり** (人力) 圖人の力。人の機能(きか)。  
**まんり** (爲すわざ) 圖人の力。人力車の略。  
**まんりつ** (震慄) 圖おそれおのゝきてふるふる。おそる、コト。

まんり

**まんりつ** (森立) 圖いかめしくそびえ立つコト。むらがりそびゆるコト。  
**まんりつ** (新律) 圖新規に制定されたる法律の神トを云ふ。  
**まんりよ** (宸慮) 圖天子のおぼしめし。  
**まんりよ** (神慮) 圖神の思召(しめぞ)。  
**まんりよ** (深慮) 圖深き考へ。遠大(とほ)の思召(しめぞ)の神トを云ふ。  
**まんりよ** (心慮) 圖考へ、おもんばかり。  
**まんりよ** (振旅) 圖戦争に勝ち、軍隊(いく)をまごのへて凱旋(がいせん)するコト。  
**まんりん** (森林) 圖樹木の甚だ多く集り生じてる處、もり、はやし。  
**まんりん** (親臨) 圖貴き身分の人が自から其の場に來らる、コト。  
**まんりん** (人倫) 圖人たる者の守り行ふべき大道。君臣父子夫婦朋友等の間柄に生ずる自然の順序を云ふ。  
**まんりお** (心理學) 圖精神のはたらきと精神の状態とに就きて、研究する哲學の一種。  
**まんりやち** (新涼) 圖涼風(すずかぜ)の立ち初めたるコト、即ち秋の初めの稱。  
**まんりやち** (神領) 圖神社の領分地。  
**まんりやち** (斟量) 圖おしはかる。くみは



ふんり

かろしんしやくするコト。
ふんりやく(津梁) 固わたり場を橋と云ふ。
ふんりやく(侵略) 固おかし取る。かすめ取るコト。
ふんりやく(心略) 固物事に際會して、即時に生ずる心のはたらき、即ち頓智(頓)氣轉(頓)のコト。
ふんりやく(信力) 固神佛を信仰する力。
ふんりやく(神力) 固しんりきに同じ。
ふんりやく(新緑) 固木の葉の芽を出して緑色を呈すと云ふコトにて、春の季(三夏)の初めのころを云ふ。
ふんりやく(心力) 固心のはたらき。
ふんりやく(人力) 固人のちから。人智のはたらきを云ふ。
ふんりやく(盡力) 固骨を折るコト、力をつくすコト。
ふんりやく(神力) 固草の名、おくての稻(科)の名。
ふんりやく(人力車) 固人を乗せ人の力にて挽(と)く車、馬車電車に對しての語。
ふんりやく(人力車夫) 固人力車を挽くを業とせる人のコト。
ふんりやく(侵略主義) 固他國を侵略(時)し取りて、我が領分(領)を擴めむ

ふんる、ふんれ

とする主義。
ふんる(親類) 固其の家の縁(縁)の續(つ)きたる人同士のコトを云ふ。
ふんる(人類) 固人間の仲間。人、ふんる(人類學) 固人種(種)の相違の關係、及び人間の生じたる起原(起)等を研究する學問のコトを云ふ。
ふんる(親類分) 固實際は親類でないも、親類と假定せし間柄の稱。
ふんる(つきあひ) 固親類附合、固親類間の實際(實際)親類なるらざるも親類同様の交際をするコトを云ふ。
ふんれ(浸淫) 固人間に害を與(與)ふる云ふ氣、あしき氣。
ふんれ(臣隸) 固けらいのコト。
ふんれ(神靈) 固神のみたま。微妙なる神の靈徳のコトを云ふ。
ふんれ(心靈) 固たましい、即ち肉體死すとも、心靈死せずなど。
ふんれ(振鈴) 固鈴(鈴)を鳴すコト。
ふんれ(浸禮) 固キリスト教に歸依(歸)する時に行ふ儀式(式)の稱。
ふんれ(人種) 固人間(種)のコト。
ふんれ(診療) 固病氣を診(診)て、療治(療)するコトを云ふ。
ふんれ(臣僚) 固多くの家來。群臣、

ふんれ、ふんわ

ふんれ(新曆) 固太陰曆(曆)の稱、即ち舊曆に對して太陽曆(曆)の稱。
ふんれ(森列) 固樹木の高く立ち列(列)なれるコト。おごそかに竝(並)び列(列)なれるコトを云ふ。
ふんる(針路) 固船の通ふ路、航海の路。
ふんる(進路) 固進み行く路、たごる路。
ふんる(昼樓) 固昼氣樓(樓)に同じ。
ふんる(新六歌仙) 固歌道の大家三十六歌仙の外に、新たに選びたる。六大家の稱、即ち俊成、慈圓、家隆、定家、西行、後京極を云ふ。
ふんわ(神話) 固廣く傳(傳)はつてる神代の話。
ふんわ(親和) 固したしみ、やわらぐコト。互(互)ひに混(混)り合ふコト。
ふんわ(親王) 固皇太子の御外の皇子(皇子)皇孫(孫)に賜はる御稱號、皇女の御方は内親王と申したてまつる。
ふんわ(人皇) 固天子の御事を申したてまつる。
ふんわ(親王家) 固親王の御稱號を許さる、皇族の御家すじのコトを申す語。
ふんわ(神話學) 固太古神代のころに在りしと云ふ、不思議なる諸種の物語

に就きて、研究する學問の稱。

ふんわり(眞割引) 固手形の支拂期日前に、現金を拂ひ渡す時に、其の支拂ひ期日までの日數に對する、日歩を手形の現金額よりして、割引(引)コトを云ふ。
ふんわりかしら(親王頭) 固芝居にて、役者の用ゆる髪(髪)の一種の名、昔時親王方の結(結)せ給ひたる髪(髪)の如き形をなせるもの。

すす

(すす)

すす(洲) 固川などの水中に、水淺くして土砂の現はれてる處の稱。
すす(砂) 固石の極めて小さく細(細)かきもの、即ちすなのコト。
すす(簀) 固簀(竹)の一種、竹の細き物又は葦(葦)などにて粗(粗)く編(編)しもの。總て細き物を十文字に編(編)みて、其の目をすかせしもの。すだれ。
すす(鬚) 固大根(根)鬚(鬚)牛蒡(蒡)などの心に、細き孔の多くあきて、水分の無く

なりたるもの、稱。

すす(巢) 固鳥の棲(棲)む居る所の稱、又た獸や虫の多く居る所のコトを云ふ。轉じて人又は物の多く集まつてある所の稱。蜘蛛(蜘蛛)の尻(尻)より吐く粘(粘)りある糸の如き物。
すす(籠) 固ひよこ、ひなぎり。總て年のゆかぬもの、コトを云ふ。
すす(芻) 固乾(乾)かしたる草、即ちまぐさ。牛馬のコトを云ふ。枯れたる草を束(束)れたる物の稱。草を刈(刈)り取るコトを云ふ。
すす(素) (接頭) 或る語に冠(冠)らせて、飾(飾)らざる。其のまゝと云ふ意を表はす語、例ば素面(面)など。或る語に冠(冠)らせて、何物をも持たぬ又は平々凡々なり云ふ意を表はす語、例ば素漢(漢)など。
すす(數) (接頭) 或る語に冠(冠)らせて、少なからすと云ふ意を示す語、例ば數人、數等(數)など。
すす(子) (接尾) 或る語の下に加へて云ふ、無意味の語、例ば金子(子)など。
すす(馬尾) 固馬の尾の毛の稱。

(すすあ)

すすあ(素襖) 固禮服の一種、すはうの訛り、すはうの條を見よ。
すすあ(素襖) 固すあうの訛り。
すすあ(素足) 固はだしのコト。足袋(袋)を穿(穿)ぬコト。
すすあ(牙儻) 固仲買(買)を業とせるコト。又は其の人(人)なご(ご)媒酌(酌)のコト。
すすあ(銃眼) 固又銃腹(腹)とも書く、鐵砲(砲)の筒(筒)の中のコトを云ふ。

(すすい)

すすい(水) 固水性(性)の略、即ち五行(行)の一(一)みづ。總て水(水)の流れ又は溜(溜)つてある處の稱。たひらかなり。凹(凹)凸(凸)なきなり。
すすい(垂) 固たるものしたたる。さがる。せばほざり。のぶる。しく。將(將)に爲らむとす。將に達(達)せむとす。意を表はす語、即ちなんんすとす。

ふんわ、すす、洲、砂、簀、鬚

すす、巢、籠、芻、素、數、子

すすあ、すすい、水、垂







すゐか、すゐき  
 ト。視力のよほりし眼。  
 すゐがん(酔眼) 酒に酔(た)てて眼の、ごんよりさなれるコトを云ふ。  
 すゐがん(衰顔) 酒をさるえたる顔つき、元氣なきかは形(かた)のコト。  
 すゐがん(醉顔) 酒に酔(た)たる顔つき、すゐがん(隨感) 酒時(さ)に感ずること云ふ意にて、物事に感(か)ずること、感(か)ずる(か)るしや(水交社) 陸軍の借行社と同一の組織にて、各鎮守府所在地に在る海軍將校の集會所の稱。  
 すゐがらん(隨行員) 酒つき從(か)りて行く人、さも人のコト。  
 すゐき(水氣) 酒しめり氣。水分を含みおる容子。水より立ちのぼりたる氣、(即ち水面より上る蒸發氣(た)り) 病氣の一種、身體のむくむコト、即ち水腫(すいじゆ)。  
 すゐき(衰季) 酒をさるえて回復(た)るの見込(ま)くなりし時の稱。  
 すゐき(芋苗) 酒芋(さ)の皮を去りて干(か)したる物、即ち芋がらのコト。  
 すゐき(瑞氣) 酒めてたき氣、えんきのよきしるしのコトを云ふ。  
 すゐき(隨喜) 酒信心(しん)して、喜び有(あ)る

すゐき  
 たがるコトを云ふ。  
 すゐき(推究) 酒道理を推(ま)しきわむるコトを云ふ。  
 すゐき(遂究) 酒道理をきわめたすコトを云ふ。  
 すゐき(衰朽) 酒をさるえて役に立(た)ぬコトを云ふ。  
 すゐき(水牛) 酒熱帯(た)地方に産する獸の名、形は牛に似て其れよりは大きく、其の毛色は灰色(は)に青(あ)みを帯びたるものにて、毛は荒(あ)し、其の角(つ)は甚(た)大にして、半透明(た)の黒色を呈す、又た黒色中に鼠色又は白色の、雲の如き文(ぶん)ある物あり、角は種々の器具を製す材料と爲り、又た飾(か)り物として用らる。  
 すゐき(水居) 酒水上の生活、舟(ふね)まるるコトを云ふ。  
 すゐき(水魚) 酒水と魚(い)と轉じて極めて仲(な)のよきコト。更(ま)に轉じて難(が)るべからざるコトに喩(たと)えて云ふ語。  
 すゐき(水禽) 酒水鳥(すいじゆ)の科ト、すゐき(水銀) 酒みづがれの科ト、すゐき(推舉) 酒人をさりもつコト。人をすすめ上げるコト。人(ひと)を上げ用ゆるコトを云ふ。

すゐき、すゐく  
 すゐき(醉吟) 酒に酔(た)てて唄(うた)ふ。  
 すゐき(醉狂) 酒に酔(た)てて精神の狂(くる)ふコトを云ふ。  
 すゐき(粹狂) 酒ものづきなるコト、物すきなる人のコト。  
 すゐき(睡郷) 酒れむるコト。  
 すゐき(水郷) 酒水邊に在る村落(むら)の科トを云ふ、即ち岸邊(きし)の村里(むら)の科トを云ふ。  
 すゐき(醉客) 酒すゐか(か)に同じ、すゐき(水脚) 酒吃水(た)に同じ、すゐき(垂拱) 酒手をこまぬきてゐるコト。轉じて何事もせず遊(あ)んでるコトを云ふ。  
 すゐき(水魚交) 酒きわめて仲(な)のよきコト、親(お)みの交り。  
 すゐき(衰軀) 酒身體(た)のやせおさるるコト、又(また)はやせおさるる(た)る身體。  
 すゐき(炊具) 酒煮炊(た)をする道具。  
 すゐき(燧火) 酒石と金と打きて出したる火、即ちきりび(た)轉じて合圖(あ)に上る火、即ちのろし。  
 すゐき(水火) 酒水と火(く)と水害と火災(く)互(た)ひの仲(な)の甚(た)悪(わる)きコト。  
 すゐき(西瓜) 酒又水瓜(すい)とも書(か)く、蔓草(まんそう)の名、其の葉は大きくして羽状(う)を

爲し、實(み)亦(また)大きく圓形にして、皮は黒綠色を呈して厚(あ)く、縱(た)に規則正しき線(せん)あり、肉(にく)は赤色にして水分多く、且つ甘(あま)し、夏季の好食品なり、種(た)は平(ひら)くして黒色を呈す、すゐき(酔臥) 酒酔(た)ばらつてゐる、すゐき(水軍) 酒海軍に同じ、即ちふないくさの科トを云ふ。  
 すゐき(衰機) 酒をさるえくすれる。よほりてこはれる。  
 すゐき(水光) 酒水の色(いろ)水の景色(けい)の科トを云ふ。  
 すゐき(水管) 酒水の通(と)うて行く管(くだ)り、かけ樋(ひ)の類(るい)を云ふ。  
 すゐき(吹管) 酒金屬類に對し、化學的の試験(しけん)を爲すに用ゆる具、アルコールの火柴(ま)を金屬に吹き掛(か)るに用ゆるガラス管の科ト、すゐき(翠髮) 酒みざりの黒髮、すゐき(水刑) 酒みづづめの科ト、すゐき(垂教) 酒教を垂(た)るコト、教を受(う)くるコト、すゐき(水月) 酒水上に映(うつ)れる月影(げい)の科ト、武藝(ぶげい)の型(かた)の名、假令(か)伊賀の水月(いげ)なり、すゐき(水源) 酒水の流れ出るもさ、すゐく、すゐけ

すゐき(瑞驗) 酒めでたきしるし吉兆(きしやう)の科トを云ふ。  
 すゐき(水園學) 酒海の一般の有様(ようさ)を研究する學問の稱。  
 すゐき(垂古) 酒むかしの科ト、すゐき(推古) 酒昔の事蹟(じせき)を推し考へるコトを云ふ。  
 すゐき(遂古) 酒大昔(たせき)の科ト。庭園(てい)の科トを云ふ。  
 すゐき(水園) 酒水に沿(た)る土地(ち)の科トを云ふ、鳥園(とり)の科トを云ふ。  
 すゐき(推般) 酒人を推舉するコト、すゐき(水塞) 酒水邊に設(た)けたるさりて、水邊に在る小さき城、すゐき(水災) 酒水害に同じ、すゐき(水草) 酒水中又は水邊に咲(は)り生する草の科トを云ふ、すゐき(水葬) 酒死體を水中に葬(ま)るコト、火葬土葬に對しての稱、すゐき(藤藤) 酒藤(ふ)の條を見よ、すゐき(推察) 酒さつしる、おもひやる、おしはかるコト、すゐき(水産) 酒水中に産する凡ての物を云ふ、すゐけ、すゐさ

すゐき、すゐし  
 すゐき(炊飯) 酒飯(はん)を炊(た)くコト。煮炊(た)するコトを云ふ。  
 すゐき(推參) 酒まかり出る、出かける。失禮(しつれい)な舉動(きどう)をなせるコトを云ふ。  
 すゐき(推算) 酒其れから其れへさ道理を推して、ばかり考(かん)へるコト、順(じゆん)々に規則正しく計算(けいさん)するコトを云ふ。  
 すゐき(水彩畫) 酒洋畫(やう)の一種水にて溶(と)け能(た)ふ繪具(え)のみを用ひて、描(か)きし畫(が)の科トを云ふ、すゐき(水産物) 酒水中に生産する魚類(い)類、介類及び海草類の總稱、すゐき(遂志) 酒志(し)を達したるコト、すゐき(垂示) 酒教(け)ゆる知らせ示めすコトを云ふ、すゐき(衰死) 酒をさるえて死するコト、すゐき(粹士) 酒おもひやりのよき人、さげたる人(ひと)いきな人、すゐき(水師) 酒海軍の科トを云ふ、すゐき(出師) 酒軍隊をくり出すコト、兵士を出すコト、戰爭をなすコト、すゐき(炊事) 酒食品を煮(た)炊(た)するコト。食品を料理するコト、すゐき(遂事) 酒物事を爲しこげるコト、すゐき(隨時) 酒さきどきをりたり、すゐさ、すゐし 1014



するし

するし(衰死) 固身體(カウシ)のおさるえて死  
 するし(水死) 固水におぼれて死する、  
 するし(垂死) 固死に臨(カウシ)んでるコト、し  
 にかのケコト、臨終、  
 するし(推叙) 固其の事項(カウシ)を他人に委  
 (カウシ)れて、自分は断(カウシ)りて關係せぬコ  
 トを云ふ、  
 するし(瑞日) 固芽出度(カウシ)き日、  
 するし(炊舍) 固飯を炊くところ、  
 するし(水瀉) 固水の如く大便の下るコ  
 トを云ふ、  
 するし(水車) 固みづぐるま、即ち水の  
 落る力に依りて廻(カウシ)るやうになつて  
 る車の稱、  
 するし(水手) 固舟を漕(カウシ)ぐ人、即ちふ  
 なる(船頭(カウシ)の)コト、  
 するし(垂珠) 固耳たぶ、耳朶、  
 するし(水腫) 固病氣の名、身體(カウシ)に  
 水がたまりて膨(カウシ)れる病氣、  
 するし(隨處) 固行くところ、到るこ  
 ろのコトを云ふ、  
 するし(推叙) 固位を進む。位をのぼす、  
 するし(推進) 固推(カウシ)して進めるコト  
 推し進むコトを云ふ、  
 するし(水心) 固凡て眼にて見ひ能(カウシ)

するし

するし(水神) 固水の神、水を守(カウシ)つて  
 る神のコトを云ふ、  
 するし(醉人) 固醉客に同じ、  
 するし(粹人) 固すぬな人、しやれる人、  
 いきな人のコトを云ふ、  
 するし(隨身) 固人に附き添(カウシ)て従ひ  
 行くコト、即ち供(カウシ)をして行くコトを  
 云ふ、昔時の一つの官名、攝政(カウシ)又  
 は關白の職に在る人の護衛(カウシ)として  
 弓矢(カウシ)を持って従ひ行く役(カウシ)、又は  
 其の人のコトを云ふ、  
 するし(水晶) 固石の名、石英(カウシ)の  
 一種、正(カウシ)しく六角形を爲せる結晶體  
 (カウシ)にて、其の質極めて堅(カウシ)く、一  
 般に無色透明(カウシ)にして、宛然(カウシ)  
 硝子(カウシ)の如く極めて美し、種種の飾  
 (カウシ)り物となすの外、印材(カウシ)又は眼鏡  
 (カウシ)を製す又た同じ水晶にて其の種  
 類澤山ありて、紫色なる物赤色なる物  
 黄色なる物等種々あり、赤色のを赤水  
 晶と云ひ、黄色なるを黄水晶と云ひ、紫  
 色なるを紫水晶と云ふ、  
 するし(水) 固水のうへ、水流(カウシ)  
 の表面(カウシ)の稱、  
 するし(水推) 固おしゆづるコト、ゆ

するし

するし(瑞祥) 固めでたきしるし、  
 するし(隨性) 固其の人に備(カウシ)はつ  
 てる運勢、運命のコト、  
 するし(水尺) 固みづばかりのコト、  
 するし(衰弱) 固をさるえまわる、や  
 せをさるうコトを云ふ、  
 するし(隨從) 固つきしたかふ、  
 するし(垂詢) 固諮詢(カウシ)に同じ、  
 するし(水準) 固みづもりのコト、  
 するし(水衝) 固水の流れて打ちあた  
 るところのコトを云ふ、  
 するし(水松) 固水草の名ミル、  
 するし(水推) 固ほめたたえるコト、  
 するし(水色) 固水の色、水(カウシ)の如き薄  
 青(カウシ)き色、水(カウシ)のけしき、  
 するし(水色) 固みどり色のコト、  
 するし(水絶) 固地理學の語、雨水  
 (カウシ)又は絶(カウシ)す流れつつある水の爲  
 (カウシ)に、地(カウシ)が掘(カウシ)て凹凸(カウシ)の生じた  
 る部のコトを云ふ、  
 するし(炊事掛) 固煮炊(カウシ)をする  
 役向(カウシ)のコト、又は其の人のコト、  
 するし(水蒸氣) 固水のじやうはつ  
 して、立ち上(カウシ)る氣、ゆげ、  
 するし(水準器) 固水もりを爲すに

するし、するし、推

するし

するし

用ゆる器具、水平にけづりたる細長  
 (カウシ)き水の中央に、細き溝を作り、中へ  
 水銀又は水を入れたるもの、  
 するし(水鏡) 固身門) 固神社の山門の左  
 右に在つて、矢及び弓を持つて人形  
 (カウシ)、即ち左大臣及び右大臣のコト、  
 するし(出師準備) 固軍隊をくり  
 出す仕度(カウシ)のコト、  
 するし(水晶葡萄) 固葡萄の一  
 種、其の果實の白色を呈する物、  
 するし(水上警察) 固水上に  
 於ける船舶其の他の事故(カウシ)に就き、警  
 戒し保護し、又は救助を爲す警察のコ  
 トを云ふ、  
 するし(推) 固動をしかる、さつしる、  
 するし(綏綏) 固おだやかなるさま、盛  
 んなるさまを云ひ表はす語、  
 するし(遂送) 固つき隨ふて行くさま、  
 のぼりたつさまを云ふ、  
 するし(備備) 固あんじおそれる状(カウシ)  
 に云ふ語、  
 するし(慧星) 固はつき星のコト、  
 するし(醉醒) 固醉(カウシ)と醒(カウシ)るコト、  
 するし(衰世) 固おさるえたる世、  
 するし(衰勢) 固勢のおさるえたるコト、  
 段々(カウシ)弱(カウシ)くなるコト、

するし(水勢) 固水の流れゆく音、  
 するし(水勢) 固水のぬきほひ、水(カウシ)の流  
 れ行くありさま、  
 するし(水星) 固星の名、太陽の最も近  
 く在る一つの遊星の稱、  
 するし(綏靖) 固おだやかなるコト、靜  
 かなるコトを云ふ、  
 するし(瑞星) 固芽出度(カウシ)コトのある  
 知らせとして出る星、いはひ星、  
 するし(垂髻) 固をさな子のたれ髪のコ  
 トを云ふ、  
 するし(燧石) 固火打石(カウシ)のコト、  
 するし(垂線) 固真直(カウシ)に垂れ下つて  
 る線(カウシ)のコトを云ふ、  
 するし(水戦) 固水上の戦ひ、海戦、ふな  
 いくさのコト、  
 するし(錐尖) 固錐(カウシ)の穂さき、  
 するし(推薦) 固人を採用(カウシ)さすべく  
 すすめるコト、  
 するし(推遷) 固其れから其れへこ、自  
 然にうつり變(カウシ)り行くコト、  
 するし(水仙) 固草の名、葉は綠色にし  
 て扁平(カウシ)くして細長く、其の尖は圓  
 形をなす、長さ七八寸より一尺五六寸  
 まであり、冬の頃に黄色又は白色の五  
 瓣の小きき花を咲かす、其の莖は白色

にして球状を呈して、地中に在り、薬用  
 に供せらる、花は生(カウシ)て觀賞す、  
 するし(推圍) 固おしひらく、ひろくす、  
 ひろげるコトを云ふ、  
 するし(垂漚) 固よだれたれるコト、  
 其の物を非常にしたひ又は非常に欲  
 (カウシ)するコトを云ふ語、  
 するし(水成岩) 固水中に在る岩石  
 が、水の爲に碎(カウシ)かれて流れて湖水、  
 又は川などの底(カウシ)を爲せるを云ふ、  
 するし(水夢死) 固人たるの本分  
 を盡さず、坐食して徒(カウシ)に生涯(カウシ)  
 を送るコトを云ふ、  
 するし(水仙羹) 固菓子の名、葛の  
 粉に砂糖(カウシ)を混(カウシ)て、ねりて、小さ  
 く切りて蒸(カウシ)たるもの、  
 するし(水鏡) 固鍋(カウシ)の一種、其  
 形は扁平(カウシ)たくしてつるの附(カウシ)て  
 ある物、専ら料理人の使用(カウシ)するも  
 の、  
 するし(水前寺海苔) 固肥後國の  
 水前寺地方より、産出(カウシ)する川海  
 苔(カウシ)の一種、  
 するし(水推) 固人を推薦する  
 手紙のコト、  
 するし(水樓動物) 固水中に生







するは、するひ

するはん(随伴) 図附き従ふコト、供(ト)して行くコト、

するばりふ(水防夫) 図洪水(ト)出水等の防禦を爲す役をしてる人夫、

するばりくみあひ(水防組合) 図水防夫の組合のコト、

するばりしやう(瑞寶章) 図勳章の一種、國家に勳功(ト)ある者に賜はる勳章にて、一等より八等に區別さるる、

するひ(炊婢) 図めしを炊く下女。おさんごんのコト、

するひ(水飛) 図非常に細(ト)かき粉(ト)を得る方法のコトを云ふ、即ち粉を水に溶(ト)して、其の荒(ト)き物の水底(ト)に沈(ト)むるを待つて、其の上澄(ト)を取り、其の中に混(ト)つてる細粉(ト)を沈(ト)ませて取りたる物を乾(ト)かして得たるもの、稱、

するひ(衰微) 図わりおさるえるコト、

するひ(粹美) 図いやみのなき美しきコト極めて美しきコト、

するひ(翠微) 図山の青々(ト)としてる容于を云ふ、

するひつ(水筆) 図筆の種類、根元(ト)までおろして文字を書くに用ゆる筆、即ち

するひ、するへ

するひつ(隨筆) 図思ふ事見た事などを、筆(ト)のままに書き記(ト)したる文章のコトを云ふ、

するひん(水濱) 図水のそば(ト)しへ、

するひん(葵寶) 図陰曆五月の稱、

するふ(水夫) 図ふなこ、船頭(ト)のコト、

するふ(炊婦) 図めしをたく女中、

するふ(炊夫) 図めしをたく下男、

するふ(醉舞) 図酒に酔(ト)ふて踊(ト)り舞ふコト、

するふ(緩撫) 図いたはりて安(ト)んするコト、なぐさめいたはるコト、

するふろ(水風呂) 図すえふろの詛り。其の條を見よ、

するふん(随分) 圖身分相當に、分相應(ト)に、す、ぶる甚だ云ふ語、

するふん(水分) 図みづの氣、

するへ(水兵) 図海軍の兵士、

するへ(水平) 図まつたいらなるコト、

するへ(衰弊) 図おさるへつかる、コト

① 身體のよはるコトを云ふ、

するへ(水豹) 図獸の名、あざらしの科トを其の條を見よ、

するへ(水萍) 図うき草のコト、即ち水上に浮(ト)んでる草、轉じて定(ト)めな

するへ、するま

するへ(水邊) 図水のそば(ト)のほざり、

するへいどち(水平動) 図地面(ト)が平(ト)に動くコト、

① 横に動くコトを云ふ、

するへいせん(水平線) 図地平線に對する稱、海面と天とが恰も相連(ト)つてゐるかの如くに見えてる部分のコトを云ふ、

① 見波(ト)し能(ト)ふだけの海面の範圍(ト)を云ふ、

① 曲(ト)みなく横(ト)にまつづくに引れたる直線の稱、

するへいめん(水平面) 図動かさる水の平かなる表面のコトを云ふ、

するへ(推歩) 図天に在る星の動くのを測(ト)るコトを云ふ、

するへ(醉歩) 図酒に酔(ト)よろつき歩(ト)する(ト)るコトを云ふ、

するへ(醉美) 図酒に酔(ト)なる勢にて書きたる文字の稱、

するま(睡覺) 図れむ氣を催(ト)ふす、れむたくなるコトを云ふ、

するま(揣摩) 図おしはかるコト。推量(ト)するコトを云ふ、

するみ、するよ

するみん(睡眠) 図れむるコト、れるコト、

するみやく(水脈) 図地中を水が流れ行く水筋(ト)のコトを云ふ、

するむ(睡夢) 図さるるとして夢(ト)を見るコト、

するむ(瑞夢) 図よきゆめ、めでたきゆめ、

するめん(水面) 図水のおもて、

するめい(醉迷) 図酒に酔(ト)て視力の不規則(ト)になるコトを云ふ、

するもん(水紋) 図水面に生ずる波(ト)の模様(ト)、波の打てるさま、

するもん(水門) 図樋(ト)の口、開門(ト)、

するもん(推問) 図道理詰(ト)にして問ひたすコトを云ふ、

するやち(翠楊) 図芽(ト)の生じたる青青(ト)せし柳(ト)の稱、

するやち(垂楊) 図枝垂(ト)柳(ト)のコト

するやち(水楊) 図柳の一種、川柳、

するやち(水藥) 図みづぐすり、

するやち(水楊妃) 図草花の名、菊の一種にて、淡紅色の花の咲くもの、

するやち(水楊酸) 図藥の名、熱(ト)を下げるものサルチル酸の一名、熱(ト)を下げるコトを云ふ、

するゆ(垂論) 図さし示す。さとして教ゆるコトを云ふ、

するよし(衰容) 図わりたるさま、おこ

するよ、するら

するよ(水浴) 図水をあびるコト、

① 水の中へ入りて身體(ト)をあらふコト、

するらい(水雷) 図水中にて非常の勢にて破裂して敵の軍艦を打ち破る、爆裂彈(ト)の如き物、

するらち(老衰) 図年をさつて身軀(ト)のおさるへるコトを云ふ、

するらん(翠巒) 図青々(ト)して山、

するらいこ(水雷庫) 図各鎮守府に在りて水雷を貯藏(ト)して置く倉庫、

するらいくわ(水雷火) 図水雷に同じ其の條を見よ、

するらいてい(水雷艇) 図船體(ト)輕(ト)く速力早く、水雷發射管を備え、敵艦(ト)近(ト)く進み寄りて、水雷を發射する役を爲す艦、

するらいてい(水雷艇隊) 図水雷艇の集合して爲れる一隊の稱、

するらいはちかん(水雷砲艦) 図襲(ト)ひ來たれる水雷艇を破壊(ト)し、若しくは驅逐(ト)する砲艦を云ふ、

するらいくちかん(水雷驅逐艦) 図軍艦の一種、速力(ト)の最も早き小形の軍艦にて水雷艇を驅逐する任に當る、軍艦のコト、

するら、するり

するらい(水雷艇母艦) 図水雷艇隊に従ひ行きて、其の水雷艇に、石炭糧食飲用水其他必需品を供給(ト)する艦、

するらいはくわいかん(水雷破壊艦) 図軍艦(ト)の一種、敵の水雷艇を破壊する武器を備(ト)えつけてある軍艦のコト、

するらいはくわくかん(水雷捕獲艦) 図水雷艇を捕獲する用を爲す軍艦、

するらいはちきよあみ(水雷防禦網) 図水雷の衝突(ト)を防ぐ可く爲めに、軍艦の周圍(ト)に設(ト)けられてある鋼鐵製の網(ト)のコト、

するらいはつしやくわん(水雷發射管) 図水雷艇(ト)又は戰艦に、備(ト)えつけられてある、一種の器械(ト)にて、水雷を敵艦(ト)見かけて、海中へ放(ト)ち出す用を爲すもの、

すいり(酢煎) 図食品に酢を入れて煮(ト)すコト、又は酢にて煮し食品、

するり(推理) 図物事の道理を推(ト)し考(ト)ふるコト、道理を考へて物事を察(ト)するコトを云ふ、

するり(醉裏) 図酒に酔(ト)あるコト、

するり(水理) 図水の流(ト)れ行く道すぢ、

するり(水利) 図水の利益(ト)、即ち水を



すぬり、すぬれ

飲料洗濯等の種々の用に充(つ)るコト
水の便利(べんり)即ち水路を船にて物
を搬び行く交通(たうつう)の便(べん)を云ふ、
すぬり(水流)図水の流れ水の流れ行く
コトを云ふ、
すぬり(垂柳)図水邊に枝(えだ)の垂れ下
つてる柳(やなぎ)したれ柳、
すぬりん(垂綸)図釣糸(つりいと)を水の中へ垂
れ入れるコト。つりするコト、
すぬり(水量)図水のかさ、
すぬり(推量)図おしはかる。さつす
る。おもひやりにするコト、
すぬり(水力)図水の物を壓(おさ)す力
のコトを云ふ、
すぬり(水電機)図水力に依
りて發電機を運轉させて電流(でんりゅう)を
生ぜしむるコト又た其れに依つて生じ
たる電氣、
すぬれ(衰齡)図年をとりて身體のおこ
るへるコト。老人のコトを云ふ、
すぬれ(翠簾)図あなすだれのコト。皇
太后が幼帝に代り、政治をみなせばせ
らるゝコトを云ふ、
すぬれ(水練)図水泳(スイヨウ)に同じ、
すぬれ(垂機)図あわれむコト、あわれ
みを與(あた)ふコト、

すぬれ、すう 敷

すぬれ(水練場)図水泳(スイヨウ)の稽古
(ギョウ)をする場所、
すぬろ(水路)図船の通(とほ)ひ行く路(みち)、
すぬろ(階路)図山などを穿(くわ)つて作り
たる道路(だうぢう)、トンネル、
すぬろ(垂露)図ポトポトと落ちる露(つゆ)、
書道の語にて、文字の縦(たて)に引く畫
(え)の下端(しも)をはねずに、押(お)えて
止めて置くコトを云ふ、
すぬろ(水樓)図岸邊(かたぎは)に在る高き家
水邊(みづのへ)のたかごの、コト、
すぬろ(推論)図理由(りゆう)に就きて論議
(ろんぎ)するコト、
すぬろ(水蠟燭)図いばたの木のコ
トを云ふ、

(すすう)

すう(據)圖一定の所へ置く、例は膳を
据(た)う。其の處へすばらせる。おちつか
す。さしめ置く。設(た)ける。さめる。例
ば座布團を据(た)う。灸(しよ)をすう、
すう(樞要)圖大切なコト、かんじ
んなるコト、
すう(陣遠)圖かけはなれたる田舎
(いぢ)、片田舎(かたがは)のコト、
すう(數個)圖すうに同じ、
すう(趨賀)圖賀事を述(のたま)ひにまかり出
るコト、
すう(數行)圖五六行(ごりゅう)、五つ六つ
のくんだり、五つ六つのならび、
すう(數學)圖數理(すうり)を研究する學
問のコト、即ち算術(さんじゆつ)代數(だいすう)幾何
(きこ)三角法(さんかくぽう)微分(みぶん)積分(かぶん)等の總稱
(そうけう)、數奇(すうき)圖不運(ふえん)なるコト、ふし
やはせるコトを云ふ、
すう(樞機)圖國家の大事(だいじ)な政
務(せいむ)の事務(じむ)の大切なコト、かなめ
の戸(と)のくるるの、コトを云ふ、
すう(舞妓)圖牛人前の藝妓(げいぎ)、半玉(はんぎよ)
(おんな)の、コトを云ふ、
すう(數回)圖いくたびも、五六度
も。たびたびの、コトを云ふ、
すう(趨迎)圖走り出で出迎(でむか)ひをな

すう 据

すコトを云ふ、

すらびつ(隙月)圖正月の異名、
すらびつ(數月)圖五六個月、
すらこ(數個)圖五つ六つ、
すらこ(數口)圖五六人。物事の口數
(くちすう)の五つ六つを云ふ、
すらこ(鬚根)圖草木の根の部より、更
に四方へ出でるひげの如き根の稱、
すらさ(趨走)圖出掛(でかけ)て行くコト。
走(は)り行くコト、
すらさ(芻草)圖牛馬の餌(え)となす草、
即ちまぐさ。かりくさ、
すざいとはつ(數罪俱發)圖刑法の語、一
人にて二種以上の罪を犯したるコトの
發覺せる場合(はつ)の稱、
すらじ(數字)圖數(すう)を書き表(ひ)はすに
用ゆる文字、又は數を示す文字、即ち一
二三百千萬等の文字、
すらし(數詞)圖數をかぞふる語、即ち一
二三と第一第二第三などの類、
すらし(樞軸)圖動(うご)ちの基礎(きそ)、
すらし(運轉)圖まわらす物を中心(ちゆうしん)國家
の大政の主力(しゆりき)を云ふ、
すらし(數日)圖五六日、
すらし(嶺峻)圖山などの高くして、
すらし(數)コトを云ふ、

すらざりし(鐵面皮)圖あつかましくあり

すらざりし(鐵面皮)圖あつかましくあり
わうちやくてあり、
すらせい(趨勢)圖勢(せい)のおもむくこ
ろ。物事の移(うつ)り行くさま。物事の
なりゆきを云ふ、
すらせい(樞星)圖北極星(きたきょくせい)の、
すらそ(數個)圖小僧侶(せうじゆ)の、
すらそ(數多)圖數(すう)の多きコト、澤山と
云ふ意を表はすに用ゆる語、
すらた(素語)圖雜(じやく)を入れず、う
たひをうとふコト、
すらち(鴉場)圖まき場の、
すらにん(數人)圖五六人、
すらねん(數年)圖五六十年の、
すらはい(崇拜)圖あがめたつこぶコト、
すらはい(趨拜)圖まかり出てお目にかか
る。奉(ほう)上の敬語、
すらま(芻株)圖草を刈(かり)て枯(かわ)か
したるもの、即ちかいば、まぐさ、
すらみつ(樞密)圖大切なコト。國家の
政事の機密(きみつ)の、
すらみつ(樞密院)圖天皇の御下間に
對し奉(ほう)つて、協議(ぎぎ)をなす處にて、樞密願
問官に依りて成り立つて最高(たか)の官府
の稱、
すらみつ(樞密顧問)圖天

すらに隸屬する最高の顧問官にして、樞

すらに隸屬する最高の顧問官にして、樞
密院の會議に列する議員、
すら(數目)圖五つ六つの科目(こくむ)の
コト。いろ／＼の科目(こくむ)の、
すら(數理)圖數學の理論、
すら(數量)圖物の數(すう)、目方(めがた)
かさの、コトを云ふ、

(すすえ)

すえ(末)圖終り、はし。物の尖(と)の方
(かた)へ、いただき。子孫(こそん)假令(かじ)は平家
の末流(すえりゅう)など。世(よ)の衰(し)へ来る
コト、即ち末世(すえ)の今(いま)の後の(のち)の。凡(たゞ)て
衰(し)へるへたる狀(じやう)を云ふ、假令(かじ)はモ
ウ末(すえ)の役(やく)にたため、又は其物
すえお(據置)圖すえ置くコト、
すえお(據置)圖動か(うご)かす、いちら
す、其のままにて置く、
すえお(陶窯)圖陶器を焼(や)くに用ゆるか
まごの、コトを云ふ、
すえお(据腰)圖腰を据(た)えて構(かま)えて
るコト、
すえお(末始終)圖いついつまでも、
すえお(永)圖くさ云ふ意を表はす語、
すえお(末末)圖のちのち。我が身の行
すうも、すえす 末 1011五







すき、すきか 梶、過

其の木材は建築(かん)其他器具を製するに用ひられ、其の樹皮は屋根を葺(つ)に用ゆ。

すき(梶) 図杉に同じ。

すき(過) 接尾(つ)或る語に附け加えて、凡て程度(た)を越(こ)たるを云ひ表はす語。

すきあぶら(梳油) 図髪をすくに用ゆる水油。

すきいた(杉板) 図杉の木を薄く切りたる板を云ふ。

すきいれ(漉入) 図紙に文字(もんじ)や模様(もよう)などをすかせしものを云ふ。

すきいれがみ(透入紙) 図文字や模様をすかし表はしたる紙。

すきちつし(透寫) 図書又は書を下に置き其の上に薄き紙を敷きて下の書畫を其のまま寫し取るコト又は寫し取りたる物。

すきをり(杉折) 図杉の木を薄くへぎて作(つ)りたる折(せ)葉子類を入れる具。

すきがき(透垣) 図竹垣(たけかき)の一種、竹さ竹との間(ま)をすかせし物。

すきかぜ(隙風) 図すきまをもれて吹き込み来る風。

すきかは(杉皮) 図杉の木の皮。

すきかへす、すき

すきかへす(漉返) 図反古(かぶ)やボロなどを煮(ゆ)て再び紙させし下等の紙。

すきかへす(漉返) 圖翻反古(かぶ)などを水に浸けて、ペトペトにして打ち碎(くだ)きて紙をなす。

すきかへす(鋤返) 圖鋤鐵(くわ)にて土地を掘り返(か)す。

すききり(剝切) 圖魚類肉類等を薄く切りたる物の稱。

すききれ(透切) 図すかして見ゆる疵(きず)のある物の稱。

すききれ(漉切) 圖紙(かみ)を漉(く)く時に仕損(し)じて紙面(かみ)に透(こ)の生じたるものを云ふ。

すききらみ(好嫌) 図すくコトきらみのコト、より好みをなすコトを云ふ。

すきくし(梳櫛) 圖櫛の一種、専(せん)ら髪(かみ)をすきて髪拵(かみかた)を去るに用ゆる具。

すきくし(梳櫛) 圖櫛の一種、専(せん)ら髪(かみ)をすきて髪拵(かみかた)を去るに用ゆる具。長方形(ながはたがた)にして左右に極(きま)めて(つ)細かき齒(は)の附けられある物。

すきくし(杉材) 圖杉の木材。

すきくるま(透車) 圖箱車にて、内の透きさうつて見ゆる仕掛の車。

すきこみ(漉込) 圖紙に文字や模様などをすかすコト又は透(こ)したる紙。

すきこち(好心地) 圖物すきな心根。

すきし、すきな

すきしや(敷寄者) 圖物すきな性質(しやう)の人のコトを云ふ。風流(ふうりゅう)なる。

すきすき(好好) 圖人毎(ひと)に其の好みを異(こと)にせるコトを云ふ。

すきすきし(好好) 圖このまじし、すいてあり。

すきたす(漉出) 圖紙をこしらへる。

すきたて(杉立) 圖模様(もよう)の名、杉の木(か)の立つてる如き形をなせるもの。

すきちゆり(杉重) 圖杉の木材を薄く剝(は)して作りたる重箱(かさね)。

すきて(結手) 圖網(かみ)を編(か)む人。

すきて(梳子) 圖女髪結(おんなかみむす)の弟子(でし)女髪結(おんなかみむす)に従ひて髪をすくを業(わざ)せる人。

すきとる(杉戸) 圖杉の板にて作りし戸。

すきとる(剝取) 圖魚肉や肉類等を薄くへぎとる。

すきとる(梳取) 圖櫛(かみかた)にて髪(かみ)をすくを取り去る。

すきとほる(透地) 圖透(こ)すきて先の方が見ゆる。切事(きりごと)の先(さき)を十分に察(さ)し知る。甚(ことごと)く美(うつく)し。

すきぬ(杉菜) 圖水邊(みづべ)の砂地(すな)に生(は)える草(くさ)の名、トクサの種類(しゆ)にて眞緑色(まろく)の細(こ)かき枝(え)を生じて、其(その)尖(とが)が輪(わ)の如(ごと)くにれられる。故(ゆゑ)に此(こ)の名(な)あり。

而して莖(かき)の高(たか)五(ご)六(ろく)寸(すん)にて、春(はる)の頃(ころ)に芽(こゝろ)を出(で)し、莖(かき)の先(さき)に小(こ)さき花(はな)を咲(さ)かす、其(その)形(かたち)筆(ふで)の穂(ほ)の如(ごと)く、

すきぬべ(剝鍋) 圖鍋(かま)の一種、圓形(まるかたち)にして淺(あ)く、其(その)中央(ちゆう)に四(よ)き孔(あな)を設(た)けし物、剝切(は)りになしたる魚類(いさな)肉類(にく)を煮(ゆ)る具(ぐ)。

すきぬり(杉形) 圖物を積(た)み重(おも)ねるに用(もち)ゆる臺(たい)の名、中央(ちゆう)の部(ぶ)がコ(こ)ンモリと高(たか)くなつてゐて、左(ひだり)の廣(ひろ)が右(みぎ)の形(かたち)をなせる物。

すきにかは(透膠) 図すきさうりたる膠(か)を云ふ。意(い)にて、精製(せいせい)せるにかわ。

すきのか(杉屋) 圖杉の皮(かわ)にて家根(かきね)を葺(つ)きたる家(うち)。

すきのかはり(杉庵) 圖屋根(やぐら)を杉(かき)の皮(かわ)にて葺(つ)きたる小(こ)さき家(うち)。

すきはし(杉箸) 圖杉の木(かき)を細(こ)く圓(まる)くけづりて作りたる箸(はし)のコト。

すきはひ(生業) 圖なりあひ、かきやう、すきはら(空腹) 圖腹(はら)の減(へ)つてゐるコト。

すきはら(杉原) 圖杉の木(かき)の生(は)つてゐる野(の)原(の)。

すきはらがみ(杉原紙) 上等(じょうとう)の日本紙(にっぽんかみ)の一種(しゆ)、判(はん)大きくしてきめ細(こ)かく、光澤(こうさつ)があるもの、奉書紙(ほうしょかみ)に似(に)て其(その)色(いろ)少(すく)しく

すきな、すきは

すきな、すきは

すきな、すきは

黒し、

すきふ(杉生) 圖杉の木(かき)の生(は)つてゐる處(ところ)。

すきふす(好、不好) 圖好(よ)むコトと好(あ)まぬコト。すききらひ。

すきま(透間) 圖あいた、すゐてる部分(ぶぶん)。

すきまるた(杉丸太) 圖杉の木(かき)の枝(え)を拂(は)いて皮(かわ)を去(は)り研(ひ)をかけたもの。

すきみ(透見) 圖すき間(ま)より窺(のぞ)ひ見る間(ま)より、よりのぞきみるコト。

すきみ(剝身) 圖薄(うす)くへぐやうに切りたる魚類(いさな)のコト。魚肉(いさな)の切身(きせ)を醬油(しょうゆ)又は味噌(みそ)で漬(ひ)くもの。

すきめ(透目) 圖物(もの)と物(もの)との間のすいてゐるころ。

すきめ(好目) 圖色情(じやうじやう)に心を寄(よ)せる目つき(めつき)いろめ、なかしめ。

すきもの(好者) 圖すきなものすくもの。ものすきのコト。色情(じやうじやう)にふけるコト。

すきや(透綾) 圖絹織物(きんぬ)の名、生絹(なまぬ)にて薄(うす)く、すき通(すきとお)つてゐるやうに織(か)した物、夏向(なつむか)の衣服(いふく)地(ち)。

すきや(敷寄屋) 圖風流(ふうりゅう)を主(な)として建(た)てし小(こ)さき家(うち)、茶道(ちやだう)にて草庵(そうあん)の科(か)を云ふ。

すきやち(誦經) 圖佛教(ぶつこう)の語(ことば)、經文(きやうもん)を唱(な)へ

すきふ、すきや

ふるコトを云ふ。

すきやき(剝燒) 圖魚類(いさな)肉類(にく)等をすき切(き)りになしたる物(もの)を、つけ焼(つけやき)にする。如(ごと)くにして煮(ゆ)きたるもの。

すきやま(杉山) 圖杉の木(かき)の生(は)つてゐる山(やま)。

すきやりど(杉遣戸) 圖杉の木材(かき)にて作りたるをくり戸(かど)のコトを云ふ。

すきやまりち(杉山流) 圖あんまの流儀(りゅうぎ)の一種(しゆ)の名。

すきわざ(好事) 圖色情(じやうじやう)に深(こ)きコト。

(すすく)

すく(結) 圖動糸(うごきいと)をあやつりあみて網(あみ)を製(つく)る。

すく(鋤) 圖動(うご)にて土(つち)を掘(ほ)り返(か)へす。

すく(梳) 圖動(うご)くしげづる。

すく(透) 圖動(うご)紙(かみ)をこしらへる。

すく(透) 圖動(うご)同(どう)のうが出来る。物(もの)と物(もの)との間(ま)が開(ひ)ける。清々(せいせい)する。心持(こころもち)がよくなる。假令(かじやう)ば気がすく胸(むね)がすくひまになる。假令(かじやう)ば腹(はら)がすく油断(あぶらだん)が出来る。手落(ておち)が生(は)する。すく(過) 圖動(うご)さうり越(こ)して行く。選(せん)して行く。まさつてゐる。すぐれてゐる。假令(かじやう)ば

すきや、すく 結、鋤、梳 一〇二九



すく、すくひ 鉄、直、少、救  
才力衆に過ぐ物事の終る、物事が終を告げる死する。  
すく(鉄) 剛直(き)なごを孔(か)へはめ込みて結ぶ、即ち鼻緒(はな)をすけるなど、すく(直) 剛ただちに、程なく、其のまゝ、まつすく云ふ意を表はす語、  
すく(宿院) 宿院の宅、寺院、すく(直) 剛ただちに今ちきに云ふ意を表はす語、  
すく(直) 剛まつすくなり正しくあり、すく(宿紙) 宿紙かへしの紙、  
すく(宿世) 宿世の前の世のトを云ふ、前の世より傳はつて来た因縁(いんねん)、すく(たのみ) 直頼(ちか) 人(ひと)を經(へ)す直直(ちか)に頼むコト、  
すく(巢口) 巢口(すく)の孔(か)の口、すく(ない) 少(すく) 剛わづかなコト、多くないコト、  
すく(ぬし) 少(すく) 剛わづかなり、多(おほ)からすあり、すく(し) 少(すく) 剛わづかなり、すく(直) 剛ただちに、すく(ま) 剛まつすく云ふ意を表はす語、  
すく(ね) 宿禰(すく) 宿昔(すく) 天皇(てん)が臣下(しん)をいつくしまして呼ばせ給ひし稱、  
すく(ひ) 救(すく) 剛すくふコト、たすけるコト力を添(そ)るコト、

すくひあむ(抄上) 剛動物をすくひて取り上げる、  
すく(ひ)あむ(抄網) 剛竹(たけ)又は針金を輪(わ)にせる物に、囊(ふくろ)の如き状(じやう)を爲せる網(あみ)を附けて、長柄(ながえ)をつつけしもの、泳(およ)ぎ居る魚類(いさな)を捕(と)ふに用ゆる具、  
すく(ひ)きん(救金) 剛救助(きゆう)の爲めに差し出す金子、  
すく(ひ)こや(救小屋) 剛困窮(きんきゆう)せる者を助け住(す)はすべく建(た)たる小屋、  
すく(ひ)だす(抄出) 剛動物をすくひて外へ出す、すく(ひ)やく(抄出) 剛出す、  
すく(ひ)だま(抄玉) 剛すくひ網(あみ)に同じ、又た手綱(てづな)とも云ふ、  
すく(ひ)とる(抄取) 剛動物をすくひて手に取る、  
すく(ひ)ぬし(救主) 剛困窮(きんきゆう)者を救(きゆう)ふ慈悲(じ)善家(ぜんか)を云ふ、たすけられし人、  
すく(ひ)ばち(抄撥) 剛三味線(しみせん)の弾き方の名、三味線の糸(いと)を撥(は)にて下(した)より抄(すく)ふ、すく(ひ)まい(救米) 剛ほごし米、  
すく(ひ)ふ(集) 剛剛集(しゅう)をこしらへる、すく(ひ)ふ(抄) 剛剛すくひさる、しやくひ取り

すくふ、すくふる 濟、疎、選 一〇三〇  
すく(ふ) 救(すく) 剛助(すく)たすく、力を添(そ)る、困難(くわん)にせざる者に物を與(たま)へて助(すけ)ける、災難(さいなん)に悪事(あくじ)なごを避(よ)かれしむ、加勢(かぜ)す、助勢(すけ)す、  
すく(ふ) 濟(すく) 剛剛救(きゆう)に同じ、すく(ふ) 過(すく) 剛剛すくすに同じ、程(ほど)を越(こ)す、度(ほど)をはづす、  
すく(ふる) 疎(すく) 剛剛すくすまる、小さくなる、すく(ふる) 選(すく) 剛剛すくすむコト、  
すく(む) 疎(すく) 剛剛おそれ小さくなる、ちみみて動かぬ、かむ、  
すく(む) 疎(すく) 剛剛すくすまる、  
すく(る) 泥炭(でいたん) 剛剛物(ぶつ)の一種、でいたんのコト、  
すく(る) 槍(すく) 剛剛もみぬか、もちがら、すく(る) 石炭(せきたん) 剛剛せきたんのコト、  
すく(る) 直焼(ちか) 剛剛刀(た)の及(およ)びの焼(や)き方、焼(や)き方、  
すく(る) 直槍(ちか) 剛剛すやりのコトにて、槍(やり)の種(たぐひ)の枝(えだ)のなきもの、  
すく(る) 勝(すく) 剛剛まさつて、ぬきんでて、身(み)體(たい)が丈夫(ぢゆうぶ)である、  
すく(る) 選(すく) 剛剛えらびさる、より取る、よ

きもののみを取る、善惡(ぜんあく)をためしみる、すく(る) 勝(すく) 剛剛まさつて、すく(る) 越(こ)す、こやかである、達者(たつしや)である、  
(すすけ)  
すけ(柱) 剛家(け)や塀(へい)などの傾(かたむ)きか、つてるを支(さ)え置く棒、  
すけ(助) 剛助(すけ)たすける、力をそゆる、たすけるコト、  
すけ(菅) 剛草(くさ)の名、葉(は)其(その)他(た)大體(たい)の狀(じやう)に似(に)似(に)、葉(は)に巾(ちん)の廣(ひろ)き物(もの)と、狹(せま)き物(もの)とあり、其(その)廣(ひろ)き物(もの)は菅(か)笠(かさ)を作る材料(そ)となり、狹(せま)き物(もの)は、囊(ふくろ)を作るに用(もち)ひらる、  
すけ(次官) 剛次(じ)くわんの剛訓、  
すけ(菅笠) 剛菅(か)の巾(ちん)の廣(ひろ)き葉(は)にて編(あ)みたるかぶり笠(かさ)、  
すけ(假名) 剛假名(かりな) 剛漢字(かんじ)の右(みぎ)に其(その)漢字(かんじ)の音訓(おんくん)等を施(お)したる假名(かりな)、  
すけ(助勢) 剛助勢(すけ)を助(すけ)く、加勢(かぜ)する、  
すけ(加勢) 剛加勢(かぜ)をする人、又は其(その)仲間(なかま)、  
すけ(助太刀) 剛助太刀(すけ)をせる一方(いっぺん)の人(ひと)を助(すけ)けるコト、又は其(その)人(ひと)、  
すくれ、すけた、柱、助、菅

すけて(助手) 剛助(すけ)ける人(ひと)力(ちから)になる人(ひと)、手傳(てづか)い人(ひと)、  
すけ(ぬし) 無情(むじやう) 剛剛つれなし、愛想(あいさう)分(ぶん)なし、あわれみなし、  
すけ(兵衛) 剛助兵衛(すけ) 剛剛女色(によしき)を好(この)む痴漢(ちかん)を、ののしつて云ふ語、  
すける(鉄) 剛剛すくに同じ、  
すける(助) 剛助(すけ)たすける、たすける、世話(せわ)する、  
すけん(素見) 剛剛見るのみにて買(か)ひはぬコト、又は其(その)人(ひと)、即ちひやかし、  
(すすく)  
すく(素子) 剛剛身(み)分のいやしき男子(おとこ)、山(やま)をこのコトを云ふ、  
すく(素扱) 剛剛すくくコト、  
すく(素扱) 剛剛すくく、  
すく(敷刻) 剛剛五六時間、  
すく(凄) 剛剛物(もの)すくあり、おそろしくあり、氣味(きみ)悪(わる)し、  
すく(少) 剛剛わづかばかり、すくない、云(い)ふ意(い)を表(あらわ)すに用(もち)ゆる語、  
すく(少) 剛剛まるつきり、ちつとも、いささかも云(い)ふ意(い)を表(あらわ)す語、  
すく(過) 剛剛程(ほど)を越(こ)す度(ほど)をばづす、  
すけて、すくす 鉄、凄、少、過

すくす(悄悄) 剛剛打ちしはれる、はりあひのなき狀(じやう)を云(い)ひ表(あらわ)す語、  
すく(なし) 少(すく) 剛剛わづか、ささいさ云(い)ふ意(い)を表(あらわ)す語、  
すく(ふる) 剛剛このうへなく、をびたたく、はなはだしく、いたくきつく、  
すく(凄) 剛剛物(もの)すくす容子(ようし)、すくすコトの程(ほど)合(あ)ひ、  
すく(る) 剛剛鳥(とり)の巢(すく)るコト、  
すく(る) 剛剛籠(かご)の中(なか)にもつて、冬(ふゆ)期(き)に籠(かご)つて外(そと)へ出(で)ぬ、虫類(むしりゆう)の産婦(うぶ)が産屋(うぶや)に養生(じやうじやう)して、  
すく(る) 剛剛達者(たつしや)なるコト、勢(せい)ひの盛(も)りなるコト、まさりすくされてるコトを云ふ、  
すく(る) 剛剛六(む)の遊戯(ゆうぎ)、すく(る) 盤(ばん)に白(しろ)と黒(くろ)の石(いし)各(おの)お十二(じふに)宛(あ)てを置(お)き、竹(たけ)の筒(つつ)に入れてある賽(さい)を振り出して、現(いま)はれたる其(その)數(かず)だけ、石(いし)を進(すす)めて勝負(しょうぶ)を決(き)する遊戯(ゆうぎ)、同じく一種(いっしゆ)の遊戯(ゆうぎ)、大(おほ)なる紙(かみ)に幾個(いくばく)かの仕切(しきり)を設(た)け、其(その)仕切(しきり)の中(なか)へ種々(しゆしゆ)の繪(え)を描(か)き、振(ふ)りて其(その)出(で)たる數(かず)だけ、すく(る) 剛剛、  
すく(る) 剛剛、  
すく(る) 剛剛、



すさ、すさむ 遊、荒、戯  
順々(22)に振り出より進み行きて、早く上の部に達したる者を勝とする遊び

(すさむ)

すさ(寸落)圖又たつたさも云ふ、麻(マ)又は藁(ワ)などを細かく切りたるもの、壁(カ)を塗るに土の、はなれぬやうに交(マ)えこむもの、  
すさ(從者)圖さもびさ。じゆうしや、  
すさけ(素酒)圖着(マ)なしに只だ酒ばかりを飲入てるコト、  
すさ(洲崎)圖淺瀬(マ)が洲(マ)の如くなりて、海の中に突き出たる部分を云ふ、  
すさび(遊)圖あそぶコト、なぐさむ、  
すさび(荒)圖すさぶコト、  
すさぶ(荒)自動あれる(マ)度(マ)を過(マ)して進み歩く(マ)おぼれるふける(マ)基(マ)たしく變る、おさるえる、  
すさむ(荒)圖動あらず。むちやくちやにする(マ)打ちやつて置く、すてておく、  
すさむ(戯)自動もてあそぶ。好み愛する。賞美する、  
すさむ(遊)圖なぐさめさし樂(マ)しむ、面白(マ)としてあそぶ、

すす、すす 退、煤、鈴  
すする(退)圖退(マ)しりぞく、のく、ひく、さがる、

(すすし)

すすじつ(數日)圖五六日、  
すすしめ(素紗)圖織物の名、紗織の上等の物のコトを云ふ、  
すすしや(船屋)圖すしを賣る家、すをつくる人、  
すすしぼち(酢鉢)圖酢を盛(マ)るに用ゆる平(マ)たき鉢、  
すすじや(素姓)圖系圖(マ)のつづき、  
(すすす)  
すす(煤)圖塵埃(マ)に煙(マ)が附着して凝(マ)まりたるもの、稱(マ)煙が物に附着して、生じたる純黑色の粉末のものを云ふ、  
すす(鈴)圖鳴物(マ)の一種、多く眞鍮(マ)にて造られたるもの、其の形状は一般に、中の空(マ)の毬(マ)の如きものにて、下の方に横に細き溝(マ)の如き隙(マ)あり、其の中に小さき銅(マ)の球(マ)あり、之を振れば其の球の動くに依り

すす、すすか、銅、蓑、籠  
すす(錫)圖鐵物の一種、鉛(マ)に似て其の色白く、鉛よりは輕し、なれども其の質(マ)堅く、且つ光澤(マ)ありて美し、又た火に脆(マ)く溶(マ)け易きに依り、種々の日用品を製作する材料となる、  
すす(蓑)圖竹の一種にて、幹(マ)の細きもの即ちしのさ、  
すす(數珠)圖佛具の名、念佛を唱(マ)ふる時に、爪先(マ)にて繰(マ)るもの、小さき球(マ)を多く糸に通して、輪(マ)をなしたるもの、球も大小種々あり、其の上等の物になれば、水晶にて製せらる、普通は煉玉(マ)又はムクロジの實(マ)を用ゆ、球の數(マ)も上品中品下品に依りて其々の別あり、  
すす(籠)圖籠(マ)と云ふ、  
すすいろ(煤色)圖薄黑色(マ)に稍や黄色(マ)を帯びし色合、  
すすか(鈴鹿)圖鹿の別名、  
すすがき(鈴柿)圖塗柿(マ)の種類にて其の果實(マ)の小さき物、食用さず、又た漆を取る、  
すすかけ(蓑懸)圖修験者(マ)山伏が、其の衣服の上に被(マ)ふ一種の衣物、麻にて織りて、饅頭の如き紋を付しもの、  
トウなのコトを云ふ、  
すすなり(鈴生)圖果實(マ)が神樂(マ)の鈴の如く、樹の枝に群(マ)り生じてるコトを云ふ、  
すすはき(煤掃)圖家屋内に溜(マ)りし煤(マ)を取り拂(マ)ひて清(マ)しくする、  
すすはらひ(煤拂)圖煤を拂ひ落すコト、すすはき、  
すすふる(煤)自動煤(マ)にまぶる(マ)垢(マ)などで汚(マ)れて不潔(マ)くなる、  
すすほこり(煤埃)圖すすまほこり、  
すすまし(進)圖いさましくあり、はきはきしてあり、  
すすみ(進)圖すすむコト(マ)先(マ)へ行くコト(マ)發達するコト(マ)いそぐコト(マ)物事になれて巧みになるコト、  
すすみ(涼)圖すすむコト、  
すすみいづ(進出)自動前へ出る、  
すすみだれ(納涼傘)圖涼(マ)む爲めに、川(マ)邊(マ)又は屋上(マ)などに設(マ)けられたる傘(マ)、  
すすみぶね(納涼船)圖夏季に客を載せて川中を、さ行く船、遊船、  
すすむ(進)自動すすませる、すすむようにする、假令は馬を進むなど、  
すすむ(進)自動前へ前へ出る(マ)上(マ)へすすむ、すすむ 煤、進、涼、一〇三三

すすか、すすし 薄、鮭、溜、涼  
すすか(薄)圖草の名、其の葉は茅(マ)や葦(マ)に似て、高さ三尺以上五尺内外に達す、秋の頃に其の尖に白色を呈せる穗(マ)状(マ)なせる花咲く、  
すすき(鮭)圖魚の名、海と川とに棲む魚にて、其の大きな物は二尺から三尺に達せども、普通は一尺内外なり、體は橢圓形にして稍や扁平(マ)く、背(マ)は薄(マ)き綠色を呈し、腹部は白色を呈す、鱗(マ)極めて細かく、口は比較的に大なり、此の魚冬の中は、海中に匿(マ)るるも、晩春の頃より、川水に上り來たりて捕獲(マ)さる、味(マ)極めて美なり又た湖水にも産す、  
すすぐ(溜)圖動物を水に浸(マ)て振(マ)て美しくす(マ)口をゆすぐ、  
すすぎ(錫細工)圖錫を材料として造りたる種々の器具、  
すすし(涼)圖すすしくあり(マ)心地よくあり、(マ)いさましくあり、  
すすし(生絹)圖練(マ)ざる絹糸(マ)にて織りたる薄き絹織物の稱、  
すすしろ(清白)圖大根の異名、正月の七草(マ)に用ゆる時に云ふ語、

すす、すすな 蓑  
すす(蓑)圖正月の七草に用ゆる菜の名

すすな、すすむ 煤、進、涼、一〇三三







すぢあ、すぢく

すぢあひ(筋合) 固事實(筋)の趣き(筋)の概略の道理(筋)。  
すぢがき(筋書) 固其の事實(筋)の概略(筋)を書きたるもの。特に芝居の狂言の筋を書きし物を云ふ。  
すぢがぬ(筋骨) 固肉(筋)と骨(骨)と。身体(筋)の中に在る軟(筋)らかき骨。  
すぢがね(筋金) 固物の心(筋)になつてゐる細き金屬(筋)物に巻きつけられてある細き金屬。  
すぢかひ(筋違) 固すぢかふコト。すぢかひになつてゐる所。  
すぢかふ(筋違) 固斜(筋)に筋が入り混(筋)つてゐる。斜(筋)に置(筋)れてある。すぢかひはぬ、もさる。  
すぢかつ(筋纏) 固鯉(筋)の一種、其の青き肌皮(筋)に、白き筋の五つ六つ纏(筋)に通(筋)つてゐるもの。  
すぢがぬいり(筋金入) 固凡て筋金の入つてゐる物のコトを云ふ。筋金の入つてゐるコト。  
すぢかまほ(筋蒲鉾) 固蒲鉾(筋)の一種にて下等の物、魚類の皮や筋を、肉と一所に捕(筋)まてて作りたるもの。  
すぢがぬ(筋限) 固役者(筋)が顔(筋)を拵(筋)らえる其の仕方(筋)の一種。

すぢこ、すぢみ

すぢこ(筋子) 固鮭の子を胞(筋)に包まれてあるままで、鹽漬(筋)となしたるもの。稱。  
すぢこくたん(筋黒檀) 固黒檀(筋)の一種、細き筋の纏(筋)に通(筋)つてゐる黒檀。  
すぢたて(筋立) 固毛筋(筋)を立てるコト。筋棒(筋)に同じ。  
すぢぢらぬ(筋籠) 固織物(筋)の名、すぢらぬの如くに、たての糸を浮(筋)して織りたるもの。  
すぢぢがひ(筋違) 固身体(筋)の筋(筋)のちがふコト。物事の道理に反(筋)けるコト。手續(筋)にたがふコト。  
すぢなし(筋無) 固いたし方なし、せん方なし、直打(筋)なし、たしかならず。  
すぢはち(筋鉢) 固筋金の入(筋)つてゐる兜(筋)の鉢(筋)の筋(筋)を云ふ。  
すぢはる(筋張) 固動筋(筋)が澤山(筋)に立ちあはれてゐる。  
すぢぼち(筋棒) 固櫛(筋)の種類にて、髪の毛の筋(筋)を立てる棒(筋)、けすぢ棒の筋(筋)を云ふ。  
すぢみち(筋道) 固物事の道理(筋)物事の順序(筋)、手續(筋)。  
すぢみち(筋籠) 固織物の一種、其の織目(筋)を細(筋)くしたる一種の縮(筋)。

すぢむ、すぢつけ 拆棄 一〇三六

すぢむかひ(筋向) 固はすかひになつてゐる向(筋)の筋(筋)。  
すぢむかふ(筋向) 固すぢむかひに向つてゐる向(筋)の筋(筋)。  
すぢめ(筋目) 固家のつづき、即ちすぢめ(筋目)の筋(筋)。  
すぢぢらぬ(筋籠) 固身体(筋)の筋(筋)のちがふコト。昔時武士が町人(筋)をいやしめて云ひし語。  
すぢぢる(筋振) 固身体(筋)を曲る、もさる、くねる。  
(すぢく)

ト、酔に漬(筋)たる食品の筋(筋)。  
すつと(一層) 固ひさしほ、一段(筋)更に進(筋)んで、尙ほ盛(筋)んにと云ふ意を表(筋)す語。  
すつと(直) 固ぐすぐすせず(筋)其のまま(筋)まつぐと云ふ意を表す語。  
すつと(酸) 固酸(筋)多し、酸氣(筋)多し。  
すつばい(酸) 固酸(筋)多し、酸氣(筋)多し。  
すつばり(悉皆) 固すつかりの詠り、すつばぬ(素破) 固突然その人の秘密にせる事を云ひ露(筋)すコト。不意に飛び放(筋)れたる言動(筋)をなして、人を驚(筋)ろかすコト。ぬきはなつコト。  
すつぼん(籠) 固籠(筋)の種類、其の形は全く籠(筋)に同じけれども、脊(筋)の甲は圓くして、中央の部(筋)稍(筋)や突出(筋)して硬(筋)く、周圍(筋)は比較的(筋)に軟(筋)かく、腹部にある甲(筋)は小さくして軟(筋)、色は一様に暗黒色にして灰色を帯(筋)ぶ、頭は籠(筋)の其と同じけれども、口の端(筋)が尖(筋)つてあり、我國の到る處の川、湖水等に棲(筋)みて、蝦蟹(筋)小魚等を捕(筋)へて食す、其の肉は甚だしく滋養(筋)分に富(筋)むるに依り、其の味も亦すつと、すつとは、直酸、籠

た極(筋)めて美なり。  
(すすて)

すて(素手) 固手に何も持つてゐぬコト、即ちからて、てぶらの筋(筋)。  
すてちり(捨賣) 固捨賣(筋)るやうな直段にて、商品(筋)を賣るコトを云ふ。  
すてがね(捨假名) 固漢文を讀(筋)み易(筋)からしめむ爲めに、附け加(筋)えたる送(筋)り假名(筋)の稱。  
すてがね(捨鐘) 固時を知らず爲めに打つ鐘の前に、二つ三つか三つ三つか其の數(筋)を定(筋)めて無駄(筋)に撞(筋)つ鐘の筋(筋)を云ふ、其の目的(筋)は此より時を撞(筋)つぞと云ふ注意(筋)を惹(筋)き起(筋)す爲(筋)である。  
すてき(素敵) 固非常にすぐれたる筋(筋)甚だ多くある筋(筋)。  
すてき(素敵) 固たぐきに、非常に、甚だ多(筋)く云ふ意を表す語。  
すてご(棄子) 固育(筋)てられぬ爲めに、往來(筋)などへ棄(筋)し子。  
すてご(捨詞) 固掛(筋)り掛(筋)に云ひ遣(筋)して行く、いやみなる言葉。  
すてごばぬ(捨子花) 固しびと花の筋(筋)。  
(すすて)

すてごぶぬ(捨小舟) 固乗る人のなくして岸邊(筋)に浮(筋)んでる舟(筋)寄る邊なき人の筋(筋)の筋(筋)を云ふ。  
すてごるも(捨衣) 固破(筋)れて役に立ぬやうになつたる衣物。  
すてせりふ(捨塞詞) 固すてごばに同じ其の條を見よ。  
すてたいご(捨太鼓) 固太鼓を打ちて時を知らず場合に、聞く人の注意(筋)を惹(筋)く爲めに、初めに二つ三つか三つ三つか、餘計に打つ太鼓(筋)の筋(筋)を云ふ。  
すててご(素手挺踊) 固踊(筋)の一種、をどけたる馬鹿踊。  
すててご(既) 固さきに。まえがた(筋)もはや(筋)やつと(筋)残らず、悉く。  
すててご(已) 固既に同じ。  
すててご(捨直) 固すて賣(筋)になす代價、すててご(捨鉢) 固むちやくちや、やけ、やからの筋(筋)。  
すててご(捨機) 固三味線(筋)の調子(筋)を合(筋)す爲めに彈(筋)くコト。  
すててご(捨人) 固世の中の事に關係せず隠遁(筋)せし人。  
すててご(捨札) 固其の罪人(筋)の犯罪(筋)の次第(筋)を書き記(筋)して、刑場(筋)に立て置きたる札(筋)の筋(筋)昔時に行な



すてふ、すこり 薬

はれたるもの、

すてふち(捨扶持) 國徳川時代にゆかりある家柄(おぢ)の老人や子供(こ)や婦女などに、養ひ扶持(たすけ)として、只だ與(たす)え置きたる祿(ろく)のこトを云ふ。●役(やく)に立の者に、なまけにて與え置く扶持、

すてふね(捨舟) 國岸(がし)に空しく繫(つ)がれてあつて乗り手のなき舟、

すてみ(捨身) 國自己の生命を捨て、物事をなすこト。やけのこト、

すてむち(捨鞭) 國馬(うま)を駆(か)らすべく爲めに、乗り手が鞭(むち)で尻(しり)を叩くこトを云ふ、

すてもの(捨物) 國打ちやつたるもの。●用

すてる(塞) 國動すつに同じ其の條を見よ

すど(數度) 國たびたび。しばしば。いくたびも云ふ意を表はす語、

すど(寶戸) 國よしすを用ひて作りたる障子の類を云ふ。●家の表戸(うら)のこトを云ふ、京阪地方の方言、

すどり(州鳥) 國水中の洲に下りて休息(やすみ)して鳥(とり)みさこの別名、

すなほ(砂埃) 國砂煙に同じ、

すなみち(砂路) 國砂地の道路、

すなめり(洲滑) 國海に棲(すま)む一種の獸、

す其の形は入鹿(しか)に似て、体肥えて長く、頭は小さく、口は鳥の嘴(くちばし)の如く鉤(かぎ)の形に尖(と)りて曲(ま)り、林色は一面に黒色を呈す、

すねん(數人) 國多くの人。●多くの人人、

すね(腫) 國身軀の名所、脚(あし)の膝(ひざ)より腫(は)るに至るまでの間を云ふ、

すねる(拗) 國他人の言に従はぬ。●心がひがむ。●ねぢれる、

すねん(數年) 國五六年、

すねあて(鷹當) 國鏡(かがみ)の附屬物の名、

鷹(たか)を保護(ご)する爲めに鷹へ當てる堅(かた)き甲(かぶ)の如き物。●鷹の具、鷹へ當る物、

すねおし(鷹押) 國一種の遊戯、互ひに鷹と鷹とを、くつつけて押(お)し合つて、

すなほ、すねお 鷹、拗

すこり、すなほ 社

すどろし(素通) 國眼鏡(めがね)の一種、度(ど)のなき眼鏡のこトを云ふ、

すどろふ(酢豆腐) 國豆腐料理の名、豆腐に酢(す)を煮(ゆ)だしたをかけし物、

すどほり(素通) 國其の家の前(まへ)を通りながら、立ち寄(と)ぬこト、

すどほる(素通) 國通りながら、立ち寄(と)すして過ぎ行く、

すな(砂) 國非常に細(こ)かき石の稱、

すながね(砂蟹) 國海濱(うみづか)や谷川(やがわ)などの砂の中に棲(すま)つてる蟹、

すなぶね(砂金) 國砂の内に混(ま)りてある金の粉(こな)のこトを云ふ、

すなけむり(砂煙) 國風の爲めに砂(すな)が煙(けむり)の如くに立ち上るこト、

すなご(砂子) 國極めて細(こ)かき石、すな。●金又は銀の箔(はく)を粉(こな)して練(ね)り、や蒔繪(まきゑ)細工(さいこう)などに飾(かざ)して吹(ふ)き掛(か)るものな云ふ、假令(かじやう)ば金砂子のまきえなど、

すなごし(砂漉) 國桶(か)の中に砂を入れ、其の中を水(みづ)をくぐらせて、水中に在(あ)る塵(ちり)を取り去るこトを云ふ、

すねくる(拗) 國よくすねる人を云ふ、

すねかじり(鷹嘴) 國親の鷹(たか)の子(こ)が、ちるさ云ふこトにて、萬事(ばんじ)萬端(ばんたん)の親(おや)の世話(せわ)になつてるこト、

すねんらい(數年來) 國五六年このかたさ云ふ意を表はす語、

すねことば(拗言) 國すねて物を云ふこト

すのこ(簀子) 國竹又は葦(あし)などを編みて作りたる蓆(むしろ)の如き物、

すのもの(酢物) 國酢漬(すく)にしたる魚類や、野菜類のこトを云ふ、

すはら(蘇枋) 國熱帯地方に産する藤(ふじ)に似寄(にせよ)たる木、花は黄色を呈す其の木材(もくざい)は弾力(だんりき)に富(と)るを以て、小さき弦(ひょう)の張(は)りの弱(よわ)き弓(ゆみ)を製(つく)りに多く用ひらる、又其の木材を薄く切りて煮(ゆ)き詰(め)れば、紫色の汁(じゅう)を得(え)て、染料(ぞうり)に供(た)せらる。●染料の名

すはし(洲走) 國魚の名、いなの大なる物を云ふ、

すはしつこし(機敏) 國さくあり。●物事を爲すにぬかりなし、

すはせ(素肌) 國まつばだか、あかばだかのこトを云ふ、

すはせか(素襦) 國まるはだかのこト、すつばだかのこト、

すばねし(素話) 國菓子(こ)や茶(ち)など、を食(た)はす、喫(く)して、唯(ただ)話(わ)しのすばら、すばな

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八

すなす、すなほ 漁、乃、即 一〇三八



すはな、すはま

みになすコト 鳴物(ナガ)を用ひすに、人情話(ナガ)や、落話(ナガ)をなすコトより離(ナガ)れる、一人だけ別(ナガ)になつてゐる。

すはま(洲濱) 國海の淺瀬が岸邊(ナガ)へ、入りこみし處のコトを云ふ。淺瀬が岸へ入り込みたるが如き狀(ナガ)を、臺(ナガ)の上に搭(ナガ)ちて其れに、松や梅などを植(ナガ)し物、祝ひ事の時に飾として用ひ島臺の一種。凡て凹凸(ナガ)又は出入(ナガ)の多き形(ナガ)を云ふ。一種の菓子、しんこ豆の粉を餡(ナガ)にて煉(ナガ)り固めて、楕圓形(ナガ)を爲して輪切(ナガ)にせし物。

すはらび(諏訪平) 國袴地(ナガ)の一種、麻(ナガ)にて織(ナガ)りたるもの、信州の諏訪地方より出産する物。  
すはへ(楚) 國木の枝振(ナガ)のコト、即ち細長く延(ナガ)び出たる枝。  
すはまる(統) 自動一つになる、まさまる、あつまる。  
すはまがた(洲濱形) 國周圍(ナガ)の出たりしてゐる形の物を云ふ、又た周圍の出入せる模様を稱。

すはま、すひあ

すはま(洲濱) 國周圍の洲濱形になつてゐる盛り物の臺を云ふ。  
すはや(驚破) 國すはに同じ、其の條を見よ。

すばやし(素早) 國物事(ナガ)を爲すに、はしこくあり。萬事のふるまひが早(ナガ)し。すばしつこし。  
すはやり(楚割) 國魚肉を細く製(ナガ)して薄鹽(ナガ)をし干(ナガ)したる一種の食品を云ふ。  
すばらし(素晴) 國殊の外に立派(ナガ)なり。甚だばてやかなり。  
すばる(昴星) 國星の名、七個の星が一列(ナガ)となつてゐるを云ふ、即ち七曜星(ナガ)のコト。  
すばるほし(昴星) 國北斗(ナガ)の七星のコトを云ふ。

(すすひ)

すひあ(吸上) 國凡て口又はポンプ仕掛(ナガ)の器械(ナガ)で吸ひ取る。  
すひあげ(吸上) 國吸ひ上げるコト。水などを高くへ吸ひ上げる器具。  
すひあげる(吸上) 國動すひあぐに同じ、すひあ(吸上) 國凡て口又はポンプ仕掛(ナガ)の器械(ナガ)で吸ひ取る。  
すひあげ(吸上) 國吸ひ上げるコト。水などを高くへ吸ひ上げる器具。

すひあ、すひつ

すひあ(吸上) 國凡て口又はポンプ仕掛(ナガ)の器械(ナガ)で吸ひ取る。  
すひあげ(吸上) 國吸ひ上げるコト。水などを高くへ吸ひ上げる器具。

すひあ(吸上) 國凡て口又はポンプ仕掛(ナガ)の器械(ナガ)で吸ひ取る。  
すひあげ(吸上) 國吸ひ上げるコト。水などを高くへ吸ひ上げる器具。

すひあ(吸上) 國凡て口又はポンプ仕掛(ナガ)の器械(ナガ)で吸ひ取る。  
すひあげ(吸上) 國吸ひ上げるコト。水などを高くへ吸ひ上げる器具。

すひつ、すひも

すひつ(吸付) 國動物と物とがびつたりと、くっついて離(ナガ)れぬ。  
すひつ(吸付) 國動物と物とがびつたりと、くっついて離(ナガ)れぬ。

すひづつ(吸筒) 國竹にて造(ナガ)りたる筒、酒(ナガ)を入れるに用ゆる具。  
すひつけたばこ(吸付烟草) 國煙草を煙管に充(ナガ)て、火をつけて人に動(ナガ)めるコトを云ふ。

すひとる(吸取) 國口にて吸ふて取る。吸はせて取らす。染(ナガ)み込せて取る。或る手段(ナガ)を用ひて金錢(ナガ)などを取り込む、假令(ナガ)彼(ナガ)の女に吸ひ取れた。集(ナガ)め寄(ナガ)せて取る。  
すひとりがみ(吸取紙) 國インキなどにて書たる文字の乾かぬ中に、其の上にて(ナガ)て壓(ナガ)せて浮てるインキを吸ひ込せる紙、其質粗雜(ナガ)にして淡紅色を呈す。  
すひふくべ(吸瓢) 國醫療器械の一種、硝子で製されたる茄子形(ナガ)の、又は鏡餅(ナガ)形のもの、火にて内の空氣を薄くさせて、人の皮膚(ナガ)に吸いつかせて、血などを吸ひ取らせるもの。  
すひもの(吸物) 國清汁(ナガ)に、魚肉や野菜をあしらひし物。

すひものせん

すひものせん(吸物膳) 國吸物膳を載せて出す膳(ナガ)。  
すひものあん(吸物椀) 國吸物を盛るに用ゆる小形の椀(ナガ)。

(すすふ)

すすふ(吸) 國空氣を口より氣管(ナガ)へ引き入れる。空氣と共に流動物(ナガ)を口へ引き入れる、假令(ナガ)汁を吸ふ。引き入れる。しみこませる、假令(ナガ)土が水を吸ふ、引きて我れの方へよせる、假令(ナガ)客を吸ひ込むなど。

すすふ(統) 國動すへくくる、多くの物を一つにして取締(ナガ)る。なまむ、支配する、かんさくする。  
すすふ(費蓋) 國曲物(ナガ)の縁(ナガ)に篋を張りて、蓋(ナガ)せし物、夏季用の飯櫃(ナガ)などの蓋に用ゆる。

(すすへ)

すすへ(術) 國行(ナガ)ふべき方法。爲すべき手段。總て仕方(ナガ)仕様(ナガ)のコトを云ふ。  
すすへ(須) 國必ずすすべきこと。

すひも、すへが、吸、統、術、須

すひも、すへが、吸、統、術、須

すへさ、すへら

すへさ(皇) 國多くの物事を、一つにして云ひなすことなへ名。  
すへら(皇) 國多くの物事を、一つにして云ひなすことなへ名。  
すへら(皇) 國多くの物事を、一つにして云ひなすことなへ名。

すへさ(皇) 國多くの物事を、一つにして云ひなすことなへ名。  
すへら(皇) 國多くの物事を、一つにして云ひなすことなへ名。  
すへら(皇) 國多くの物事を、一つにして云ひなすことなへ名。

すへさ(皇) 國多くの物事を、一つにして云ひなすことなへ名。  
すへら(皇) 國多くの物事を、一つにして云ひなすことなへ名。  
すへら(皇) 國多くの物事を、一つにして云ひなすことなへ名。

すへさ、すへら 總、皇、滑、一〇四一

すへさ、すへら 總、皇、滑、一〇四一



すへら、すほし 統、穿

すへらき(皇)固天皇、天子の御事。

すべらす(滑)固動すべらかす、すべらせ

る、すへるやうにする。

すべらかす(滑)固動すべらかす、すべらせ

すべらきのはな(皇花)固牡丹の一名。

すべる(統)固動すべらかす、すべらせ

すべらき(滑)固動足の踏(つ)方を誤(まち)つ

て、なめらかに進み行く(ま)ことこりな

く過ぎ行く(思)はす知らず口走(は)る

座したるま、膝(ひざ)を擡(た)げて動(う)

すべり(滑)固すべらこト、

すべりいづ(滑出)固動(ひ)をすべらか

せて前の方へ出る(こ)つそりさ出掛る

忍(しの)びてまかり出る(も)れて出る、

すべりいづ(滑入)固動すべりいづの反對

(ひ)

(すずほ)

すほし(素乾)固かけほしにして置くコト

すほし(穿)固すほんであり、小さく細く

あり、元氣なくあり、しほれてあり、

すまふ(争)固動いさかふ。あらさふ(し)

たいす。こぼる(相)撲をさる、

すまん(數萬)固五六萬、

(すすみ)

すみ(炭)固木材が燃(も)て黒色に變じた

るもの、稱(な)一種の燃料にて、薪(たき)

を煮焼(ゆ)せしめ、黒色をなしたるもの、

其の用途(もち)けれども、一般に之を火

さなして、熱(あつ)を取るに用ひらる、

すみ(墨)固書畫を書き、又は黒色を呈さ

すべき時に、水に攪(か)り混(ま)せて、黒色

の汁(じゅう)をなましむるものにて、之を製

するに上等の油煙(あぶら)を、膠(にか)に

すほま、すまう 隅

すほま(穿)固動すほませる、すほまやう

にする。

すほむ(穿)固動すほむせまく細くなる 假令ば

傘(かさ)がすほむ(衰)しえ、元氣うせ

る(し)ほむ、すほむ花(はな)が、

すほん(數本)固多くの書物、

すほん(素本)固かへり點(ち)や訓點(しん)

の施(せ)こされてない漢籍(かんせき)本文以外

に何等の事も記されてない書物、

(すすま)

すま(隅)固すまのこト、かご、

すま(相)撲固すまうに同じ、

すま(住居)固すんでるこト(すんでる

家、

すま(相)撲固二人互ひに取り組みて倒

(た)し合をなすこトを云ふ、

すま(とり)固相撲取(こ)固相撲をさるを業(わざ)

せる人、力士(りきし)、

すま(とり)固相撲甚句(しんご)固俗語(じやくご)の一種、

相撲取(こ)の唄(うた)一種の甚句(しんご)、

すま(とり)固相撲取(こ)固草(くさ)の名、す

ま(草)の一名、

すま(隅)固手文庫(てもんこ)の一種、四

邊(へ)に朱塗(しゆぬ)にて雲形(うんがた)を表(あらわ)した

る小箱(こばこ)、

すま(隅)固隅角(ぐまかく)固隅角(ぐまかく)の略、其の

隙(ひま)を見よ、

すま(隅)固墨(すみ)固書きたり又は塗(ぬ)むつ

たりしたる墨(すみ)の色(いろ)を見て、其の人の吉

凶(きう)を判断(はんぱん)するこトを云ふ、

すま(隅)固隅角(ぐまかく)固方形(かたがた)なる物の、

四角(ししかく)をくはませたるもの、

すま(隅)固隅角(ぐまかく)固方形(かたがた)なる物の、

すまき、すまふ 清、澄、住 一〇四二

すまき(簀巻)固茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ(茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて

包みたるを云ふ)茶(ち)にて物を巻きて



すみす、すみつ

(掃)にて、墨を研る役をしてる人を云ふ  
**すみすり**がめ(墨研瓶)墨硯に用ゆる墨つぼのコト。  
**すみそ**(酢味噌)墨味噌を搗(た)んで酢と砂糖を混(ま)したる物。  
**すみぞめ**(墨染)墨黒色(くろ)に染めたる衣服、僧侶の用ゆる物。濃鼠色(ねむし)に染めたる喪服(まふら)。  
**すみぞめ**ころも(墨染衣)墨鼠色に染めたる法衣(ぼん)。  
**すみたわら**(炭俵)墨炭を入れて持ち運ぶる俵(た)のこト。  
**すみちがへ**(隅違)墨はすになつてゐるこトすちがひになつてゐるこト。  
**すみづか**(墨柄)墨一種の文具、短(ひ)かくなりたる墨を挾(くわ)みて、研(と)る具、竹を細長(なが)く切りし物を二枚合せて、墨をばさむ様(よう)に爲(な)せし物。  
**すみつき**(住着)墨すみつくこト。  
**すみつき**(墨付)墨の物に付(つ)たる其の色合(いろあ)ひ。書きたる文字の容子(ようし)足利(あし)時代又は徳川(とくせん)時代に、幕府(幕府)より命令書(れいしよ)の印(いん)として捺(な)したる墨色の印形(いんがた)。  
**すみつき**(住着)自動住むべき所が定まる。  
**すみ家(すみ)**を定める。

すみつ、すみた

**すみつけ**(墨付)墨一種の遊戯、互ひに墨のつけ合を爲すこト。  
**すみつぼ**(炭壺)墨火消(くわ)の壺(う)のこト、用ゆる具、木にて作(つく)られ、中央(ちゆう)に眞綿(まゐ)を墨汁(すみぢ)を十分に含(ひ)りて、眞綿(まゐ)を墨汁(すみぢ)を十分に含(ひ)ませたる物を入れたるもの。眞綿(まゐ)やパンやなどに墨汁を含ませて入れて置く、圓形又は小判形(こばんがた)の蓋(ふた)の附(つ)てゐる、小さき入れ物、重(おも)に眞綿(まゐ)にて製す、筆に墨をつけるに用ゆる具。  
**すみづきん**(角頭巾)墨頭巾(すみづきん)の後の方に、しころの如き形の、黒き布(くろ)の附(つ)けられある物。  
**すみとり**(炭取)墨炭を入れて置く箱(こ)のこト、其の形及び種類頗る多し。  
**すみどころ**(住所)墨凡て住居する場所のこトを云ふ。  
**すみぬは**(墨繩)墨壺の墨をつけて、木材に練(ね)を引くに用ゆる具、麻糸(あし)を用ゆ、其の糸の端(は)に針(はり)のつけられあるもの。  
**すみなる**(住馴)自動一處に永(とこ)く住む。住みて其處(そこ)に心安くなる。  
**すみぬがし**(墨流)墨水の上にすりたる墨

すみに、すみれ 董

を流して、雲の如く亂れたる上へ、紙を當(あ)けて其の模様を染め寫したるもの。  
**すみはごり**(清濁)墨すんでるこトと、にごつてゐるこト。  
**すみのぼる**(澄昇)自動暗れ渡りたる空に(ぼ)たる月(つき)のぼる。  
**すみばさみ**(墨挾)墨短かく爲りたる墨をするに用ゆる竹にて製したるばさみの如きもの。  
**すみひ**(炭火)墨炭をいこして、火(ひ)をさせし物、炭火(すみび)に對しての稱。  
**すみや**(炭屋)墨炭を賣つてゐる家。  
**すみや**(炭連)墨はやきこト早(はや)く、  
**すみや**(炭焼)墨木を焼き炭(すみ)を爲すこト又は其を業(わざ)せる人。  
**すみや**(角檜)墨城などの曲り角(かど)に設けられてゐる檜。  
**すみや**かまど(炭焼壺)墨木材をむし燒にして、炭(すみ)なすかまど。  
**すみや**きころも(炭焼衣)墨炭を焼く人の着る衣物(きもの)にして甚だしく汚(く)れし衣物のこトを云ふ。  
**すみぬちや**(素海松茶)墨染色の名、すみれ色に赤(あか)みを帯(お)たる色合(いろあ)ひの稱。  
**すみれ**(董)墨野に生する小さき優美なる

草花(くさな)の名、葉の長さ三四寸にて、其の葉は長き卵形(たまごがた)を呈す、春の頃に葉の尖(と)に紫色又は白色を呈してやさし、又たの名をすまうさり草(くさ)と云ふ。  
**すみれ**色の略(りやく)戀(こ)と云ふ意義を表はすに用ゆる語。  
**すみれいろ**(草色)墨染色の名、うすき紫色のこト。  
**(すすむ)**

**すみ(済)**自動しどげる、をわる、はたす、すます。  
**すみ(住)**自動すまふ、即ち其の居所を定む(よ)く自動鳥獸魚類などの居所を定め、即ち巢(ね)をこしらへる。  
**すみ(澄)**自動うつくしくなる、清(き)くなる。明らかになる、くもりなき。聲(こゑ)や音(ね)のさえてうつくしき。をさまる、なほる。  
**(すすめ)**  
**すみ(皇)**固すべ。すべらの訛(かたが)り。  
**すみがみ**(皇神)固神の敬稱。  
**すみみま**(皇孫)固天照皇大神の御子孫とす。  
**すみれ**、すみめ、済、住、棲、澄、皇

云ふ意にて、天皇の御事。  
**すめら**(皇)接頭、皇祖(みまろ)天神(かみ)又は天皇の御事に關する物事に冠(かぶ)せる。假令(たと)ば皇御國(みくに)皇大君(みまろ)すめら登(あ)り(天皇)固天子の御事を申す、すめらみい(皇御軍)固天子の軍人、朝廷(ていてい)の軍人、すめらみこと(天皇)固至尊(みまろ)の御事を申し奉(たが)ひる語。  
**すめん**(素面)固酒に酔(よ)てめ顔(かほ)、しらふ化粧(けいざう)なごせめ其のままの顔(かほ)撃劍(げきけん)の語面(かほ)を被(か)らすに仕合(あ)はなすこトを云ふ。  
**(すすも)**

**すもじ**(酢文字)固錯(さく)の大和語(わがことば)である(李)固木の名、高さ二丈内外に達する木、葉は長き楕圓形又は卵形にして、周圍(まわり)に不規則なる齒(は)あり、春の頃に白色五瓣の花を咲す、其の實は桃に似て小さく食用に供すれど、味(あじ)酸(す)いし。  
**すもり**(暇)固巢に残つてて野化(や)ぬ鳥の卵(たまご)のこトを云ふ。  
**すもどり**(素戾)固思ふ事成就(じやうじゆ)せずす。  
**すめら**、すみめ、李

して空(そら)しく歸るこト。  
**(すすや)**  
**すや**、素焼(すや)固焼きたるままにてくすりを引かぬ陶器(たうき)の稱。  
**すやり**(素槍)固其及(そのおよ)ぶのまつすぐにして、枝のなき槍(やり)の稱。  
**(すすゆ)**

**すゆ**(澀)自動凡て飲食物にかび生し腐(く)れて酸(す)くなる。  
**(すすら)**  
**すらららん**(素浪人)固浪人をいやしみて云ふ語。  
**すららもの**(怠慢者)固なまけ者、物事をなほざりにする人。  
**すらわらひ**(冷笑)固あざけり笑ふこト。せらわらひのこト。  
**(すすり)**  
**すり**(掬摸)固人込みの中にて、ひそかに  
**すやき**、すり 隨 一〇四五



すりあ、すりた

人の懐中物や携帯品などをぬすみ取る者、ちば、きんちやくきり、すりあび(摺上)摺動印刷(おむし終)る、すりあび(摺上)摺すりあがるコト、すりいも(摺芋)摺一種の料理、山の芋をすりつぶして、煮汁(ゆず)をかけたるもの、

すりちす(磨白)摺一種の白(お)、粉(こな)をこすりて皮を破(やぶ)り去るに用ゆる具、土(つち)を固め又は木にて白(お)の如く造(つく)られたるもの、

すりえ(摺餌)摺(お)目白(め)などの小鳥を飼ふに用ゆる餌(え)にて鱧(うなぎ)や鮠(あじ)などの摺身に、菜(さい)を混ぜて、つぶしたる餌(え)、

すりかぬ(磨鉦)摺すりまぜて鳴(な)す鉦、すりかぬ(磨管)摺動知れぬやうに取りかえる、

すりかへ(磨管)摺すりかへるコト、すりかへる(磨管)摺動甲の物と乙の物を人の知らぬやうに取りかふ、

すりきづ(摺傷)摺すりむきて受けしきづすりくづ(磨屑)摺物をすりつぶして、生じたるくづ、

すりくたく(磨碎)摺動硬(か)き物を白(お)にてすり、細かく碎(くだ)き又は粉(こな)す、

すりめ(摺目)摺印刷(お)なしたる其の容子(よう)のコトを云ふ、

すりむき(摺剥)摺すりむくコト、すりむく(摺剥)摺動こすれて皮が損(こ)す、こすれて皮に傷(きず)を受ける、

すりもの(摺物)摺又た刷物とも書く、印刷(お)したる物、摺印刷(お)なさんとする物を云ふ、

すりよる(摩寄)摺動そばへにぢりよる物と物とをこすり合す、

(すする)

すする(磨)摺動段々こすれて其形が、へり損する、

すする(磨)摺動物と物をこすり合せて、光澤(あざ)を出す、即ちみがく、使(つか)ふてなくす、用ひて少(すく)なくする、せじを云ふ、へつらふ、

すする(摺)摺動物を硬(か)き物と硬(か)き物との間(ま)に挟(はさ)みて、こすりて細かくくだく、假令(たと)ば味増(あじぞ)をする、

すする(摺)摺動よくさわる、こすれるやうにふれる、

すする(摺)摺動物と物を強くすり合す、

すりめ、すする、磨、摺、擦

すみこ、すりた

すりこぎ(播粉木)摺堅(か)き木にて造られたる細き棒(ぼう)、摺鉢にて食品をすりつぶすに用ゆる具、あこへもざる、段々(だだ)劣(よ)けつて行く人を罵(のの)しつて云ふ語、

すりこむ(磨込)摺動こすりつけて中へ入(い)りゆくやうにする、

すりころも(摺衣)摺古代の一種の服、染(ぞ)草(くさ)の汁を用ひて、摺り模様を表(あらわ)したるもの、即ちこすりこるも、

すりさんしやち(擦山椒)摺山椒の實を細かくくだきたる物、

すりしやちが(擦生薑)摺生薑(しょう)の根をわさび卸(お)ですりをろした物、

すりだし(摺出)摺又た刷出とも書く、印刷(お)するコト、印刷して世に出すコト、

すりだし(磨出)摺すりだすコト、マツチの一名、

すりだす(磨出)摺動硬(か)き物をこすり研(けん)きて美しく光澤(あざ)を出す、

すりだす(摺出)摺動印刷して世に出す、印刷(お)しはじめる、

すりたて(刺立)摺刺刀(さ)にて毛をそりたるばかりの時のコト、

すりだしまさき(磨出蒔繪)摺こすりて光

こする、

こする(様)摺動滑(か)なる上をすべつて行くやうに歩(あ)み行く、即ち膝(ひざ)や尻(し)をすりて歩み行く、

こする(摺)摺動摺り人の物を奪(さら)ひ取る、こする(意慢)摺横着(よこぢ)なるコト、わろがしこきコト、なまけるコト、

こするがはんし(駿河牛紙)摺和紙の一種、牛紙に似て其の色赤黒(あかぐろ)く、質(しつ)は雁皮(かり)に似たれども脆(もろ)くして裂(さ)れ、け易し、駿河國より産すに依り、此の名あり、

こするける(意漫)摺動なまける、ぶしやうする、行くべき所へ行かぬ、逃(に)げる、すらかる、

こするどし(鋭)摺すぐれてる、すばしつ、こし、先(さき)が尖(と)つてあり、勢(いき)が強(こ)し、よく切り得らる、切味(きりあじ)がよろし、

こするめいか(鵝鳥取)摺鳥賊の一種、全體細長くして、三角形を呈せるものにて、長さ一尺内外に達(いた)するもの、

こすれ、こすれる、摺、摺、摺、摺

すりつ、すりみ

すりつ(磨)を十分に表はしたる、まきえ細工すりつけぎ(摺附木)摺すり合せて火を出して、木に黏(ね)るもの、即ちマツチのコトを云ふ、

すりつぶす(播漬)摺動物を摺鉢に入れれん木で、こすりてくだく、摺て物をこすりて細かく爲す、

すりとる(摺取)摺動往來(わ)の人の物を盗(ぬ)す、

すりぬか(磨擦)摺もみのかのこト、すりぬける(磨脱)摺動こまかして逃(に)げる、人込(ひと)の中へまぎれ入りて逃(に)げる、

すりばち(播鉢)摺食品をすりつぶして粉(こな)とし、又は軟(な)らかく爲すに用ゆる細(こ)かき目のつけある陶器(た)の鉢、

すりばん(摺半)摺すりばんしょう(摺半鐘)の略、

すりび(播火)摺石と金をすりて出したる火のこトを云ふ、

すりびしほ(播磨)摺すりつぶして製したるひしほのこトを云ふ、

すりほん(摺本)摺印刷(お)なしたる書物すりみ(摺身)摺魚肉を摺鉢にてすりたる物、

すりみ(磨研)摺動こすりて光澤(あざ)を出す、

すりあふ(摺合)摺動物と物とがこすれあつてる、互(たが)ひに仲(な)が悪くなる、あらそふ、

すりあらし(摩枯)摺種々(た)の人に交際(か)し、種々の出来事に逢遇(あ)して、性根(しやうこん)が悪くなつたコト、又た其の人、すりあらし(摺擦)摺始(はじめ)物(もの)と物とが合(あ)ひかかつてる状(じやう)を云ふ、語(ことば)同じ(おな)じほどの高(たか)さでありと云ふ意を表はす語、物と物とがこすれ合つてる状を云ふ、互(たが)ひに仲(な)の悪くなつてる状を云ふ、

すりあがひ(摩達)摺すりあがふコト、すりあがふ(摩達)摺動互(たが)ひにすれ合ふて過ぎ行く、すれすれになつて行く、

すりつからし(摩枯)摺すりつからしに同じ其の條を見られよ、

すりめ(摺目)摺すり合ふて摺(お)したるこころのこトを云ふ、

すれる(摺)摺動こすれる、すれ合ふて摺(お)じる、互(たが)ひの中(なか)が悪(わる)くなる、浮世(うきよ)の事(こと)からに馴(な)れて人が悪くなる、

(すすむ)

すすむ(坐)摺すりわつてるコト、すわるコト

すれあ、すわり、坐、一〇四七

すりめ、すする、磨、摺、擦

すりめ、すする、磨、摺、擦

すりめ、すする、磨、摺、擦

一〇四七



















せいき、せい

せいきん(星華派) 星の形又は華(は)の  
花形を其の記号(きごう)として、専ら愛  
情戀思の事實(じじつ)を詩歌の材料として  
採する、新派詩家の稱、  
せいせうしよ(請求書) 図金銭又は物品等  
を請求する爲めの文書、  
せいせうしよ(精勤證書) 図精勤を  
賞し、其の功勞を證明したる名譽の證  
書のコトを云ふ、  
せいせう(成句) 図前(まへ)の人の作りおかれ  
たる成語。文句のコトを云ふ、  
せいせう(贊句) 図むだな文句、  
せいせう(晴空) 図はれ渡りたるそら、  
せいせう(清華) 図攝家(せつが)に次ぐ名門の  
コトを云ふ、  
せいせう(正貨) 図紙幣に對しての稱、金  
銀貨のコト、  
せいせう(製靴) 図くつをこしらへる、  
せいせう(製菓) 図菓子をこしらへるコト  
せいせう(精華) 図直打(ちうだ)ひかり、ほま  
れ。まじり氣のなききつ、  
せいせう(靖和) 図世間のよく治(ち)まつ  
てるコト。世の中のおだやかなるコト、  
せいせう(正畫) 圖寫眞の語、種板(しゆばん)  
り紙に映(うつ)し取りたる寫眞の稱、  
せいせう(星群) 圖ほしがたまつて出て

せい

るコト、ほしのむれ、  
せいせう(盛會) 圖盛大なる會合、  
せいせう(聖會) 圖神の事に就きての會  
合のコトを云ふ、  
せいせう(制外) 圖制規の外、おきての  
外(がい)のコトを云ふ、  
せいせう(世外) 圖世の中を離れたる、  
靜かな場所、山間幽谷(ゆうこく)など、  
せいせう(聲光) 圖ほまれのコト、  
せいせう(精光) 圖美事なるひかり。う  
つくしき、かやきのコト、  
せいせう(清光) 圖よきひかり、  
せいせう(星光) 圖ほしのひかり、ほし  
のかやきのコトを云ふ、  
せいせう(誠惶) 圖つしみをそる、  
せいせう(生獲) 圖いけどり、  
せいせう(生活) 圖人の生きつづけたら  
くコト。世渡(よせわた)りのコト、  
せいせう(生還) 圖戦争などに出掛けて  
生命を全(ま)ふして歸るコトを云ふ、  
せいせう(盛觀) 圖つばなる見もの、  
せいせう(請願) 圖れがひもむる、  
せいせう(誓願) 圖神佛に祈願をこむべ  
く爲めに、誓(ちか)を立てるコト、  
せいせう(税關) 圖輸出入品に對して、  
關稅を取り立つる役所、

せい、せい

せいせう(生活費) 圖生存してゐる費用  
即ちくらし向の費用、  
せいせう(請願人) 圖請願を爲す人  
せいせう(請願巡査) 圖我が邸  
宅又は營業所などを、守衛(しゆゑ)して貫  
ふべく爲めに、費用を支拂ひて、備(び)  
ひたる巡査、  
せいせう(正經) 圖正しきすじみち、  
せいせう(世系) 圖ちすじのコト、  
せいせう(正系) 圖正しきけいさう、  
せいせう(聖經) 圖聖人が教えを遺(のこ)す  
べく、著(しよ)はされし本、  
せいせう(西經) 圖東經に對しての稱、地  
球の西部の經度(けいど)を云ふコト、  
せいせう(生計) 圖なりはひ、くらし、  
せいせう(清潔) 圖うつくしきコト。けが  
れぬコト。潔白(けつぱく)、  
せいせう(生血) 圖なまなましき血、いき  
せいせう(腥血) 圖なま血のコト、  
せいせう(暇監) 圖かむ。くらしコト、  
せいせう(政教) 圖政治と宗教、  
せいせう(聖教) 圖聖賢(せいけん)の遺(のこ)し置  
かれたる教訓(きょうくん)の一名、  
せいせう(生業) 圖なりはひ、世渡(よせわた)り。  
稼業(かせぎ)のコトを云ふ、  
せいせう(正義) 圖ただしきなりはひ。定

まりたる職業、

せいせう(成業) 圖事業の成功のコト、  
せいせう(聖賢) 圖聖人と賢人、即ち學識  
德行共に萬人に勝(か)れる人を云ふ、  
せいせう(生絹) 圖引き出したばかりの絹  
(きぬ)、れらぬ絹、  
せいせう(政見) 圖政事上の意見、政事上  
の見識(けんし)のコト、  
せいせう(政權) 圖政事を行ふ權利。政事  
上の權利。人民が政事にたづさる權利  
のコトを云ふ、  
せいせう(勢權) 圖いきほひと、權利(けんり)  
せいせう(壙歎) 圖自己の職分を盡(つ)し  
て奉公(ほうこう)を大切にするコト、  
せいせう(旌顯) 圖あらはし示すコト、  
せいせう(精研) 圖物事の條理をくはしく  
みがきまはむるコトを云ふ、  
せいせう(成憲) 圖成文の國法、憲法、  
せいせう(晴暄) 圖晴天にして風なく最  
(もと)もおだやかなるコトを云ふ、  
せいせう(誠慊) 圖まごころ、まごころ、  
せいせう(世諺) 圖世の中のことわざ、  
せいせう(制限) 圖くぎり。しきりをつけ  
るコト。一定せる限(かぎ)り、  
せいせう(聲言) 圖云ひふらし。ひやうば  
んのコトを云ふ、

せい

せいせう(誓言) 圖ちかひの言葉(ことば)。  
かひたる言葉(ことば)を云ふ、  
せいせう(西諺) 圖西洋のことば、  
せいせう(賢見) 圖活用せぬ意見。役(やく)に  
立ぬ考(かんが)ひのコトを云ふ、  
せいせう(賢言) 圖むだなことば。むだ口、  
せいせう(正教員) 圖小學校の本科及  
び専科の正教員のコトを云ふ、  
せいせう(制限外) 圖一定せる制限  
を越(こ)えるコト。くぎりより外(がい)へ出  
るコトを云ふ、  
せいせう(政權) 圖政事を行  
ふ權利を握(にぎ)らむとして、争ひ合ふコ  
トを云ふ、  
せいせう(世故) 圖世の中の事故(じこ)、即ち世  
上の事柄(ことば)のコトを云ふ、  
せいせう(成語) 圖一つの意味(い)をなせる  
言葉(ことば)のコトを云ふ、  
せいせう(正誤) 圖まちがつてゐる事を正し  
直(ただ)すコト、即ち校正、  
せいせう(小鱸) 圖魚の名、すまきの子の稱、  
せいせう(書信) 圖かへりみさるコト、  
せいせう(竹筴) 圖鱈(たら)の皮にある、細く長  
き刺(さ)の如きもの稱、  
せいせう(贅語) 圖むだな言葉、むだな文句  
(ぶくろ)に立(た)つ物語(ものがたり)、

せい

せいせう(正鵠) 圖射的又は弓術的(きうじゆつてき)の  
中心(ちゆうしん)に在る、黒星(くろせい)の稱。重  
心(ちゆうしん)なる點。主眼(しゆげん)要點、  
せいせう(正攻) 圖正面より堂々(どうどう)と攻  
(こう)めて行くコトを云ふ、  
せいせう(成功) 圖目的を達するコト成就  
するコト。出世(しゆしゆ)發達(はつたつ)するコトを云ふ、  
せいせう(正刻) 圖正しき時間、  
せいせう(接骨) 圖折れたる骨をつなぐコ  
ト、即ちほねつぎのコト、  
せいせう(誠悃) 圖まごころ、まごころ、  
せいせう(精魂) 圖精神に同じ、  
せいせう(精根) 圖こんき。しんぼう。忍耐  
心(にんげん)のコトを云ふ、  
せいせう(圓潤) 圖かはや。雪隠(せういん)、  
せいせう(警言) 圖警言(けいげん)に同じ、  
せいせう(精査) 圖念を入れてしらべるコト  
せいせう(星座) 圖天體に星のある場所、  
せいせう(正坐) 圖ただしく坐す、行儀(ぎよぎ)  
よく坐す。上座(じやうざ)のコト、  
せいせう(靜坐) 圖しづかに坐(ま)つてゐるコ  
ト、心をもちつけて考へるコトを云ふ、  
せいせう(正妻) 圖本妻のコト、  
せいせう(精彩) 圖うつくしきつや、  
せいせう(聖裁) 圖天子の政事を、おさば  
きあそばすコトを申す、

せい

せい

せい

1014



せいせい

せいせい(制裁) 法律に違ひたる人に、  
 國家の加ふる處分 凡て不都合なる所  
 爲(せい)ありし者に加ふる處分、  
 せいせい(整齊) 固ひさしく整(せい)ふ 平  
 等(たい)なるコト、  
 せいせい(精細) 固くわしきコト、こまか  
 なるコト、ちみつなるコト、  
 せいせい(齊莊) 固おこそかにしてみだれ  
 ざるコト、さゝのひてみだれぬコト、  
 せいせい(生草) 固はえてる草、  
 せいせい(星霜) 固年月(せい)、  
 せいせい(懐情) 固かなしむコト、いたむ  
 コト、うれふコト、  
 せいせい(清掃) 固うつくしくさうちをす  
 るコト、又なしたるコト、  
 せいせい(正裝) 固正服を着(せい)たるコト  
 ◎儀式に適(せい)ひたる服装(せい)、  
 せいせい(盛裝) 固立派に着(せい)さるコト、  
 リリしきいでたち、  
 せいせい(清爽) 固心のさはやかなるコト  
 せいせい(腥臊) 固なまぐさきコト、けが  
 れてあるコトを云ふ、  
 せいせい(聖像) 固聖人の肖像 ◎特に孔子  
 の像の稱、  
 せいせい(製造) 固こしらえるコト、  
 せいせい(政策) 固政事に就きてのてだて

せいせい

せいせい(製作) 固こしらえるコト、つく  
 りなすコト、  
 せいせい(正朔) 固正月の一日 ◎毎月の一  
 日 ◎轉じて曆のコトを云ふ、  
 せいせい(生殺) 固生(せい)したり殺したり、  
 せいせい(省察) 固自己の行ひ自己の性質  
 の善惡を省(せい)みてためなほすコト、  
 せいせい(制札) 固禁制(せい)の次第を記せ  
 し立札のコトを云ふ、  
 せいせい(生産) 固生計(せい)を立てて行く  
 コト、即ちなりはひのコト、  
 せいせい(聖算) 固天皇陛下の御壽命の御  
 事を申す、  
 せいせい(精算) 固くわしくかんじやうす  
 るコト、  
 せいせい(清算) 固滞(せい)なく勘定(せい)  
 を仕上(せい)ぐるコトを云ふ、  
 せいせい(成算) 固もくろみ心づもり、  
 せいせい(青山) 固樹木の青青(せい)生(せい)へ  
 しげつてる山 ◎墓所の稱、  
 せいせい(星散) 固天に星(せい)のちらばつ  
 てる云ふ意より轉じて、ちらかつて  
 るコト 飛々に在るコト、  
 せいせい(聖餐) 固キリスト教にて、ヤツ  
 を祭る儀式の時に用ゆる食事の稱にて  
 パンを聖肉と云ひ、葡萄酒(せい)を聖

せいせい

血と云ふ、  
 せいせい(製造場) 固凡て物品を製造す  
 せいせい(生産地) 固物品をこしらへ出  
 す土地(せい)、  
 せいせい(生産費) 固物品を生出する入  
 費即ち、資本(せい)、  
 せいせい(製造所) 固凡て物品を製造  
 する所、  
 せいせい(製造元) 固こしらえたる人  
 又はこしらへたる家、  
 せいせい(生産額) 固生出されたる物  
 のかさ、即ち多少、  
 せいせい(精算人) 固會社や組合など  
 の精算に關する事務を執るべく、選  
 (せい)れたる人、  
 せいせい(生産物) 固生出されたる物  
 品 ◎生(せい)たる品物、  
 せいせい(生産力) 固生産し能(せい)  
 ふ限度(せい)のコトを云ふ、  
 せいせい(正三角形) 固三角の三  
 邊の相等しき三角形の稱、  
 せいせい(正史) 固たゞしき歴史、かざらざ  
 る歴史のコトを云ふ、  
 せいせい(聖旨) 固天子のおむね、陛下のお  
 ぼしめし、  
 せいせい(勢至) 固佛の名、せいせいほまつ

せいせい

コト、  
 せいせい(製紙) 固紙をこしらへるコト、  
 せいせい(製糸) 固綿(せい)をつむぎて糸とな  
 すコト ◎繭(せい)より糸を製す、  
 せいせい(誓詞) 固ちかひのこぼ、  
 せいせい(誓紙) 固誓文(せい)、けいやく書の  
 コト、  
 せいせい(靜思) 固おちついて考へるコト、  
 せいせい(靜止) 固じつとしてとどまつて  
 動かすに在るコト、  
 せいせい(制止) 固おさえとどむ ◎きんする  
 コト、  
 せいせい(成齒) 固わけ代(せい)りて生(せい)し齒  
 せいせい(星使) 固全權大使(せい) 全權公使(せい)  
 のコトを云ふ、  
 せいせい(世子) 固身分たかき人のよつぎ、  
 せいせい(生子) 固うまれた子うみたる子、  
 せいせい(生死) 固いきるさ死ぬ、  
 せいせい(姓氏) 固うじな、みょうじ、  
 せいせい(省視) 固歸省に同じ、  
 せいせい(西史) 固西洋の歴史、  
 せいせい(清至) 固陰曆四月の稱、  
 せいせい(清駛) 固清(せい)き川の流れの早き  
 コトを云ふ、谷川などの、  
 せいせい(青史) 固れきしのコト、  
 せいせい(青磁) 固淡藍色(せい)又は濃(せい)

せいせい

藍色のくすりを、一面(せい)に引きたるせ  
 ぎ物を云ふ、  
 せいせい(政事) 固まつりごと、  
 せいせい(盛事) 固さかんなるコト、立派  
 (せい)なるコト、  
 せいせい(清時) 固世の中の治まれるコト、  
 せいせい(簪仕) 固初めて官に就くコト、  
 せいせい(贅字) 固むだな文字、  
 せいせい(清秋) 固仲秋のコト ◎陰曆八月  
 の稱、  
 せいせい(正秋) 固仲秋のコト、  
 せいせい(腥臭) 固なまぐさきかさ、  
 せいせい(政治家) 固政治を行ふ道に達し  
 てる人、  
 せいせい(制式) 固さだめおきて、  
 せいせい(正式) 固本式的コト、  
 せいせい(青漆) 固青き色に染めたるうる  
 し、  
 せいせい(性質) 固たち ◎うまれつき ◎き  
 だてのコトを云ふ、  
 せいせい(正室) 固本妻(せい)に同じ、  
 せいせい(生日) 固生れたる日、即ちたん  
 じやう日のコト、  
 せいせい(聖日) 固キリスト教にて、日曜  
 日のコトを云ふ、  
 せいせい(晴日) 固はれたる日、上天氣、

せいせい

せいせい(誠實) 固まこと、まごころ、  
 せいせい(世襲) 固爵位財産又は特別の  
 職務職業等につき、其の家に具(せい)はれ  
 る物を、子孫が承(せい)け繼(せい)で行くコ  
 トを云ふ、  
 せいせい(正斜) 固まつすぐなるまなめ  
 なる ◎正しきまがつてると、  
 せいせい(精舍) 固寺(せい)の寺院、  
 せいせい(清寫) 固きよがきのコト、  
 せいせい(政社) 固政治家の團體(せい)、  
 せいせい(正寫) 固ただしくうつすコト、  
 せいせい(正邪) 固正(せい)しきと、まごころま  
 なるコト、  
 せいせい(生者) 固いきてる者、うまれて  
 来たもの、  
 せいせい(盛者) 固さかゆるもの。さかん  
 なるもの、  
 せいせい(正射) 固直角(せい)になりてう  
 つりたる影(せい)のコトを云ふ、  
 せいせい(清酒) 固すみたる上等の日本酒  
 せいせい(聖主) 固賢明(せい)にあます  
 君主、  
 せいせい(聖謬) 固聖算(せい)に同じ、  
 せいせい(盛暑) 固はげしきあつさ、  
 せいせい(聖書) 固ヤソ教の教書にて、新  
 約全書のコトを云ふ、







せいせ

さまを云ひ表はす語、  
 せいせい(整飾)此の上もなく十分に、  
 ささなふてる状(せ)に云ふ語、  
 せいせい(精精)圖勵(せ)む勉強(せ)する  
 ①叶(せ)ふ力の届くだけ云ふ意を表  
 (せ)はす語、假令は精精力を盡す、  
 せいせい(聖詔)圖天子のみことり、  
 せいせい(正籍)圖本籍、  
 せいせい(成績)圖できばえ、いさほし、  
 せいせい(清絶)圖此の上もなく清きコト  
 せいせい(精選)圖くわしくえらぶ、えり  
 ぬくコトを云ふ、  
 「云ふ、  
 せいせい(清鮮)圖清くして美しきコトを  
 せいせい(靚麗)圖極めてやわらかき毛を  
 以て織りたる、最上等のしき物、  
 せいせい(生鮮)圖魚、鳥、獸類のなまにく  
 の極めて新らしき物、  
 せいせい(生前)圖生(せ)てゐたときのコ  
 ト、死後に對して云ふ語、  
 せいせい(整然)圖さとのふてるさま、  
 せいせい(性善)圖人の性質は本来より善  
 なるもの云ふコト、①性質の善なるコ  
 ト、  
 せいせい(凄)圖す(せ)しき状(せ)物しづ  
 かにして、さびしき状を云ひ表はす語、  
 せいせい(聖善)圖故事にて、なまけあつ

せいせい

き母のコトを云ひし語、  
 せいせい(花)圖植物學の語、其  
 の花瓣(せ)の大きさの同一なる花のコ  
 トを云ふ語、  
 せいせい(成績)圖成績の容子を表  
 せしもの、稱、  
 せいせい(正正)圖軍隊の士氣が  
 甚だ盛んなるコトを云ふ、  
 せいせい(聖祖)圖天子の御先祖、  
 「コト  
 せいせい(精粗)圖くわしきコトをまつな  
 せいせい(清楚)圖たんばくにして美しきコ  
 ト、清くあざやかなるコト、  
 せいせい(清僧)圖品行方正なる僧侶(せ)  
 せいせい(盛層)圖重なり合つて成り  
 立てるコト、①重なり合つて成り  
 せいせい(清僧)圖妻帯(せ)せず肉食せざ  
 る名僧のコトを云ふ、  
 せいせい(聲息)圖おさげられたより、  
 せいせい(棲息)圖おさひ居るコト、やど  
 り居るコト、  
 「序、  
 せいせい(正則)圖正しき規則、正しき順  
 せいせい(悽惻)圖なげきいたむコト、  
 せいせい(正續)圖正篇と續篇と、  
 せいせい(租税)圖租税を取り立つる規則  
 せいせい(生存)圖いきながらえてるコト

せいせい

せいせい(勢捕)圖軍勢(せ)をそるへる  
 コト、①勢をさこのへるコト、  
 せいせい(背板)圖圓き木を方形の柱(せ)に  
 引き切りたる其の殘(せ)りの木を云ふ  
 ①腹巻(せ)の背にあたる部分の名、  
 せいせい(政體)圖政事のしくみのコト、  
 せいせい(生態)圖いきてあるありさま、  
 せいせい(青黛)圖まゆづみ①さかゆきの  
 コトを云ふ、  
 せいせい(聲帶)圖聲門の内部に在る、小  
 さき帯(せ)の如き製(せ)をなせるもの、  
 此れがいきの働(せ)で震(せ)えて種々  
 の音聲を出す、  
 せいせい(聖代)圖ゆたけく治(せ)まれる  
 御代(せ)、太平の此のみよ、  
 せいせい(盛代)圖さかんなる御代(せ)①  
 代のさかゆるコト、①上に聖帝おはし、  
 下に群賢あり、國富み民安きコト、  
 せいせい(正大)圖甚だ正しくして些の非  
 難すべきコトのなきコト、  
 せいせい(世代)圖時代(せ)、世(せ)、  
 せいせい(盛大)圖甚ださかんなる、甚だ  
 さかゆる、最も立派(せ)の、コト、  
 せいせい(征討)圖せめうつコト、  
 せいせい(政黨)圖政治に關する同主義の

せい

人人の組合、假令は政友會とか國民黨  
 など、  
 せいせい(正當)圖ただしきコト、あたり  
 まへなるコト、  
 せいせい(製糖)圖砂糖をこしらえるコト  
 ①精製したる砂糖、  
 せいせい(政道)圖まじりこ政事(せ)、  
 せいせい(正道)圖正しき道(せ)①本道  
 (せ)、  
 せいせい(聖堂)圖孔子(せ)の肖像(せ)の  
 祀(せ)られる堂を云ふ、  
 せいせい(制吒迦)圖せいたか童子(せ)の  
 コトを云ふ、  
 せいせい(背高)圖たけのたかきコト、  
 せいせい(請託)圖たのむ、れがふコト、  
 せいせい(清濁)圖するまにこれるま、  
 清(せ)きまきまなきま、  
 「云ふ、  
 せいせい(贊澤)圖おこりにふけるコトを  
 せいせい(正旦)圖正月の元日、  
 せいせい(生誕)圖うまれるコト、  
 せいせい(聖斷)圖天子の政事をみそなは  
 せてお定(せ)めあそびすコト、  
 せいせい(政談)圖其時の政事に關する議  
 論、  
 せいせい(聖壇)圖神を祀つてある壇(せ)  
 せいせい(製糖所)圖砂糖を製造する

せい

せいせい(正當防衛)圖せいたうば  
 うまに同じ、其の條を見られよ、  
 せいせい(制吒迦童子)圖不動明王  
 の脇に立てる三針と金剛棒とを持つて  
 像の稱、①國音相通するより、身長(せ)  
 の高さ人のコトを云ふに用ゆ、  
 せいせい(政黨内閣)圖政黨員を  
 以て、相(せ)立てたる内閣を云ふ、  
 せいせい(正當防禦)圖我れに損  
 害又は危険を加へんとする者に對して  
 我れの力にて其の損害、其の危険を防  
 ぎ除くコトを云ふ、  
 せいせい(政談集會)圖其の當  
 時の政事に就きて、是非善惡を談論す  
 る會合のコトを云ふ、  
 せいせい(政談演說會)圖  
 時の政事に關する、可否の意見を演說  
 して發表する會合、  
 せいせい(棲遷)圖安らかに休息するコト、  
 せいせい(整地)圖土地をさとのえならすコ  
 ト又はならしたる土地、  
 せいせい(精緻)圖くわしきこまかきコト、  
 せいせい(生地)圖うまれたる土地、  
 せいせい(生知)圖生(せ)ながらにして道  
 理を辨(せ)まへてるコト、

せい

せいせい(政治)圖政(せ)を行ひて一國を  
 をさむるコト、  
 せいせい(筥竹)圖易(せ)をたつるに用ゆ  
 る細き竹、メドギの、コト、  
 せいせい(製茶)圖茶の葉を製して茶  
 となすコト、①精製されし葉茶(せ)、  
 せいせい(整除)圖數學の語、殘(せ)りす割(せ)  
 り切れて殘數の生(せ)の云ふ、  
 せいせい(正廳)圖表座敷(せ)表書院、  
 せいせい(清聽)圖しづかにして聽くコ  
 ト、謹んできくコトを云ふ、  
 せいせい(成長)圖大きくなるコト、①發  
 達(せ)するコト、  
 せいせい(正中)圖まんなか、  
 せいせい(誠忠)圖忠義にかたまりたる  
 コト、純忠、  
 せいせい(精忠)圖誠忠純忠に同じ、  
 せいせい(精蟲)圖精液の中に在る精子  
 のコト、即ちこたれ、子種、  
 せいせい(成蟲)圖幼虫より變體(せ)し  
 て親虫(せ)と同一の形になりたるもの  
 を云ふ、  
 せいせい(製肘)圖陰(せ)にあて、さしづ  
 をして思ひ通りになさしめぬコト、  
 せいせい(聖敎)圖天皇の、みことり、  
 せいせい(正直)圖まつすぐ、ただしき、



せいちゆちせん(正中線) 図凡てまつすぐに通つてゐる線(線)の線を云ふ。  
 せいぢらんたい(政治團體) 図政事に關する事柄に就きて、意見を同ふして結合せし團體(団体)を云ふ。  
 せいづ(製圖) 図畫圖面(面)を作る圖を引くコト。  
 せいづち(精通) 圖物事又は其の事に委(こま)しく通じてゐるコト。  
 せいづか(製圖家) 圖製圖(製)を業とせる人(人)を云ふ。  
 せいづひ(聖帝) 圖聖德聖明なる天子、  
 せいづい(青帝) 圖春の神の神を云ふ。  
 せいづい(制定) 圖規則を定(定)むる、おきてを定むるコトを云ふ。  
 せいづい(成丁) 圖滿二十歳以上の男子の科(科)を云ふ。  
 せいづい(井底) 圖井戸の底(底)を轉じてせまき考へなどを云ふ。  
 せいづい(蜻蜓) 圖虫の名とんぼの科、  
 せいづい(聖朝) 圖をさまれる御世(御世)のめでたきまよの科を云ふ。  
 せいづい(征鳥) 圖渡(渡)り鳥のかへりゆくもの、稱、歸雁(雁)の類、  
 せいづい(聲調) 圖聲のしらべ、聲をささ

なふるコト、調べ、  
 せいづい(整調) 圖ボートにてかぢを取りて、漕手(漕手)の調子(調子)が一致するやうにさしづする人、  
 せいづい(制條) 圖おきて、法文、  
 せいづい(清笛) 圖又たシン笛とも云ふ、音楽に用ゆる笛、  
 せいづい(清道) 圖手紙に用ゆる語、他人の健(健)かなるコトを云ふ語、  
 せいづい(正嫡) 圖本妻の科(科)本妻の生みたる子(子)一族中の基(基)の家、  
 せいづい(聖哲) 圖萬人にすぐれてかしくコト、又は其の人、  
 せいづい(西哲) 圖西洋のすぐれたる學識あるえらい人(人)を云ふコト、  
 せいづい(清徹) 圖清(清)くすき透(透)つてゐるコト、水などの、  
 せいづい(生鐵) 圖きたえ、れらざる鐵、  
 せいづい(精鐵) 圖十分にきたへし鐵、  
 せいづい(製鐵) 圖鐵(鐵)を吹き分(分)けて鐵を取るコト、鐵を精製して材を製するコト、  
 せいづい(盛典) 圖盛大なる儀式(儀式)、  
 せいづい(聖典) 圖聖經(聖經)に同じ、  
 せいづい(聖典) 圖聖經に同じ、  
 せいづい(成典) 圖定りたる法律規則(規則)

定の儀式(儀式)、  
 せいづい(晴天) 圖はれたる空、よき日和、  
 せいづい(聖殿) 圖神を奉祀(奉祀)しある御殿(御殿)の科(科)を云ふ、  
 せいづい(正殿) 圖表(表)で御殿、  
 せいづい(世傳) 圖代々つたはるコト、  
 せいづい(井田) 圖昔時支那にて行はれたる田地に就きての方法、即ち田地を井の字形に九つに區切(區切)て、其の一を租税として官に取り上げ、他を人民に借し與ふるコトを云ふ、  
 せいづい(聖天子) 圖聖德高き天皇の御事を申す、  
 せいづい(製鐵所) 圖製鐵に關する仕事を爲す所、  
 せいづい(青天白日) 圖疑(疑)はれて潔白の身(身)となりたるコト、  
 せいづい(井底蛙) 圖井の底にゐる蛙と云ふ意より轉じて、思慮見聞の狭(狭)き人(人)をあざけりて云ふ語、  
 せいづい(世途) 圖世路に同じ、  
 せいづい(星斗) 圖星(星)の科(科)、  
 せいづい(征途) 圖軍(軍)に赴く途(途)、  
 せいづい(生徒) 圖學校にて教育を受けてゐる人、即ち學生、

せいちゆちせん

せいづい

せいづい

1064

せいど(製度) 圖おきて、きそく法律(法律)、  
 せいどち(西東) 圖西と東と、  
 せいどち(齊等) 圖おさしきコト、相違なきコト、  
 せいどち(盛冬) 圖冬のまつさいちう、  
 せいどち(正統) 圖正しき血すじ、  
 せいどち(青銅) 圖からかれの科(科)、  
 せいどち(成童) 圖滿十五歳に達せし男子、  
 せいどち(聖德) 圖天子の御高徳、  
 せいどち(盛徳) 圖さかんなる徳、  
 せいどち(整頓) 圖まごまるコト、  
 せいどち(青銅器) 圖からかれにて製したる器具類の稱、  
 せいなん(西南) 圖西と南と、  
 せいなん(靖難) 圖國家の難義を助くるコト、  
 せいなん(青肉) 圖青色の印肉、  
 せいなん(生肉) 圖生(生)の魚鳥獸肉類、  
 せいなん(贅肉) 圖身體中に生ずる餘分の肉の塊(塊)の科(科)特に瘤(瘤)の科(科)を云ふ、  
 せいなん(生乳) 圖製造せぬしほりたるま(ま)の新らしき乳汁(乳汁)、  
 せいなん(靜寧) 圖安すらかなるコト、世の中のおだやかなるコト、

せいねん(成年) 圖丁年に達したるコト、  
 せいねん(生年) 圖生(生)れたる年月、うまれし日の科(科)、  
 せいねん(青年) 圖わかもの、二十歳前後の血氣盛りの男子を云ふ、  
 せいねん(整年) 圖年をま(ま)のへるを云ふ意にて、滿一ケ年の科(科)を云ふ、  
 せいねん(盛年) 圖さかり年、血氣さかりの年、  
 せいねん(征馬) 圖たびへ出て行く馬、  
 せいねん(濟輩) 圖なまき、とも、から、  
 せいねん(旌旗) 圖はたのぼり、  
 せいねん(成敗) 圖出来るさ出来ぬさ、成るさ成ぬさ、  
 せいねん(成敗) 圖罪をただして、こらすコト、  
 せいねん(西方) 圖西にあたる方、  
 せいねん(聲望) 圖人望(人望)ほまれ、  
 せいねん(正方) 圖正しき四角を云ふ、  
 せいねん(晴眸) 圖ひさみ、くろめ、  
 せいねん(聲貌) 圖こえさかたさ、  
 せいねん(制帽) 圖定めたる形の帽子、  
 せいねん(星芒) 圖ほしのひかり、ほしのかがやくコトを云ふ、

せいねん(精博) 圖物事にひろく、くはしく通じてゐるコトを云ふ、  
 せいねん(清白) 圖けがれてぬコト、  
 せいねん(生縛) 圖生(生)で縛(縛)つて、  
 せいねん(征伐) 圖せめうつコト、  
 せいねん(正法) 圖た(た)しきのり、た(た)しきしかたの科(科)を云ふ、  
 せいねん(製法) 圖こしらへかた、こしらへる仕方(仕方)を云ふ、  
 せいねん(政法) 圖政治と法律、  
 せいねん(税法) 圖税則(税則)に關する法律の科(科)を云ふ、  
 せいねん(躰學) 圖高き山やけはしき崖(崖)などへ登(登)るコトを云ふ、  
 せいねん(成版) 圖活版に對しての稱にて、木版(木版)版木の科(科)、  
 せいねん(正犯) 圖從犯に對する稱にて、犯罪の張本人、即ち主犯、  
 せいねん(生蕃) 圖やばんなる人民、  
 せいねん(正反對) 圖全く反對なるコト、全然相違せるコト、  
 せいねん(政費) 圖政治を行ふに就きての費用、  
 せいねん(政黨) 圖政務を議するに就きての費用の科(科)を云ふ、  
 せいねん(正妃) 圖正しきさき、正しき典

せいど

せいねん

せいねん

1065



せいひ

方のコトを云ふ、  
 せいひ(成否) 図物事のなるま成(成)ざる  
 せいひ(正否) 図正しきま正しからざるま  
 のコトを云ふ、  
 せいひ(正比) 図数学の語、正比例のコト、  
 せいひ(脆美) 図味(味)のやはらかにして、  
 甘(甘)きコトを云ふ、  
 せいひ(整備) 図さこのひそなはる、十分  
 にそなはる、 「みつなるコト  
 せいひ(精緻) 図きわめて細かきコト、ち  
 せいひ(精美) 図極めて美しきコト、極め  
 てよきコト、つやつやくきれいな  
 コト、  
 せいひ(贅費) 図むだな費用(費用)、  
 せいひ(省筆) 図省文に同じ、  
 せいひ(静謐) 図世の中の太平なるコト  
 を云ふ、  
 せいひ(正賓) 図主(主)たる客、  
 せいひ(清貧) 図人に謙(謙)節を曲(曲)  
 すして貧賤(貧賤)に甘(甘)むるコト、  
 せいひ(精品) 図すぐれたる品物、  
 せいひ(青萍) 図青色を呈せる、うき  
 草のコトを云ふ、  
 せいひ(世評) 図世間のうはさ、  
 せいひ(製氷) 図氷(氷)をこしらへる  
 コト、器械で氷を氷とするコト、

せいひ、せいふ

せいひ(正比例) 図数学の語、比例(比  
 )のコト、反比に對しての稱、  
 せいふ(政府) 図田畑(田畑)の面積(面積)、  
 せいふ(政府) 図一同の政事を統(統)べくり  
 するま、 「捕虜(捕虜)、  
 せいふ(生俘) 図いけざられたる人、即ち  
 せいふ(正負) 図数学の語、正數(正數)と負數(負數)  
 のコト、即ち十(十)一の印(印)のコトを  
 云ふ、  
 せいふ(征賦) 図政府より租税をとりたつ  
 るコトを云ふ、  
 せいふ(税賦) 図租税(租税)が、り物、  
 せいふ(腥風) 図血なまぐさき風、  
 せいふ(西風) 図西より吹き来る風、  
 せいふ(清風) 図きよくすしき風、  
 せいふ(正副) 図正と副と主と客と、  
 せいふ(正服) 図改(改)まりたる服(服)  
 式(式)に用ゆる服(服)制(制)服(服)の  
 せいふ(征服) 図せめてした(した)がばせるコ  
 ト、改(改)めて降(降)すコト、  
 せいふ(制服) 図規則を以て定(定)めた  
 る服装(服装)、  
 せいふ(盛服) 図立派なるよほひ。美  
 しいてたちのコトを云ふ、  
 せいふ(清福) 図しやわせ、こうふく、  
 せいふ(齊物) 図物事に對して區別(區別)のな

せいふ

きコト又は區別を立てざるコトを云ふ  
 せいふ(生物) 図凡て生(生)てる物、動植物  
 のコトを云ふ、  
 せいふ(贅物) 図役にたたる物むだな  
 せいふ(齊粉) 図こな、こまかきもの、  
 せいふ(清芬) 図きよきかほり、  
 せいふ(聲聞) 図ほまれよきひやうげん  
 せいふ(成分) 図其の物の中に含(含)ま  
 れてゐる或る一部の物、  
 せいふ(正文) 図註釋文(註釋文)などに對  
 して、本文(本文)のコトを云ふ、  
 せいふ(精分) 図根氣(根氣)元氣(元氣)腦力  
 (腦力)のコト、  
 せいふ(省文) 図むだな文句をばくコト  
 せいふ(成文) 図文章に述(述)あらはす  
 コト、しるしめされてある文書、  
 せいふ(贅文) 図むだな文句無用の文句、  
 せいふ(政府案) 図政府より議會に提  
 出(提出)する議案(議案)、  
 せいふ(政府案) 図政府の味方となる  
 政黨員(政黨員)又は議員、  
 せいふ(政府委員) 図國會にて、政  
 府を代表して貴衆兩議院の質問に答へ  
 せいふ(生物學) 図地球上に於て生  
 きてる物の機能(機能)發達(發達)を研究す

一〇六六

せいふ、せいほ

る學問、  
 せいふ(成文法) 図文書に認めて一  
 般に用(用)たれる法律(法律)のコトを云ふ、  
 せいふ(政柄) 図政治に關する權柄(權柄)  
 せいふ(生平) 図ひこる、つれづれ、  
 せいふ(正平) 図極めてたいらかなるコ  
 トを云ふ、  
 せいふ(生兵) 図未だ戰(戰)かばざる軍  
 勢、即ちあらたの兵士、 「兵  
 せいふ(精兵) 図よりぬきの兵、つよき  
 せいふ(旌表) 図すぐれたる善行の人を  
 世に知らせるコト、  
 せいふ(聖廟) 図孔子(孔子)を祀りたる處  
 即ち聖堂(聖堂)、 「れつきのくせ  
 せいふ(性癖) 図かたよりたる性質、生  
 せいふ(生別) 図死別に對しての稱にて  
 いきわかれ、  
 せいふ(世變) 図世の中に生じたる變事  
 せいふ(政變) 図政治に關するへんくわ  
 せいふ(政界) 図亂れのコト、  
 せいふ(正變) 図まつたくかばるコト、  
 せいふ(贅辯) 図むだぐち、でたらめの  
 コトを云ふ、  
 せいふ(生捕) 図いけざり、  
 せいふ(生母) 図うみの母、

せいほ、せいふ

せいほ(歲暮) 図年の暮れ、年の暮れの贈  
 りもの、 「のコトを申す  
 せいほ(聖謨) 図天子の御政治の仕方(仕方)  
 せいほ(聖母) 図聖人を生みたる母(母)ヤソ  
 教徒(教徒)がヤソの生母(生母)マリヤのコトを云ふ  
 語、 「てばかりご。軍略(軍略)  
 せいほ(征謀) 図賊徒を征伐するに就き  
 せいほ(正謀) 図たしきはかりご。  
 正當(正當)なるくはだてのコト、  
 せいほ(西北) 図西と北と、  
 せいほ(筆下) 図筆竹を用ひてうらなふ  
 コト、うらなひのコト、  
 せいほ(製本) 図書物類、及び本類を仕  
 立(仕立)るコト、  
 せいほ(正本) 図法律の規定(規定)に依り  
 て正しく寫(寫)したる文書を云ふ、  
 せいほ(製本屋) 図製本を業とする人  
 せいほ(精米) 図白米(白米)しらげられ、  
 せいほ(青盲) 図眼は開(開)てるが、物を  
 見るコトの出來ぬ眼病(眼病)を云ふ、  
 せいほ(舍密) 図化學のコト、  
 せいほ(精密) 図くはしきコト、十分に  
 ゆきまをくコトを云ふ、  
 せいほ(生民) 図人民のコト、  
 せいほ(齊民) 図ひとしき民を云ふコト  
 で、平民(平民)のコトを云ふ、

せいふ、せいほ

せいふ(濟民) 図民をすくふ世を救ふ、  
 せいふ(舍密學) 図化學のコト、  
 せいふ(靜脈) 図身體を循(循)りたる  
 血液の腐敗したる物を更に心臓(心臓)へ送り  
 ゆく脈管(脈管)の稱にて、素人(素人)の云ふ青  
 筋(青筋)即ち是なり、  
 せいふ(靜脈血) 図血の一種身體  
 を環(環)りて養分を與(與)へたる後(後)の  
 の不潔(不潔)となりたる血(血)のコト其の色  
 は暗赤色(暗赤色)を呈せり、  
 せいふ(世務) 図世事、世わたりのつごめ  
 せいふ(政務) 図政事に關する事務(事務)のコト  
 即ち國務大臣(國務大臣)等が執る事務、  
 せいふ(稅賦) 図公(公)のかかり物即ち租  
 稅(稅)のコト、  
 せいふ(稅務) 図租稅を取り扱ふ事務(事務)、  
 せいふ(清明) 図曆の名、二十四氣の一、  
 せいふ(聲明) 図明(明)さまに云ふ、公  
 言(公言)するコト、  
 せいふ(誓盟) 図ちかひのコト、  
 せいふ(生命) 図いのちのコト、  
 せいふ(聲名) 図よきうわさ、評判、ほま  
 れのコト、  
 せいふ(姓名) 図苗字(苗字)と名(名)、  
 せいふ(精明) 図明白なるコト、ひかり  
 がやけるコト、

一〇六六







せいの、せいれ

「はしきコトを云ふ  
せいの(世果)困世事の最(じ)もわづら  
せいの(牛類)困生物(ぶぶ)のコト、  
せいの(聖霊)困泣き聲さなみだ、  
せいの(蜻蛉)困虫の名さんほ、  
せいの(精勵)困骨を折るはげむ、  
せいの(生靈)困人民(せい)いきれう、  
せいの(精靈)困死したる人のたましの  
コトを云ふ、  
せいの(政令)困政事に關する命令、  
せいの(凄寥)困静かなるコト、物さび  
しきコト、  
せいの(西曆)困西洋のこよみ、  
せいの(星曆)困天文と曆(り)と、  
せいの(清例)困きよくひやかなるコ  
ト、  
「ならんでるコト  
せいの(整列)困正しく列(れい)ぶ正しく  
せいの(清麗)困きよくしてうつくしき  
コト、さつぱりしてるコト、  
せいの(精練)困きたえれる十分に練る  
コト、  
「るコトを云ふ  
せいの(精練)困十分に練(れい)りきたゆ  
せいの(清連)困きよきさなみ、  
せいの(清廉)困正直にして貪(あ)らざ

せいの、せいわ

る潔白(けつぱく)なる行ひを云ふ、  
せいの(世路)困世わたりのコト、  
せいの(生路)困生(せい)てるみち、歩きつ  
けぬ路(じ)にけ路(じ)即ち活路、  
せいの(正路)困正(せい)しきみち、よ、し  
まならぬ行ひ、  
せいの(精廬)困寺、寺院、  
せいの(井樓)困高どの、やぐら、  
せいの(晴朗)困ほがらかに空の晴(せい)  
てるコトを云ふ、  
せいの(青樓)困遊女屋に同じ、  
せいの(井樓)困物見やぐらのコト、  
せいの(蒸籠)困物をむすに用ゆる器具  
(せい)、木製のわくの如き物の、底(ぞ)に竹  
のすのはめあるもの、  
せいの(世祿)困代受け續きて受る祿  
即ち世襲財産(せいりく)のコト、  
せいの(正論)困道理に道(せい)ふたる正  
しき議論(せいろん)のコトを云ふ、  
せいの(政論)困政事を論議するコト、  
政治家の議論、  
せいの(世論)困世の中の議論輿論  
せいの(實論)困役にたため論、  
せいの(清和)困世の中のおだやかなるコ  
ト、ほがらかに晴れ渡(せい)つてる天氣、

せう、少、小、宵、宵、宵、宵、一〇七〇

(せせう)

せう(少)困すくなき、すこし。わづかなる  
コト、いさゝか、すくなくなる。へる  
年(せう)かぬ。若(せう)し子(せい)供(せい)、少年  
かける。足りなくなる。足らぬ、つか  
ぬま。しばらくのあひだ、  
せう(紗)困夢(せう)を焙(せい)けて挽(せい)きて粉  
させしもの、即ちむぎ、か、し、  
せう(小)困ちいさきコト、年のゆかぬも  
の子供、小兒(せう)身分の賤(せい)しきコト、  
即ち小人(せう)めかけ。そばめ、太陽層に  
て、一ヶ月三十日より無き月の稱、又た  
太陽層にては、一ヶ月二十九日より無  
き月の稱、  
せう(宵)困による。にてる。にる。手本さ  
す。のつさる。まねて拵(せい)へる。即ちかた  
ざる。よはる。おさる。へるコトを云ふ、  
せう(宵)困日暮れて間もなき時、即ちよ  
ひ、夜(せい)、夜中(せい)、  
せう(宵)困さめる。しかる。せむ。  
せう(宵)困みはりをするコト。みはりの  
兵士(せい)小(せい)さくあり、細(せい)し、  
せう(宵)困しほれる。うれひるコト、  
せう(硝)困薬の名、白色を呈せる軟(せい)

かき石の如きもの、即ち硝石の類、石  
の堅(せい)き状態を云ひ表はす語、  
せう(硝)困けはしきコト、はげしきコト  
せう(硝)困生糸にて織りたるきぬ、  
せう(銷)困金屬をさかすコト、金屬のさ  
けるコト、きえて無くなるコト、ちら  
ばる。ちらかすコト、  
せう(消)困さへる。けすコト、へる。少な  
くなる。例ば消費(せい)ちる。ちらかる、  
せう(銷)困魚の名、たこ、いひだ、  
せう(沼)困池(せい)、沼まの、  
せう(沼)困池(せい)に同じ、  
せう(照)困あきらかなるコト、てらすコ  
ト、てるコト、ひかりかやくコト、  
せう(紹)困小形(せい)の乗り歩く車、  
せう(紹)困つぐ。うけつぐ、力を添(せい)る  
たすくるコトを云ふ、  
せう(招)困まねく。呼びよせる、つなぎ  
て引き止(せい)むるコトを云ふ、  
せう(都)困すゝめる。すゝむ。しゆる。は  
げむ。つゝむる。うつくし。立派(せい)  
であるなり、  
せう(詔)困天子のあうせ。天子の命令、即  
ちみことりの、告げ知らす、みちびく  
をしゆる、養成(せい)す、

せう(霄)困大空(せい)大空に、たなびけ  
る雲氣(せい)轉じてたかくあり、高し、  
せう(韶)困韶(せい)に同じ、立派(せい)なり、  
せう(焦)困こげる。こがす。こげてくさし  
思(せい)を寄す。こがる。心をいたむ。心  
配(せい)する、  
せう(焦)困物が火氣にあふて黒くなる。  
こげる。炬火(せい)、篝火(せい)、  
せう(焦)困山の頂上(せい)、山のいたりき  
山(せい)のけはしきコト、  
せう(譙)困こがむるコト。しかるコト、  
破(せい)れる。こはれる。さける、  
せう(樵)困薪(せい)を伐るコト、きこり山  
か、たきぎのコト、  
せう(蕉)困草の名、ばせうの、  
せう(蕉)困やつれたるかほつき。おそろ  
へたる容子(せい)、  
せう(蕉)困つかる。コト、やせるコト、  
せう(醺)困酒を供(せい)へて神靈(せい)を奉  
祀(せい)するコトを云ふ、  
せう(鷓)困鳥の名みそ、さき、  
せう(鷓)困物をかみくだくコト、味(せい)  
あふコト、物を食(せい)ひて生(せい)てるも  
の即ち生民(せい)人民(せい)なるコト、鳥  
の鳴(せい)くコト、  
せう(椒)困木の名、山椒(せい)の、果

實(せい)の香氣高し即ちかんばし、  
せう(薊)困木又は草などの葉(せい)散(せい)て  
さびしき状態(せい)を云ふ、  
せう(嘯)困吹(せい)く。うそぶく、聲をあけ  
て詩歌を調子たかく長く吟するコト、  
せう(蕭)困草の名よもぎの、物を云ふ、  
しづかなり。物さびし、風の靜かに吹  
く音(せい)を云ふ、  
せう(簫)困樂器の名笛(せい)の一種、せうの  
笛(せい)の、矢(せい)の幹(せい)の末(せい)の方(せい)部  
を云ふ、  
せう(澍)困風まさりの雨の激(せい)しく降  
りしめるコトを云ふ、  
せう(笑)困わらふコトおかし、  
せう(擾)困さばしきコト。亂(せい)る、コ  
ト、おとなしきコト。すなほなるコト  
、わづらはしきコト、  
せう(繞)困まはる。めぐる。取り巻く。め  
ぐらす。まどふ。からまる、  
せう(遶)困さり巻く。かこむ、  
せう(饒)困満足なるコト。ゆたかなるコ  
ト、ふへる。ます、  
せう(饒)困女子の容貌(せい)の美しきコト  
みめよきコト、へつらふ。こびる。な  
まめく、  
せう(少輔)困昔時の官名、現今の次官の  
せう(嘯)困蕭、簫、笑、擾、一〇七一











せうす、せうせ  
 一より以下の小さき数を云ふ、即ち分厘毛絲等の數、  
 せうすち(少數)圖數量の少なきコト、  
 せうすちてん(小數點)圖數學語、算用數字にて、整數(せいじゆ)と小數をばはす時、其の區別を立つる爲めに、少數の初めに附す點の稱、  
 せうせい(小生)圖私拙者。我れ、  
 せうせい(笑聲)圖わらひ聲(わらひ)、  
 せうせい(招請)圖まねきて來てもらふコト。招待(せうたい)するコト、  
 せうせい(召請)圖招請に同じ、  
 せうせい(小成)圖僅(ひ)かばかりの成功(せいこう)。一寸(いちゆん)したてがら、  
 せうせい(照星)圖小銃大砲等に裝置(せいち)てある銃(じゆう)を定むる、めやすとなるものを云ふ、  
 せうせい(小星)圖めかけのコトを云ふ、  
 せうせい(笑聲)圖わらひこえ、  
 せうせり(小照)圖小さく寫せし寫真(じやま)。  
 せうせり(昭昭)圖あきらかなる狀を云ひ表はす語、  
 せうせり(蕭蕭)圖あはれに物さびしき狀を云ふ、  
 せうせり(肖少)圖身分の鄙しき人、即ち小人のコト、

せうせ  
 せうせり(少少)圖すくなくコト、  
 せうせり(悄悄)圖憂(うれ)に沈める狀。心を痛める狀を云ふ語、  
 せうせき(硝石)圖一種の藥品にて、白色の硝や光輝(こうき)ある菱形(れいけい)の細かき結晶體(けつしんたい)なり、其の味(あじ)辛(じく)して硝や酸(さん)に、之に火を點すれば、燃(も)る火藥(くわく)を製すに用ひ、又た藥用に供せらる、  
 せうせつ(小説)圖實説なるを、作り事なるをに抱はらず、物語體(ものがたりたい)に事實(じじつ)を記して、人情風俗等を美術的に表はし述べたる文書(ぶんしょ)戯作物(げさくぶつ)の科(か)を云ふ、  
 せうせつ(小雪)圖二十四氣の冬の節にて、太陽層の十二月の二十一日頃に當る、  
 せうせつ(小節)圖ささやかなるみさほ、  
 せうせつ(峭絶)圖崖(が)などの切り下げたるが如き、けはしき狀を云ふ、  
 せうせつ(饒舌)圖ベチャベチャしゃべるコト、多辯(たべん)の科(か)を云ふ、  
 せうせん(少選)圖わづかの時間。しばらくのあひだの科(か)を云ふ、  
 せうせん(小戦)圖一寸(いちゆん)した戦ひ、小せりあひの科(か)を云ふ、

せうせ、せうた  
 せうせん(哨船)圖軍隊語にて、見張(けんじやう)の科(か)を云ふ、  
 せうせん(惘然)圖やつれて元氣なく、すこすこしてゐる狀を云ふ、  
 せうせん(蕭然)圖物さびしき狀を云ふ、  
 せうせつか(小説家)圖小説を書く人。小説作者の科(か)を云ふ、  
 せうせきせい(硝石精)圖藥の名、硝酸(けつさん)の科(か)を云ふ、  
 せうせきくわい(消石灰)圖生石灰(せいじやく)に水を注(つ)ぎて、水と石灰(せいじやく)と和合して生じたる、白色の粉末(こな)をなせるもの、稱、  
 せうそ(蕭楚)圖物さびしきさま、  
 せうそ(蕭疎)圖まばらなるコト。ちみつならざるコトを云ふ、  
 せうそ(樵薪)圖薪(き)を伐り、草を刈るコト、又は其れ等のコトをなす人、  
 せうそく(消息)圖たより。おんしん。おとづれの科(か)を云ふ、  
 せうそく(饒足)圖十分なるコト。まんまくなるコト。不足なきコト、  
 せうそくふん(消息文)圖手紙の文章、  
 せうた(饒多)圖多く。あまた、  
 せうたい(小队)圖軍隊の編成の名にて、歩兵工兵は六十餘人を以てなり、砲兵

は砲二門より成り、騎兵は五十人餘(り)より爲る。小人數の一團(ひとぐん)の稱、  
 せうたい(招待)圖人を招きて、せりもちをなすコトを云ふ、  
 せうたい(招提)圖寺の科(か)、  
 せうたい(昭代)圖なまされる御世。太平の世の科(か)を云ふ、  
 せうたい(小闘)圖小戦に同じ、  
 せうたい(抄奪)圖かすめうばふ、  
 せうたい(瀟脱)圖俗氣をはなれて、さつぱりさしてゐるコトを云ふ、  
 せうたい(小膽)圖きもだまの小さきコト度量の狭きコトを云ふ、  
 せうたい(笑談)圖わらひばなし、おどけばなしの科(か)を云ふ、  
 せうたいけん(招待券)圖招待なしたる標(ひょう)として渡し置く切符(きりふ)、  
 せうたいじやう(招待狀)圖人をまねき迎(むか)ふ案内狀の科(か)を云ふ、  
 せうち(沼池)圖ぬまさいけ、  
 せうち(招致)圖まねく。よびよせる、  
 せうちよ(昭著)圖明らかになりしきコト。特にきはたつコト、  
 せうちよ(少女)圖女子の子供の科(か)。年のゆかぬ女。乙女(おんな)、  
 せうちん(銷沈)圖さへて無くなる。影(かげ)を消(け)した、せうち

も形(かたち)も無くなるコト、  
 せうちやち(消長)圖のびるさちちむむと轉じて盛(さか)なるさ衰(し)えるコト、  
 せうちやち(小腸)圖腸の名稱にて、胃(い)液の吸収は此の部にてなす、  
 せうちゆち(笑中)圖笑ひ顔(かほ)心の中に笑つてるコトを云ふ、  
 せうちゆち(燒酎)圖酒の糟(か)又は腐敗(ふかい)したる強き酒、  
 せうちよく(詔勅)圖天皇陛下の仰(おんが)せ、命令(めいれい)の科(か)を云ふ、  
 せうちよく(峭直)圖極めて正しきコト、際立(さだ)つてまっ直(ちか)なるコト、  
 せうちやちふ(少丈夫)圖思慮に乏(ひ)しき小人の科(か)を云ふ、  
 せうちゆち(燒酎)圖焼酎を油の代用として、もやしたる火の科(か)を云ふ、  
 せうちよふち(少女風)圖雨の降る前に吹く風の科(か)を云ふ、  
 せうちづ(小豆)圖あづきの科(か)を云ふ、  
 せうてい(少弟)圖年のゆかぬ弟、  
 せうてい(逍遙)圖遠(とほ)なるコト。遠き狀を云ひ表はす語、  
 せうてり(蕭條)圖物さびしく陰氣なる狀を云ふ、  
 せうち、せうち

せうてん(小敵)圖いさゝかのてき。小人數の敵の科(か)を云ふ、  
 せうてつ(沼鏡)圖砂(すな)の混(ま)りし鏡(かがみ)より出づるより此名あり、  
 せうてん(燒點)圖光線が反射して、一ヶ處に集まる其の點の科(か)物の集まる處、又は人の注意の集まるところ、  
 せうてん(焦點)圖燒點に同じ、  
 せうてん(小傳)圖概略(がいりやく)を記したる傳記、  
 せうてんち(小天地)圖人間界の事を、天地に喩えて云ふ。せまき區域(くわいせき)の科(か)小き世界、  
 せうど(焦土)圖やけ土。やけたるあま、  
 せうど(小奴)圖こやつこ。小ぞう、  
 せうどち(抄頭)圖樹木のいただき、即ちこぶえの科(か)を云ふ、  
 せうどち(抄冬)圖冬のすそ、晩冬(ばんとう)、  
 せうどち(小童)圖こども。わらべ、  
 せうどく(消毒)圖毒氣(どくき)を去るコト、  
 せうどくしつ(消毒室)圖消毒法を行ふ室(むろ)の科(か)を云ふ、  
 せうどくはふ(消毒法)圖傳染病を豫防(よぼう)する目的にて、病毒を殺滅(ころせつ)する方法(か)を云ふ、  
 せうどくやく(消毒薬)圖毒氣(どくき)を消(け)す、せうち、せうち



せうな、せうの

(○)す薬の總稱。  
 せうな(笑納) 図笑ひつつなをさめる。人  
 に納(せ)めくれまふ云ふコトを敬ふて  
 云ふ語、例は御笑納下され度など、  
 せうな(小腸) 図腸の一部分、頭の後  
 の方に在る腸の部を云ふ。  
 せうに(小兒) 図をさなごや、こ、  
 せうに(少貳) 図昔時の官名、大宰府の次  
 官、即ち大貳の次きの位置。  
 せうにん(小人) 図小き人。思慮分別の  
 劣りの足らざる部(○)しき人のコトを  
 云ふ。  
 せうにくわ(小兒科) 図小兒に發する諸種  
 の疾病を治療する醫術。  
 せうねつ(焦熱) 図甚だしき熱(○)のコト  
 せうねん(少年) 図男の子供のコト。年の  
 ゆかぬ男子。  
 せうねつざい(消熱劑) 図熱をさますに用  
 せうねんじき(少年時期) 図少年のコト、  
 即ち男子十五歳より二十五歳まで、女  
 子十四歳より二十五歳までを云ふ。  
 せうねつちこく(焦熱地獄) 図八地獄の一  
 火の盛(○)んに燃(○)てる所を云ふ。  
 せうねんじさい(少年時代) 図少年時期(○  
 年)に同じ。  
 せうのち(小農) 図少しの田地を持ちて家

せうは、せうひ

内だけにて耕作(○)に従事せる農夫の  
 コトを云ふ。  
 せうは(請駕) 図おしるコトのしるコト  
 せうは(招牌) 図看板(○)を、まねき、  
 せうは(椒房) 図皇后の御居室のコトを  
 申す。轉じて皇后の御事を申す。  
 せうは(小邦) 図小き國。  
 せうは(小房) 図小き室、へや。  
 せうは(焼亡) 図やけてなくなるコト。  
 せうは(消防) 図火事を消(○)すコト。○  
 消防夫の略。  
 せうは(消防夫) 図火事を消(○)す人  
 せうは(消隊) 図消防隊を以て組  
 織せる一部隊のコトを云ふ。  
 せうは(小婢) 図こまづかひ。小をんな。  
 せうは(小徴) 図いさ、か。わづか。  
 せうは(焦眉) 図眉毛(○)も燃(○)なんさせる  
 こと云ふ意より出で、危急のいさも迫  
 り来りしを云ふ。  
 せうは(焦尾) 図琴(○)の異名。  
 せうは(小弼) 図昔時の官名、彈正兼の  
 次官のコトを云ふ。  
 せうは(小品) 図ちよつとした品。  
 せうは(小品文) 図一寸(○)とした

せうふ、せうへ

事實(○)を書き表はしたる短文章、  
 せうふ(少婦) 図小むすめ。年の若き女子  
 のコトを云ふ。  
 せうふ(樵夫) 図やまかづきこり、  
 せうふ(饒富) 図ゆたかなるコト。富貴な  
 るコトを云ふ。  
 せうふ(小腹) 図小き腹。轉じて度量  
 (○)の狭(○)きコト又は其人(○)下腹(○)  
 のコト、即ち腹の下部。  
 せうふ(脩粉) 図身仕度(○)を爲すコト  
 ○裝束(○)をつけるコト。  
 せうふ(燒焚) 図やく、もやす。  
 せうふ(小分) 図小き別(○)つコト、小  
 わけのコトを云ふ。  
 せうふ(小部隊) 図小人数の兵士を以  
 て、組立たる一部隊の稱。  
 せうへい(小兵) 図わづかばかりの兵卒、  
 せうへい(哨兵) 図軍隊語にて、歩哨に立  
 つ兵士、即ち見張(○)りの兵士。  
 せうへい(招聘) 図禮を盡(○)して人をま  
 れきよぶコト。  
 せうへい(峭壁) 図切りたるが如くするご  
 くなつてる崖(○)のコト。  
 せうへい(小便) 図小便、尿(○)、ゆばり、  
 せうへい(哨兵線) 図軍隊語にて、哨  
 兵をまくばりたる其の範圍(○)のコト

せうは、せうひ

を云ふ。  
 せうは(召募) 図よびあつめるコト。まね  
 きよせるコトを云ふ。  
 せうは(銷磨) 図こすれて無くなるコト。  
 すれてへるコトを云ふ。  
 せうまい(少妹) 図小き妹。もうと。  
 せうまん(小満) 図二十四氣の一なる。夏  
 の節のコトにて、太陽層の五月二十一  
 日に當る。  
 せうまきや(照鏡鏡) 図地獄に在る想像  
 上の鏡、此に映(○)せば魔ものさ難ごも  
 本性が忽ち現(○)はる、と云ふ靈鏡。○  
 轉じて匿(○)れてる秘密(○)、悪事をあ  
 ばき出すこと云ふ意を表はすに用ゆる語。  
 せうみん(小民) 図しじもの小もの。  
 せうみやち(小名) 図徳川時代に、大名よ  
 り領分地の少なりしものを云ふ。  
 せうめつ(焼滅) 図やきつくす。やけてな  
 くなる。  
 せうめつ(消滅) 図あさ方(○)もさめず無  
 (○)なるコトを云ふ。  
 せうもち(消耗) 図なくする。使ひすつ。  
 せうもん(謙門) 図山門(○)に同じ。  
 せうやく(硝藥) 図火藥のコト。  
 せうやく(抄譯) 図要點をぬきて、ほんや  
 くするコト、又は其のもの。

せうは、せうひ

せうゆ(詔諭) 図天子のみことごり。  
 せうゆ(小勇) 図けちな勇氣、匹夫の勇。  
 せうゆ(小用) 図小便に同じ。  
 せうゆ(憊容) 図やつれてるコト。  
 せうゆ(小恙) 図一寸さした病氣。  
 せうら(小牢) 図羊(○)のいけにへなそ  
 なへたる、御馳走(○)を云ふ。  
 せうらん(焦爛) 図焼けてたれるコト。  
 こげてくさるコト。  
 せうらん(照覽) 図くはしく見る。あきら  
 かに見るコト。○神佛の見て居らる、と  
 云ふコトを云ふ語。  
 せうらん(笑覽) 図笑ひつつ見るコト。○人  
 に見せるコトを敬(○)ぶて云ふ語。  
 せうらん(擾亂) 図世の中のみだれるコト  
 世間のさばかしきコト。  
 せうり(小利) 図すこしばかりの利益。  
 せうり(小吏) 図こやくにん下役人。  
 せうり(笑留) 図笑納(○)に同じ。  
 せうり(小流) 図巾(○)のせまき川。  
 せうり(峭立) 図山のけはしくそびへ立  
 つてるコトを云ふ。  
 せうり(焦慮) 図思をこがす、心をなや  
 ますコトを云ふ。  
 せうり(少領) 図昔時の官名にて、現  
 今の郡長のいさき職。

せうふ、せうへ

せうり(少量) 図量(○)の少なきコト、  
 分量のすくなきコト。  
 せうり(音略) 図はぶくコト。  
 せうり(抄略) 図うばひさる、かすめ  
 取るコトを云ふ。  
 せうる(焦類) 図物を食(○)て生てる者  
 の總稱、生物、動物。  
 せうれい(詔令) 図みことごり。  
 せうれい(鶴鶴) 図鳥の名、みささぎ。  
 せうれい(蛭蟻) 図虫の名、むきわらじみ。  
 せうろ(小路) 図細き道(○)。小みち。  
 せうろ(謙樓) 図高樓に同じ、やぐら。  
 せうろく(小祿) 図ふち米の少なきコト。○  
 轉じて薄給(○)のコトを云ふ。  
 せうろく(抄録) 図要點を書き抜くコト。○  
 抜き書きせしもの。  
 せうわ(笑話) 図わらひばなし。おどけ物  
 語(○)のコトを云ふ。  
 せうわ(小話) 図ちよつとした話。○立話(○)  
 (せせお)  
 せお(背負) 圖動者になふ、かつぐ。  
 (せせか)



せかい(世界) 圀世の中。浮世(うきよ) 地球  
 ①同じ種類の物の範圍内の稱、例ば人間界。植物界など。芝居にて演じつある其の狂言のこトを云ふ特稱。  
 せかい(青樓) 圀ふなだのこト。  
 せかい(世界的) 世界に關係したるこト。云ふ意を表す語。  
 せかい(わん) 世界觀。圀世の中の狀態を察し見るこトを云ふ。  
 せかい(だめ) 世界定。圀芝居にて其の演すべき狂言を取り定めるこト。  
 せかい(ちゆち) 世界中。圀世の中のこト。地球上全體のこトを云ふ。  
 せかい(餓鬼) 圀さもらふ人のなき死者の靈魂を供養するこト。單に死者の靈魂を吊ふこトを云ふ。  
 せかい(急) 圀動いそがす。せくようにす。せが(背) 圀西洋仕立の書物の綴(づ)り目に、あてである半(か)のこト。  
 せが(督) 圀勸無理に望む。強(か)て請ふ。切に望む。  
 せが(骨) 圀我が子のこトをへり下(くだ)つて云ふ語。子供をあざけつて云ふ語。男根(おんどこ)の稱、俗語なり。

せき(石) 圀礦物の一、即ちいし。いは堅(かた)きこト。石(いし)にて作りたる一種の樂器、管(くだ)の類。樂器の音の振ひ揚(たか)げらぬ狀を云ふ語。樹目(じゆもく)の稱、一石は一斗の十倍。  
 せき(石) 圀木像(ぼくざう)を安置すべく石にて作りたる室(むろ)の石むろ。  
 せき(碩) 圀十分(じゆぶん)に充(み)て大なるこトを云ふ。例は碩學。碩德など。  
 せき(跼) 圀足のうらのこトを云ふ。  
 せき(夕) 圀ゆうぐれ。日ぐれ。くれがた。ゆうべのこトを云ふ。  
 せき(汐) 圀海水の水、うしほ。ひきしほのこト。  
 せき(昔) 圀むかし。いにしへ。往時(わうじ)。  
 せき(踏) 圀ささきこト。踏(ふ)に通ず。ふむふみつく。うやうやく敬(か)ふ意を表はすに用ゆる語。  
 せき(踏) 圀かす。踏(ふ)みしく。  
 せき(惜) 圀おしく思ふ。おしむ。大切になす。あはれむ。同情するこト。  
 せき(籍) 圀書物。本(ほん)文書(ぶんしよ)月籍(げつせき)帳(ちやう)の稱。或る物事を其から其へこトりつたふるこト、即ちしきふらすこト

せき(藉) 圀入り亂れ雜(ご)るこト。雜(ご)りて調(てい)のぼさるこト。しきものこす。しく。席(せき)助(すけ)頼(たの)り。つしみ敬(か)ふ狀を云ひ表はす語。  
 せき(席) 圀敷物。こた。座敷(ざしき)、室(むろ)坐るべき一定の場處(ばう)即ち座席(ざせき)しくこト。安(やす)んずる。安(やす)ならぶ。つらぬ。  
 せき(席) 圀藁(わら)にて作りたる敷物。むしる。こた。大なる狀(ざう)を云ふ語。  
 せき(膳) 圀肉類の干(か)したる物の稱。長(なが)し。久(ひさ)しきなり。  
 せき(赤) 圀染色(ぞうしき)の名、あかきこト。あか。あかき色に染めたるもの。からつば。空(から)しきこト。懸(か)さす飾(かざり)らす。そのまゝ云ふ意を表はす語。  
 せき(迹) 圀在りにし物事のあと。足(あ)りて爲す。即ちしたがふ。其の事實(じじつ)に依りて考(か)ふ。行(ゆ)ひ。行(ゆ)ふたる事柄(じぶ)總(くわ)て形(かたち)のありて見(み)得(え)らるべきもの。こトを云ふ語。  
 せき(跡) 圀あさ、其の意義(いぎ)迹(あと)に同じ、委(あ)しく前條(ぜんじょう)を見(み)られよ。  
 せき(斥) 圀しりぞく。うさんする。遠(とほ)ざく。追(お)ひやる。うかがふ。さか

せかい、せかれ

せき 石、碩、跼、汐、昔、踏、惜、籍

せき 藉、席、膳、跡、斥 一〇八〇

る。はかりみる。望(のぞ)み見る。特(とく)に戦(いくさ)争(あ)ひの容子(ようし)を、さぐるこト。即ちものみ。せき(う)ゆびさす。さししめす。廣(ひろ)々としてあり。ひろし。  
 せき(漸) 圀米を洗ふこト。かしぐ。  
 せき(析) 圀こぼす。わる。さく。くづす。分(わ)つ。ほごく。  
 せき(脊) 圀せ。せなか。せ骨(せぼね)の連(つ)なれるが如(ごと)き狀(かたち)をなせるもの。稱。道(みち)理(り)。すちみち。「はぶく。へらす」  
 せき(瘠) 圀やせる。おさらふ。のぞく。  
 せき(瘠) 圀あれ地(ち)やせ地(ち)。  
 せき(鶴) 圀鳥の名、せきれいのこト。  
 せき(腑) 圀やせるこト。やせたる人(ひと)死(し)したる人(ひと)又は動物(どうぶつ)の骨(ほね)を云ふ。  
 せき(躡) 圀忍(しの)び足(あし)にて歩(あ)むこト。ぬき足(あし)にて歩(あ)むこトを云ふ。  
 せき(蹟) 圀迹(あと)に同じ。其條(じじょう)を見よ。  
 せき(蹟) 圀圀川の石(いし)はら、即ち川原(かわはら)水邊(みづべ)の砂(すな)の原(はら)のこトを云ふ。  
 せき(績) 圀綿(わた)を延ばして糸(いと)とす。つむぐ。てがら。い。さ。は。し。わ。ざ。つ。つ。く。こ。ト。出来(でき)上(あ)るこト、即ち成功(せいこう)するこト。  
 せき(積) 圀つむ。つもる。かさ。地面(ぢめん)の坪(つら)敷(し)。  
 せき(尺) 圀尺度(じちど)の名稱、一尺(いちせき)は一寸(いちじゆん)の十(じゆ)倍(ばい)。

陪(ばい) 圀さし。ものさし。さしがれ。長さ(ながさ)。高さ(たかさ)。はかる。  
 せき(隻) 圀一つ(ひとつ)云ふこト。對(たい)に對(たい)して其(その)一方(いつぱう)のもの云ふ。  
 せき(皙) 圀男女(なんにょ)の肌(かわ)の色澤(いろざわ)の白(しろ)きこトを云ふ。はだしらし。  
 せき(戚) 圀みうち。即ち親戚(しんせき)仲(な)のまきこト。したしきこト。うれふる。いたむ。かなしむ。おこる。いかる。武器(ぶき)の一種(いっしゆ)まさかりを云ふ。  
 せき(感) 圀うれひかなしむこト。  
 せき(蹠) 圀足のうら。ふむこト。  
 せき(錫) 圀かたなぬぐこト。  
 せき(錫) 圀金屬(きんごく)の名、す。赤銅(せきどう)の僧(そう)の用(もち)ゆる鐵製(てつせい)の環(わん)の、はめある一種(いっしゆ)の杖(ぼう)即ちしやくちやう。たまたま。たまたま。  
 せき(溷) 圀海水(かいすい)のさし引(ひ)に依(よ)り、或(ある)は浸(ひ)され或(ある)は干(かわ)る。海岸(かいがん)の土地(ち)の稱、即ちかた、ひかた。  
 せき(寂) 圀静(しず)かなる。物(もの)さびしきこト。特に僧侶(そうりよ)の死去(しき)せるこトを云ふ。  
 せき(螫) 圀虫(むし)がさすこト、即ち虫(むし)が刺(さ)して毒汁(どくじゆ)を入れる。轉(ま)じてそのこた。害(がい)するこトを云ふ。  
 せき(釋) 圀ほごく。はなす。ゆるす

放(は)つ。消(け)る。けす。打ちやる。すつる。さる。散(ち)らす。さかす。あかす。譯(やく)を述(の)ぶ。處置(ちぢ)す。さばく。をさめる。なまむ。  
 せき(炙) 圀肉類(にくるい)などを火(か)にのせてやく。あぶるこト。むつましふして互(たが)ひにし。たし。近(ちか)よるこトを云ふ。  
 せき(關) 圀道中(だいちゆう)の要處(やうち)に門(かど)を設(た)け、役所(やくしよ)を置(お)きて、通行(たうじゆう)人の身分(身分)舉動(きゆうどう)等を調(しら)べたる處(ところ)即ちせきしよ。總(くわ)て支(し)へ。遮(し)るこト。又はものを云ふ語。相撲(すもう)取(とり)の、中の第一位(だいいち)の稱、即ちせきしよ。總(くわ)て團圓(だんげん)又は一(いつ)群(ぐん)中の長(なが)のこトを云ふ。極端(ごくたん)と云ふ意(い)を表(あらわ)す語、即ちせきのやま。  
 せき(咳) 圀むせびせくこト。病氣(びやうき)の爲(ため)にはげしく出る。せき。  
 せき(持) 圀圍碁(いご)の語(ご)にして、持(も)ち合(あ)ふ。云(い)ふ意(い)より出(で)たるもの、互(たが)ひに攻(せ)め圍(とり)みたる一部分(いっぶんぶん)に對(たい)つて、先(ま)に石(いし)を下(くだ)したる方が、不利(ふり)となりたる時に、双方(ふたう)が石(いし)を下(くだ)さず、勝負(しょうぶ)なしとして打ち棄(す)て置く。盤面(ばんめん)の場處(ばう)のこトを云ふ。  
 せき(惜愛) 圀をしがる。なむむ。  
 せき(積惡) 圀かさなりたる惡事(あくじ)。

せき 漸、析、脊、瘠、蹟、績、尺

せき 隻、戚、蹠、錫、溷、寂、釋

せき、せきあ 炙、關、咳 一〇八一



せきい、せきえ

せきい(昔遊) 図むかしあそびしコト。むかしのあそび。  
せきい(積憂) 図かさなるなげきコト。  
せきいつ(尺一) 図昔時支那にて、詔勅を寓すに長さ一尺ある版を用ひたるより出で、詔書のコトを云ふ。  
せきいん(戚姻) 図妻のちすち、即ち妻方の親類のコトを云ふ語。  
せきいん(借陰) 図時間をむだに過すコトを借(か)みて奮勉するコト。  
せきいん(積陰) 図日々天氣の晴(は)れざるコト。曇天のつらくコト。  
せきいん(石印) 図水晶や蠟石(ろうせき)などに刻(う)りたる印形のコトを云ふ。  
せきいちふち(石郵風) 図海洋上にて俄かに吹き起る暴風のコトを云ふ。  
せきうち(積雨) 図ながあめ。りん雨。  
せきうちつ(積鬱) 図不平のかさなるコト。つもれるうらみ。精神のふさぎ勝(か)なるコト。日々天氣の晴れやらぬコトを云ふ。  
せきちん(積雲) 図夏期に於て表はる、珠(たま)の如き雲の、積(た)なりて山の如き形をなせる雲の稱。  
せきえい(石英) 図礦物の名、水晶、めのう等の總稱にして、其の種類頗る多く、百

せきえ、せきか

七十餘もありと云ふ。  
せきえい(隻影) 図只だ一つのかけ。  
せきえき(蟪蛄) 図虫の名、さかげ。  
せきえん(積怨) 図つもるうらみ。かさなる遺恨(い)のコトを云ふ。  
せきえく(石屋) 図石造の家屋。  
せきかい(石階) 図石にてたみし段々、即ち石のきざしのコト。  
せきかい(石壑) 図山中の谷川などに棲むかに、山がにのこト。  
せきかち(石交) 図石の如き堅き交(あ)つと云ふ意にて、極めて親密なる交際。  
せきかち(石坑) 図石たみ、みせし穴。  
せきかち(石膏) 図礦物の名、一名を油石(あぶらいし)と云ふ。質(し)堅からず、光澤(あ)ある無色透明(あ)の石なり、多く美術的の彫刻の材料、又は装飾品又は薬用として用途頗る廣きもの。  
せきかち(石紅) 図石造の橋、いしばし、せきがき(席書) 図集會の席土にて書畫(か)びなどをかくコト。  
せきかく(刺客) 図しかくに同じ、人を暗殺(あ)せんとさくはだつる人。  
せきがく(積學) 図學問の功を積(た)みて、世の中を益するコトを云ふ。  
せきがく(碩學) 図博(た)く學問を修めて

せきか、せきき

るコト、又は修めし人。大學者。  
せきかつ(釋揚) 図故事にて官途に就く、仕官するコトを云ふ、庶民が褌衣を釋(は)しと云ふ意より出づ。  
せきがん(威顔) 図うれひ顔。物案(ぶ)じなるかほつきのコトを云ふ。  
せきがん(石籠) 図石にて造りたる塔(た)塔形をなせる石碑の稱。  
せきかんたち(石敢當) 図九州地方にて、路の曲(ま)り角(かど)、又は突き當りなどに立たる建石(た)に刻(う)り付けられたる文字にて、當(あ)る所敵なしと云ふ意を表はすものなりと云ふ、支那より傳はりし語。  
せきき(夕暉) 図ゆうやけ。ゆうげん。  
せきき(石基) 図石で造りたるごたい。  
せきき(石器) 図石でこしらへたる器物、又は石で造りたる器械(が)。  
せききふ(石級) 図石のだんだんのコト。  
せきやち(施行) 図人に物品を與ふるコト物を施(た)すコトを云ふ。  
せきやく(隻脚) 図片脚(か)び。一方の足、せきやく(赤脚) 図腰(こ)より下即ち脚(あ)をあらはしてゐるコトを云ふ。  
せきやく(積極) 図消極に對しての語にて、正しきコトを意味(い)する語、委し

せきく、せきわ

く云へば働(は)くコト、續けるコト、進むなど云ふ、總て現在實在(じ)の意を表はすに用ゆる語、即ち陰に對するの陽なり。  
せきくじ(石器時代) 図古人智の毫も發達せざる時に、石を用ひて刀劍(や)び、其の他日用の器具を製して使用せし時代の稱。  
せきくよくて(積極) 図總て物事が正しく順調(じ)に進み行き、又は活動(か)する状態(じ)を云ふ。  
せきくよくしゆき(積極主義) 図進歩發達精力集中等の發展を主とする主義のコトを云ふ。  
せきくち(開口) 図ぬせきの水の落ち口のコトを云ふ、即ち堰口。  
せきくつ(石窟) 図いはや。岩くつ。  
せきくわ(石火) 図石と鐵(て)と打ち合ひて出る火(あ)轉じて極めて僅かの時間、つかぬ間(ま)に生ずる物事の變化のこトを云ふ語。  
せきくわ(碩果) 図大なる果實(くだ)。  
せきくん(夕暉) 図夕まぐれ。夕方。  
せきくわい(石灰) 図石ばいのコト。  
せきくわい(石塊) 図石のかたまり。ころころ石。ころた石のコト。

せきく

せきくわく(石櫛) 図石にて造りたる櫛、即ち石のひつぎのコトを云ふ。  
せきくわく(尺蠖) 図昆虫の名、しやくこり虫のコトを云ふ。  
せきくわん(石棺) 図石にて造りたる棺桶(か)。  
せきくわん(石のひつぎ) 図石のひつぎ。  
せきくわん(席巻) 図席(せ)を巻き行く如く、偉大なる勢にて片端(か)より土地を侵略するコトを云ふ。  
せきくわいど(石灰土) 図石灰(せ)の混合せる土のコトを云ふ。  
せきくわさい(石花菜) 図ころてん草の一名、此の草を煮きてころてんを製す。  
せきくわへち(石華表) 図石にて造りたる鳥居(い)のコトを云ふ。  
せきくわいがん(石灰岩) 図石灰石が、集合して成り立ちたる岩の稱。  
せきくわいする(石灰水) 図生石灰(せ)を水にこかして、其の上澄(あ)を取りたるもの、稱。  
せきくわいせき(石灰石) 図石の一種、之を碎(くだ)きて、燃(た)して石灰となすもの、化学上より云へば、炭酸(あ)石灰(せ)より成り立てる石。  
せきくわいどち(石灰洞) 図石灰岩が地下

せきく、せきい

水の爲めに洗はれて、長き年月の中に自然と掘りさらばれて生じたる空洞の稱。  
せきくわいゆち(石灰乳) 図生石灰(せ)と水とを混(ま)して強く振りて、生じたる白色の乳の如き物。  
せきけい(石運) 図小石の多くある細き道(みち)の石、ころ道のコトを云ふ。  
せきけち(石橋) 図石材を以て架(か)たるはし。いしばし。  
せきけつ(石碁) 図石のたてふだ。石ぶみ。  
せきけん(席巻) 図席巻(せ)に同じ。  
せきけん(石鹼) 図牛豚類の脂肪(あ)と苛性曹達とを混せて煮きて、其中へ食鹽水を加へて固めたるもの、油氣を去り、汚物を洗ふに用ゆ。  
せきけつめい(石決明) 図介の名あわび。  
せきこ(石罅) 図石に生ぜしすきま。  
せきこち(積功) 図てがらのかさむコト。多くの功績(い)のコト。  
せきこち(石工) 図石屋の職人、いしく。  
せきこち(箱口) 図云ひわけをなすコト。云ひわけの種となすコト。  
せきこち(斥候) 図物見(あ)敵の容子を密(ひそ)かに探るコトを云ふ。  
せきこく(石刻) 図書畫を石に刻るコト。

せきく、せきい



せきし

石に刻りたる書畫を其のまゝ印刷せし物、いすすり、

せきこつ(脊骨) 図脊のほねをせられ、

せきこむ(急込) 固動あせぐ、いそぐ、いら

せきこむ(咳込) 固動つりけさまにはげし

せきさい(釋菜) 固略式の釋典(註)の稱、

せきさい(赤菜) 固野菜の名、ほうれん草

のこトを云ふ、

せきさい(石材) 固石細工(石細工)、又は建築

用の材料となす石を云ふ、

せきざち(石造) 固總て石材を以て建築、

又は製作するコト、又は製作なしたる

もの、コトを云ふ、

せきざち(石像) 石に刻(き)りたる肖像、石

佛(石佛)などの類を云ふ、

せきざつ(刺殺) 固突き殺す、さし殺す、

せきざん(積算) 固まとめて計算するコト

せきし(赤子) 固あかこ、や、こ、人民の

コトを云ふ、即ち陛下の赤子、

せきし(尺紙) 固少しばかりの紙、一寸(寸)

とした文章のコトを云ふ、

せきし(惜死) 固生命(命)をおしむコト、

せきし(席次) 固せきじゆんのコト、

せきし(昔時) 固むかしのコト、以前、

せきし(積聚) 固あつむるコト、あつめ

せきし

つむコトを云ふ、

せきしち(瘠瘦) 固やせる。おころへるコ

せきしつ(石室) 固石造の部屋、岩屋、

せきじつ(積日) 固日数を重ぬるコト、

せきじつ(昔日) 固むかし、

せきじつ(夕日) 固ゆうひ、

せきしふ(積習) 固長き間のしきたり、久

しきならはせのこトを云ふ、

せきしゆ(隻手) 固片方の手、

せきしゆ(赤手) 固物を携へぬ手、からて

むだてのこトを云ふ、

せきじゆ(碩儒) 固大學者のコト、

せきしよ(尺書) 固一寸(寸)したる文書、

一寸としたる手紙のコト、

せきしよ(關所) 固昔時道中の要處に在り

し通行人を見張る處の稱、是非とも通

らねば目的の處へ行けぬ所、即ち關門

(カワヅ)、

せきしん(赤身) 固まるばだか、

せきしん(赤心) 固まごころのこト、

せきしん(石心) 固堅固(こ)なる精神、

せきじん(昔人) 固むかしの人、古人、

せきじん(籍甚) 固よき評判のさかんに廣

(こ)まるコト、ほまれ、著るしく知れ

渡れるコト、

「偉人(偉人)」

せきじん(碩人) 固大人物、すぐれたる人。

せきし

せきしやち(石匠) 固石屋の職人、石工、

せきしやち(石莖) 固水草の名、重(重)に水

邊の石上に生ず、葉は細く長くして、兩

端(かた)は薄(うす)けれど中央(ちゆう)の部

は厚し、多く一本の根より群(ぐん)り生

ず、色は青し、冬に至るも枯れず、夏の

初めに莖(こ)を生じ其の尖(せん)に一種の

香氣ある土筆(つ)の如き花を咲(さ)す、

せきじやち(石上) 固石のうへ、

せきじやち(席上) 固座敷(ざ)に居る其の

場處(ば)を云ふ、

せきじやち(斥攘) 固しりぞけてよせつけ

ぬコト、のけものさするコト、

せきじゆち(石絨) 固石綿(せ)に同じ、

せきしよく(赤色) 固あかき色、

せきしやち(石莖) 固草の名、石莖(せ)

に同じ、

せきしゆち(石首魚) 固魚の名、いしも

せきじやち(赤繩) 固支那の唐の章固(て)

ま云ふ人の故事より出たる語にて夫婦

の縁(ゆかり)のこトを云ふ、

せきじふじしや(赤十字社) 固戦時に於て

敵味方の區別なく、負傷したる軍人

を、親切に治療(て)し仕合ふ爲めに、世界

各國が、同盟して設けたる社を云ふ、

せきしよやち(關所破) 固昔時道中の要

せきし

處に、關所の設けられてありたる時に、

通過すべき手形所持せぬ者が、欺き

て關所を通りたるコト、又は通りたる

人を云ふ、

せきしよち(石鐘乳) 固礦物の一種

つづら石のこトを云ふ、

せきする(積水) 固たまり水のこト、

せきする(積翠) 固山や林の青々として

コトを云ふ、松の樹の異名、

せきする(脊髓) 固腦と連(つ)なつて神

經中樞にして、身體中の貴重なる機關

の一、脊推骨内に在りて、灰白色の細胞

と纖維(せん)とより成れるもの、

せきすん(尺寸) 固少しばかりのこト、い

さ、かなるコトを云ふ、

せきするこつ(脊推骨) 固せられ、

せきするびやち(脊髓病) 固脊髓に生ずる

諸種の疾患の總稱、

せきすんのこち(寸尺功) 固わづかばかり

のてから、いさ、かなる功勞、

せきせい(赤誠) 固まごころのまま、正

しき心、即ちまごころのこト、

せきせい(石精) 固精製せし石炭油、

せきせち(夕照) 固夕日(ゆ)のゆうばえ、

せきせき(寂寂) 固いささびしきさま、

物しづかなるさまを云ひ表す語、

せきせ

せきせき(藉藉) 固亂れ雑つてるさま、

せきせき(威威) 固いたみうれふるさま、

せきせつ(積雪) 固積りたる雪(ゆ)を、

せきせん(赤洗) 固すばなしのこト、

せきせん(石簾) 固石に生ぜし、け、

せきせん(積善) 固善き行をつみかさぬる

コト、善行の多きコト、

せきせん(貴善) 固朋友が互ひに善き行を

しあふべく氣をつけ合ふコトを云ふ、

せきせん(寂然) 固静かなるさま、物さび

しき状(じ)を云ひ表す語、

せきせん(晰然) 固あきらかなるさまを云

ひ表す語、

せきせんのよけい(積善餘慶) 固善き事を

多く爲せば、其の酬(む)として必らず

善き事の多く来るこトを云ふコトを云ひし

語、

せきそ(尺素) 固尺紙(せ)に同じ、

せきそ(石鼠) 固虫の名、ケラの異名、

せきそく(石鐵) 固石にて造りたるやじり

せきそく(赤族) 固一族をみなころしにす

るコト、一族をれたやしにするコト、

せきそつ(赤卒) 固虫の名、赤さんば、

せきそろ(節季候) 固昔時年の暮に、人家

の軒(か)に立ちて、セキノロと云ひつゝ

金錢を乞ひし一種のこつじきの名、

せきた

せきた(書蹟) 固雪駄(せ)の記り、

せきたい(石帶) 固昔時東帯(た)の時に靴

(か)の腰につけたる帯(お)の稱にて、革

(かわ)に漆を塗りしもの、此に珠玉(たま)の

めなう、蠟石(ろう)などを以て美しき飾(か)

りを施せるもの、

せきたい(石蓋) 固盆栽物(ばい)を飾るべ

く載せる蓋、唐木にて製せる形種々あ

り、こにはのこト、

せきたい(積堆) 固たかく積み重(かさ)なる

コトを云ふ、

せきたい(斥退) 固しりぞける、よせつけ

ぬ、おひやるコトを云ふ、

せきたち(赤道) 固地球の中央にして、南

北の兩極即ち地軸と九十度の角度を以

て、地球を一周せるこトを想像上の線

にて、此の線の部は太陽の光線の直下

する所に當る、其の周りは實に一萬百

六十四里弱(せ)ありと云ふ、

せきたつ(急立) 固せかす、いそがす、

せきたふ(石塔) 固墓石(は)に石にて造り

たる五輪の塔、

せきたん(石炭) 固黒色を呈せる光澤(つ)

ある一種の石、此は數百年來土中に

埋(か)もれたる木が、化學的の變化を起

して、炭(すす)化せしもの、之(こ)に火を移



せきた、せきち

せば、一種の臭氣を放ちつゝ盛んに燃(燃)て強熱を起す。  
せきだん(石壇) 石にて積みし、だんだんせきだんゆ(石炭油) 石油のこト、即ち石臘油を精製したるもの。  
せきだちさい(赤道祭) 軍艦郵船商船等が、赤道直下を通過する時に、赤道の神を祭ると云ふ、一種の船祭(船祭)。  
せきだんかち(石炭坑) 石炭を掘り出す爲めに、山を穿(穿)ちたる穴。其の穴の穿(穿)てる場處の稱。  
せきだんがす(石炭瓦斯) 石炭を或る仕掛(仕掛)に依りて燃(燃)して、生ぜしめたる瓦斯(瓦斯)、之を管(管)にて引きて燃料に供す。一般に燃料として用ひる瓦斯は是なり。石油を燃(燃)した時に生ずる油煙(油煙)の稱。  
せきだんさん(石炭酸) 密薬の名、白色にして光輝ある、針の如き細き結晶(結晶)を爲せる物、一種の臭氣あり、殺菌防腐の特効薬なり。  
せきだちちよくか(赤道直下) 赤道のまつ下に當る、地球上の部分の稱にて、地球上最も熱(熱)き處。  
せきち(石地) 石塊(石塊)の多く混(混)れる地、即ちいしちのこト、

せきち、せきて

せきち(尺地) 田少しばかりの土地。  
せきち(赤地) 田作物(田作物)も何にもなき土地。凶年にて穀物の實(實)らぬ土地。  
せきち(瘠地) 田物を植(植)ゆるも出来ざる土地、即ちやせちのこト。  
せきち(關路) 關所に通ずる道、即ち本街道のこトを云ふ。  
せきち(斥逐) 田をいばらう。おひやるせきち(積蓋) 田つみたくばふこト。つみたくばへ置きたる物を云ふ。  
せきち(石竹) 田草花の名、莖(莖)の高さ一尺乃至三尺、葉は細長く針の如くにして對生す、五六月の頃、莖の頭(頭)に花瓣(花瓣)の裂(裂)たる美しき大なる花を咲す、色は紅白青黄等種々あり。  
せきち(石女) 田石にて造りたる女子の肖像(肖像)子をばらまぬ女。  
せきち(石腸) 田精神、意志の堅固(堅固)なるこトを云ふ。  
せきち(石柱) 田せはれのこト。  
せきち(積重) 田つみかさねるこト。上が上へ積れてあるこト。  
せきて(關手) 田昔時關所を通過する時に差し出したる料金の稱。  
せきて(席亭) 田よせ、せき、  
せきて(尺鐵) 田一寸(一寸)した武器。

せきて、せきて

せきてん(釋奠) 田支那にて天子の勤(勤)められし孔子の祭を云ふ、即ち陰曆の二月上の丁の日に、孔子と其の十哲とを、大學寮に於て、併せ祀られたる儀式のこトを云ふ。  
せきてん(石田) 田石多くして耕作に適せざる荒れ田のこトを云ふ。  
せきてつ(赤鐵) 田鐵物の一種、製鐵に最も欠くべからざる物にて、赤色又は暗赤色を呈する酸化鐵なり、又た時に之の粘土に混じて、赤き泥(泥)の如き觀を呈せるものあり、此れは繪具の材料となる。  
せきて(關戸) 田關所の門のこト。  
せきて(瘠土) 田瘠地(瘠地)に同じ。  
せきて(尺度) 田ものさし。  
せきて(尺土) 田尺地(尺地)に同じ。  
せきて(石燈) 田石ごらう。  
せきて(赤銅) 田合成金の名、しやくごらうに同じ、其の輝を見よ。  
せきて(石燈) 田石のだんだん、石段、せきて(尺腹) 田手紙のこト。  
せきて(積徳) 田よき行ひをかさねるこト。つもりたる徳行(徳行)。  
せきて(關取) 田相撲中の第一位の者、即ち大關(大關)角力士(角力士)のこトを云ふ。

せきな、せきは

普通語 一 群(群)又は團體中に於て、特に勝(勝)れたる人のこトを云ふ、(勝)に肥滿せる女子を、力士に喩(喩)へてあざけりて云ふ語。  
せきぢちゆ(石脂油) 田石炭坑より湧出(湧出)る暗黒色を呈せる一種の臭氣ある油、之を精製して石油を製す。  
せきじん(責任) 田或る事實(事實)に就きて爲さるべからざる義務(義務)のこト。自己の行爲又は監督等より生じたる結果に就きて、その責(責)を引き受くる義務の稱。  
せきにんしや(責任者) 田其の事柄(事柄)に就きて、責任を負ふてる人。  
せきにんないかく(責任内閣) 田責任を負ふてる内閣を云ふ意にて、施政の如何輿論の如何に依りて、進退すると云ふ責任を帯べる内閣。  
せきねん(昔年) 田むかしのこト。  
せきねん(積年) 田年月をのみしこト、即ち長の年月、年來(年來)のこト。  
せきのと(關戸) 田關戸(關戸)に同じ。俗曲の歌舞の名。  
せきのぼる(塞上) 田動せきあぐに同じ。  
せきはい(香背) 田せなか。うしろの方、せきはい(斥罷) 田退(退)けて用ひぬ。す

せきは、せきは

たれる。すたるこト。  
せきは(石芒) 田尖(尖)のさがつてる石。石にある、さかりのこト。  
せきは(瘠薄) 田地味のよからぬこト。やせち、あれ地のこト。  
せきは(寂寥) 田さびしき、ひつそり。  
せきは(赤飯) 田こわめし。  
せきは(石盤) 田墨色(墨色)を呈せる石盤。石を、薄く板の如くなせしもの、文字や圖畫(圖畫)を書き、又は筆算を爲す具。石筆にて文字を書き記す板。  
せきは(石版) 田印刷(印刷)の材料となる板(板)めて滑(滑)らかなる石、此れに書畫をかきて、インキを用ひて印刷(印刷)するもの。  
せきはらひ(咳嗽) 田わざこに咳(咳)をす。せきはんいし(石版石) 田石版印刷物の材料となる石のこト、其の質(質)の細(細)かく軟(軟)らかにして、而(而)も滑(滑)らかに光澤(光澤)のある物、多く石灰石を用ひて製せらる。  
せきはんじゆつ(石版術) 田石版にて印刷せきひ(石碑) 田石に文書を刻(刻)みし物、いしぶみ(石塔) 田塔(塔)のこト。  
せきはつ(石筆) 田一種の筆、燧石等の石を筆の如き形にせるもの、石盤を用ひ

せきは、せきは

る筆。  
せきは(赤貧) 田甚だしき、貧乏。  
せきは(石斧) 田古代の斧(斧)、石にて作りし物。  
せきは(責任) 田豫審判事が検事の意見を叩きて、拘留中の刑事被告人を呼出しの節は、何時にても出頭すると云ふ、保證(保證)を立てしめて、其の親戚知人に預(預)けるこトを云ふ法律語。  
せきは(關札) 田關所の通り札。關所の手形。  
せきは(積債) 田かさなるうらみ。  
せきは(積分) 田高等數學の科。  
せきは(石叢) 田石の一種、前世世界の鳥の糞(糞)の化石せしもの。  
せきは(積弊) 田つもれる弊害(弊害)。  
せきは(尺兵) 田みちかき及物類の稱。  
せきは(尺壁) 田極めて大なる珠玉(珠玉)のこトを云ふ。  
せきは(石壁) 田石造の塀(塀)。  
せきは(石片) 田石ころ、石のかげら。  
せきは(石墨) 田石の一種、混合物なき炭素より成りたる石にて、色は墨(墨)の如く黒くして、幾分の光澤(光澤)あり、其の質極めて脆(脆)し、之を碎(碎)きて鉛筆の心(心)となす。







せしん、せせつ 施、銭、許

せじん(世人) 図世間の人々 〇人民、

(せせす)

せす(施) 施す。あさふ。めぐむ。せすち(脊筋) 図脊骨の通つて縦の縫(縫)のすち 〇衣物の脊の部に在る縦の縫(縫)目筋のコトを云ふ語。

(せせせ)

せせ(瀬瀬) 図瀬又た瀬を云ふ意にて、多くの浅瀬のコトを云ふ。せせ(銭) 図子供の語、せにのこト、せせい(是正) 図正し直すコトを云ふ。せせせとめ(浅瀬乙女) 図川邊(川邊)に棲(ひ)居る、少女のコトを云ふ。せせかひ(銭貝) 図小介(小介)の名、ヒサゴ貝のコトを云ふ。せせくる(許) 図許せる。せせくる(許) 図許せつ。むやみにせはやく。せせこせする。せせこまし(狭細) 図せまくしてきうくつにあり。せまくして餘ゆなし。せせつ(世説) 図世間の評判(評判)。世上の

せせな、せたう 鑿、弄

うはさのこトを云ふ。

せせな(世道) 図世の中ありさま、せせたい(世帯) 図しよたいのこト、せせたい(世帯) 図世道に同じ、せせたり(世道) 図世の中の人々の守るべき

うはさのこトを云ふ。せせら(世道) 図世の中ありさま、せせたい(世帯) 図しよたいのこト、せせたい(世帯) 図世道に同じ、せせたり(世道) 図世の中の人々の守るべき

うはさのこトを云ふ。せせら(世道) 図世の中ありさま、せせたい(世帯) 図しよたいのこト、せせたい(世帯) 図世道に同じ、せせたり(世道) 図世の中の人々の守るべき

うはさのこトを云ふ。せせら(世道) 図世の中ありさま、せせたい(世帯) 図しよたいのこト、せせたい(世帯) 図世道に同じ、せせたり(世道) 図世の中の人々の守るべき

(せせそ)

せそ(施) 図僧に物品を與ふコト、せそく(世俗) 図世間のならはし。世の中のありさまのこトを云ふ。せそん(世尊) 図佛をたつとびて云ふ語、即ち釋迦(釋迦)の尊稱。せそんじりう(世尊寺流) 図書體の一の名、藤原行成の書き初めし流儀の稱。

(せせた)

せたい(世態) 図世の中ありさま、せたい(世帯) 図しよたいのこト、せたい(世帯) 図世道に同じ、せせたり(世道) 図世の中の人々の守るべき

せたえ、せちか 處、賃、節 一〇九〇

正しき道、即ち道義、

せたえ(瀬瀬) 図川の浅瀬(浅瀬)のさされるコト、さされたるコトを云ふ、せたえ(處) 圖處しいたぐ。むこく取り扱ふ。

せたけ(背丈) 図身長。みだけ、せたむ(賃) 圖賃せむ。せめたつ、せたらちま(春曉馬) 図春(春)の曲(曲)つて馬のこトを云ふ。

せたけ(背丈) 図身長。みだけ、せたむ(賃) 圖賃せむ。せめたつ、せたらちま(春曉馬) 図春(春)の曲(曲)つて馬のこトを云ふ。

(せせた)

せち(節) 図時候の變り目、即ちせつ。さきおり(節會) 図節會(節會)の日、せち(世智) 圖世才(世才)に同じ、せち(世智) 圖昔時朝廷に於て、天子が出御ましまして、御前に於て、臣下に酒肴を賜はりし御事を申す、即ち元日の節會さか、豊明(豊明)の節會さかの類を云ふ。せちがい(殺害) 圖さつがいの詠り、人を切り殺(殺)すコトを云ふ、せちからし(世智辛) 圖世渡(世渡)が切なし世渡がむつかし、せちかしこし(世智賢) 圖世才にたけてあり、世事になれてあり、

せちへ、せつ 折

せち(節) 図節會(節會)の日に供する食膳の稱、即ち元日の雑煮、正月十五日のかゆ、三月三日の草もち、五月五日のちまきなどの類の稱。せちたり(節刀) 圖せつたうの詠り、昔時天子が使者に印(印)として賜はりたる刀(刀)のこトを云ふ。せち(切) 圖せつにの詠り、せちふん(節分) 圖立春、立夏、立秋、立冬の四季の移り目の稱、特に立春の日のこト、せつふん、せちふるまい(節振舞) 圖國の祝ひ日に、祝ふて馳走(馳走)をなすコトを云ふ、せちべん(世智辯) 圖しわんばうなるコト、しわきコト、けちのこト、せちみ(節忌) 圖精進をなすべく、定めたる日のこトを云ふ語、せちり(刹利) 圖佛教の語にて、たつさき人のこトを云ふ、せちん(世塵) 圖世の中ちりまを云ふ意より轉じて、世事のうるさきコトを云ふ

(せせつ)

せつ(折) 圖折る。をれる。かむ。しやがむ。ひしぐ。くじく。中(中)を取る。ほ

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

ごあひをさる即ち折中(折中) 〇定(定)るほどよくす。やめる。止(止)む。はや死(死)。わかじにのこト、即ち天折、せつ(暫) 圖明かなるさま。光(光)り輝(輝)やくさまを云ひ表す語、せつ(漸) 圖前條に同じ、せつ(漸) 圖米をさぐ。かしぐコト、せつ(雪) 圖ゆきのこト。轉じて色白く美しきコトを云ふ。洗(洗)ひきよめる。すく。むくゆ。例ば恥を雪ぐ又は恨を雪ぐなど。

せつ 設、拙、層、截、綫、襷 一〇九一

せつ(設) 圖たなきコト。おされるコト。下手(下手)なるコトを云ふ。自分(自分)のこトを他に向つて云ふ。代名詞例ば我れ。私。拙者など。せつ(層) 圖層(層)ふコト。つゝしむコト。いさきよきコト。みくびる。輕(輕)んす。こせつ。わづか。いさか。はたく。碎(碎)く。碎(碎)きて細かくなせし物。即ちくづ。轉じてちぎれちぎれとなりし物の稱。せつ(截) 圖たち切る。きつぱり割(割)る。言葉(言葉)なくみに云ひまくる。上手(上手)にさきつける。せつ(綫) 圖つな。なほ。ひも。轉じてしはる。くくる。むすぶコト。せつ(襷) 圖つれ着(着)。平素(平素)に着る衣服(衣服)けがる。さこれる。けがす。よこれたる衣服(衣服)、やぶれたる衣服(衣服)なれる。なれ



せつ、せつ、い、嘔、穢、糞、舌、燥

てじやれる。
せつ(嘔)固なめる。すゝるコト。すゝり
泣(せ)をなすコトを云ふ。
せつ(穢)固梁(せ)の上に在る短かき柱(せ)
の稱。即ちうだちの柱。
せつ(糞)固糞(せ)に同じ其の條を見よ。
せつ(舌)固舌(せ)にて作られたる紐(せ)
馬具の名たづな。
せつ(嘔)固双方をつなぎ合す具、即ちく
さび。さゝへる支(せ)ふ。
せつ(糞)固ひそかに取る。ぬすむ。ひそ
かに、こつそりせ。
せつ(舌)固した。べろ。轉じて言葉(せ)
更に轉じて物語。話すコト。
せつ(糞)固馬鹿にす。あなごる。みくびる
。押(せ)れ親(せ)しむ。なれて懸(せ)に
なる。きたなくす。汚(せ)す。よこす。
せつ(絶)固たゆる。たつ。無くなる。こ
ゆる。すぐ。止(せ)める。止(せ)める。殊(せ)
に。極めて。いちちるしく云ふ意を。
表はすに用ゆる語。
せつ(あい)固切に愛す。云ふ意にて
此の上もなく、いつくしむコト。
せつ(い)固雪の降りそふな空あひ、
せつ(い)固目立つて、こまなつて
コト。きはたつてちがふコト。

せつゐ、せつえ

せつゐ(絶域)固外國の國を云ふ。
せつゐん(切韻)固漢文の反切(せ)に依り
て、漢字の正音を知るコト。
せつゐん(雪隠)固大小便の用を足す處、
即ちこぼりか、かわや。
せつらん(雪雲)固ゆきぞら。ゆきぐも。
せつえい(泄洩)固もる。コト。もれ流る
コト。もれて知れるコト。
せつえい(拙詠)固つたなき和歌。自分の
作りし和歌をさげすみて云ふ語。
せつえう(切要)固きはめて大切なコト
せつえつ(折開)固直打(せ)をへらすコト
。物の價を下げるコト。
せつえん(絶縁)固縁を切るコト。えにし
のたゆるコト。交(せ)をたつコト。理
學の語。電氣の流のたゆるコト又はた
つコトを云ふ。
せつえん(絶麗)固すぐれてうるはしきコ
ト。殊にあてやかなるコト。美人の妙
(せ)なる姿(せ)を云ふ。
せつえん(絶遠)固甚だしく遠きコト。遠
くかけ離なれたるコト。
せつえん(絶縁)固電氣の流れもる
るを、防ぐ。く爲めに、ゴムや絹糸又は
麻糸(せ)を、密(せ)に巻きたる電氣線の
コトを云ふ。

せつえ、せつか

せつえん(絶縁物)固電氣の感ぜぬ物
體、即ち硝子や陶器(せ)の類を云ふ。
せつか(拙下)固拙者(せ)、やつがれ。
せつか(拙家)固我が住宅の曹を云ふ。
即ち拙宅(せ)。
せつか(折價)固價(せ)を減するコト。直
段(せ)をまげさせるコト。
せつか(絶體)固此の上もなくよきコト。
せつか(絶家)固相續(せ)者のなくなりた
る家の曹を云ふ。
せつかい(切開)固切(せ)り開くコト。切つ
て口をあけるコトを云ふ。
せつかい(切匙)固一種の器具、9の字の
如き形をなせる物にて、摺鉢(せ)の目
の内に附着せし物を、かき落す具。轉
じて餘計(せ)な世話をやくコトを云ふ
俗語。
せつかい(切解)固きりほぐコト。
せつかい(殺害)固人をころしそなふコ
トを云ふ。即ちさつ(せ)むい。
せつかい(絶海)固大洋の曹、即ち陸地
より甚だ遠く離れたる海。
せつかい(絶崖)固けはしきがけ。
せつかう(雪行)固雪のふつてる中を行く
雪の積れる中を行くコト。
せつかう(折肱)固支那の故事にて物事に

せつか、せつや

てなれるコト、經驗を十分につみ重(せ)
れてるコトを云ふ。
せつか(攝行)固其の人に代(せ)りて物
事を行ふコト。物事を兼(せ)。れ行ふコ
ト。
せつか(舌耕)固たくみにしやべるコト
。辯舌を以て生計を立てるコト。
せつか(絶交)固まじはりをたつ。つき
あひを止(せ)めるコトを云ふ。
せつか(折角)固骨をおるコト。力を盡
すコト。苦心するコト。
せつか(刺客)固刺客(せ)の詠り。
せつか(雪客)固鳥の名、鷺(せ)の漢名。
せつか(絶擊)固けはしき谷。
せつか(噪急)固せき立るコト、いらち
の曹を云ふ。
せつか(接合)固つなぎあはす。つけあ
はす。つなくコト。
せつか(切諫)固きびしく意見す。きつ
く諫(せ)むるコトを云ふ。
せつか(折檻)固きびしくせめるコト、
きびしく、こらすコト。
せつか(舌痛)固重病の名、痛腫を云ふ
悪性の腫物が、舌の上に生ずる病氣に
て、治療の手段なきもの。
せつ(雪肌)固雪の如く白き肌(せ)を云

せつゐ

ふ意にて、美人の肌の曹を云ふ。
せつ(節期)固さき、おり、時節(せ)。
せつ(利鬼)固おにの曹を云ふ。
せつ(變器)固へんき、即ちをまるの曹
を云ふ。
せつ(節季)固十二月の末日の曹。轉
じて懸金(せ)の支拂を爲す日、月末日
の曹を云ふ。
せつ(節義)固ただしき行ひ。正しく道
徳に適(せ)ひし主義(せ)みさほの曹。
せつ(絶奇)固極めてめづらしきコト。
すぐれてくしきコト。
せつ(切去)固切り去る切つてのける
せつ(接近)固ちかよる。ちかづく。
せつ(拙吟)固つたなき詩歌(せ)の曹
。自分の作つて詩歌の稱。
せつ(説經)固佛敎の意義を解(せ)
り易く説き聞すコト。
せつ(折曲)固をれまがる。なりま
げるコトを云ふ。
せつ(説經師)固説經を爲す僧侶
(せ)を唱ふを業とせる人。
せつ(破戒)固破戒の僧侶。經文の意義
を昔話の中に雜(せ)して、節(せ)をつけて

せつか

面白く唄ひて、世渡(せ)の料となせし
ものを云ふ。後に至りて俗人(せ)も
亦た之を唄ひて、一つの渡世を爲すに
至れり。
せつか(節句)固節日(せ)の意にて、五節
句の曹を云ふ。即ち人日、上巳、端午、
七夕、重陽の五つの總稱。
せつか(貴付)固働せきたつ。せつつく。さ
いそくする。うながす。
せつか(絶句)固漢詩の一體の名、即ち起
承轉結の四句より成り立てるものにて
五言七言の別あり。
せつか(拙寓)固自己の住宅。
せつか(雪花)固降りつゝある雪。雪を
花に喻(せ)へて云ひし語。
せつか(接遇)固あしらひ。待遇(せ)。
せつ(絶群)固群(せ)にぬきんでてる。
すぐれてるコトを云ふ。
せつ(雪光)固ゆきの光り。ゆきあ
かりの曹を云ふ。
せつ(攝官)固攝職(せ)に同じ。
せつ(攝政)固攝政と關白と。
せつ(切願)固切にたのみ。熱心に
ねがふ。ひたすらたのみ。
せつ(雪花菜)固豆腐のしほりか
す、おからの曹を云ふ。



せつく、せつげ

せつくばたらき(節句勸)節句は祝ふて  
休むもの、然るにはたらくと云ふ意  
り出で、怠者(怠)の職業に不規則なる  
コトを云ふ語。  
せつげ(攝家)節句政白に任ぜらるべき  
家柄(家)の節句を云ふ。  
せつげ(絶家)節句絶たる家、  
せつげ(設計)節句建築(建)又は或る物を  
製作するに就ての、もくろみの節句、即  
ち下つもの節句。  
せつげ(雪景)節句雪の積りたるながめ、  
即ち雪けしきの節句を云ふ。  
せつげ(折桂)節句桂を折ると云ふ意にて  
官吏登用試験に優等第一にて、及第せ  
しコトを云ふ語。  
せつげ(絶景)節句くれてよき景色(景)  
せつげ(説教)節句宗教(宗)に依りて、教  
(教)となるべき事を説き聞かすコト。  
せつげ(絶叫)節句大聲を揚げて、泣き叫  
(叫)ぶコトを云ふ。  
せつげ(攝兼)節句職(職)をかねて行ふ  
コト。かねるコトを云ふ。「ト  
せつげ(接見)節句引き寄せて面會するコ  
せつげ(節儉)節句けんやくす。しまつす  
る。つまじきコトを云ふ。  
せつげ(節減)節句しまつして入費(費)を

せつげ、せつし

せつげ(裏言)節句なれなれし言葉。な  
めやかなる言葉。みだらがましき言葉  
の節句を云ふ。  
せつげ(絶險)節句甚だしくけはしきコト  
せつげ(絶懸)節句けんそなる山、  
せつげ(舌劍)節句せんそして、人を困(困)  
らせるコトを云ふ。  
せつげ(説教師)節句説教する僧侶、  
せつげ(設計書)節句みつもりがき、  
せつげ(接見日)節句來訪の客に、接  
見すべく定めたる日の節句を云ふ。  
せつげ(雪後)節句雪の降りたるあと、  
せつげ(絶後)節句今後に再び斯の如き事の  
あるまじきと云ふ意を表はす語。  
せつげ(拙工)節句へたな職人、  
せつげ(折脇)節句春秋左氏傳の故事より  
出たる語にて、經驗の功を積み大醫  
と爲ると云ふコト。總て經驗を積み  
名人とされるコトを云ふ。  
せつげ(絶巧)節句極めてたくみななるコト  
せつげ(絶好)節句此の上もなきよきコト  
美事なるコトを云ふ。  
せつげ(舌口)節句口さき。口ぶり。  
せつげ(接骨)節句折れたる骨をつなぎ合

せつこ、せつし

せつこ(折痕)節句をれめをれあき。  
せつこ(舌根)節句したの節句。  
せつこ(接骨木)節句木の名、には  
こに同じ、其のクシの如き實(實)は、煎  
じて薬用となる。  
せつぎ(切磋)節句ぎを切りみがくこと云  
ふ意より轉じて、學問を修め智慧をみ  
がくコトを云ふ。  
せつぎ(折挫)節句くじけるコトおれくだけ  
る。おとろえくじける。  
せつぎ(折罪)節句罪をしたらべただすコト  
せつぎ(節操)節句まほ正しき精神、  
せつぎ(舌争)節句いさかひ言葉であらそ  
ふ。議論(論)するコト。  
せつぎ(拙作)節句自分のつくりたる詩歌  
文章(文)の謙遜語。不出來の詩歌、  
せつぎ(拙策)節句つたなき策略。拙石の  
策略と云ふ謙遜語。  
せつぎ(拙作)節句出來の悪き製品。自分  
の作りし物のコトを云ふ。  
せつぎ(折算)節句一々しわけをして、計  
算(算)するコトを云ふ。  
せつし(拙子)節句私、拙者。私の子(子)。  
せつし(折死)節句わが死するコト。  
せつし(折枝)節句枝(枝)を折(折)るコト。雙

せつし

をわする即ち腰をかかめるコト、  
せつし(接枝)節句枝(枝)をつぎあはすコト、  
又たつきたる枝。  
せつし(節士)節句まほ正しき男子。節義  
を重する人のコトを云ふ。  
せつし(切齒)節句歯をくひしげらるコト。非  
常に残念(念)がるコトを云ふ。  
せつし(雪兒)節句うたひめ、藝者(藝)。  
せつし(節次)節句其の時節。時より、  
せつし(綴字)節句文字をつづるコト、又は  
つづりたる文字の節句を云ふ。  
せつし(絶秀)節句はだつてすぐれたる  
コト。ひいでるコト。  
せつし(節日)節句天子の御誕生日(日)。  
の節句を申す。國家の祝ひ日。  
せつし(切實)節句まことなるコト。實際  
(實)なるコト。能くあてはまるコト。  
せつし(拙者)節句私(私)の、やつがれ。  
せつし(接取)節句うけとる。  
せつし(接手)節句手に接すこと云ふ意にて  
受け取るコトを云ふ。  
せつし(攝取)節句とりおさめる、例は食  
物を攝取すなど。  
せつし(攝酒)節句酒をほごほごに飲むコ  
ト。酒をつつしみ飲むコト。  
せつし(竊取)節句ひそかに他人の物をぬ

せつし

すみ取るコト、  
せつし(接受)節句接手に同じ。  
せつし(拙書)節句自己のかきたる文字、  
せつし(絶所)節句要害險阻(所)なる所、  
せつし(節序)節句順序(序)、じゆんばん  
。時候の正しく變りゆくコト。  
せつし(接心)節句物を見て心に感ずるコ  
ト。  
せつし(贅臣)節句なれしたしむ家來、  
せつし(絶盡)節句たえつきるコト、  
せつし(殺生)節句生き者を殺すコト、  
せつし(折傷)節句骨を折りくちくコト  
。骨を折(折)れたるコト。  
せつし(攝政)節句天子に代つて、政治  
を執り行ふコトを云ふ。  
せつし(接上)節句上方につやくコト、  
せつし(接壤)節句土地と土地とが、つ  
ぎ合つてつるコトを云ふ。  
せつし(切情)節句切なる心。思ひつめ  
たる心。ふかなさけの節句。  
せつし(舌狀)節句舌(舌)の如き狀(狀)を  
爲せるコトを云ふ。  
せつし(折衝)節句敵の攻め寄せ來らん  
とするを、防ぎ止むコト。國際上のか  
けひきの節句を云ふ。  
せつし(接踵)節句踵(踵)を接すこと云ふ

せつし、せつす

せつし(絶勝)節句著(著)しくすぐれた  
る景色。絶景(景)の節句。  
せつし(接觸)節句すれにすれになつて  
るコト。すれあつてつるコト。  
せつし(攝職)節句職務を兼ね行ふコト  
兼務(務)の節句。  
せつし(雪色)節句雪の色。雪ふりの  
けしきの節句を云ふ。  
せつし(設色)節句色を設くこと云ふ意よ  
り轉じて、繪具(具)を施す彩色する。  
せつし(絶色)節句上等の彩色(色)の。非  
常なる美人の節句を云ふ。  
せつし(絶食)節句食物をくわぬコト。  
だんじきの節句を云ふ。  
せつし(切齒)節句切齒(齒)の節句。  
せつし(殺生)節句殺生(生)の節句。  
せつし(攝氏)節句攝氏(氏)の節句。  
計の節句を云ふ、即ち沸騰點(點)を百  
度とせるもの。  
せつす(節)節句ほどよく、ほどほどに  
す。きりもりする。こりしまる。きり



せつす、せつせ 攝、接、絶

る、さだめる(つ)ましくする、  
せつす(攝) 圖(つ)りて行ふ(つ)かれ行  
ふ、即ち其の人の後見(つ)なる、  
せつす(接) 圖(つ)ちかよる、ちかづく(つ)お  
目にかかる(つ)まじゆる(つ)つなぎあふ(つ)  
引き受く(つ)うけさる、  
せつす(絶) 圖(つ)たゆ、なくなる(つ)まさる  
ぬきんでる(つ)きわだつ、  
せつせい(節省) 圖(つ)ほほどにはぶく、  
せつせい(拙生) 圖(つ)せつしや、私(つ)ひ、  
せつせい(節制) 圖(つ)ちわ目にす、ひかへ  
めにする(つ)さしりしまる(つ)コト、  
せつせい(攝生) 圖(つ)養生(つ)する(つ)コト、身  
體(つ)を大切にす(つ)コト、  
せつせい(攝政) 圖(つ)天子に代(つ)りて、政事  
を行ふ(つ)コトを云ふ、  
せつせい(絶世) 圖(つ)世にすぐれ秀(つ)づる  
尋常ならぬ(つ)コトを云ふ、  
せつせり(絶唱) 圖(つ)非常に出来のよき詩歌  
せつせり(絶笑) 圖(つ)大わらひをする(つ)コト、  
せつせつ(節節) 圖(つ)なりを、ささげ、  
せつせつ(切切) 圖(つ)いさも親切(つ)なる(つ)  
れんごるなる(つ)さしせまれり(つ)云ふ意  
を表はす(つ)語、  
せつせつ(屑屑) 圖(つ)くだけてる(つ)状(つ)の細か  
くなつてる(つ)状(つ)を云ひ表はす(つ)語(つ)こせば

せつせ、せつそ

しく立ちはたらく(つ)状(つ)を云ひ表はす(つ)語、  
せつせん(接戦) 圖(つ)互ひに近よりて戦ふ(つ)コ  
ト、  
せつせん(折線) 圖(つ)種々異りたる(つ)方行(つ)を  
なせる(つ)直線の(つ)つづきしもの(つ)稱、  
せつせん(舌尖) 圖(つ)舌の尖(つ)口前(つ)の  
達者(つ)なる(つ)コトを云ふ、  
せつせん(舌戦) 圖(つ)舌論(つ)する、いさか  
せつせん(截然) 圖(つ)きつぱり(つ)さち切る(つ)状  
を云ひ表はす(つ)語(つ)轉じて(つ)物事の(つ)區別が  
確(つ)か、明か(つ)について(つ)ある(つ)コトを云ひ  
表はす(つ)語、  
せつせつじ(折折爾) 圖(つ)のびのびする(つ)の  
びやかなる(つ)状(つ)を云ひ表はす(つ)語、  
せつそり(節奏) 圖(つ)音楽の(つ)節(つ)を、しらべ  
る(つ)コトを云ふ、  
せつそり(拙僧) 圖(つ)僧侶が(つ)自分の(つ)コトを云  
せつそく(拙速) 圖(つ)物事を(つ)粗末(つ)に早く  
仕上(つ)る(つ)コト(つ)出来上り(つ)は早きも、  
其の(つ)物は(つ)つたなき(つ)云ふ、  
せつぞく(接續) 圖(つ)つづひてる、つながつ  
てる、くつづいて(つ)る(つ)コトを云ふ、  
せつそく(絶息) 圖(つ)絶命(つ)に同じ、死す(つ)コト、  
せつそん(折損) 圖(つ)をれそんする(つ)コト、  
せつぞく(接續詞) 圖(つ)文章中(つ)の句を、つ  
なぎ合す(つ)に用ゆる(つ)語、例(つ)又(つ)さか及(つ)な

せつそ、せつた

どの(つ)語(つ)を云ふ、  
せつそく(折曲) 圖(つ)り能(つ)ふ(つ)關節(つ)を具  
(つ)へてる、小(つ)さき(つ)虫(つ)類(つ)の(つ)總稱、即ち(つ)く  
も、蟬(つ)け(つ)な(つ)ご(つ)の(つ)類、  
せつた(雪駄) 圖(つ)牛(つ)の(つ)皮(つ)を(つ)底(つ)に(つ)ま  
し、其(つ)の上(つ)に(つ)表(つ)を(つ)付(つ)けた(つ)る(つ)草履(つ)  
を(つ)云ふ、其(つ)の(つ)雪(つ)駄(つ)と(つ)名(つ)づ(つ)けた(つ)る(つ)は、昔  
時(つ)千(つ)利(つ)休(つ)が(つ)初(つ)めて(つ)工(つ)夫(つ)して(つ)雪  
雪(つ)の(つ)時(つ)に(つ)穿(つ)し(つ)より(つ)出(つ)づ、  
せつたい(接待) 圖(つ)さりもち、さりなし、あ  
しらひ(つ)は(つ)ご(つ)す(つ)假(つ)令(つ)ば(つ)接(つ)待(つ)酒、  
せつたい(設題) 圖(つ)問題(つ)を(つ)定め(つ)る、定め(つ)た  
る(つ)問題(つ)の(つ)コト(つ)を云ふ、  
せつたい(絶對) 圖(つ)他に(つ)比(つ)べ(つ)る(つ)もの(つ)な  
き(つ)コト(つ)ご(つ)う(つ)あ(つ)つ(つ)ても、あく(つ)まで(つ)もの  
意、  
せつたい(絶大) 圖(つ)此(つ)上(つ)なく(つ)大(つ)き(つ)い(つ)コト、  
せつたい(絶代) 圖(つ)其(つ)の(つ)時(つ)代(つ)に(つ)最(つ)も(つ)すぐ  
れ(つ)る(つ)コト(つ)世(つ)に(つ)二(つ)つ(つ)さ(つ)なき(つ)コト、  
せつたい(舌昔) 圖(つ)舌(つ)の上(つ)に(つ)生(つ)ず(つ)る(つ)白(つ)き(つ)垢  
(つ)の(つ)如(つ)き(つ)物(つ)を云ふ、  
せつたい(節刀) 圖(つ)昔(つ)時(つ)大(つ)將(つ)が(つ)勅(つ)命(つ)を(つ)奉(つ)じ  
て、賊(つ)徒(つ)な(つ)ど(つ)を(つ)征(つ)伐(つ)に(つ)行(つ)く(つ)時(つ)に、天(つ)子(つ)よ  
り(つ)其(つ)の(つ)印(つ)として(つ)下(つ)し(つ)賜(つ)はり(つ)た  
る(つ)刀、

せつた、せつち

せつたり(竊盜) 圖(つ)他人(つ)の(つ)物(つ)を(つ)ぬ(つ)す(つ)み(つ)取(つ)る  
コト、又(つ)は(つ)取(つ)り(つ)たる(つ)やつ、  
せつたり(絶倒) 圖(つ)非常(つ)に(つ)わ(つ)ら(つ)ふ(つ)コト、  
せつたり(絶島) 圖(つ)大洋(つ)の中(つ)に(つ)在(つ)る(つ)小(つ)島、  
せつたく(拙宅) 圖(つ)拙者(つ)の(つ)す(つ)ま(つ)ら、  
せつたん(切斷) 圖(つ)ち(つ)き(つ)る(つ)コト、  
せつたん(舌端) 圖(つ)舌(つ)の(つ)さ(つ)き、  
せつたん(截斷) 圖(つ)切(つ)る(つ)た(つ)つ(つ)わ(つ)る(つ)コト、  
せつたい(接待員) 圖(つ)來(つ)客(つ)を(つ)さ(つ)り(つ)も(つ)つ  
役(つ)の(つ)人(つ)の(つ)コト(つ)を云ふ、  
せつたぬし(雪踏直) 圖(つ)損(つ)じ(つ)たる(つ)雪(つ)踏(つ)を  
繕(つ)る(つ)ふ(つ)な(つ)業(つ)を(つ)さ(つ)せる(つ)人(つ)轉(つ)じて(つ)下(つ)駄  
直(つ)し、  
せつたい(絶命) 圖(つ)絶(つ)命(つ)を(つ)絶(つ)つ(つ)る(つ)コト、  
コト(つ)も(つ)出(つ)來(つ)ぬ(つ)避(つ)け(つ)べき(つ)手(つ)段(つ)の(つ)盡  
(つ)たる(つ)コト(つ)を云ふ、  
せつち(拙地) 圖(つ)拙者(つ)の(つ)地(つ)面、自(つ)家(つ)の(つ)所(つ)有  
地(つ)の(つ)コト(つ)を云ふ、  
せつち(設置) 圖(つ)も(つ)う(つ)け(つ)お(つ)く(つ)つ(つ)くり(つ)置(つ)く、  
せつちよ(拙著) 圖(つ)自(つ)家(つ)の(つ)著(つ)作(つ)物、  
せつちん(雪隠) 圖(つ)せ(つ)つ(つ)い(つ)ん(つ)の(つ)詠(つ)り、  
せつちん(節鎖) 圖(つ)節(つ)度(つ)使(つ)の(つ)居(つ)る(つ)役(つ)所、現  
今(つ)の(つ)郡(つ)役(つ)所(つ)の(つ)如(つ)き(つ)もの、  
せつちん(絶塵) 圖(つ)浮(つ)世(つ)の(つ)俗(つ)事(つ)を(つ)さ(つ)く(つ)る(つ)コ  
ト(つ)隱(つ)居(つ)する(つ)コト、

せつち、せつそ

せつちち(絶頂) 圖(つ)た(つ)だ(つ)き(つ)山(つ)の上、  
せつちち(接杖) 圖(つ)い(つ)く(つ)さ(つ)な(つ)し(つ)は(つ)じ(つ)め(つ)る  
コト、兵(つ)端(つ)を(つ)開(つ)く(つ)コト、  
せつちち(接中) 圖(つ)く(つ)つ(つ)き(つ)合(つ)つ(つ)て(つ)る、  
せつちち(雪中) 圖(つ)雪(つ)の(つ)ふ(つ)り(つ)つ(つ)つ(つ)ある(つ)な  
か(つ)雪(つ)の(つ)ふ(つ)つ(つ)て(つ)る(つ)間(つ)を云ふ、  
せんちん(雪隠) 圖(つ)將(つ)某(つ)の(つ)詰(つ)め(つ)方(つ)の  
一(つ)種(つ)、王(つ)將(つ)を(つ)盤(つ)面(つ)の(つ)隅(つ)に(つ)追(つ)ひ(つ)込(つ)む、  
せつちち(折衷) 圖(つ)彼(つ)我(つ)の(つ)意(つ)見(つ)を  
聞(つ)きて(つ)は(つ)ご(つ)く(つ)定(つ)め(つ)たる(つ)意(つ)見(つ)、  
せつちち(雪中) 圖(つ)雪(つ)中(つ)行(つ)軍(つ)の(つ)雪(つ)の(つ)降  
つ(つ)て(つ)る(つ)中(つ)を(つ)軍(つ)隊(つ)の(つ)進(つ)み(つ)行(つ)く(つ)コト、  
せつてい(設定) 圖(つ)も(つ)う(つ)け(つ)き(つ)め(つ)る(つ)つ(つ)くり  
上(つ)る(つ)コト(つ)を云ふ、  
せつてい(攝提) 圖(つ)十二(つ)支(つ)の(つ)第三(つ)位(つ)の(つ)寅  
せつてい(雪泥) 圖(つ)雪(つ)が(つ)さ(つ)けて(つ)道(つ)の(つ)ご(つ)ろ  
く(つ)なる(つ)コト(つ)を云ふ、  
せつてん(拙店) 圖(つ)我(つ)が(つ)店(つ)の(つ)コト、  
せつてん(雪天) 圖(つ)雪(つ)ぞ(つ)ら(つ)雪(つ)の(つ)降(つ)り(つ)て  
る(つ)日(つ)の(つ)コト(つ)を云ふ、  
せつてん(絶巔) 圖(つ)山(つ)の(つ)いた(つ)だ(つ)き、  
せつど(節度) 圖(つ)り(つ)き(つ)そ(つ)く(つ)ほ(つ)ご(つ)さ  
し(つ)つ(つ)云(つ)ひ(つ)つ(つ)け(つ)の(つ)コト(つ)を云ふ、  
せつどち(雪洞) 圖(つ)手(つ)燭(つ)の(つ)一(つ)種(つ)ぼ(つ)ん(つ)ぼ  
り(つ)の(つ)コト(つ)を云ふ、  
せつとち(絶東) 圖(つ)東(つ)のは(つ)て、

せつそ、せつは

せつとち(舌頭) 圖(つ)した(つ)の(つ)さ(つ)き(つ)した(つ)口(つ)さ  
き、  
せつとち(絶等) 圖(つ)上(つ)等(つ)無(つ)類、  
せつとち(喪濱) 圖(つ)け(つ)が(つ)す(つ)コト、名(つ)を(つ)そ(つ)ん  
する(つ)コト(つ)を云ふ、  
せつとく(説得) 圖(つ)云(つ)ひ(つ)聞(つ)か(つ)せて(つ)得(つ)心(つ)を  
さ(つ)せる、得(つ)心(つ)の(つ)ゆ(つ)く(つ)や(つ)う(つ)に(つ)物(つ)語(つ)る(つ)コト、  
せつどし(節度使) 圖(つ)昔(つ)時(つ)の(つ)官(つ)職(つ)の(つ)名、一  
方(つ)面(つ)の(つ)軍(つ)旅(つ)を(つ)督(つ)し、且(つ)つ(つ)軍(つ)務(つ)を(つ)取(つ)締  
(つ)る(つ)役、現(つ)今(つ)の(つ)師(つ)團(つ)長(つ)の(つ)如(つ)き(つ)もの、  
せつとち(接頭語) 圖(つ)他(つ)の(つ)語(つ)の(つ)頭(つ)に(つ)冠(つ)か(つ)ら(つ)せて、一(つ)つ(つ)の(つ)意(つ)味(つ)を(つ)表(つ)は(つ)せ  
る(つ)語、假(つ)令(つ)ば(つ)新(つ)月(つ)の(つ)新(つ)さ(つ)か、初(つ)日(つ)の(つ)初(つ)  
か(つ)の(つ)如(つ)き(つ)を云ふ、  
せつた(利那) 圖(つ)さ(つ)つ(つ)な(つ)も(つ)讀(つ)む、少(つ)し(つ)の  
間(つ)ア(つ)ハ(つ)ヤ(つ)と(つ)云(つ)ふ(つ)間、  
せつた(困苦) 圖(つ)くる(つ)しく(つ)あり、  
せつた(切) 圖(つ)ひ(つ)た(つ)す(つ)ら(つ)に、れ(つ)つ(つ)し(つ)ん(つ)に(つ)れ  
ん(つ)ご(つ)る(つ)に、し(つ)き(つ)りに、た(つ)つ(つ)て、  
せつた(絶念) 圖(つ)思(つ)ひ(つ)切(つ)る、あ(つ)き(つ)ら(つ)め(つ)る、  
せつた(説破) 圖(つ)さ(つ)き(つ)や(つ)ぶ(つ)る、云(つ)ひ(つ)ふ(つ)す、  
せつた(折破) 圖(つ)を(つ)り(つ)碎(つ)く(つ)コト、  
せつた(切羽) 圖(つ)刀(つ)の(つ)鏢(つ)の(つ)鞘(つ)に(つ)付(つ)け  
つか(つ)の(つ)方(つ)さ(つ)にあ(つ)たる(つ)面(つ)に、付(つ)け  
て(つ)ある(つ)薄(つ)き(つ)金(つ)物(つ)の(つ)稱、  
せつばち(切望) 圖(つ)甚(つ)だ(つ)望(つ)む、し(つ)き(つ)りに(つ)の







せにき、せぬひ

の中へ軸(軸)を通して廻はして遊ぶコト、

せにぎ(錢座) 圓金座銀座などに對しての稱、徳川時代に金銀貨(金貨)以外の錢を造(造)りし處のコトを云ふ、

せにさし(錢差) 圓錢を一まとめにする爲めに、其の孔へ通す細き繩、

せにたむし(錢癖) 圓錢にかさのこト、

せにづく(錢盡) 圓錢がなくなり、金力(金力)がなくなる、

せにつつ(錢筒) 圓錢を入れ置く竹の筒、

せにつら(錢面) 圓錢の表面(表面)、

せにつかひ(錢道) 圓錢をつかふコト、

せにばと(錢箱) 圓錢を入置く箱、

せにむし(錢蟲) 圓虫の名、やすでの稱、

せにもらひ(錢賈) 圓人の軒(軒)に立ちて金錢を頼み買らふコト、又は其の人、

せにもちけ(錢儲) 圓金錢をもふけるコト

せにん(是認) 圓善き物事と思ひて、承知(承知)するコトを云ふ、

(せせぬ)

せぬひ(狹縫) 圓凡て縫物の角角(角角)をせまくして、かざり置くコト、

せぬひ(背縫) 圓衣服の背筋(背筋)を縫ふコトを云ふ、

せば、せひ 狹、忙

(せせば)

せば(狹) 接頭) 或る語の上に冠(冠)らせて、せまくある、せまくるしと云ふ意を表はすに用ゆる語、 「んするせばくるし(狹) 圓せばくあり、せばくかせばし(忙) 圓いそがはし、ひまなきなり、せばし(狹) 圓ひろからずきゆうくつなり、せばしなし(忙) 圓せばし、いそがし、せばせばし(忙) 圓せばし、いそがし、いそがはしくあり、 「かしくありせばせばし(約) 圓つづまやかなり、こませばた(背旗) 圓脊(脊)や帯(帯)などへさす小なはたのこトを云ふ、

せばぬ(狹布) 圓巾(巾)のせまきめの、せまく織りたる布、 「るせばまる(狹) 圓動せまくなる、せまくあせばむ(狹) 圓動せまくならず、せばくす、

(せせひ)

せひ(是非) 圓よろしきコトとあしきコト(是非)でも非(非)でもと云ふ意より轉じて、必ず、きつとも云ふ意を表はすに用ゆる、

(せせむ)

せむ(妾) 圓めかけ。そばめのこト(妾)むすめのこト(妾)女子が自己の事を他に向つて云ふ謙遜語、

せひ、せふ 蟬、妾

せふ(接) 圓又たせつとも讀む、したしむ。交(交)はる(交)近よる。ちかづく(交)受く。うける(交)つらなる、つづく(交)捷に通すかつ、

せふ(雲) 圓細(細)かき雨。さあま(雲)雨のシトシトと降る音を云ふ語、

せふ(咳) 圓悪(悪)く云ふ、そのる(咳)物をつゝきて食ふ、つひばむ(咳)する、すふ

せふ(鯉) 圓川魚の名、たなこ、

せふ(捷) 圓かつこト、即ち勝利(捷)勝ち軍(捷)の報告(捷)たかひかちて得たる品即ち分捕品(捷)さかし、はやし、ささし、

せふ(睫) 圓眼の縁(縁)に生へてる細き毛、即ちまつげ(睫)眼をしばたくコト、

せふ(姪) 圓女子の容貌(容貌)の美しきを云ふ、

せふ(耳) 圓合(合)する。あふ。一つになるコト(耳打)する。さ、やく(耳)木の葉の風に揺(揺)れて動く状(状)を云ひ表はす語、

せふ(蕨) 圓おそる。こはがる。おそれさする。おどかすコト、

せふ(蕨) 圓たすく。さ、なふ。をさめる。すぶる(蕨)世話(世話)す(蕨)かぬる。代(代)る。代理(代)する(代)道(道)ひかける。おひゆきて捕へる(蕨)取る。とり入れる。例

せふ 接、雲、捷、鯉、姪、蕨

ば攝養するとか食を攝すとか、

せふ(癖) 圓うそぶく。陰(陰)にて、そのる。ひそかに悪口を云ふ、

せふ(滲) 圓ふる。すきゆく(滲)わたる、

せふ(情) 圓こはがる。おそる。おづる(情)おどかす。おどす。おびやかす、

せふ(襪) 圓はき物。くつ、

せふ(愛) 圓おりの。和(和)らぐコト、

せふ(淡) 圓うるほふ。惠(惠)を受く(淡)さうる。たつする(淡)あまれし。ゆきわたるめぐる。めぐり、

せふ(捷) 圓すばしつこくして、たぐみなるコトを云ふ、

せふ(澱) 圓あまねくうるほふコトあまれきコト、

せふ(急) 圓急(急)はめて早きコト。すばしつこきコトを云ふ、

せふ(涙) 圓泣(泣)やましく泣き立つるコト。うるさく泣くコト、

せふ(魚) 圓(魚)魚類(魚)の種族の一つの名、魚類中の脚(脚)特に長く、頭(頭)及び嘴(嘴)の亦た長きものを云ふ、即ち能く水を泳り能く水中の魚を捕へ食ふに適する種類を云ふ、水どり、

せふ、せふき 癖、滲、情、愛、淡

せふ(和) 圓(和)密折(折)合(合)よく、やはらぐるコトを云ふ、

せふ(早) 圓(早)捷快(捷快)圓心持(心持)よく早きコト。快(快)くすばしつこきコト、

せふ(伏) 圓(伏)魚類の淺瀬(淺瀬)に姿(姿)を隠(隠)し居るコトを云ふ、

せふ(捷) 圓(捷)疾(疾)圓極めて早きコト、

せふ(取) 圓(取)圓獲(獲)ひさなる食品を食ふコトを云ふ、即ちせつしゆ、

せふ(ゆ) 圓(ゆ)圓べちやべちやせしやべり立る(ゆ)云ひかけて云はぬ、

せふ(顧) 圓(顧)圓左右のこめかみ、

せふ(捷) 圓(捷)捷軍(捷軍)の知らせ、

せふ(澱) 圓(澱)圓十二日間のコトを云ふ

せふ(心) 圓(心)圓心の他(他)散(散)からぬやうに、精神を整(整)ふコト、

せふ(出) 圓(出)圓めかけの子、

せふ(水) 圓(水)圓水の中を歩み行くコト水をわたり行くコト、

せふ(水) 圓(水)圓水鳥(水鳥)圓水中の淺瀬(淺瀬)を歩(歩)り歩みて、小鳥を捕(捕)へ餌(餌)とする鳥類を云ふ、

せふ(雲) 圓(雲)圓しづしづと降る雨の音を云ふ、例(例)ば細雨(細雨)雲、

せふ、せふせ 和、早、伏、捷、取、ゆ、顧、捷、出、水、水、雲



せふせ、せほね

せふせん(捷戦)闘いくさにかつコト、  
せふそく(捷速)闘いちりるしく速(速)か  
なるコトを云ふ、  
せふたく(妾宅)闘めかけの住宅、  
せふはち(捷報)闘めかけの知らせ、  
せふふく(幸腹)闘めかけの生子、  
せふふく(懽服)闘おそれおちてしたむふ  
こぼがつて恐れ入るコト、  
せふふく(懽伏)闘おそれて平伏す、  
せふふん(懽聞)闘おちいくさの知らせ、  
せふへい(妾嬖)闘お氣に入りのめかけ、  
せふほ(捷歩)闘足はやくに歩むコト、はや  
足にて、歩み行くコトを云ふ、  
せふみ(瀬踏)闘川の瀬の浅深(浅深)をはか  
るコト、物事をためしみる、こころむ  
るコトを云ふ、  
せふもち(賤毛)闘まつ毛、  
せふより(妾賤)闘そばめめかけ、  
せふり(捷利)闘かつコト、かち、  
せふり(賢理)闘やばらぎ、ごごなふコト、  
せふれふ(涉獵)闘種々の書物を廣く讀む  
コト、學問に廣く通じてるコト、

(せぜほ)

せほね(背骨)闘脊中(脊中)の骨、委(委)しく

せまい、せむ 道、蟬、攻

(せぜま)

せまい(施米)闘貧困者に米をめぐみ與  
(与)ふコト、ほごし米、  
せまる(道)闘動ちかまつて来る、くるし  
む、いそぐ、いそがる、切(切)なく  
る、きはまる、せばまる、ちりまる、

(せぜみ)

せみ(蟬)闘虫の名、夏季に於て日中に出  
て、樹に止(止)りて、やかましく泣く虫、  
其の種類甚だ多し、  
せみ(滑車)闘帆柱などの上端に、取り付  
けて物を引き上る用を爲す、小さき車  
を云ふ、  
せみ(春梁)闘又た春峰とも書く、馬の  
せみのほづき(蟬羽月)闘陰曆六月の稱、  
せみのほづき(蟬羽衣)闘薄く織りたる  
絹物にて製したる衣服の稱、

(せぜむ)

せむ(攻)闘敵を撃つ。進み行きて敵を

せむ、せめか 貴

(せぜめ)

せむし(僞僞)闘病氣の名、背骨(背骨)が屈  
(屈)みて背に大きな瘤(瘤)の如き物の出  
来る病氣、又の名を、イギリス病と云ふ  
討つ、相手なまかさんと迫る、あやま  
ち又は罪科をたらしあばかんとする、  
せむ(貴)闘動ただす、しかる、なじる、  
さいそくす、せびる、

(せぜめ)

せめ(貴)闘せむるコト、なじるコト、我  
れの確(確)と引き受けて、避(避)られぬコ  
ト、責任(責任)なまかに、はめるたがの  
コトを云ふ、  
せめあひ(攻合)闘せめあふコト、  
せめあふ(攻合)闘双方よりせめてゆく  
互ひに打ちあふ、互ひに過失をあばき  
合はむと、せまる、  
せめいる(攻入)闘動進んで敵の中にせめ  
入る。敵の中へあはれ、む、  
せめちま(貴馬)闘あれ馬を乗りならすコ  
ト、馬をならし、こなすコト、  
せめおとす(攻落)闘動攻めて敵軍を降伏  
(降伏)させる、攻めて敵の城をぬく、  
せめかか(攻掛)闘動敵軍めかけて撃  
(撃)て行く、

(せぜよ)

せよ(施與)闘めぐみほごすコト、  
(せぜり)

せり(芹)闘水草の名、沼(沼)溝(溝)等の水  
氣多き湿地(湿地)に生ず、葉は羽状を爲  
せる三片(三片)のものにて、對生す、春の  
半頃より嫩葉(嫩葉)を出し、夏の頃に最  
も繁茂して、白き小さき花を咲す、葉莖  
(葉莖)共に一種の香氣ありて、食用とな  
る、

(せぜり)

せり(競)闘せり賣するコト、行商、  
せり(競)闘せり賣するコト、  
せりあ(競上)闘動より押し(押し)て上へ  
あぐ、  
せりあ(競上)闘動段々直段を高くな  
す、段々高き直をつける、  
せりあ(競合)闘せりあふコト、  
せりあ(競合)闘動あそふ、いさかひ  
する、互ひに劣(劣)らじはりあふ、  
せりいち(競市)闘せり賣を爲す市、  
せりちり(競賣)闘物品を持ちて賣り歩く  
コト、行商、

せめき、せめな

せめり、せめり

せよ、せりら

せめき(貴木)闘しめ木、くさびのコト、  
せめく(貴苦)闘せめて苦(苦)しめるコト、  
せめく(貴具)闘罪人を責めるに用ゆる道  
具、昔時に用ひし物、  
せめく(攻具)闘敵を攻めるに用ゆる具、  
即ち武器(武器)のコトを云ふ、  
せめく(闘)闘互ひに争(争)ひ合ふ、  
せめく(闘)闘互ひに争(争)ひ合ふ、  
せめく(攻口)闘攻めて行く場所、  
せめく(貴殺)闘貴めてころす、い  
ちめころす、  
せめさい(阿貴)闘貴(貴)て苦(苦)し  
せめさ(攻道具)闘敵を攻める凡ての  
道具、即ち武器の、  
せめさ(貴道具)闘動昔時罪人を拷問  
するに用ひし、種々の道具、  
せめて(攻手)闘せめて來る人数、  
せめて(貴手)闘せめ苦しむる人、即ち拷  
問(拷問)する人、  
せめて(切)闘よんどころなくば、甚(甚)だし  
くば、無理(無理)に、たつて云ふ意を表  
はす語、  
せめとふ(貴問)闘動なぢりさふ、  
せめとる(攻取)闘敵を攻めて、城又は  
土地を取る、  
せめな(貴詰)闘動きびしく問ふ、こ

せめき、せめな

せめり、せめり

せよ、せりら

せめぬく(攻抜)闘動攻めて、敵城又は敵  
陣(陣)なごを下し落す、  
せめのぼる(攻上)闘動軍勢(軍勢)が都(都)  
(都)へ攻(攻)て行く、  
せめはたる(貴促)闘動きびしく督促(督促)  
せめよす(攻寄)闘動攻めつゝ進みよる。  
攻めて行く、  
せめよる(攻寄)闘動攻めて近づき來る、  
せめんと闘一種の人造土(人造土)の名、石灰  
と粘土(粘土)を混ぜ合せて焼きて、粉  
とせし物、貴重なる建築材料の一なり

(せぜも)

せもつ(施物)闘ほごしに出す物品、

(せぜや)

せやく(施薬)闘薬をほごすコト、ほご  
こし薬(薬)醫士が病氣を診(診)て薬の處  
方をなすコト、  
せやく(施薬院)闘昔時官府より、貧  
民に藥劑を施したる所の稱、現今の慈  
惠病院の如きもの、

せめき、せめな

せめり、せめり

せよ、せりら























せんけ

せんけい(善計) 図よきくわだて、よきはかりごと、よきたくみのコト、せんけい(全形) 図まさまりたる形、全體の状態(サ)のコトを云ふ、せんけち(遷喬) 図春來りて谷間の鶯が、喬木にうつるこ云ふ意より轉じて、他地方へ移りゆくコトを云ひ表はす語、せんけち(宣教) 図宗教を説きて、弘(ヒ)むるコトを云ふ、「なる教訓(サ)せんけち(善教) 図善真なる教へ、爲めにせんけち(前曉) 図前日の夜あけ、せんけつ(鮮血) 図なまぐさき血、せんけつ(鮮潔) 図美しきコト、けがれてぬコト、いさぎよきコト、せんけつ(専決) 図自分一人にて定めるコト、ト、勝手に定めるコト、せんけつ(先決) 図先に定めて置くコト、先に定められたることから、せんげつ(先月) 図すぎ去りし月、まへの月、即ち前月、せんげつ(前月) 図まへの月、せんげつ(緘月) 図みか月のコト、せんげふ(専業) 図専門とせる事業、専門とせる職業の科ト、せんげふ(職業) 図いやしきわざ、下等な

せんけ

るなりあひ、醜業の科ト、せんけん(先見) 図前以て其の事を察し知るコトを云ふ、せんけん(淺見) 図低(ヒ)き見識(サ)。あさはかなる考へのコト、せんけん(專權) 図權力をふるひて、勝手氣まゝな行をなすコト、せんけん(擅權) 図前條に同じ、せんけん(先賢) 図昔時の賢人(サ)、せんけん(嫺娟) 図やさしくうつくしきコト、うるはしきコト、せんけん(宣顯) 図のべあらはすコト、せんけん(船舷) 図ふなべりのコト、せんけん(泉源) 図いつみのみなもとの湧き出るもとのコト、轉じて根元(サ)、みなもとのコトを云ふ、せんげん(宣言) 図のべ云ふ、廣くのべて知らせちかふコト、せんげん(讒言) 図うは(ヒ)このコト、せんげん(踐言) 図云ひたる通りに、相違なくふみ行ふコトを云ふ、せんげん(前言) 図前に述べたる言葉、せんげん(全權) 図全部の權力、一切の權力、全部の權能(サ)、せんげん(善言) 図よきことば、爲めになるコト、教へさなるべき言(ヒ)、

せんけ、せんこ

せんけりし(宣教師) 図ヤソ教の布教師、せんげんしよ(宣言書) 図或る事實(サ)に付き、天下に知すべき事を記せる文書、せんげんころし(全權公使) 図大使の次に位する外交官の名、即ち國際上に關する、總ての權利を、天皇陛下より御委任されて外國へ行き、我國を代表する官吏、せんこ(千古) 図むかし。長き年月の間、せんこ(戰鼓) 図いくさに用ゆる大鼓(サ)、即ち陣太鼓(サ)の科ト、せんこ(船庫) 図船を藏(サ)し置くくら、船の内に在る倉庫、せんこ(先後) 図あさや、まさき、せんこ(蟬語) 図せみの鳴き聲、轉じてやがまししくしやべり立つコト、せんこ(戰後) 図戦争が終つた後(サ)、せんこ(讒語) 図うは(ヒ)このコト、せんこ(前後) 図前と後と、あごさき、せんこ(全戸) 図一家中、家族(サ)、せんこ(前古) 図大むかしのコト、せんこ(善後) 図後々(サ)の爲(サ)になるやうに取り計(サ)ふコト、あごの仕末(サ)を善(サ)くつけるコト、せんころ(淺紅) 図うすき桃色(サ)、せんころ(先公) 図まさきのきみ、先君、

せんこ

せんころ(戦功) 図いくさのてがら、せんころ(染工) 図染物(サ)を爲す職人、そのものや、こつや、せんころ(栓孔) 図栓をはめこむべきあな、せんころ(専攻) 図其の事のみ専門に修(サ)め研(サ)ぐコトを云ふ、せんころ(船工) 図船大工(サ)、せんころ(全功) 図申し分なきてから、せんころ(先刻) 圖さきほど、せんこく(宣告) 図のべ知らす、裁判の言渡(サ)の科トを云ふ、せんこく(戰國) 図國々が互ひに戦ひて、天下の亂れ居る時代を云ふ、我が國にては應仁より元龜(サ)天正(サ)までの間を云ふ、せんこく(全國) 図國ぢゆう、せんこつ(扇骨) 図あふぎのほね、せんこつ(戦骨) 図戰場に横(サ)ばつてる戦死者の骨、せんこふ(善業) 図よきしわざ、善根、せんころ(先頃) 圖さきころ、せんころ(善根) 図人をあはれみめぐむコト、即ち慈善の行ひを云ふ、せんこぼち(綿牛蒡) 図きがみ牛蒡(サ)の科トを云ふ、せんこくふぬ(千石船) 図和船の種類にて

せんこ、せんさ

千石の重量(サ)ある荷物(サ)を積み得る船、せんこくふん(宣告文) 図裁判の云ひ渡(サ)の理由を書きたる文書、せんこくとし(千石通) 図さうし(一種)にて、長方形の箱の如き物にて、上の口より米を入るれば、横(サ)米さに爲つて下の口より出る仕掛の物、せんさ(千差) 図いろいろ、ここなつてあるコトを云ふ、せんざ(遷座) 図天子又は神の御座所(サ)を、他へうつされ給ふコト、せんざ(前座) 図講談落語の席にて、初めの中に出る藝人の稱、せんざい(前裁) 図庭(サ)に植(サ)たる草や木、庭園(サ)の科ト、せんざい(専裁) 図自分の勝手にさばくコト、我が勝手に定めるコトを云ふ、せんざい(淺才) 図智識の足ざるコト、せんざい(鮮菜) 図新らしき野菜物(サ)、せんざい(先妻) 図以前の女房、せんざい(剪裁) 図切上て細かくす、細かくたさるコト、せんざい(織細) 図非常に細かきコト、せんざい(剪紵) 図絹糸や絹きれなごを用ひて作りし細工物(サ)の稱、

せんさ

せんざい(千歳) 図長(サ)の年月の科ト、せんざい(善哉) 図佛教の語、人の行の善良なるを見て、よいかないかなと褒(サ)める語、菓子(サ)の一種、小豆(サ)を汁(サ)に煮き、砂糖を入れ餅(サ)を入れし物の稱、「争ふコト、いくさせんざり(戦争) 図武器を用ひて、威力をせんざり(船窓) 図船に在るまど、せんざり(船倉) 図船底(サ)に在るくら、即ちふなぐらの科ト、せんざり(潛藏) 図かくしななす、ひそみかくるコトを云ふ、せんざり(蟬噪) 図蟬(サ)の鳴きたつるが如く、やかましうしてうるさきコト、せんざく(芟削) 図かり取り、けづりのぞくコトを云ふ、刈りて美しくす、せんざく(詮索) 図たづねもさむ。さがししらべるコトを云ふ、せんざく(穿鑿) 図のみにて孔(サ)をあけるコト、委しくさぐり求(サ)むるコト、せんざつ(羨殺) 図非常にうらやましが、るコト、羨(サ)み切るコト、せんざつ(禪刹) 図寺院、寺、せんざいもち(善哉餅) 図汁粉の一種、つぶし餡(サ)の汁の中へ、餅を入れたるもの、



せんさ、せんし

せんさいもの(前栽物) 園野菜類(前栽)の青物(青)のコトを云ふ。  
 せんざんかみ(穿山甲) 園熱帯地方に産する獸の名、其の形は鼠に似て大きく、尾頗る長し、全身は骨の如き鱗(鱗)を以て包(包)まれ、常に穴居して蟻(蟻)を捕(捕)えて食す云ふ。  
 せんざばんべつ(千差萬別) 園さまざま雑多さ云ふ意を表はすに用ゆ語。  
 せんし(宣言) 園昔時天子より下し給ふ任官の勅命を奉じて、上卿(上卿)より外記(外記)に下知(下知)せしコトを申する語。女官の名仙洞(仙洞)の女房。  
 せんし(淺紫) 園極(極)めてうすき紫。  
 せんし(専恣) 園ほしいまま、我まま、せんし(擅私) 園勝手氣ままに自己の利益のみをはかるコトを云ふ。  
 せんし(織指) 園しなやかな指。轉じて美人の指のコトを云ふ。  
 せんし(瞻視) 園みあぐるコト。じつこ、みつめてるコトを云ふ。  
 せんし(千思) 園いろ／＼と思案(思案)するコト。千々(千々)に心を碎くコト。  
 せんし(先子) 園先妻(先妻)の生みの子。  
 せんし(戰士) 園軍人のコト。  
 せんし(遷徙) 園うつるコト。うつすコト。

せんし

せんし(先師) 園死去された師匠。  
 せんし(戦死) 園うち死のコト。  
 せんし(船子) 園ふなこ、せんごう、せんし(戦史) 園戦争の歴史、軍記、せんし(潛思) 園心をおちつけて考ふるコト。深く思案するコト。  
 せんし(宣示) 園一般に述べ知らせるコト。  
 せんし(撰絲) 園絹織物の名、はふたひの類を云ふ。  
 せんじ(戦事) 園戦争に關したる事。  
 せんじ(戦時) 園戦争をしてる時代。  
 せんし(前肢) 園まへ足のコト。  
 せんし(禪師) 園學識德行共に高き禪宗の高僧に、朝廷より賜はる尊稱。法師の科ト。  
 せんし(全市) 園其の市の、こらず、せんし(全紙) 園切りたる紙に對しての稱にて、満足(満足)なる紙。新聞紙残らず云ふコト。  
 せんじ(前時) 園さきのさき、まへ、せんじ(善事) 園よろしき事、芽出度き事、祝ひごこのコトを云ふ。  
 せんじ(漸次) 園だんだん、しだい、せんじ(前事) 園まへのコト、もこのコト、前(前)に在りしコト、せんじ(前次) 園前後に同じ。

せんし

せんしち(千秋) 園年の久しきコト。極めて長きコトを云ふ。  
 せんしち(専修) 園専一にをさむるコト。  
 せんじち(善柔) 園やさしくみせかけてるコト。温和をよほふコト。  
 せんしつ(纖悉) 園細々しき事にまで十分ゆき届くコトを云ふ。  
 せんじち(踐跡) 園ふみにじるコト。  
 せんしつ(船室) 園船の内に在る客室(客室)、船内の部屋(部屋)。  
 せんしつ(痲疾) 園病氣の名、痲氣、せんしつ(露濕) 園うるほふコト。患(患)によくするコトを云ふ。  
 せんじつ(先日) 園このあひだ、過日(過日)、せんじつ(前日) 園まへの日、せんしつ(禪室) 園禪學を修むる部屋。さざりを開くべく修業する部屋の稱、せんしふ(全集) 園其の人の著作に掛る、詩歌文章等を残らず集めたる書物を云ふ。  
 せんしや(船車) 園船と車、せんしや(選者) 園選擇する人、えらぶ人例は俳句の選者など、せんしや(戰車) 園軍用の車、せんしや(織砂) 園極めて細かき砂、せんしや(撰者) 園文章をつくりたる人。

書物を著(著)したる人、

せんしや(前者) 園前に在る人。さきにありし事柄(事柄)のコト、せんしゆ(船首) 園船の先(先)、へさき、みよしのコトを云ふ、せんしゆ(船主) 園船の持主(持主)、せんしゆ(船手) 園せんごう、ふなこ、せんしゆ(先主) 園まへの主人、せんしゆ(先取) 園さきどり、他の人より先に受取るコト、せんしゆ(戦守) 園戦(戦)ふさ守(守)るコト、せんしゆ(占守) 園其の處に據(據)りて、固く守り居るコトを云ふ、せんしゆ(戰手) 園かまわき手。轉じて美人の手のコトを云ふ、せんしゆ(選手) 園選抜(選抜)したる人。其の技に最も長せる人、せんしゆ(漸滿) 園ゆる々、コトうるほふ、せんしゆ(前主) 園まへの主人、せんしよ(戦書) 園戦争を始むる云ふ通知書、宣戰の文書、せんじよ(蟻蝨) 園虫の名、ひきがへる、せんじよ(餘紋) 園其の人の才識をばかり試(試)して、官位をさぐるコト、せんしよ(膳所) 園昔時將軍大名等の膳部がかりのコトを云ふ、

せんし

せんしよ(善書) 園文字を巧みに書くコト

せんしよ(前書) 園前に記(記)したる文書。前に記るべき文書、前文、せんしよ(全書) 園一つの科目に關する事を、残らずあつめ載せし書物、せんしん(淺斟) 園小人數にて、あつさりさ催(催)す酒宴(酒宴)即ち小酌、せんしん(淺深) 園淺きと深きと、せんしん(先進) 園學問藝術仕官等に就きて、我より先に進める人、せんしん(專心) 園一生懸命(一生懸命)になるコト、熱心(熱心)なるコトを云ふ、せんしん(前進) 園前へ進む、さきへ出る、せんしん(前身) 園前の世の身。今より以前(以前)の時の境遇(境遇)、せんしん(善心) 園まごころ、本心(本心)正しき心(心)のコト、せんしん(全身) 園身體(身體)ちゆう、せんしん(漸進) 園次第次第に進み行くコト、次第に發達するコト、せんじん(前人) 園前の方に在る人。前代(前代)の人のコト、せんじん(先人) 園前條に同じ、せんししや(戦死者) 園戦争にて死せし人

せんし

うちじにせし人、

せんしたち(剪枝刀) 園大形の西洋鉄(西洋鉄)の如き物、髪(髪)の毛を斬(斬)るに用ゆる鉄、せんじちや(煎茶) 園煎じて喫(喫)む茶、煎じたる茶、せんじつむ(煎詰) 園餾につめる、水氣のなくなるまで煎じる。終りまで論じつめる、せんしやち(船槽) 園船の帆(帆)ばしら、せんしやち(船將) 園軍艦の司令官、船長(船長)に同じ、せんしやち(旋匠) 園ろくろ細工師、ひき物師(ひき物師)のコトを云ふ、せんじやち(戦状) 園戦況に同じ、せんじやち(僧上) 園分限をわきまへず、我が儘(我が儘)の舉動(舉動)を爲すコト、せんじやち(泉壤) 園地下。泉下、せんしやち(前生) 園まへの世。うまれぬまへの時。さきしやう、せんしやち(善祥) 園めでたきコト、せんじやち(禪讓) 園天子の御位をゆづらせらるるコトを云ふ、せんしやち(痲癩) 園病氣の名、陶先(陶先)腹部(腹部)のさし込み痛む病氣、せんしやち(閃爍) 園きらめきわたる、せんじやち(厚絹) 園かまわきコト。もろ

せんし



せんし  
 きコト。しなやかなるコト、  
 せんじやく(織弱) 図前條に同じ、  
 せんじやく(前借) 図義務責任等をたさ  
 の前に金子を借るコトまへかり、  
 せんじやく(賤差) 図毛織物。毛布、  
 せんじやく(賤差) 図美なる食品を載せて  
 ある膳部 ①お料理のコト、  
 せんじやく(禪宗) 図佛教の宗派(ぜん)の一  
 にて、建仁元年に榮西僧師(えいせい)が、宋  
 (せう)の國に留學して歸りて、傳(でん)えた  
 りと云ふ宗旨、  
 せんじやく(饋粥) 図かゆ、  
 せんじやく(選出) 図えらび出す、えり拔  
 く ②選舉されたるコト、  
 せんじやく(戰術) 図戰爭する方法、いく  
 さの方法。た、かひのしかた、  
 せんじやく(仙術) 図仙人の使(し)ふ一種  
 の術。不思議なる術、  
 せんじやく(撰述) 図書物を著(し)はすコ  
 ト、  
 せんじやく(先蹤) 図古人の爲し來たりた  
 る、あさかたのコト、  
 せんじやく(戰慄) 図ふるひおそる、コト  
 せんじやく(瞻矚) 図ながめる、みつめる、  
 せんじやく(千秋樂) 図雅樂の音曲の名  
 ③歌舞演技等の無事に終りたるを云ふ  
 に用ゆる語、

せんし  
 せんしばんこう(千紫萬紅) 図花の色の種  
 々様々なるコトを云ふ、  
 せんしばんかう(千思萬考) 図千(せん)に  
 思を碎(くだ)くコト。種々様々思案(しあん)  
 に暮(く)るコトを云ふ、  
 せんしやくきん(前借金) 図前かりをなし  
 たる金子のコトを云ふ、  
 せんしやくこく(戰勝國) 図全部の戦ひに  
 打ち勝ちたる國、  
 せんしんぼんく(千辛萬苦) 図さまさまな  
 せんしやくきよく(尖晶石) 図水晶の種類  
 にて、其の先(せん)の尖(か)れるもの、  
 せんしちばんざい(千秋萬歲) 図極めて長  
 く續(つ)くこと云ふ意を表はす語、  
 せんしよくじやく(染色術) 図染物(せん)を  
 なす仕方。染色(せん)を表はす學術上の  
 方法のコト、  
 せんしやばんべつ(千差萬別) 図いろいろ  
 さつた。思ひ思ひと云ふコト、即ち物の  
 相ひさしからざるコト、  
 せんしやくとくけん(先取特權) 図法律の語  
 他の人より先(せん)に物を得るコトの權  
 利。即ち優先權、  
 せんじやくわねん(千手觀音) 図佛像の  
 一種。智慧の十分に具(そな)はつてると云  
 ふコトを表はしたる物さかにて、觀音

せんし、せんす 撰、管、先 一一一八  
 (せん)の胴(たね)より上に二十五體、具(ぐ)は  
 ばり居りて、左右に各二十宛(せん)の臂  
 (せう)が出てゐる觀音の像、  
 せんじやくせいひん(戰時禁制品) 図萬國  
 公法上、又は國際約上に就きて、戰時に  
 於て双方の交戦國へ、他の中立國より  
 して輸入するコトを禁じられたる物品  
 のコトを云ふ、其の物品の種類は素よ  
 り一定されてゐるが、併し其の大體は  
 直接に軍用となるべき物、  
 せんす(鴉子) 図あぶぎのコト、  
 せんす(撰) 圖動作ありあらず、のぶる、あ  
 みなす、即ち編輯す、  
 せんす(管) 圖我が身のほごをわきまへす  
 に、目上(めいじやう)の人があるかなしにする、  
 せんす(先) 圖自動さきに立つて事をなす、  
 さきんする、  
 せんす(煎) 圖動せんじる、煮(に)出す、  
 せんす(宣) 圖勸のぶる、つける、知らせる  
 せんす(潛水) 圖水中へもぐり入るコ  
 ト、水中にかくれるコト、  
 せんす(泉水) 圖庭園に掘りたるみやび  
 なる池のコトを云ふ、  
 せんす(全數) 圖のこらすの數(かず)、  
 せんす(千筋) 圖織(か)に細かき筋の通  
 つてる縞襪(かむか)の稱、

せんすべ(詮術) 圖しかた、ほご、すべ  
 方法、爲すべき手たん、  
 せんするき(潜水器) 図潜水服を着けて水  
 中へ沈(しず)める人に、呼吸(き)を自由に  
 なさしむべく爲めに、新らしき空氣を  
 送り、又た呼(よ)きたる空氣を、容易く  
 排出せしむる器械、  
 せんするふ(潜水夫) 圖水中へ潜水服を着  
 けて、沈みて仕事を爲す人、  
 せんするふく(潜水服) 圖潜水夫が水中に  
 て、種々の作業を爲すべく爲めに、着る  
 一種の頑丈なる衣服、ゴムと金屬(くわ)と  
 とより製せらる、  
 せんすべぬし(無詮術) 圖いたしかたなし  
 如何んとも爲しあはさす云ふ意を表  
 はす語、  
 せんせ(前世) 圖まへの世、  
 せんせい(專精) 圖もつばらくばしきコト  
 専心(せんしん)に同じ、  
 せんせい(淺青) 圖色舎の稱、うすあをき  
 色、あさぎ色のコトを云ふ、  
 せんせい(先聖) 圖昔の聖人のコト、  
 せんせい(先生) 圖學問に達して人 ①師  
 匠と仰ぐ人のコトを云ふ、  
 せんせい(戰世) 圖戰國に同じ、  
 せんせい(宣誓) 圖ちかひを立すコト、  
 せんす、せんせ

せんせい(蟬蛻) 圖蟬のゆけから、  
 せんせい(專制) 圖君主の意見のままに、  
 政事を行ふコトを云ふ、  
 せんせい(潛勢) 圖ひそんで現(げん)はれ  
 る勢力のコトを云ふ、  
 せんせい(專政) 圖勝手氣ままの政事 ①あ  
 つせいの政事のコト、  
 せんせい(專製) 圖其の人一手にて、製造  
 するコト、又はせし物、  
 せんせい(船稅) 圖船舶に賦課(ふせ)る租稅  
 のコトを云ふ、  
 せんせい(善政) 圖よき政治、  
 せんせい(前生) 圖さきの世、前の代、  
 せんせい(全盛) 圖非常に盛んなるコト、  
 せんせう(鮮少) 圖さなきコト、  
 せんせう(鮮少) 圖すくなきコト、わづか  
 のコト、  
 せんせう(前宵) 圖前日の夜前日の夕、  
 せんせう(船籍) 圖船が其の屬(ぞく)せる管  
 海官廳を定めて、其の官廳の臺帳に録  
 (ろく)られてあるもの、稱、  
 せんせう(泉石) 圖泉水と、には石、  
 せんせう(前夕) 圖前日の夕方、  
 せんせう(前席) 圖前の方の席 ①前に座し  
 たる席 ②さきに述べしコト、  
 せんせ

せんせつ(洗雪) 圖あらひそぐと云ふ意  
 にて、恥(か)などをそぎきよむるコト  
 せんせつ(緘服) 圖こまかきコト、  
 せんせつ(剪裁) 圖たち切る、きる、  
 せんせつ(前説) 圖前(ぜん)に述べたる意見  
 せんせふ(戰捷) 圖た、かひに勝つから  
 いくさのコトを云ふ、  
 せんせふ(全捷) 圖甲分(けんぶん)なく勝つ、即  
 ち大勝利のコト、  
 せんせふ(全燒) 圖のこらす焼る、まるや  
 せんせん(船戰) 圖ふないくさ、海戰、  
 せんせん(占専) 圖一人(ひとり)じめ、  
 せんせん(閃閃) 圖きらきらときらめくさ  
 まに云ふ語、例は銀影閃々、  
 せんせん(戰線) 圖敵と戦を交(ま)えてる  
 區域(くわい)を云ふ、  
 せんせん(宣戰) 圖天皇が敵國に對して、  
 戰を爲す由を告げ知らせらるるコト、  
 せんせん(戰戰) 圖ビクビクしてゐる状(じやう)、  
 こわがりおそれる状を云ふ、  
 せんせん(戰船) 圖軍艦に同じ、  
 せんせん(先前) 圖まへがた、以前、  
 せんせん(前線) 圖第一のほな、ズット前  
 (せん)の方の列(れつ)の稱、  
 せんせん(淺鮮) 圖さなきコト、  
 せんせん(瀟瀟) 圖小川の靜かなる物音  
 せんせ







せんち

せんぢ(精治) 図つくろひなほすコト、  
 せんぢ(煎茶) 図熱湯に浸(シ)して喫(シ)む煎じ出したる茶、  
 せんぢ(仙女) 図女の仙人、 「コト  
 せんぢ(蟾蜍) 図虫の名、ひきがえるの  
 せんぢ(洗除) 図よこれを洗ひのぞくコト、  
 せんぢ(洗去) 図これを洗ひのぞくコト、  
 せんぢ(賤女) いやしき女、はしため、  
 うたひ女、遊女、  
 せんぢ(前陳) 図前(シ)に述(シ)たるコト  
 せんぢ(先陣) 図先登に同じ、先(シ)のそな  
 へのコト、前衛、  
 せんぢ(縲塵) 図ちりほこり、こみ、  
 せんぢ(戰陣) 図戦地の陣營、  
 せんぢ(戰場) 図戦場のさわき、戦争の  
 さわき、戰場、  
 せんぢ(善知識) 図佛教を俗人に説き  
 聽(シ)せて、善道に導く學識徳行のある  
 僧侶の科トを云ふ、 「を爲す人  
 せんぢ(船長) 図船の指揮取締(シ)る  
 せんぢ(戦場) 図戦争をなす場、  
 せんぢ(船中) 図船のなか、  
 せんぢ(先住) 図寺院の以前の住職、  
 せんぢ(舟籠) 図多くの人々の中に於  
 て、特別に可愛(シ)がられるコトを云

せんち、せんて

せんぢ(全智全能) 図一つとして  
 缺(シ)てるコトなき智力と能力、  
 せんぢ(痲瘋) 図腹のしぶつて痛(シ)む  
 コト、痲瘋のいたみ、  
 せんぢ(全通) 図其の地方の鐵道などが  
 全部開け通するコトを云ふ、  
 せんて(先手) 図他より先(シ)んじて行ふ  
 コト、先(シ)に立つて働(シ)くコト、  
 せんて(先) (シ)に立つて働(シ)くコト、  
 先(シ)じて事をなして相手をへこます  
 コト、圍碁(シ)將棋(シ)にて、先(シ)に  
 打(シ)ち始むるコト、又は其の人の稱、  
 せんて(先帝) 図さきつ御代(シ)の天子  
 の御事を申す、  
 せんて(登踏) 図目的(シ)を達する仕方  
 (シ)、てびきと云ふコト、わな、やな  
 のコト、  
 せんて(船底) 図ふなぞ、  
 せんて(前庭) 図まへの方の庭、  
 せんて(選定) 図えらびきめるコト、  
 せんて(前程) 図行くべき先き、即ちゆ  
 くて、將來(シ)の科ト、  
 せんて(前定) 図以前(シ)に定めたるコ  
 ト、前もつて定めるコト、  
 せんて(前提) 図或る物事を云ひ出んこ  
 す前置きの事柄(シ)、或る物事を誘

せんて、せんさ

せんて(ひ起す) べき材料とせざるもの、  
 せんて(前兆) 図さざし、まへふれ、  
 せんて(前條) 図前の箇條、前のくだり、  
 せんて(剪剔) 図切り去るコト、切りの  
 ぞくコトを云ふ、  
 せんて(洗滌) 図あらひ清める、  
 せんて(鉄鉄) 図いたる鉄、いてつ、  
 せんて(先哲) 図昔のえい、  
 せんて(前哲) 図先哲に同じ、  
 せんて(旋轉) 図グルグル廻るコト、  
 せんて(閃電) 図いなづまのきらめくコ  
 ト、電氣のひかるコト、  
 せんて(前電) 図まへに打つた電報、  
 せんて(先天) 図うまれつき、うまれざ  
 る前のコトを云ふ、  
 せんて(前殿) 図表御殿、前の御殿、  
 せんて(先性) 図うまれつきに具  
 (シ)はれる性質を云ふ、  
 せんて(先天毒) 図生れながら、有  
 (シ)てる病氣毒、例は胎毒(シ)など、  
 せんて(先天病) 図うまれつきの  
 病氣、即ち遺傳病の科ト、  
 せんて(先天的性能) 図先  
 祖(シ)より段々筋(シ)を引き來れる  
 性質、  
 せんて(遷都) 図天子のゐます都を他處(シ)

せんさ

せんさ(へうつ) せらるるコト、  
 せんさ(賤奴) 図下男、いやしき男子、  
 せんさ(先度) 図先(シ)ころ、先日(シ)、せ  
 んだつてと云ふコト、  
 せんさ(先途) 図進み行く道(シ)、目的(シ)  
 の物事の結局(シ)、利害得失成敗  
 の決する大切なる場合を云ふ、即ち此  
 を先途と戦ふの類、  
 せんさ(前途) 図進(シ)み行く道、將來(シ)  
 のコトを云ふ、  
 せんさ(全部) 図部(シ)全部、  
 せんさ(毒奴) 図ひけの一面に生(シ)てる  
 人、西洋人のコトをあざけつて云ふ語  
 せんさ(尖頭) 図さきのさがつてるコト  
 尖(シ)の細きコトを云ふ、  
 せんさ(先頭) 図さき、はな、はし、  
 せんさ(船燈) 図船に點(シ)す燈火、  
 せんさ(先登) 図戦(シ)の時に第一に  
 敵陣に攻め入るコト、凡て第一にのぼ  
 りたるコト先に立つコト、  
 せんさ(戦鬪) 図たたかふコト、  
 せんさ(船頭) 図船を動かす人、船を進  
 ます人、  
 せんさ(煽動) 図おだてるコト、  
 せんさ(仙洞) 図太上皇(シ)の御座所  
 (シ)の科トを申す、轉じて太上皇の御

せんさ、せんな

せんさ(事) 申し上ぐ、  
 せんさ(占得) 図しめうるコト、  
 せんさ(潜匿) 図ひそみかくる、  
 せんさ(宣德) 図支那にて始めて製せし  
 銅器(シ)、又は陶器の稱、宣徳の二字を  
 銘(シ)してある物、  
 せんさ(滑道) 図かくれのがるコト、  
 せんさ(戰鬪) 図軍艦が此れより戦  
 を始むる知らせに立つる旗(シ)、  
 せんさ(前頭骨) 図ひたひの骨、  
 せんさ(戰鬪員) 図敵と専らたたか  
 ぶ軍人、即ち歩兵騎兵砲兵科の科トを  
 云ふ、  
 せんさ(戰鬪艦) 図軍艦の一種、主  
 (シ)として敵艦を砲撃し又た敵の砲撃  
 を十分に防ぎ得る仕掛(シ)になつてる  
 もの、  
 せんさ(戰鬪線) 図敵軍と交戦する  
 其の範圍(シ)、即ち戦線、  
 せんさ(仙洞御所) 図仙洞に同じ  
 其の條を見よ、  
 せんさ(戦鬪力) 図戦鬪に堪(シ)  
 る力、即ち兵力の科ト、  
 せんさ(所詮) 圖つづまること、  
 せんさ(千生) 図果實(シ)が小さき實

せんな、せんい

せんな(數多) 結(シ)びしを云ふ、  
 せんな(小き物) 群(シ)り生じてる状  
 を云ふ、  
 せんな(船難) 図航海中に船が風雨の難  
 に遇ふコト、海難(シ)、  
 せんな(賤男) 図いやしき男、下男、  
 せんな(善男) 図心掛(シ)のよき男子  
 せんな(佛門) 図佛(シ)せし男子、  
 せんな(千成柿) 図さる柿の科ト、  
 せんな(鈴) 図の如く群(シ)り  
 生するより此の名あり、  
 せんな(千成茄子) 図茄子の一種  
 其の實(シ)の細かくして、群(シ)り生  
 する物、  
 せんな(千成酸漿) 図ほほづき  
 の一種、其の實は極(シ)めて小さけれど  
 も、澤山に群(シ)り生ず、  
 せんな(千成草) 図草の名、  
 飄草の種類にて、飄草の大きき二三寸  
 ほどの物が、多く群(シ)りて生ず、  
 せんな(禪尼) 図出家(シ)したる女子、  
 せんな(鮮肉) 図新らしき肉、  
 せんな(先入) 図以前(シ)に自己、又は  
 其人の精神に入りしコトを云ふ、  
 せんな(選入) 図えりぬきへ加へるコト  
 せんな(仙女) 図女の仙人、やまひめ、  
 せんな、せんい



せんに、せんれ

せんれよ(善女) 図心掛(おんこころか)のよき女子。佛門に歸依せし女子。  
せんれん(仙人) 図淨世(おんじやうせい)を離れて山などに住る居る神術に長ぜりさ云ふ人。神佛のやうなる人。  
せんれん(専任) 図主(おんぬし)として、其の事務を受け持つてゐるコト。  
せんれん(前任) 図前(おんぜん)に役につひてゐたコト、又は其の人の稱。  
せんれん(善人) 図心掛のよき人。  
せんれん(千日紅) 図草の名、秋の頃に紫紅色を呈せる極めて美しき花を咲かす、莖の長さ三尺内外あるを普通とす、其の花の開くや、長き間(おんちがひ)落ちざるより此の名あり。  
せんれん(千日草) 図千日紅(せんじつこう)に同じ、前條を見られよ。  
せんれん(仙人掌) 図草の名、さばてんのコトを云ふ、其の果實(おんじやうじやう)の形が仙人の掌(おんてのあし)に似たるより此の名出るなりき。  
せんぬき(栓抜) 図らせん状(らせんじやう)を爲して細き鉄の棒の先端に、横(おんよこ)に柄(おんえ)の附きある物、塙(おんたけ)の栓を抜く具。  
せんぬん(先年) 図過ぎし以前の年。  
せんぬん(先年) 図過ぎし以前の年。

せんれ、せんは

せんぬん(専念) 図一途(おんいつと)に思ひ込むコト。一心になるコト。  
せんぬん(前年) 図前の年。  
せんぬん(前年) 図千日松(せんじつしょう)のこびたる物の稱、盆栽(おんばいざい)に用ゆ。  
せんぬん(全能) 図満全なる能力。  
せんぬん(善網) 図佛(おんぶつ)の像の御手に附け引きはる綱(おんつな)轉じて葬式の時に棺を納め與(おんもち)の先きに付けて引きゆくつな(おんつな)の稱。  
せんば(船場) 図ふなつき(港)の、  
せんば(前場) 図取引所にて、午前中に立つ相場の(おんさうじやう)のコトを云ふ、後場に對しての語。  
せんばい(専賣) 図其の人にのみ限つて、販賣し得らるるコトを云ふ。  
せんばい(戰敗) 図いくさ(負)るコト、まけいくさ(負)るコトを云ふ。  
せんばい(先輩) 図我れより先に學問藝術等に達してゐる人。我より年上(おんとし)の人の稱。  
せんばい(全勝) 図全部勝す、残らずやめせんばい(全敗) 図全くの敗北。  
せんばら(瞻望) 図あほき見る。首を長くのばしてながむるコト。  
せんばら(船房) 図船室(おんせんじやう)に同じ。

せんは

せんばら(羨望) 図うらやましきコト、うらやましく思ふコト。  
せんばら(禪房) 図寺の、  
せんばら(前坊) 図前(おんぜん)の東宮(おんとうきやう)の、コトを申する語。  
せんばら(戰袍) 図鎧(おんよろい)の上に着る衣物、昔時陣中で用ひし物。  
せんばら(戰報) 図戰爭の容子を知らすコト、又は其の報告。  
せんばら(先方) 図相手(おんあひあひ)先の人。  
せんばら(前方) 図まへの方(おんまへ)に定めし方法の、  
せんばく(淺薄) 図淺慮(おんせんりょ)に同じ、  
せんばく(船魄) 図月(おんつき)の異稱、  
せんばく(汗陌) 図縦横(おんじやうびやう)に通つて大道路の、  
せんばく(膳箱) 図膳を入れて置く箱、  
せんばつ(先發) 図仲間(おんなか)より先に立するコト、又は出立せし人、  
せんばつ(選抜) 図よりぬくコト、えらび取るコトを云ふ、  
せんばつ(選伐) 図山林中の立木をえらびて伐(おんき)り取るコト、  
せんばつ(剪髮) 図髪(おんかみ)を切る、即ちさんばつ(剪髮)の、

せんは

せんばつ(剪伐) 図賊徒(おんそく)を平(おんひら)ぐコト、即ち征伐(おんせい)を拂(おんひら)き去るコト、又は枝(おんえだ)を拂(おんひら)き去るコト。  
せんばふ(戦法) 図戰爭の仕方(おんじやうほう)、戰術(おんせんじゆつ)の、  
せんばふ(道法) 図道法(おんどうほう)の名にて、薄墨(おんすす)を以て雲形(おんくもがた)などを、ぼかし塗(おんぬ)にして表はす仕方を云ふ、  
せんばん(旋反) 図グルグルめぐりて戻(おんかへ)り來るコトを云ふ、  
せんばん(銓判) 図はかり試みて、定むるコトを云ふ、學藝(おんがく)などにつきて、  
せんばり(栓張) 図戸に棒(おんぼう)を押して、開(おんひら)けぬやうになし置くコトを云ふ、  
せんばん(先番) 図物事を先きになすべき番にあたるコトを云ふ、  
せんばん(千萬) 圖數(おんかず)の、其の多きさま種類(おんしゆるい)や有様(おんあやう)の様々(おんさまざま)なるを云ひ表はす語。  
せんばん(先晩) 図さきの夜、まへの夜、  
せんばん(前晚) 図前日の夜、  
せんばん(先般) 図さきころ、さきだつて、先日のコトを云ふ、  
せんばん(前半) 図前の半分、文章(おんぶん)などに、前に述べたる半分のコトを云ふ、後

せんは、せんひ

せんばい(對して)の稱、  
せんばん(全數) 図残らずの全體、  
せんばづる(千羽鶴) 図鶴の數多く集まれるコトを云ふ、數多く紙にて鶴を折りて吊したるものを云ふ、  
せんばりぼち(栓張棒) 図外より戸などの開(おんひら)けぬやうに、かけて置く棒、即ちしんばりぼち(栓張棒)の、  
せんばいとくきよ(專賣特許) 図一つの新しい物を發明したる人が、其の物に就きて、專賣の權利を得たし、願ひ出たる時に、政府が調査の上特に許すコトを云ふ、  
せんび(賤微) 図下賤なるコト、身分の極せんび(船尾) 図船の、  
せんび(賤卑) 図いやしきコト、  
せんび(善美) 図すぐれてよきコト、すぐれて美しきコトを云ふ、  
せんび(前非) 図以前に爲したる曲事、  
せんび(全備) 図まつたくそなはる、  
せんび(先妣) 図子が、其の死したる母の、コトを云ふ語、  
せんび(鮮美) 図あざやかなるコト、新らせんび(扇屏) 図ちやううつがひにて、開閉(おんひら)の出來き得るやうになれるさびらのコトを云ふ、

せんひ、せんふ

せんひつ(仙譯) 図天子のみゆき、  
せんひつ(染筆) 図書又は畫等をかくコトを云ふ、  
せんひん(先便) 図先(おんまへ)のたより、先に出しせんひつ(選評) 図えりわけて、ひやうばん(選評)するコト、  
せんぶ(宣布) 図政府より人民に法律規則等を傳へ知らせるコト、  
せんぶ(先父) 図死したる父を云ふ、  
せんぶ(先夫) 図さきの夫(おんうす)を云ふ、  
せんぶ(賤婦) 図いやしき女、  
せんぶ(淺膚) 図うわつらの皮、轉じてあさはかなるコトを云ふ、  
せんぶ(先負) 図陰曆の語、公(おんこう)なる事件(おんじ)に用ひて悪(おんあく)と云ふ日の稱、  
せんぶ(全部) 図残(おんざん)らずの全體、  
せんぶ(前夫) 図さきそひの夫(おんうす)、  
せんぶ(膳部) 図膳の上に載(おんか)たる食品、  
せんぶ(膳夫) 図料理人、いたば、  
せんぶ(旋風) 図つむじ風、  
せんぶ(潛伏) 図ひそみ、かくれる、  
せんぶ(千振) 図藥草の名、インドウの一種にて、其の莖(おんかき)は乾して藥となる



せんふ、せんへ

味(シ)甚だ苦(カ)し。  
せんぶん(撰文) 図文章をつくるコト。  
せんぶん(全文) 図文章全部。  
せんぶん(前文) 図前(シ)に述べたる文章  
又は文句のコト。  
せんぶちき(旋風器) 図風を起(シ)さす機  
械(キ)。  
せんべい(煎餅) 図菓子一種小麥粉に玉  
子と砂糖を混ぜ煉(シ)て薄(ク)のばし  
て焼きし物。  
せんべい(前表) 図前に表(シ)はして置き  
せんべき(碑壁) 図瓦にて築きたる塀。  
せんべつ(銭別) 図旅立(シ)を祝して物を  
贈(ル)るコト、はなむけ。  
せんべん(先鞭) 図さきかげするコト。一  
方に路(カ)を開きつけるコト。  
せんべん(全篇) 図一つの文章。書物の全  
体的コトを云ふ。  
せんべん(前篇) 図二冊に分れたる書物の  
前の方の篇(シ)。

せんへ、せんま

せいべんばんくわ(千變萬化) 図種々雑多  
に變化して極(ク)まりなきコトを云ふ。  
せんべいふとん(煎餅蒲團) 図一枚の布團  
を二つに折り、其の中へ入つて寝(シ)る  
コト。薄(ク)き布。  
せんべんいちりつ(千篇一律) 図詩文章な  
ごに、趣味(シ)變化の少なきコトを云  
ふ。轉じて凡て興味(シ)の少なきコト  
せんぼ(羨慕) 図うらやみし心。  
せんぼ(繕補) 図つくろひおぎなふ。  
せんぼ(先鋒) 図先に立て敵に向ふ人。  
先を立て進み行く軍隊。  
せんぼ(船篷) 図ふねのさま。  
せんぼ(善謀) 図よきばかりこと。  
せんぼ(占卜) 図うらなふコト。  
せんぼ(戦役) 図うちじに。  
せんぼ(浴浸) 図水中にくぐつて姿(シ)を  
をかくすコトを云ふ。  
せんぼんしめぢ(千本占治) 図草の名しめ  
じ草(シ)の一種、細かき草(シ)の群(シ)。  
りて生ずるもの。  
せんまい(洗米) 図あらひまれ(米)。  
せんまい(饌米) 図神に供(シ)ふ洗ひ米。  
せんまい(燕) 図草の名、燕(シ)の一種に  
て、春先に芽を出したる嫩(シ)ものは、

せんま、せんみ

其の尖(シ)渦(シ)の如く輪(シ)を爲す茹  
で、食す。  
せんまい(螺旋) 図鋼鉄(シ)を薄(ク)のばし  
て渦の如く巻きし物、時計などの器械  
に用らる。  
せんまいづけ(千枚漬) 図漬物(シ)の一種  
大なる蕪(シ)の根を薄(ク)切り、鹽(シ)と  
昆布(シ)とで漬(シ)し物。紫蘇(シ)の葉  
を数多く重(シ)れ、味噌で漬(シ)したもの。  
せんまいわん(千枚岩) 図石の名、其の  
質(シ)脆(シ)くして、極(ク)めて薄(ク)く  
割(カ)され得らるる岩を云ふ。  
せんまいどほし(千枚通) 図錐の一種にて  
全部鉄より成立(シ)てる物、帳簿(シ)や  
書籍(シ)の類を綴(シ)るに用ゆる物、  
打ち込みて孔をあける。  
せんまんむりやち(千萬無量) 図はかり知  
れぬほど数の多きコトを云ふ。  
せんまい(鮮味) 図新らしき魚。新らしき魚  
にて爲したる料理(シ)。  
せんまい(禪味) 図禪學のしゆみのコト。  
せんまい(織密) 図極めて細かきコト。極  
めてくわしきコト。  
せんまい(千三) 図よくうそをつくる人。く  
にうなごを業(シ)せる人。  
せんまい(賤民) 図身分のいやしき人。ま

せんみ、せんめ

すしき人のコトを云ふ。  
せんみやち(宣命) 図立皇后。立太子又は  
改元などの御時に、天子の御思召(シ)を、  
を、一般に告げ知らせ給ふべく認めら  
れたる文書。  
せんみやち(宣命使) 図宣命を讀み聞か  
せんむ(先務) 図第一になさねばならぬつ  
さめ、肝心のしごと。  
せんむ(占夢) 図みたる夢の吉凶を占(シ)す  
ふコト、ゆめうらなひ。  
せんむ(専務) 図専門とせるつさめ。専一  
につかさざるつさめ一心になつてする  
しごこのコト。「きらかなるコト  
せんめい(鮮明) 図あざやかなるコト。あ  
せんめい(開明) 図通(シ)かしき事を、解  
(シ)り易く明(シ)かなすコト。  
せんめつ(殲滅) 図みな殺しにして、打ち  
亡すコトを云ふ。  
せんめつ(漸滅) 図だんだんさほろびる、  
しだいになくなる。  
せんめつ(全滅) 図一つも餘(シ)さすほろ  
ぶ、めちやめちやになる。  
せんめん(泉面) 図泉水の水、  
せんめん(洗面) 図顔を洗(シ)ふコト。  
せんめん(扇面) 図あぶぎのこト。扇の地  
紙(シ)のこトを云ふ。

せんめ、せんも

せんめん(全免) 図まるつ切り許す。全部  
ゆるすコト。「方のコトを云ふ。  
せんめん(前面) 図前の方。表に向つて  
せんめん(洗面器) 図顔をあらふに用ゆ  
るたらい。せんめん(だらひ)、  
せんもち(織毛) 図極(ク)めて細き毛。う  
ぶ毛のこトを云ふ。  
せんもん(専門) 図一つの學術又は一つの  
事柄のみを、主として修(シ)むるコト、  
又た修めたるコト。  
せんもん(前門) 図前の方の門、表門。  
せんもん(禪門) 図出家して佛道に入りし  
男子のこトを云ふ。  
せんもんか(専門家) 図一つの學科又は一  
つの學術に通(シ)せる人のこト。  
せんもんご(専門語) 図専門の學科に就き  
ての語、即ち術語(シ)のこト。  
せんもんがく(専門學) 図一つの科目(シ)に  
に就きて、研究(シ)する學問の稱。  
せんもんばんこ(千門萬戸) 図人家が夥多  
(シ)しく立ち列(シ)んでるこト。多くの  
家又た家のこト。  
せんもちちゆり(旋毛蟲) 図獸類の肉の内  
に棲(シ)てる、尖(シ)のれちれてる小さ  
き虫の稱。  
せんもんがく(専門學校) 図普通學校

せんや、せんよ

に對しての稱、専門の學科を教ゆる學  
校。  
せんや(先夜) 図過(シ)し先(シ)の夜。「に同じ  
せんや(前夜) 図まへの夜、さまの夜。  
せんやち(宣揚) 図あまれくあげ知らす。  
せんやち(先約) 図まへのやくそく。  
せんやち(煎藥) 図煮(シ)て用ゆる藥。  
せんやち(洗藥) 図あらひぐすり。  
せんやち(仙藥) 図仙人の用ゆる藥。あら  
たかなる藥。靈藥。  
せんやち(縛約) 図たをやかなるコト。し  
なやかなるコトを云ふ。  
せんやち(遷躍) 図諸處(シ)をめぐりまは  
る。はれまはるコトを云ふ。  
せんやち(先役) 図前(シ)に其の役を勤(シ)め  
しコト。前に勤めたる役。  
せんやち(僧論) 図自己の身分位置等を查  
(シ)すして、勝手氣まゝの舉動(シ)を  
なすコト。  
せんやち(全癒) 図全治(シ)に同じ。  
せんやち(善談) 図たくみにおべつかをつか  
ふコト。上手(シ)にへつらふコト。  
せんやち(占用) 図自己の物として使用す  
るコトを云ふ。  
せんやち(選用) 図えらび用ゆる。えりぬ  
きて採用(シ)するコト。











